

スターゲイザー

"SUGURI" a little war in brand new-earth.



スターゲイザー

"SUGURI" a little war in bland new-earth.

原作：橙汁
著：ふか

地球という星はボロボロだった

目次

プロローグ	11
グリーンバード	15
コンバットマニユーバ	71
バイオレットスカイ	141
N・S・B・	273
プルウィウス・アルクス	341
シンキング・ザ・キングピン	419
ランデヴー	491
エピソード	557
あとがき	573

スターゲイザー

"SUGURI" a little war in bland-new earth.

地球という星はボロボロだった

繰り返された戦争で、人も地球もボロボロになった

ほんのわずか、地球に残った人たちは、地球の手当てをはじめた
もうボロボロで、人の手なんかに負えないのに

ファーストエンカウンター

雲一つない青空の下、清んだ湖面が暖かな日差しを受けてきらめいている。周囲には深い森が広がり、密に並んだ広葉樹の葉が我先に光を求める。どんなに晴れていても、だから地表は薄暗かったが、この水辺は別だった。色鮮やかな翼を持った鳥たちが舞い降り、木々の合間からは大小様々な動物が這い出してくる。みながここで羽を休め、水浴びをして、飲み水を得、魚や昆虫を捕らえた。柔らかな風が若葉の匂いを運んでくる。新緑の季節。

そんな穏やかな水辺に似つかわしくない、電動機の駆動音。

湖畔に鎮座する大岩が突然震えだし、激しい振動が地面を揺らす。湖面に幾重にも波紋が広がる。金属同士が擦れ合う甲高い音が響きはじめる。

驚いた動物たちは動きを止めた。なかでも臆病なものは、生い茂った夏草の隙間へ、薄暗い森の奥へ、空へ、あるいは自らの巣穴へと身を隠す。

大岩に掛けられていたカムフラージュネットとそれに根を張った植物たちが、ちよつとした砂埃を巻き上げて滑り落ちた。ほぼ垂直に切り立った岩壁が剥き出しになり、朝日を受け

て鈍く、光る。その部分は岩ではなかった。直径三メートルはあろうかという、円形をした分厚い鋼鉄の蓋である。コンクリートの洞窟への入り口だ。それがいま、四本の動力シャフトに押されてゆつくりとせり出してくる。

やがて重いシャフトの駆動音が鳴り止むと、今度は洞窟の奥、緩やかだが長い下りスロープの通路内を、プシュ、という排気音が反響した。気密扉が開いたのだ。

洞窟の奥深く、通路を照らす薄暗い照明の下に、チェンバー（気密室）から一人の少女が踏み出した。と、その背後で、彼女がいま通り抜けたドアが勢いよく閉まる。密閉され、即座に自動で与圧。振り向かずとも少女には音でわかった。高感度のセンサと挟み込み防止装置、立ち上がりの早い開閉用モーターからなるドアロックシステムには隙が無く、それは高速で、少女と、洞窟奥の人工地下大空洞とを切り離れた。まるで通過するものを追い出すかのように。

しかしそれは少女にとっては慣れたもので、また、だからと開け放つていてはエアロツクの意味がないということ少女はよく理解もして、だからちつとも不愉快だなどとは思わなかった。外の世界は見えない毒に満ちているのだから。

もつとも、と少女は思う、実は、いまとなつてはそれほど気密にこだわる意味はないのだ。なぜならそういう見えない毒は、ほとんど自分が吸ってしまった。

そのおかげで、この星はほんの少し綺麗になった。森が広がり、花が咲いて、生き物が戻ってきた。人間はといえば、いまや地上に小さな街まで作っていて、すっかりそこで生活し

ているものもいる。まだ、長かった地下生活のすべてを地上に持ち出すことは、できないでいたが。

足取り軽くスロープを上る。薄暗い重コンクリートの洞窟から、少女は陽の射す地上へと躍り出る。眩しい、そう感じるのは一瞬だ。

少女の肌は白く、瞳は血のように赤く、腰まで伸びた髪は銀色にきらめいている。だが彼女のそういった外観上の特徴はもちろん、病的なものではない。陽の光を全身に浴びて深呼吸する。太陽に手をかざし、晴れ渡った空を仰ぐ。

そこには毒も、炎も、死の塵もない、彼女が産まれた時代には考えられなかった、清んだ青空が広がっていた。この星は長い時間を掛けてこのきれいな空を取り戻したわけだが、それに自分のがんばりが幾ばくかは貢献しただろう、というのは、あながち思い上がりではないだろう、少女はそれを誇らしく感じる。よい気分だ。

「……うん？」

柔らかない草に腰を下ろしてしばし空を眺めていた少女は、ふと、いくつかの小さな影が、高いところから降ってくるのをその目に捉えた。

この季節、この青空の下、それは雨や雪ではありえない。どうやらその影は、自力で飛んでいるようでもあった。だが舞い戻ってきた小鳥たちではなさそうだ。あまりにも高度が高すぎるし、その割には大きく見える。

なるほどあれが、少女は立ち上がる。

数日前から、人々を騒がせている「なにか」。少女にもそれがなんなのかわからなかったが、人々が不安を感じているのはたしかだった。とりあえず、様子を見に行ってみよう、本当ははじめからそのつもりだったのだ。あまりの陽気についてのんびりしてしまった。

四本シャフトの耐爆ドアが地響きを立てて閉まっていく。集まりかけていた動物たちが再び慌てて散っていった。騒がしくしてごめんなさい、と心で詫びながら、少女はシャフトが完全にロックされ、シエルターの気密に問題がないことをドア脇のインジケータランプで確認する。異常なし。それから落ちていたカムフラージュネットを拾い上げると――少女の体はふわりと浮き上がった。そのまま身長は五倍はあろうかという大岩、シエルターゲートのてっぺんまで舞い上がり、丁寧にネットを掛け直す。念のため、念のため……。

ふわり、ふわり。どこにも足場などない空を、少女はゆつくりと昇っていく。深い森を見下ろし、見渡す。一息ついたあと、高空に浮かぶ謎の影に目を移す。

あれはいったいなんなのだろう？

はやくたしかめたいと思う一方で、急いてはならない、という気持ちもあった。なにか、自身の心の深いところで警鐘が鳴り響いているような気がした。慎重に行動すべきだ、と。なぜそのように感じるのか、その根拠は少女自身にもわからなかった。

いっしか影はその数を増している。

グリーン
バード

地球という星はボロボロだった

地球がもう、人の手には負えないことに気づいたとき
人は、地球をどうにかできるひとを造った
途方もない時間をかけて、たった一人

たった一人のひとはスグリと呼ばれた

「なにか」の影はいまだ遙か高空にあつた。

なんだろう、ちよつと様子を見に行くだけなんだけど。

結局スグリは、うわべの好奇心や使命感よりも、自らの深層心理からの警鐘に重みをつけて、慎重に行動した。なんでもないと漠然とした不安をうったえる自分の心を納得させるため、といった方がより正確だったが、しかし、そういったある種臆病な氣勢から生まれる慎重な姿勢というものは、これまで多くの場合、彼女自身のみを護るにとどまらなかった。スグリは影の群れに最短で接近したいのを堪え、木々に触れんばかり、ぎりぎりの低空を森の起伏に沿って飛ぶ。大岩に偽装したシエルターゲートから北東へおよそ三七〇キロ。ここまで来ればいいだろう。新しく地上にできたどの街からも、十分に離れている。

スグリは軌道を変える。半径十キロほどの螺旋軌道を設定してそれに乗る。旋回上昇開始。仮想軌道を一周するのに約三分。その間に九〇〇〇フィート程度上昇する。緩やかに高度を

上げていく。

陽が高かった。スグリは遮るものがない空中で強い日差しにさらされる。しかし大気の温度は上昇するにしたがって低下していった。ここは、地上と比べればずっと涼しい。ひんやりとした風に頬を撫でられ、スグリは心地よさに目を細めた。銀の髪がさらりと流れ、たおやかに揺れる。大気速度は八〇〇ノットを超えていたが。

スグリとあの謎の影たちとは、いま十分な距離があった。スグリの眼下にはやはり深い森が続いており、上空から見下ろす限りはたいして目を引くものはなかった。——つまり、あの影たちがスグリを見つけてなんらかの関心を向けてきたとしても、スグリがどこから飛んできたのかということとその航跡から割り出すことはできない。このまま影たちと同高度まで上昇し、大きく旋回しながらアプローチする。スグリはそういう算段だった。

しかしスグリが自ら設定した仮想円を二・五周ほどしたとき、その目論見は挫かれた。ふわふわと漂っていた影のいくつかがスグリの存在に気づいたのだ。

気づかれた、ということにスグリも気づいた。思わず静止、前方に目をこらす。影たちがまっすぐ自分に向かってくるのをスグリは知覚する。

もはや航跡を偽るような飛び方は無意味だ、スグリはそう判断する。旋回上昇を中断し、垂直に、急速上昇。一気に影たちと同高度、その上を取るべく舞い上がる。スグリを追って影たちも上昇に転じる。

華奢な肩口や服のすそから可視化した水蒸気の尾を引いて、スグリは三万フィートの高空

へ。気温はマイナス六〇度。大気圧、酸素濃度は地表の三分の一以下という世界である。スグリといえど安穩としてはいられない。しかし、だからこそ——ちよつとした緊張状態にあるいまのスグリには、影たちの、その形状がはつきりと認識できた。

それは、一見すると太った鳥のようだった。丸い、いや四角形、ほぼ立方体……角を大きく丸めたキューブの胴体。緑色の。左右の面の真ん中に、短く単純な形状の主翼が不格好に張り付いていて、あろうことか、ときおりそれがパタパタと羽ばたいている。尾部にはやはり単純な水平尾翼が一枚ある。下面がどうなっているかはよく視えないが、脚に相当するものはないようだ。前面いっぱい黄色い円形の単眼が備わっていて、それは確実にスグリに向けられていた。光学系の照準器だろう、とスグリは冷ややかに思う。カメラのレンズに似ている気がするのだ。

いまや影——キューブたちがスグリを目掛けて飛んでいるのは明らかだ。他者の存在に関心に向けて能動的に動くものたち。自然のものではないだろう、とスグリは思った。人工物だ、間違いなく。

しかしスグリやこの星の人々にはキューブの正体がわからなかった。であるならば、それはいつたい、誰の手によるものか。

とりあえず様子を見に行くだけ、というわけにはいかなかったことを、スグリは悟った。見極めねばならない。あれが何者なのか、どこから来たのか、その目的はなんなのか——この星にとって危険な存在なのか否か。

スグリは宙を蹴る。瞬間、周囲の大气が急激に減圧され、青空に真っ白な水蒸気の塊が現れた。爆音と共に生じる巨大な雲。低空であればその強烈な圧力変動波は木々を根こそぎ吹き飛ばしただろう。だが、その雲のなかにスグリの姿はすでない。加速という過程を無視した機動を前に、雲の発生はそもそも遅すぎたのだ。

そして、そこまでだった。高速飛翔体の周辺に当然起こるはずの現象がなにひとつ続かない。音も気流も置き去りに、熱もGも押し退けて、在るべき事象を切り裂きながらスグリは翔けた。

見極めねばならない。この、わたしが。

虹色の環状フィールドが煌めく。銀の髪がさらりと流れ、揺れる。たおやかに。

翼を畳んでダイブする鳥のような飛行姿勢で三〇〇キロを駆け抜ける三〇〇秒の間、スグリはキューブたちの目的を探ることばかり考えていた。

こちらに向かつてくる以上、少なくとも自分という存在を周囲の大气や森の木々などの自然物とは区別して認識しているのは間違いない。けれど鳥たちを目掛けて飛んでいったりはしていないようだから、単純に生き物に反応しているのもなさそうだ。ということは、彼らは人に興味があるのか。人と動物の区別が、彼らにはできるのか。

しかし、とスグリは思う。地上の人々は、街からあの影たちを見上げていた。逆に、影たちからもみんなの姿が見えていたはずだ。現に彼らは先ほど、あんなに離れた場所からこの

自分を見つけたではないか。それなのに、いまのところ彼らとみんながなんらかの形で接触したというような話は聞いていない。これはいったいどういうことだろう。

彼らは人に向かって飛んでいるのではない。いま、この時も。

スグリはどきりとする。つまり彼らは、地上のみんなと、この自分とを区別している。

「まさか」

スグリは身体を起こす。手足を広げて急停止。パン、と大気が爆ぜる。

もう二十キロと離れていないところに――かなり広がって、ばらばらに飛んではいるが――キューブたちがいた。ざっと見て十数機。それらひとつひとつは、スグリの身長よりもずっと大きい。と、突出していた先頭の二機が加速し、互いに寄り添うように編隊を組んだ。

先遣隊のようだ、とスグリは思う。緊張の面持ちでそれを見つめる。二機がさらに増速する。距離十五キロ。

――気のせいだろう、きっと彼らには、鳥たちの姿は小さすぎて見えないのだ。地上の人々は木々や建物の影に隠れて発見できなかったに違いない。自分が見つかったのも高度を上げてからのことだった。

目標距離が縮まる。十キロ、九キロ、八キロ……。

なんと呼び掛けようか、と思ったところで、スグリはある問題に気がついた。そもそも、言葉は通じるのか。発話は。彼らから目的を聞き出すということが果たして可能なのだろうか。

キューブたちにそういう機能があれば、もちろんなんの問題もなかった。あるいは彼らを通じて、彼らの制作者と通じることができれば、なおよい。しかし、

しかし、もしそのどちらも叶わなかったら……。

五キロ、四キロ、三キロ。

いや、それでもなんとかなるだろう。たとえば会話が不可能でも、相手の行動や態度からその狙いを探るということはできる。身振り手振り、だ。たぶん、大丈夫。きつと。

心臓の鼓動が高鳴る。早鐘のように打つ。

先行するキューブはスグリから百数十メートルにまで接近していた。いまは大きく減速している。ふわふわと漂うように、風に流されるように、スグリに近づく。

実際にはスグリの方が風上にいた。キューブとの距離が十メートルを切り、もう声が届くかもしれないと思ったが、スグリは迷った。

二機のキューブは触れ合うほどの間隔で隣り合い、スグリの前方約五メートルの位置で静止した。ほんの数秒——スグリには長い時間に思われたが——の静寂の後、あちらから動く気はなさそうだと判断したスグリはおずおずと呼び掛ける。

「あの、」キューブの大きな単眼がかすかに瞬きをしたように感じた。どうやら音を聞く能力はあるらしい。スグリは続けた。「こ、コンニチワ……!」

その瞬間——まったく予想外の反応だった。片方のキューブがスグリに向かって猛スピードで突進する。

突然の事に血の気が引く。なんだ、と思うより早く体が動いた。スグリは右へ回避。なんだ、危ない、ぶつかるところだった。まるで思い切り体当たりするかのようだった。そのつもりだったのだろうか。

しかしキューブはスグリの予想を違えた。すれ違い、後ろに飛び抜ける直前、キューブはまるで風船のように大きく膨らみ、そして弾けた。

轟音が雷の如く響き渡る。圧縮波が音速を超えて広がり、キューブの緑色をした鋼鉄の外殻は、赤熱した破片となって四散した。一瞬の出来事だった。キューブは自爆した。

スグリは爆風に吹き飛ばされ、球状に成長する黒煙の中から煙の一部を引きずって放り出された。放物線を描いて落ちていく。星の重力に引かれるまま、真逆さまに落ちながらスグリは見た。爆発効果外に逃れていたもう一機のキューブが真上から突っ込んで来ている。その単眼が閃いた。ビームが撃ち出され、スグリは再び爆風に煽られた。

——もし、会話が不可能だったら。

後続のキューブたちが追いついてきている。全機が動力降下を開始。たくさんの一つ目がキラキラと輝いて、その度スグリは右へ左へ弾かれる。

——相手の行動や態度を見るしかない。

「攻撃をしてきた……」

かつ、それだけで十分なのだ。敵か、味方か、それを知るには。

攻撃をしてきた。攻撃をしてきた。攻撃をしてきた。攻撃をしてきた。スグリは呆然と反

復する。いったいどうして。ショックだった。それは事実だ——だが。

自身の心の奥深くに、なにか驚くほど冷めた思考が巣喰っているのにスグリは気づいた。それが次第に大きくなる。はじめに影の群れを見て言い知れぬ不安を抱いた、あの時の感じに似ていた。

その冷めた心が、冷めた自分の声で、「そうだね」と言った。
攻撃をしてきた。

そうだね。

いまさらなにを驚いているのだ、とてもいたげな、淡々とした声だった。奇妙な感覚にスグリは戸惑った。ざわざわとして、落ち着かない。

胸の奥でささやく声は、攻撃をしてきた彼らは敵だ、と言っていた。

たぶん、その通りだろうとスグリも思った。そう、そんな気は、最初からしていたのだ。だからあのような遠回りをしたのだ。そうでなければいい、と願いながらも、そうであった場合に備え続けていた。

でも、彼らはいったい誰にとつての敵なんだろう？ わたしは彼らのことをなにも知らないのに、なにもわからないのに。知らない相手を、敵だと言ってしまったていいのかな。

「あなたを脅かすものは、私の敵」

このときスグリは、私とはだれか、とは考えなかった。ただへ私への傷を塞ぎ、毒を吸い出し、熱を冷まして励ましてきた日々を思った。

なるほど、そうか。そうだった。それならば、私の敵はわたしが廃する。いままでとんなら変わらない。これはわたしの役目なのだ。ずっとずっと以前から、一万年もそうしてきたのだから。

スグりは逆さに落ちながら、両手を上、いまは大地に向けて掲げた。

スグリの手のひらから幾条もの光芒があふれ出した。それらは規則性を持って折れて、重なり、互いに引き合い纏わりついて、やがて薄明の中に長大な銃器のコントラストを描き出す。

スグリの右手がその銃のグリップに触れる。瞬間、光は激しく弾け飛び、輝く膜を脱ぎ捨てるように、黒く重厚なビーム砲が姿を顕す。砲の左側面からサブグリップが飛び出す。左手で掴み、引き寄せる。

それはスグリの身にはあまりに巨大で、銃らしく構えることなどとてもかなわない。保持するにはサブグリップを握る左手を精一杯突き出し、右腕で銃床を抱え込まねばならなかった。狙いをつけるのも体ごとだ。スグりは落ちながらそのように構える。巨大な砲にしがみつき、一緒に落ちていくようなものだった。

砲の名はバスターといった。あまりに抽象的すぎる呼称だったが、不都合を感じるものはない。なぜならこれは、大昔に繰り返された戦争に於ける、武器と呼ばれる商品ではないからだ。モデルナンバもシリアルも、自らを誇張する厳めしい名も必要ない。これはスグリの力の一部にすぎない。その力を一意に向けることを助ける触媒にすぎない。稼働に必要な

電力も、撃ち出す粒子そのものも、スグリが練り上げ、注ぎ込むのだ。

砲身部がスライドして前方へせり出し、砲はさらに長大になる。いまやバスターは完全な射撃態勢にある。スグリ自身もすでに戦いを決意していた。しかし実射の段階に至って、その胸中にいま一度小さなためらいが生まれる。

本来バスターは、惑星大気との衝突を経ても燃え尽きずに落ちてくる、あるいはそのような予想されるデブリの類を事前に狙撃し、質量を減らすためのものだった。V・MAXモードの選択によって、異常接近する近傍天体きんぽうてんたいの軌道を逸らすといったことまでやってのけたが、まさか大気圏内で「敵」を狙い撃つ日が来ようなどとは、スグリには思いもよらないことだった。

思いつく限りの理屈が彼らは敵だといっている。揉め事なく対話できる存在だと思いたかったスグリではあるが、他方、先制攻撃を受けた現状に際し、その胸には小さくもたしかな戦闘意欲が芽生えている。雨あられと降り注ぐビームの弾を、これ以上、ただ受け続けることをスグリは拒否した。このままいけばやがて彼らのビームは減衰前に地表にも届き、森へ、木々へと突き刺さるだろう。もうすぐそうなる。そうはさせない。もう迷ってはられないのだ。

きつとこの攻撃欲求の元にあるのは、この星を守らなければ、という使命感だろう。そう信じる。

バスターにトリガーはない。喚んで、構えて、命じるだけだ。

「発射」

スグリは応射した。

砲身が爆発を起こしたかのような輝きと共に、超高密度の光線が放たれた。同時に、砲前方に巨大な虹色の環が幾重にも展開する。光は虹をくぐるたびに引き延ばされて太くなり、いつそう激しく荒れ狂った。ビーム径は何倍にも膨れあがり、熱プラズマ化して渦巻く大気が実際の加害範囲をなお出鱈目でたらめなものにする。射線の周囲にいくつもの電磁泡が、生まれては弾ける。

ビームの速度、効果界、いずれを見てもキューブたちにとって到底逃れられるものではなかった。そればかりか、彼らはバスターの射撃と同時に自機の電磁シールド強度を遙かに上回るEMIを受けていて、その時点でほとんど機能停止に追い込まれていた。キューブはビームの発生を観測することすらできなかった。

次の瞬間にはもう、熾烈を極める光の奔流がすべてを飲み込んでいる。爆発に次ぐ爆発、しかしビームはそれすらかき消し、洗い流して、なお少しも衰えることなく伸びてゆく。まるで自らが炸裂する場を渴望するかの如く、狂った輝きはやがて暗い宇宙の果てへと消えていった。

虹が去り、空にはスグリだけが残った。撃ち放ったビームは胸の奥で燦る熱くすぶをも押し流してしまったようだった。まるで毒気を抜かれたようにスグリは平静さを取り戻す。

しかしそれも束の間のことだった。帯電し、いまだ紫電を迸らせる空の彼方にスグリは見

た。目を疑う。

射線の脇にまったく新しい別の影が現れていた。

一目で大質量を予感させる巨大な影だった。あんなものがぶつかったらと狼狽するが、落下してきてはいない、浮かんではいるのだ、ということを知覚してほんの少しだけ気が落ち着く。しかし、あれはなんだろう。巨大な、あまりにも巨大すぎる影。

大きさはいうまでもなく、その形状も明らかにキューブたちのものとは違っていた。円筒状の構造物のようだが、蜃気楼のようにぼやけたその像からは細かいディテールまでは読み取れない。高度を目算することすらかなわなかった。どうにも距離感がつかめないのだ。それにもかかわらず、——静止衛星軌道に浮かぶ宇宙船だ、突然スグリはそう思いつく。おそらくそうだろうと確信し、それから「ばかな」と呟いた。

なぜ、気づかなかった。いつからいたのだ。なにか、空間レンズのようなもので隠れていたのか……距離感がつかめないのはそのせいだ。その欺瞞手段がいまのバスターの射撃で影響を受けたのか。

考える間に空が歪んで、宇宙船の影は周囲に溶けるように滲み、薄まり、やがて消えた。キューブたちはあそこから飛んできたのだろう、ということだけは間違いないさそうだった。「……思ったより、厄介なことになりそうだな……」

つぶやくスグリの手の中で、バスターはふたたび輝く光を纏う。幾筋もの光芒の束に姿を変える。そしてほどけて、大気に還った。

スグリは第二射はおこなわなかった。

ひどく疲れた、とスグリは思った。実際疲れていたし、これほどの疲労を感じたのは久しぶりでもあったが、その確たる理由はよくわからなかった。長く生き、多くを見たが、彼女は自身の心に対してはそこまで器用ではなかった。

落下に伴う微無重力感は宇宙空間に滞空するのとはまた違っていて、浮遊感と同時に風を感じるその心地よさは、スグリの現実感を優しく拭い去った。もう少しだけ、このまま落ちていきたい、そんなことを思いながら、スグリは微睡むように目を伏せた。

スグリの夢見心地は、彼女が時速一六〇キロで大地に突き刺さるまで続いた。

*

照明の落ちた暗い部屋。壁一面にコンソールが並ぶ。正面の壁に据えられた、メインモニタとなる巨大なラストスクリーンといくつもの補助表示装置が淡い光を放っている。室の中央には多目的レーザーディスプレイ。その周囲を、やはりコンソールを備えた、巨大な円卓が取り囲んでいる。

さながらどこかの基地の司令室といった様相で、現に大量のコンソールはここで働く大勢のオペレーターたちのために備えられたものだった。

施設は宇宙船である。途方もない時間を費やして、様々な宇宙、数多の星々を渡ってきた。

いまこの船はまた、旅の途中に見つけたある惑星に強い関心を持ち、その惑星の衛星軌道上に留まっていた。様々な角度から観測されたその惑星の姿はレーザーディスプレイに投影されている。青く美しい星だった。

この薄暗い部屋は宇宙船の中央部分、コア・ナセルを擁する大空洞の縁下に位置しており、正真正銘、船の中央管理統制室として機能している。

しかしここには巨大宇宙船の中核としての厳かな雰囲気も、飛び交う命令伝達ゆえの喧噪もなかった。コンソールに着いているはずのオペレータの姿はどこにもなく、表示装置に映った記号や数字は、勝手に変化し続けている。壊れているのではない、その装置がモニタしている制御機器が、自動的に動作しているのだ。

侵略者たちの宇宙船は高度にコンピュータ化されていた。船内の環境は様々なセンサによって常時モニタされ、そこに生きる人間にとって最適であるよう設定されている。しかしその最適を保つのに、もはや人間のオペレーターなど必要ではなかった。用済みの人間たちはオペレーシヨナルームから排除された。

それは高度になりすぎたコンピュータのいわゆる暴走とその結果、というわけではなかった。他人は信用できない、余計な人間は必要ない、この船は自分とコンピュータたちだけで完全に維持管理可能で、その方が遙かに効率が良い、そうすべきだ、そのように望む、人間がいたのだ。高度なコンピュータたちは、自らの父とさえいえるその人間の意図を忠実に汲み、実行したのだった。

白衣をまとった男が一人、円卓に備えられた一脚に腰掛けている。卓に肘を着き、気怠げな視線をメインモニタに投げかけている。

男の名はシフといった。

「見たか」とシフはぼつりと言った。

「はあ、まあ、一応」

シフの背後に立ち控えた女性が問いにこたえる。こちらは普通の人間ではなかった。室に、他に人影はない。シフが纏う陰鬱な雰囲気があるまま室の空気となって重く立ちこめるようだったが、それを気にとめる者もまたこの場にはいない。青いロングヘアを揺らして、その女性も事なげに言った。

「やつぱり、居ましたね。強そうなの」ハーフフレームの眼鏡のテンプルを少しいじって掛け直す。「他にも隠れているのかしら」

「冗談じゃない」

シフも眼鏡を掛けていた。対人センサと連動した可変配光パネルライトが、高い天井から二人を薄く照らしている。

「一人だけ、というのかえって不自然でしょう」

「俺たち人間の常識で考えればね」シフは振り向きもせずにかたえる。「でも、あの銀色のやつはもちろん、街で暮らしてとても戦えそうにない連中にしたって、俺たちと同じ人間じゃあない。未知の異星人、宇宙生物だ。これまで何度も見てきただろう、知性を持ったタ

コやイカと変わらないよ、あいつらの本質は。おまえ、キョーコ、あいつらが人型をしてるからって、妙な先入観を持つなよ」

「はあ」

「この星には、本当にあの銀髪しか戦力がないのかもしれない、そうだとでもおかしいことじゃない、ということさ。人間的な思考をしていないかもしれないんだから、どんなにばかしいことを本気でやっているかわからない。強力な一個体にすべてを賭ける、大いにありうる。もっとも俺たちとしては、俺たちにとってより都合の悪い事態に備えておく必要がある。ほかにもいる、という可能性を捨て去るべきじゃないけど、でもいま一番の問題は、戦闘能力を持ったやつがこの星に何人いるのか、なんてことじゃない」

なににも興味が無いといった気怠い態度の裏の、底の知れない傲慢さがこの男の性質だった。彼は普段からそういう態度を隠そうともしないので、女性——キョウコの方ではそんなシフの不遜な口調をいままさら不快に思うようなことはない。彼と同じようにこの星の生命を見下すではなかったが、人型といつて自分たちと同じと思うな、という言葉には、なるほどとさえ感じていた。なるほど、もっともな話だ。しかし、いま重要なのは敵の数ではないというのはどういうことだろうか、とキョウコは訝^{いぶ}しむ。間違いなく人間であるシフは、敵情を知っているわけだが、そんな大事に自分が思い至れないというのがキョウコにとってはちよつとした不満で、

「ではなんです」気づいたときには疑問をそのまま口にしていて。「その一番の問題って」シフは部下を呼びつけて話したり命令したりということはあれど、部下からの質問には面倒くさがってこたえないということがほとんどだ。キョウコもそれは十分承知している。この問いはシフの予想外の言葉に思わず反応してしまったということに過ぎず、明確な意図のもとに発した質問ではない。無視されたなら自分で考えるまでだ、とキョウコは思う。もし自分に思いつけなくても、いずれ彼はその大事から彼自身を守るために自分たちに命令を下すだろう。自分はそれに従えばよいのだ。

ようするに、いまこの場でこたえてもらえなくてもぜんぜん構わない、とキョウコはたかをくくっていたのだが、意外にもシフははっきりとした回答を返してきた。

「あのビーム砲さ」とシフはいった。「クローク（遮蔽シールド）の外縁を少しかすただけで、根こそぎ持っていかれたんだぞ。直撃したら危ない」

「単純に、ビームの強さが問題なんですか」とキョウコ。「最初から防ぐ気でいればなんとかなるでしょう。連続して撃てるものでもなさそうだったし」

「現に、一発しか撃つてきてない。それも気に入らない。本当に連発できないのか、なにかほかに考えがあるのか……暗に、こんな船なんていつでも墜とせるんだと言ってるのかもしれない。もしそうなら、実は連発もできるし、出力ももっと上げられるということになる」

そこまで言い出したら妄想だ、だいたいそれこそ相手を人間と見なした、実に人間的な予測ではないか、そうキョウコは思うが、さすがにこれをそのまま口にすることはしなかった。

「そこまで考えるものでしょうか」と、それとなく言葉を選んで探りを入れてみる。「タコやイカの仲間が？」

「たしかに、ただの憶測だよ。人間もどきの考えなんてわかるもんか。でも最悪は回避しないといけない。いま考えられる最悪は、あの銀髪のビームでこの船が呆気なく叩き落とされることだ。実際にあいつにそれが可能なかどうかをたしかめる意味でも、もう少し観察を続けなきゃならない。それなのに」

シフははじめてキョウコを振り返り、苛立たしげに言った。「見失った。この船を沈めてしまうかもしれない敵をだぜ。問題っていうのは、これだ。いまは、ほかに何人あんなやつがいるのか、なんて詮索してる場合じゃないんだよ。やつ一人で致命的なんだ、こつちは。サキに調査を続けさせろ。とにかくあいつを探し出せ」

「どれだけ相手は人間ではないといったところで、人間である自分たちは相手をも人間として考えてしまうのだ。犬猫の類にまでおとしめて見ればそうではないのかもしれないが、それで裏を搔かれてはなんともばかばかしい。かといって人間並みの知能を持ったタコの真意をシミュレートすることなど不可能だろう。ある程度以上の、戦術的な駆け引きを考えるなら、相手がどんなに未知の生物であろうとも、結局それも人間だとして扱うほかないのだ……ああ、そうか、とキョウコはシフの心に得心がいった、と思った。

この人は、それがどうしようもなく気に入らないのだろう。自分たちがなんとか住めそうな星を求めて宇宙を漂っている間、こんなに美しい星で平和に暮らしていた人間の存在が、

許せないのだ。

「……人間的に考えるなら」とキョウコは努めて事もなげにいう。「街をつつつけば、あの少女も出て来ざるを得ないところでしょうが」

「街の連中が人質か。それは、だめだ」シフは卓に頬杖をつく。「いま、すでにこの船があいつの攻撃圏内にあることを忘れるなよ。それでも撃つてこないというのは、俺たちが街の連中の安全を盾に船への直接攻撃を思いどまらせている、という見方もできるんだ。連中に手を出した瞬間、お返しにどこからともなく大出力のビームが飛んできて俺たちは吹き飛ばされるかもしれないし、あいつにしても俺たちを一撃で叩き落とせなければ、報復は街にも及ぶということがわかつているだろう……わかつているかどうかはわからないが、現状はそう感じられるように推移している。自らこの関係を壊すことはないよ」

お互いにとつての最悪を牽制し合っているのだ、少なくともいまそのような前提で動くことは間違っていないだろう、とシフは言っていた。

戦う力を持たないであろうこの星のほとんどの人々など、シフの侵略作戦にとつては邪魔者ですらない。シフにしてみれば、ただ母船がやられないように気を払いながら、あの大型ビーム砲を持つ銀髪の少女一人を倒せばそれでよいのだった。その気になれば人々を一掃することそれ自体にはなんの苦労もないのであって、だからそれを実行するのはいまでもなくてよかった。むしろ、まるで障害にもならないそれらの人々を残しておくことが、あの少女の機動力を削ぐことに繋がるのだとすれば、これを利用しない手はないわけだった。

もつともこういった判断はすべて彼の勝手な憶測に端を発するものだ、とキョウコは冷静にシフの横顔を見つめる。想定外の攻撃力に晒されている、自らの命運を左右する戦略としてはずいぶんあやふやで心許ないものでもある。シフ自身もそれは認めていて、しかしほかにやりようがないから、とにかく油断はするなといっているわけだ。たしかなことにはなにとも言えない、というのがどうしようもない現実だった。件の少女とはたつたいいまはじめてお互いの存在を認識したところなのだ。まだ一度の遭遇戦をおこなったにすぎない。

だが、それは相手にしても同じことではないか、とキョウコはふと思いつく。

ひよつとしたらあの少女も、まだ事態の受け止め方を決めかねているのではないか。彼女がこの船の存在に気づいた時点で攻撃してこなかったのは何故なのか。その理由を知ることが最悪の事態を防ぐためにいまもつとも重要だが、なんのことはない、きつと、ただ単に相手も混乱しているのだ。欺瞞を暴かれ、拠点を晒してしまったこちらに対してなんのアクシヨンもないというのは考えにくいことで、あれは、いったん退いて様子を見るというアクシヨンにはかならないのだ。姿を隠してはいるが、いまもこの自分たちの扱いを考えていて……そして、やがて殲滅すべきと判断したなら即座に砲撃してくるかもしれない。突然まったく予想もつかない場所から、最大出力で、だ。

なるほど姿が見えないというのは恐ろしいことだと、キョウコは途端、不安に思った。自分たちの勝手な妄想で相手の驚異度ばかりが際限なく膨らんでいく。こんな状況では敵の影を恐れるあまりろくな作戦行動は取れまい。シフの疑い深さを思えば、なおさらだ。姿を見

せてすらいな第二、第三の敵の存在を論じている余裕などない、という気がたしかにする。まずは確実に致命的な驚異である、あの少女。彼女の能力を知らねばなるまい。

「おまえは、船からあまり離れるな」

シフはレーザーディスプレイに浮かぶ青い星の像に視線を移した。

「増幅原理はよくわからないけど、飛んでくるものは紛れもなくビームだ。おまえの結晶で干渉できる。もしやつが撃ってきたら、おまえはこの船を守れよ。ナナコも連れていけ」

「防ぎきれるかわかりませんよ。出力差が大きそう」

「盾はおまえたちだけじゃないさ。もうクロークの効果がないと判断すれば艦艇も出すし、この船自体にも防御力はある。それぞれのフェイズで最大限減衰できればそれでいい」

「はあ」とキヨウコは生返事。

ま、たしかにいまできる備えはそれくらいものだ。敵の攻撃力の実際がどの程度かわからない以上、こちらも最大の防御を展開するほかあるまい。それでもなお敵が上回る可能性はゼロではないのだから精神的にも疲れる任務ではあるが、憶測から生えた戦術をやみくもに展開して、留守中に家を吹き飛ばされるよりはましだろう。ならば、いまはそれに専念するとうしよう。

「わかりました。ナナコのビットはB装備で構いませんね」

B装備のB、とはブロッカーのことで、そのまま防御を重視した装備パックのことを指す。敵ビーム砲による長距離攻撃から船を守ろうというのだから、それで問題ないはずだ、キヨ

ウコはシフの返事待つ。一応の承認は得ておきたかった。

装備パックと呼ばれるものには、他にもいくつかの種類がある。A装備ならアタツカーだし、C装備は護衛や輸送作戦用のパッケージだ。他にも強襲用のD装備、支援用S装備等々。シフの下にはキョウウコのような、彼に造られた普通ではないひとが、キョウウコを含めて五人いた。彼女らを筆頭に、不足する物量を多様な戦闘メカ群で補う宇宙船の戦力は強大だ。しかし彼らには、この装備パックのように体系的な部隊定義を一から組み上げられるほどの組織的な規模はなかった。なにせ生粋の人間はシフただ一人、キョウウコを含めても六人しかない。……もちろんこの数に、船の居住区で暮らす非戦闘員は含まれないが。

宇宙船がこんなことになっている原因は、やはりシフにある。船の支配者たるシフが、必要な人間を遠ざけるため、船の中枢と居住区とを明確に区分けしてしまったのだ。いつそ居住区がほかから隔離されているといつてさえよい状況である。いちおうシフは居住区の人間たちの生活にはそれなりの気を払ってはいたが、それも破壊的な反乱の兆候を見逃さないための監視でしかない。

残るはすべてコンピュータと戦闘用ロボットだ。皮肉なことにコンピュータたちはシフより遙かに居住区の生活環境を、人道的な意味で、気に掛けており、その意味でやはり優秀ではあった。しかしいかに高性能な電子頭脳といえど、人間の集団を運用したり、なんのデータもない生物と戦うためのロジックを自ら組み上げるといった作業には不慣れだった。

だがシフが宇宙船の覇権を握るそれ以前には、そうしたコンピュータや戦闘メカのかわり

に大勢の人間たちが活動していたのである。そして、戦闘組織の稼動効率を上げるさまざまな体系も、そういった人間集団がすでに築いていた。ひな型があれば改良もやりやすい、これはシフにとってもさいわいだった。

もちろん装備パックもその名残だ。もつとも、作戦目的に合わせて換装する装備パック・モジュールという概念は、キョウコたちに適用するには少々古くさいものではあった。彼女らの装備のほとんどは固定武装か、でなければ完全に個人に最適化された専用の携行兵器で、出撃ごとにごっそり武装を交換するなどという運用はそもそも考えられていなかった。一人一人がスタンドアローンでたいの状況に即応できるように造られている。もちろんそれはシフの理想にすぎないともいえるのだが、これまでのところ彼女らは概ねその理想通りに働いてきた。普通でないひと、なかでもシフの手による五人のシフ・ブランドは、現実に、ほかの兵器と比較して規格外に強力であった。

ではこの装備パックという概念はもはや完全に形骸化してしまったのかといえば、そうではない。全体で見れば戦力の中心である戦闘メカ群にはよく馴染んだし、なんでもできるシフ・ブランドにしても、それは自分がなにに目を向けるべきかを意識する指標になった。また、改良を続けられ多機能になっていく彼女らの携行兵器には、同様に体系づけられた拡張モジュールシステムが付加されたものもある。「ナナコのビット」などはその典型、というわけだった。

「……先生？」

キョウコはシフの返事をうながした。じつと黙って待っているのに、シフはレーザーディスプレイをぼんやり眺めたまま、いつまでも口をきかないのだ。するとシフは、「聞こえてるよ」と言い、早く行け、と手で払うしぐさ。

相変わらずの態度と言つてしまえばそれまでではある——しかし気怠げに青い星を見つめるシフの背に、キョウコはこれまでにない奇妙な感慨を覚えるのだった。

たぶん、これで終わりだ。これが最後。なにがあつても彼はこの星をあきらめないだろう。いや、それは彼だけではない。船も永久に飛び続けられるわけではないし、なによりこんな美しい星は、きつとほかのどこにもない。だからこの星で、さいご。私たちの長い旅はもうすぐ終わる。どんな結果になろうとも。

振り向かぬ男の背に一礼する。キョウコは統制室を出る。

*

この星の地下に広がる人工の大空洞は、広大な洞窟をコンクリートで固めた単なる空間などではもちろんない。生活設備はほぼ完全に整っているし、それもただシエルターを拡張し続けて結果的にそうなった、というのではなく、はじめからそのように建造された。建造がはじまったときすでに、地上のどこにも人間が住める場所など残らない、やがてそういう事態になるということは明らかで、そのとき生き残っていた人間はみな、長い時をこの地下で

生き存えなければならぬことを覚悟していた。地上に残した、たった一人のひとが、いつかこの星に再び緑を呼び戻すと信じて、人々は地下に身をひそめたのだ。

だから当然、地下に移った第一世代の人々でさえ、一生涯をなんとかこの閉鎖空間で過ごすことができた。しかし彼らはそれに満足して、星が再生するのをうずくまってただ待つてゐるわけにはいかなかった。とかく人口を維持し増やしていかなば人間という種の存続にかかわるのだ。高度な文明は地上で滅び、次いで霧散しかかった文化を必死に繋ぎ止めながら、何世代もかけて、人々は生活環境の改善に励んだ。結果、特に居住区の拡張は著しく、いまではなんとかそれなりの地下都市として大成している。

地面になかば埋まった体を引き抜いたスグリは、大の字に倒れて、風に揺れる木々を見上げていた。

スグリは悩んでいた。

あの大きな鳥のようなものは危険だということを人々に伝えなければならない、とスグリは思った。地上に出ている人々はバスターが放った光を見ていることだろうから、なにかよくないことが起こっているというのはいまや周知と考えるべきだった。これでスグリが黙っていれば不安が広がるのは目に見えていた。

攻撃を受けた。やりかえして、撃破した。それを話すべきだろうか。どこまで、話すべきだろうか。いったいどのように伝えればよいだろう。いまから大急ぎで地上の街をめぐり、あの奇妙な鳥を見かけたら逃げろ、隠れろ、とでもいうのか。どこへ逃げれば安全だと？

相手は空を飛んでいるのだ。ビームを放つこともできる。

ありのままを話すことで別の混乱が生まれることも考えられた。しかし、だれかがけを
してしまつてからでは遅いのだ。

こうなるとスグリはいよいよ弱つた。スグリは自分一人で結論を出すことをあきらめた。
地下都市の管理セクターの人たちに相談してみようと思つた。

様々な問題から長らく都市を守り、維持してきた管理セクターの技術者たちは、良くも悪
くもトラブルに慣れていた。突然、謎の敵と戦闘になつたのだ、と打ち明けても、よもやパ
ニックに陥つたりはしないだろう、とスグリは思つた。このような繊細な情報の扱い方につ
いて、自分よりも長けているだろうという期待もあつた。

スグリはのろのと立ち上がる。

周囲はわずかに木漏れ日が差しており、木々の密度の割には湿度もそれほど高くなかつた。
地面は比較的乾燥していて、服を払うと砂ぼこりが舞つた。スグリはむせて、軽く咳き込む。
空に、宇宙船に、動きはない。追跡されているということもなさそうだったが、念のため、
地下に降りるのにあのシエルターゲートは使わないことにした。

スグリは広葉樹の葉の下をゆっくりと飛ぶ。超低空を、乱立する木の幹を避けながら。地
を歩くようなものだ。いまのスグリを、上空からの広域探知で補足することはとてもかなわ
ないだろう。高性能な照準システムでいったんロックオンしてしまえば見失うことなく追尾
するということは可能かもしれないが、スグリはそのような気配も感じなかった。見ら

れている、という感覚が、いまはないのだ。

代わり映えない風景の中をしばらく飛び続ける。やがて目的のものを見つけたスグリはふわりと接地。

スグリの足下には、大地に埋め込まれた金属板が鈍くかがやいていた。かなり土をかぶってしまっている。スグリはその場にかがみ込み、金属板の周囲を手で払う。全貌を現した金属板は正方形をしていて、一辺の長さは大人の身長ほどであった。

スグリはいったん腰を上げてふうと一息、金属板の脇に目をやった。そこには手のひらより少し大きいくらいの、やはり金属製のボックスが備わっている。

ボックスの天板はディスプレイパネルになっていて、脇には小さなインジケータランプが備わっている。スグリが近づくと、そのランプが赤く輝いた。あやしい光がスグリの顔を下から照らす。外部コントロールは生きているようだ。

こういったコントロールを実際に起動するにはまずセキュリティを解除しなければならぬのが通例だが、既にロックは自動的に解除されている。鍵や暗号を用いる必要はなかった。生体センサが周囲を監視していたのだ。

このゲートはシエルターに致命的な事故が発生した場合に備えた、緊急脱出用だった。ただ、防護服を着た人間が地上を出歩けるようになってから作られたこともあって、外からシエルターに逃げ込むような事態も想定されている。外部コントロールのセキュリティが甘いのはそういう理由からだ。

とはいえ小動物の反応などを拾って勝手にゲートが開いてはたまらないから、完全自動ドア、というわけにはいかない。起動には人為的な操作が必要になる。

外部コントロールパネルのディスプレイの真ん中に大きくOPENの文字があり、ゆつくりと明滅している。その下に一回り小さい指示の表示が出ていて、それはOPEN表示部を押下せよ、と言っていた。分厚い防護服を着込んだ人間には細やかなキータッチは不可能だから、ディスプレイ全体が表面弾性波を拾えるようになっていた。

スグリはその指示どおりにパネルに手を伸ばし、触れる。しかし期待に反してなんの反応もない。ぎゅつと押す。爪の先が白くなる。沈黙。スグリは無意識に小首を傾げる。

生体センサによるセキュリティロックの自動解除後に、閾値以上の応力を加えればよいはずだった。スグリはそれを知識として知っていたし、現にパネルの指示にもそう出ている。

スグリはむう、とひざ立ちになり、ディスプレイに両手を添えて、えいえいと跳ねるように数度応圧した。すると、ピピ、と短い電子音。ほつとして、ひざ立ちのままコントロールパネルからそろりと手を引く。

ディスプレイの表示は変わり、機械的なスイッチを模した最終確認のボタンイメージが描かれている。ボタンイメージは小さく、親指の先ほどしかない。このイメージは短く三度、押下することになっている。もたもたしているとキャンセルされてははじめからだ。

スグリの人差し指がそろそろと伸びる。今度はすぐに反応した。

真っ赤だったインジケータの光が黄色に変わった。ディスプレイには後退せよ、のサイン。

スグリはひよいと立ち上がり、後ずさる。センサの走査範囲から逃れたところで、インジケータがグリーンへ。地面の金属板がゆつくりと、真ん中から左右に割れていく。長い階段とスロープの通路がスグりを迎える。

エマージェンシーゲートと待避通路からなる、特に緊急避難路として区別される区画は、複雑に連絡する通路の全体からすればごく短い。緊急なのだから当然だ。もつとも、大深度施設ゆえに階段は長く、気の短い者ならそれでうんざりするということもある。それでも決して先の見えない旅路ではないし、本来なら、シエルター最外郭の隔壁までは大型の昇降機を利用することができる。

いまは本来の使い方をしていない。脱出用通路を使って施設に進入しようというのだから。幅の広い階段を少し降りると、途中、平面の通路に出る。広大なミドルフロアだ。ここで昇降機と、配電が止まった時のための階段が合流する。

スグリは歩きながらちらと昇降機のドア付近を見やる。エレベーターコールパネルのボタンが明滅しているのが見えた。押せば、使える。しかしここで悠長に昇降機を待つこともないだろう、とスグリはすぐに視線を戻す。実のところ、昇降機は大人数を一度に運ぶためのものだから、あまり高速ではないのだ。

フロアを突っ切り、再び下り階段にさしかかる。眼下に次のミドルフロアが見えている。人影がないのを確認して、スグリは階段を飛び降りた。尻をぶつけないよう気をつける以外

には、着地寸前にほんの少し降下速度を減じるだけだ。ほとんど自由落下のようなもので、昇降機を待つよりずっと早かった。

同じようにして二、三のフロアをジャンプすると階段での降下は終わり、通路は緩やかな下りスロープに変わる。非常灯の下を少し歩けば、すぐにエアロックチェンバーが見えてくる。

一度に大勢が出入りするこのチェンバーの扉は、シエルターゲートのものより重く丈夫にできていて、見てくれは少々威圧的だった。しかしある意味では献身的な機械でもある。だれでもスムーズに通過できねばならない、という要求の度合いは正規通路のもの以上だからだ。気密扉の開閉は全自動で行われるし、広いチェンバー内を歩くあいだ、与減圧完了までのカウントダウンが常に確認できる。必要以上に急いでもしかたないから落ち着きましよう、というわけだ。

歩調を調整しながら、ひとつのスイッチを押すこともなくスグリはエアロックを抜ける。通路の先にはもう居住区へ出るドアが見えている。

スグリは居住区に降りることは少なかった。たまに顔を出せばみんなよくしてくれたし、スグリも彼らと話すのを楽しみにしていたが、スグリはその在り方ゆえになかなか人々と笑って暮らすということは難しかった。いつも外を忙しく飛び回っていたし、スグリの個室は管理セクターにあったから、休みはそこで取った。

すぐ目の前に見えている居住区へのドアをほんの少し未練に思いながら、スグリは通路を

左に折れる。

避難路から降りていくのははじめてだったが、ここからは管理通路だ、ということが雰囲気であつた。地下居住環境の維持に深くかわる施設に繋がっていて、誰でも入れるわけではない。管理通路は避難路よりもずいぶん手狭だつた。小柄なスグリの身でも、広げた手が両方の壁に届きそうだった。

正面に耐爆扉が見える。歩み寄るが、開かない。

ドアにはカードスロットが装備されている。しかしあいにくとスグリはカードキーなど持たない。普段使っている正規の通路にもセキュリティドアの類はいくつもあつたが、そのどれもが非接触かつアクティブに生体認証を行っていたから、スグリは鍵を意識すること自体ほとんどなかった。しかし、どうやらいまはそういうものが必要らしい。スグリは焦つた。

ついでドアに飛びついて、カードスロットを備える認証ユニット周辺をくまなく調べた。なんらかのサブシステムでアンロックできないかと期待したが、だめだつた。指紋や虹彩など、人間の個体識別が可能なインターフェイスは見あたらなかった。スグリは冷たい耐爆扉に背を預けてため息をつく。

居住区を抜けて正規通路に出るしかない、そう思つたときだった、スグリは対爆扉の右脇最上部、ほとんど通路の天井に設置された、監視カメラに気がついた。

カメラを見上げてだめもとでうつたえてみる。両手をいっぱい広げて大きく振つた。手

をあげたままぴよんぴよん跳ねた。対爆扉を指差して、ぺたぺたと何度も壁を叩いてみせた。どうか、だれか、気づいて。

しばらく身振りを続けて、ようやくスグリはあきらめた。万策尽きた。お手上げだった。ばんざいしてぐったりと扉に張りつき、蚊の鳴くよううめきと共に、ずるずる滑ってひざをついた。情けなかった。だが、のんきに疲れている場合でもなかった。開かないものはいしかたあるまいと立ち上がり、それでも少し肩を落として、扉に背を向ける。

——背後でピピ、と電子音。

スグリは、いままきに歩み出そうという姿勢で固まった。

通路に鉄の軋む音が響く。足下から細かい振動が伝わってくる。微かな風が、ふつと頬を撫でていく。

振動が収まり、通路を反響していた重い音も消えるころ、スグリはぎぎぎ、と首だけ回して肩越しに背後をうかがった。思った通りだった。あれだけ頑固だった耐爆扉が全開している。

ようするに、とスグリは思う。先ほどの必死のジェスチャーは、カメラの向こうにいる人の目に、めでたく止まっていたわけだ。しかしその人は自分がなにを訴えているのか、その内容の認識に間違いがあつてはいけなさと、できるだけ多くの情報をあの身振りから得るために、いまこの瞬間まで監視を続けた……そんなわけが、あるか。

スグリはなおも肩越しに、監視カメラを睨みつけた。カメラは動じずスグリを見つめかえ

し、キュイン、とフォーカスサーボを意地悪く鳴らした。

「ご機嫌ナナメね」

室の最前のコンソールに腰掛け、監視カメラ映像を集積表示する巨大なモニタを見上げながら、オリンは苦笑する。

たくさんの機械と表示装置が整然と並ぶ、明るい部屋だった。居住区よりも下層に位置する管理セクターの、セントラル・ルームだ。この一室で地下シエルトのすべてをコントロールしているわけではないが、重要なセクションのひとつであることには変わりない。多くの局員が忙しそうに行き来している。

集積モニタは何十にも分割されて方々の監視映像を同時に映し出している。どれも高価値施設の異変を捉えるためのもので、居住区を映したものは少ない。居住区が重要でないという意味ではないが、この場の管轄ではないのだ。やろうと思えば干渉は可能だったし、大昔はそうしていた。いまその必要がないことはむしろ喜ばしかった。居住区は居住区で、ちゃんと自立している。

したがって監視カメラの多くは機械室や制御室の様子を映すことになり、どの画面にも代わり映えない映像が静止画のように張りついている、というのが常だった。だからいま、肩をいからせて通路を進むスグリを自動追尾している数画面は、実によく目立つのだった。ペンとファイルを手にして通りかかった青年が、オリンの眩きを拾っていった。「あれは

誰だつて気分悪いですよ」

「なによ」オリンは青年を振り返つて反論する。「みんな一緒になつてはしやいでいたじやない」

「僕らには、クリティカルセクシオンを任意に開放する権限はないからね」

「そうやって私だけを悪者にする気ね」

「たしかに僕らも口は出さなかつたけど。でも一番の悪者は、やつぱりあなたじゃないかな」オリンはさらに反論しようと口を開きかけたが、ちょうどそのとき室前方のドアが勢いよく開いて、オリンと青年は揃つてそちらに目をやった。室の奥で作業中の局員たちも何人かは氣を取られたようだった。

モーター駆動の自動ドアだから、今回に限つて勢いよく、などということがあらずないのだが、そのような表現もあながち的外れではないようにオリンには感じられた。ドアをくぐつた少女の表情を見れば、だれだつてそう思う。

少女がぐるりと部屋を見渡した。その視線はコンソールに着いているオリンを捉えて止まる。「オリン……やつぱり」

「あら、ご挨拶」オリンは片手を挙げてこたえる。「いらつしやい、スグリ」

スグリは不機嫌な面持ちでオリンを睨めつける。巻き込まれてはたまらないと、青年はそそくさと退散した。

「見てたんならすぐに開けてよ」

そばまで歩いてきたスグリが、ちらりと集積モニタを見て言った。先ほどよりさらにげんなりとした声だった。ここに彼女自身がどのように映っていたのか想像してしまつたに違いない、そう考えると、オリンは可笑しくてしかたがない。

「見終わって、すぐに開けたわ。とつてもキュートだった」

「うう……」

「録画しちゃったりして」

「なにしてるの!？」

「監視映像だもの、自動記録よう。ま、そのうち上書きされるわ。何事もなければ」

「うぐぐ……」

「そもそも、どうしてあんなところから入って来たの。ひよつとしてメインゲート、落ちてる？ こっちにはそんな情報、来てないのだけれど」

スグリはハツとした様子で顔を上げ、しかし、なにか言い淀むようにうつむいた。少々妙な反応だ、とオリンは思った。何気なく発した、当然の質問だったのだが。オリンはからかうような氣勢を抑え、所在なさげに視線を彷徨わせるスグリの言葉を待つ。

「扉は大丈夫。……それより」室の奥で働く人々に目を止めて、スグリは言った。「なんだか慌ただしいようだけど、なにがあつたの？」

「発電機が、ちよつとね」とオリン。「制御信号にノイズが混じつて、ちよつぴりオーバーロードした感じ。ああ、いまは大丈夫よ、もちろん。ただの安全確認中。たいしたことはな

いわ。それよりも、このあたりのコンピュータの方がひどかった。突然不安定になっちゃって……大変だったのよ、もう」

そう、大変だった。本当に。先ほどまでの混乱を振り返り、今度はオリンがうつむきたい気分になる。

まるで桁外れに強力な電磁波障害を受けたようだった。多くのコンピュータが同時に、一斉に不調になったのだ。自らの機能として最強レベルの電磁シールドを組み込まれた機器、たとえば基幹電力用発電システムなどがそうだが、それらでさえ小さな異常は免れなかった。特別のシールドを持たないモニタ機器などのダメージは大きい。

「スグリー、たぶんそのとき、あなたは地上にいたんでしょう。なにか知らない？ 太陽が爆発でもしたのかしら」

機器が持つシールド強度がトラブルの大小に直結していることから、このあたり一帯が外部からの大規模な電磁的ノイズに晒されたのだろう、ということは想像に難くなかった。だが電磁ノイズとはいっても、シエルター内のいずれの施設も事故は起こしていない。太陽が爆発、というのは冗談としても、地上でなにか未知の現象が発生し、コンピュータ類はその影響を受けた可能性が高い。

そして、同じような現象が今後も起こりうるのか、であればそれはいつなのか、オリンは知りたかった。原因がなんであれ、地上付近からの電磁干渉であれば、シエルターの外郭が内蔵する対電磁シールドをアクティブにすることで防御が可能なのだ。しかし電磁シールド

用ジェネレーターアンプの容量は十分ではなく、いまのところ最大出力で何日も稼働を続けるということはできない。逆に、今回に至っては未使用だ。宝の持ち腐れである。電磁シールドを有効に使うには、この謎の電磁ノイズ現象が発生する時期の予測が必要なのだ。

だというのに、そのための情報がまるで足りない。地上の様子をモニタする手段は多くはないのだ。オリンは心でため息をついた。

地上で暮らす人たちも増えてきたとはいえ、彼らはまず慣れない地上での生活に順応しようとは必死だった。いまはまだシエルターに籠もる居住区の人々も、もちろんオリンたちセクター員も、いずれ地上に出た際は彼らの生活の知識を頼ることになる。彼らにさらなる作業を負担してもらうのは得策でなかったし、オリンたちには、こういう問題への対処はセクターの役割だ、という自負や責任感もあった。しかし意気込みに反して諸々の観測機器の設置はそれほど進んでいるとは言い難かった。なぜなら――

いま現在、地上は素晴らしい世界だ。オリンも何度か上がったことがある。あまり長くセクターを留守にはできないから、シエルターゲートからそれほど離れることはできないでいたが、それでも残っている記録映像で見るとはまるで別世界になっているというのがわかった。赤茶けた大地は鮮やかな緑に染まっていて、灰と煙で息もできないと思っていた空気が思いの外うまく、胸一杯吸い込んで深呼吸吸したものだ。

しかし地上は、自然とは、そのような優しい面ばかりの世界ではないのである。それは時に厳しさを持って荒れ狂うものなのだ。

人間は、そんな自然の中であたりまえに生きていた時代もあったはずで、それは誰もが知識として知ってはいた。だが、一万年を地下で過ごしたいまの人々にとって、地上はその美しさに惹かれてなんの準備もなしに飛び出して行くには無謀きわまる世界でもあった。

観測用機材の設置が遅れている理由はごく単純だ。大地はあまりにも広く、空はあまりにも高く、森はあまりにも深いのだ。地上の様子を探るには、いましばらくスグリの協力が必要だ。しかし、

「……あああ……」

先ほどから、当のスグりは頭を抱えてうめくばかり。

「なによ、どうしたのよう、さつきから」

普段のスグりはけつこうハッキリした物言いをするタイプで——それなりにからかい甲斐はあるものの——あまり長いあいだこういう表情は見せない。のんきなオリンも次第に心配になってくる。

スグリの悩みや不安というものは、いつも自分たちの安全に関わってくる。……たまには彼女自身の悩みの聞き手になってやりたいものだと思うが、少なくとも今回はその状況ではないのだろう。スグリの表情からは、口にはしづらいが早く伝えねばならない、という葛藤が容易に見て取れる。ようするに、悪い知らせというやつだ。

オリンは気を引き締めて問うた。

「そんなに考え込まないでちょうだい、スグリ。機械の故障は私たちでなんとかする。ちょ

つと訊いてみただけなんだから。ね、私の質問なんかより、そろそろあなたの話が聞きたいわ。なにか伝えるために来てくれたんでしょ」

「……うん」

スグリは目を伏せると、小さなため息をひとつ。それでようやく決心がついたというように顔を上げた。

「最近みんなが言っている、あの空を飛ぶ、雨でも雪でも鳥でもないもの。さつき、ちよつと見にいったんだ」

スグリは重い口調で話をした。

当然のことその話には部屋にいた多くの人が興味を持った。この場のリーダーといつてよいオリンが、特に持ち場に戻れというような指示を出さなかったから、周囲にはちよつとした人ばかりができた。彼らに向かってスグリは細かく説明した。

程度の差はあれみな動揺しているようだ、ということがオリンにはわかった。表情をうかがうまでもなく、背中越しに重い空気が伝わってくる。

「ふむう」沈黙が場を支配してしまわぬうちに、オリンは腕組みし、神妙な面持ちでうなずいて見せた。「なるほど、あれは、バスターだったのね」

「う……ごめんなさい」

「なにをあやまるのよ。あなたが無事でなによりだわ。本当に、どこもけがはないの」「ありがとう、だいじょうぶ」

「でも、ちよつぱり髪が汚れているわね」

「そ、そうかな？」

スグリは慌てた様子で、手でいそいそと髪を梳く。一方、オリンは不自然なほどにつこり笑つて、「お風呂に浸かつてらつしやい」

「へ？」スグリは手を止め、目を丸めた。「……オリン、いまはそんな場合じゃないよ」咎めるような視線もどこ吹く風。オリンはちつつ、と人差し指を振りながら、露骨にのんきをよそおつてウインクまでして見せる。

「だめだめ、だめよ。女の子が髪をいたわらないでどうするのよう。というわけだから」

オリンはさつと人だかりに視線を走らせた。大勢に混じつて聞き耳を立てていた一人の娘に目を止め、その娘に手招きする。「ちよつとちよつと、ヒルデさん、この方、奥にお通ししてあげて！」

「え……っ」

呼ばれた娘は突然話を振られて一瞬慌てふためいたが、「……ああ、ああはい、はいはい。うけたまわりました！」と、すぐに得心した様子でスグリの脇に並び、しっかりとその肩を抱いた。

「さあさ、こちらです」

「ふえ!？」

一見小柄なこの娘は意外に思い切りがよく、快活で、パワフルであつた。スグリの肩を押

しながら人だかりをかき分け、室の奥の扉を目指してずんずん進んでいく。居住区とはまた別の、セクターの局員らが生活する区画に向かっているのだ。そこにはスグリにあってがわれた個室も入っていて、だから当然スグリ自身もこのあたりの施設にはある程度通じている。

それを、この場の誰もが知っている。ようするにこの娘、ヒルデは、道案内ではなく連行役だった。

「ちよ……ちよつと、ちよつと」

ヒルデの歩みは止まらない。強引に背を押されながらスグリはおぼつかない足取りで局員らを振り返った。みな苦笑いで見送るばかりで、助け船を出そうというものはいない。

オリンは満面の笑みを浮かべて小さく手を振った。

「ごゆっくり」

「は……」

「さあさ、髪が傷んじやいますよ。シャンプーハット使います？ あのためし、背中をお流ししましょうか、ねえ！」

「……はあああああ!？」

スグリは絶叫した。ヒルデの妄言に対して、ではないだろうなとオリンは思う。スグリにとっては、この場の全員がこの状況で、自分をバスルームなどに追いやろうと本気で考えているらしいというのが理解できないのだろう、わけがわからなくなったに違いなかった。

いえいえスグリ、傍目にもあなたは疲れているわ。精神的に、まいっている。あなたの話

をどう受け止めるか、機械の鳥たちにどう対処するか、私たちがどんな結論を出すにしても、その行動の核はあなた以外にありえない。だから、というのもおかしいけれど、あなたには決して無理をしてほしくない。みんながそう思っている。あなたはまず心身をリフレッシュすべきだわ。満場一致で、お風呂に浸かるべきなのよ。

二人の少女はそれぞれに騒ぎ立てながら、扉の奥に消えていった。

それを見送って、先ほどの男性職員が指の上で器用にペンを回しながらオリンに尋ねた。

「なかなかやりますねあの子。新入りですか」

「助手、かしらねえ、個人的な。鈍くさいけど察しがよくて助かってる。ここに入れたのは最近だけど、新入りつてわけじゃあ……ちよつと、デスクに座らないでよ」

「しかし、困ったことになった」と別の局員。「あの影がそんなに危険なものだったなんて」その宇宙船の連中はいったいなにを考えているのだ、とまた別のものが言う。みな口々に話し始め、議論が紛糾し始めそうになったところを、オリンが制した。

「この際、相手さんの迷惑はどうでもいいわ」

「どういうことです、そいつらの目的もわからないでは、対応のしようがないでしょう」

「いくつかりますわよう。優先度が高くて、急がなきゃならないのが」

澄まし顔でそう言うと、もったいぶらないで早く話してくれ、という声があちこちで上がった。「緊急事態なんだから」

「あら、ごめんなさい。ちよつと緊張感が足りなかったかしらね」オリンは一同を見渡し、

ことさらやんわりと微笑みかけた。「まずは起こった事実をみんなに伝えること。スグリはいろいろ気をつかってたみたいだけど、へんに隠したりしない方がいいと、私は思う。大丈夫、みんなそれほどヤワじやあないわ、地上^{うえ}の人たちなら特にね。そうしたら次は、ここがまたバスターの余波でぐちゃぐちゃにされないような対策をしましょう。こっちの方が大変よ。……でも、急いでやらなければならない。あなたたちも、さっきみたいな大混乱はこりこりでしよう」

そのとおり、あのような騒動はもうごめんだと、みなが強く思った。しかし同時に、そこそいまはそれどころではない、相手の思惑を探る方が先ではないのか、とも。オリンの言葉の真意を即座に汲み取れたものは、ごくごくわずかだった。

*

やってしまった。

ふかふかのベッドに清潔なシーツ。羽のように軽く柔らかい布団にくるまって、抱き枕というわけでもない小さな枕をなぜか両手に抱えている。寝ぼけた頭でスグリは思った。やってしまった。

ここは自分の部屋だということはある。あの少女……そう、ヒルデといった。彼女に連れられてこの部屋に入ったのは覚えている。そしてたしか、ヒルデは食事を用意すると言っ

て出て行った。もう準備はできていて、すぐ戻るからここを動くな、と。自分はベッドに腰を下ろして、そしてそのまま寝入ってしまったのか。布団を整えてくれたのはヒルデだろうか。どうせなら、起こしてくれればよかったのに。

結局スグリは、いささか強引に自分を連れ回すヒルデの手を、本気で振り払うことはしなかった。彼女や、オリンや、ひいてはあの場の局員たちが、自分を気づかってくれているのがわかったからだ。一方でスグリも、彼らは今後の対応をよく議論してくれるだろうと信じた。自分一人では到底下せなかった判断を、彼らに託した。

だからいちおう、風呂には入った。シャンプーハットは使わなかったが。

ただ、現在の状況で人々が取り得る行動というのは多くはなかった。すなわち、攻めるか、守るか、逃れるか。それとももう少し様子を見るか。いずれにせよ、それは戦い方を、その姿勢を決める、ということだった。相手の敵意は明らかだから、おそらく戦い自体は避けられないのだ。

しかしスグリにとっては、突然のことにながなんだかわからないのが実際だった。

いきなり攻め返す——どこに向かって、と言われれば困るが——のはできれば避けたいが、もたもたしているうちになにか取り返しのつかないことになるかもしれない。万一そうなった時、まず危険なのは、暴力にあらがう力を持たない人々だ。自分ではない。これは、自分の独断で決められることではない。

だから、スグリは人々に助力を求めたのだった。彼らが下した判断であれば……みんな

が自分に、戦ってくれと言うのであれば、がんばれる気がした。

みんなを信じたというよりも、わたしはみんなに頼っているんだ。どうするのが一番いいのか教えてほしいんだ。背中を押してほしいんだ。みんなはそれに応えようとしてくれる。

素敵なことだ、とスグリは思った。これまで長いあいだ、スグリが人々を助けていた。この星の傷はどうしようもなく深く、人々には手の打ちようがなかったから、いつもスグリがどうにかしてきた。それが人々を助けることにも繋がった。

しかしいまは、みんながこの自分の力になろうとしてくれている。戦いに晒されて、というのがなんとも残念なところではあるが、そのこと自体は、とても素敵だ——ふと、頬に冷たいものが触れた。

枕が吸った、よだれ。

「……」

だからといって、こんなはずではなかったのだ。やってしまった、まさか寝入ってしまったなんて。

最近になってようやく人々も地上に出られるようになっていた。だから、これからもっとこんな素敵なことが増えていくに違いないとスグリは思った。人々と、この自分とが、地上の生活を豊かにするために協力してできることが、まだまだなにか、あるはずだ。

だが、そんな素敵な夢を脅かす事態がいま迫っている。これを直接なんとかするのは普通

の人々には難しいだろう。もう少し、自分が頑張らなければならぬのだ。

「甘えすぎないようにしないと……」

どうやら昼寝や仮眠の域ではなさそうだった。後悔深いものの、体の調子はすこぶるよい。頭もだんだんと冴えわたってきて——たぶんこれは、最適な睡眠時間をグツスリやってしまっている。

部屋の明かりは落とされている。ベッド脇のナイトテーブルに品のよいテーブルランプが置かれていて、暖かい光を薄く広く発している。それが唯一の光源だ。

ランプに備えられた小さなデジタル時計の数字を読み取りスグリはうめく。夜中の一時。なんとという時間に目覚めてしまったのだろうか……いやそれより、いつたい何時に寝入ってしまったのだ？

とにかく着替えて、顔を洗って、それからみんなに会いに行こう。だれか、起きているだろうか。

簡単に身なりを整えて部屋を出る。スグリは昼間オリンたちと話した部屋へ向かった。

あのあとオリンたちはどんな話をしたのだろう。鳥のような機械たちがまた現れてはいないだろうか。地上の人々には大事ないか。少なくともこれまででは、あの機械たちは人々を攻撃したりはしなかった。きのうの自分の行動が、その態度に影響を与えていなければよいのだが。

セントラル・ルームにやってきたスグリは自動ドアの前に立ち、センサに身を晒す。モ—

ターが作動してドアが開くと、なかの様子にスグリは少し驚いた。夜中だというのに昼間と変わらぬ明かりが煌々と室を照らしていた。見渡せばデスクのあちこちに紙の資料やファイルが置き去りにされていて、誰も着いていないコンソールのモニタに火が入ったままになっている。いつもきれいに整っているはずのこの部屋が、どうしたことだろう。

局員の数は減ってはいるものの、みな休んでいるわけではなさそうだった。どこか散々とした部屋の雰囲気からは、人々は一時的に別の場所に出向いているような感じをスグリは受けた。

「スグリ、ちようどよかった」

一番後ろのデスクでオリンが手招きしている。何列にも並んだデスクは後部にいくほど高くなっていて、オリンのいる場所からは部屋全体が一望できた。そこは彼女の定位置だ。普段はあんな風でもここでは偉い立場だから、彼女はそこを離れることは滅多にない。

それを思えば、予定にないバスターの使用によって起こった混乱は相当のものだったのだろう、とスグリは昼間を振り返った。あの時オリンは最前列のデスクに着いていたのだ、くたびれた様子で。監視カメラの件でからかわれたこともあって、気が回らなかったが。

「オリン」スグリはてくてくとオリンのそばへ歩み寄る。「みんな、休んでないの？」

「地上と違ってね、こっちは夜が遅くって」

「それでもいつもとは違うよ。交代の人たちだって」

「そうねえ、総出だわねえ」

言つてオリンは白いカップを口に運んだ。茶色い液体、珈琲だろう、とスグリは思う。遅れて香りが漂ってくる。間違ひなかつた。単なる嗜好か、それとも気付かけ眠氣覚ましか。

「飲む？」

「いらない。オリン、わたしだけいぶん休んじやつたよ」

「みんなの期待どおりにね。よく眠れたの？」

「……そうだね、うん。もちろん」

「なら、よかったわ」オリンはもう一度カップを傾けた。ほう、と白い息を吐いて続ける。

「それでね、スグリ。いまからラボに行くんだけど、ちよつと着いてきてもらえるかしら」

スグリはたじろいだ。一口にラボとはいってもそう呼ばれる部屋は数多く、設備は用途によつてさまざまだ。薬品を調合するためのクリーンルームだったり、大がかりな機械を組み上げる工作室だったり。いずれにせよそれらのイメージに共通しているのは、

「……難しいことはわからないよ」

オリンは、それは期待していない、と笑つた。

「ちよつと見てもらいたいものがあるのよ。見せてもらいたいもの、かしら」

「これって……」

オリンに連れられて入つた部屋はやはり工作室の趣が強かつた。意外にこざつぱりとしていて、大工場、というような感じはあまりしない。部品の生産をするよりも、組み立てをす

る場所のようだった。機械やコンピュータを整備するための部屋に違いないとスグリは思った。数力所に一定の間隔を空けて、対象機材を載せる台座や固定用の装置、それに人が扱う工具などがセットになって配置されている。

スグリとオリンが並んで立った台座には、なにも載っていなかった。天井からディスプレイを備えた多関節のロボットアームが伸びていて、オリンが見せたいというものはそこに映し出されていた。

ディスプレイを見上げてスグリは言った。

「ひよつとして、武器？」

細長い本体に傾いたグリッブ。小さなトリガーも見える。誰もが一見して「銃」とわかるものの画像。

「みんなでこんなものを作っていたの？」

「作ってなんかないわ」オリンは少々高すぎたディスプレイに手を伸ばしてスグリの視線に降ろし、自身もそれを覗き込んだ。「探してたのよ。あなたはきつと覚えていないと思って」「……どういうこと？」

「……スグリ、私たちは、あなたに戦ってほしいとは言いたくない。本当よ。もつと本音を言えば、そんな危ないことはしないでほしい。あなたがしばらく地上に出ないよう、ここに引きとめようと言う人さえいた。でも、あの機械の鳥たち、なにをしてくすかわからないじゃない。もしもそうなったとき、あなた以外に何とかできるひとはいない。だから——」

「だから？」

「これを、使ってください、スグリ。少しでも楽に戦えるように。記録を読む限り、たぶんバスターより役に立つ。バスターはあの機械の鳥と戦うのには向いていない、わかるでしょう。でもこれは違う。とても扱いやすいし、あなたへの負担もずっと小さい……このあたりの本当は私たちにはわからないけれど、ここにはそう書いてある。この記述はある程度信用できると、私たちは考えている」

オリンはいつになく真剣にそう言った。オリンは、心情的にスグリを危険に晒したくはなかったし、セクター局員の立場としてもそうするわけにはいかなかった。スグリに万一のことがあれば、次は地上の街が危ないのだ。だれにとつてもスグリを失うわけにはいかない。しかしスグリの代わりを務められる者など一人としていない。たとえオリンやほかのセクター員たちが蛮勇を奮ったところで事態を悪化させるだけだということは目に見えていた。オリンの心境は複雑だった。

勝ち続けてももうしかない、なんとしても。オリンの声や表情にはそういう苦渋がありありと滲み出ている、それは自分を心配してくれているがゆえなのだ、とわかっているにもかかわらず、スグリは気圧された。

「でも、こんなもの」

「あなたがなにを不安に感じているのかはよくわかる」オリンは口ごもるスグリの目を真っ直ぐ見つめて言った。「でもスグリ、私たちが武器を作り出すことを恐れる必要はないわ。」

というより、いまの私たちにこれほどのものを作る技術は残されていない。これは特別なのよ。私たちはこの記録にたどり着いて、この装置がかならず存在すると信じている。でも、きつとその場所は、私たちのラボのどこかではない。だから私たちには見つけれない、あなたにしか……これはたぶん、バスターと同じものなのよ」

それは、どういう？ スグリはオリンの言葉の意味を吟味する。バスターと、同じ。

戦争で傷ついたのはなにも大地だけではない。大気もひどく汚染されたし、衛星軌道上には破壊され、放置された巨大な兵器の残骸がいまもいくつも漂っている。そうしたスペースデブリや、不運にもこの星に衝突する軌道に乗った流れ星、それらをなんとかするための装置がバスターだ。それは地下シエルターで作られたものではなく、もつと以前に、ボロボロの地上で作られた。長い時間をかけて星の手当てをするスグリのために、その仕事を少しでも助けるためにと、スグリとほぼ同時期に生み出されたものだ。

少しのあいだスグリはうつむき、黙っていた。視線の先にはオリンが下ろしたディスプレイがあったが、スグリの意識はそれに向いてはいなかった。スグリはどこか、とても遠いところを見つめていた。

そんなスグリの表情を覗き見て、オリンはますます話しに熱を込めた。スグリがディスプレイのデータに関心を向けていないことに気をもんだのだ。「ね、見て。けっこう細かく記してあるでしょう。けれど、もしこんな視覚化された情報で足りないのなら、この装置の物質的な組成自体を記録しているカスケット（容れ物）がどこかにあるはず。いま、みんな

必死に探しているわ。それに触れれば、きつと——」

スグリは静かに首を振って言った。

「いないよ」

「聞いて、スグリ」

スグリのそうした態度は想定の内であつたらしく、オリンはさして動揺を見せない。身を屈めてスグリに向かい合い、食い下がろうとする。しかし、スグリはそんなオリンを手で制し、その言葉を遮つて、必要ない、と重ねて言った。

多少強引になつてもこれはゆずれない、と決めていた様子のオリンだったが、そんな彼女もさすがに怯んだ。苦しそうな表情だとスグリは思い、彼女のつらさを和らげようと小さく微笑んで見せた。そしてオリンを制した手、前に伸ばした右腕を、ゆっくり真横に開いて言った。

「もう思い出した」

その手のひらから幾条もの光芒があふれ出す。

「スグリ……」

オリンははじめてスグリの力を間近に見た。オリンに限らずこういった場に立ち会った人はいなかった。たまにふらふらと空を飛んでいる以外、日頃のスグリはまったく普通の人だった。それもそのはずで、たとえばバスターを使うときなどは、スグリはまず狙撃位置に立ち、周囲の安全を確かめたうえで装置の構成をおこなうのが常だった。なにも人目を忍んで

そうするわけではなかったが、しかし近くに人がいるでは実射はできない。それがわかっていてあえてスグリの仕事を邪魔しようという者もいなかったから、結果的に、いままでこういった瞬間はだれの目にも触れることがなかったのだ。

「きれいなね」とオリン。

いまこの場では、なにか途轍もないエネルギー活動がおこなわれていて、さらにその巨大な反応の余波がすべてを吹き飛ばしてしまわないようにするための活動、というものも同時に進行している。しかし具体的にいったいなにがどうなっているのかという話になると、それは人々の認識の遙か彼方。オリンには、目の前の光景はただ美しく見えた。オリンだけではない、いかなるモニタ機器を用いてもそのすべてを観測することはかなわない。人の目にも機械のセンサにも、それはただ、幻想的な光の乱舞として映った。

淡い陰影は明確な光の帯に姿を変え、互いに引き合い折れ重なってその輝きを増していく。オリンがふと我に返ったようにつぶやいた。

「手放しに喜んでいいものかしら」

スグリはいたずらな笑みで返す。

「あんなに使い、って言ったのに？」

「あなたの負担を減らすためなんでもする」オリンは深刻な顔のままで言った。「けれど私たちはそういう建前で、あなたに武器を持たせて戦わせようと……あなたにみんな押しつけて、あなた自身を武器に仕立てているのかも」

「そんなこと」

「いいえ、見方を変えればすでにそういうことになっている。それでもあなたはそれを、手にしてくれるの」

「わたしだって、みんなを守りたいと思ってるよ」

やがて薄明に浮かび上がる極光の輪郭。それは力のかたちを定義するもの、そのひとつ。

「……これを作った人たちは、私たちよりずっと戦いを身近に感じていたはずだわ。そしてあなたは、戦いで傷ついた星を、治すひと。昔の人はどんな気持ちであなたにこれを、武器なんてものを、遺したのかしら」

懐かしいな、とスグリは思った。その人は、同じ表情かおをしていたよ。

スグリの手がグリッパに触れる。光の膜が弾け飛ぶ。

「きつと、オリンたちと同じ気持ちだ」

オリンは一瞬ほうけたように固まって、それからくすくす笑って言った。

「あなたって本当、おませさんよね」

スグリの両手にずしりとした重量感。だがそれはバスターと比べれば遙かに小型で、より機動戦に適したメイン・ウェポン。新しいビーム砲を胸に抱えて、スグリはにつこりとはにかんだ。

その装置はビームライフルと呼ばれることになった。

コンバットマニユーバ

彼女はただのふつうの人だった

彼女はさまざまな力を与えられたが、扱い方を教わることなく一人になった
彼女の心は力を識らない

それでも、力はいつも彼女のそばにあった

蒼空を横一列に並んだキューブが飛ぶ。六機編隊。それぞれが一基ずつ備えている大きな単眼が一斉に閃く。放たれたビームはその一部を光と熱に変え、急速に減速・減衰しながらも秒速三万キロメートル程度の速度で目標に到達する。した、はずだ。後方の戦術管制機がデータリンクを通して、ビームは目標位置を正確に通過した、とキューブたちに伝えた。

戦術管制機が渡してくる情報は、通常、キューブ自身が備えるレーダーシステムによつて収集・処理したものより精度が高い。そのためキューブたちは戦術管制機が装備する移動砲台のように振る舞うことも多かった。自分たちが勝手バラバラに行動するよりも管制機の指示通り動いた方が能力が上がるのだ。特に、遠く離れた敵をじっくり狙つて狙撃するというような場面では、刹那的な瞬間の対応能力よりも慎重さや正確さが重要になる。こうした場合、キューブはより確度の高い情報を得るために、積極的に管制機と交信する。

いまがまさにその時だった。会敵直後の先制攻撃。

キューブのビーム出力は特筆すべきものではないが、六発が同時に着弾したとあれば目標へのそれなりのダメージも見込めるだろう。

まだそこまでの踏み込んだ効果確認はなされていない。管制機が伝えたのは、攻撃指令に従って発射したビームが予定通りの空間を飛翔したという事実だけだ。普通ならそれで十分ではある。だから着弾した、と言い換えてよい。だがこの敵は、普通ではない。ここ数日の交戦でキューブたちはそれを思い知っていた。

キューブ編隊の一斉ビーム攻撃から間を置かず、その目標位置から一条の輝きが返ってくる。先ほど自分たちが放ったビームの軌跡を逆向きになぞるような、その青いビームにキューブの一機が貫かれ、機能停止、自爆する。

爆風に煽られる残存キューブたち。だが以後の対応は早い。キューブの機動制御が後方戦術管制機からキューブ自身の自律戦闘プログラムに移る。キューブは管制機の支援情報も取捨選択しつつ、独自の戦闘機動を開始。編隊を二機と三機にわけ、ビームを撃ちながら目標に接近する。

ビーム攻撃を受けた敵は回避機動へ入る——それは正確ではなかった。敵はとつくに、いつの間にか、機動していた。気づけば姿が見えないという状況。では自分はいまなにを狙ってビームを撃ったのか、なにを目指して前進していたのか、情報の整合が取れずキューブは混乱する。目標位置、不明。戦闘支援情報のアップデートもない。遥か後方から広く戦域を見渡しているはずの管制機すらもが、目標を見失っている。

混乱のさなか、三機編隊のキューブが敵からの攻撃照準を受ける。敵はキューブたちの進行方向真横、下方から接近していた。この時のキューブたちにとっては完全な死角だった。狙われた三機は対抗手段をこうじる間もなくビームに貫かれ、同時に爆散。

だがその攻撃によって目標位置は暴露した。距離があつた二機編隊のキューブは無事だ。二機に攻撃指令のアップデートが届く。キューブ自身のFCS（火器管制システム）も目標を捕捉している。しかし、速い。距離三〇〇メートル程度、急速に遠ざかっていく。いや近づいているのか？

敵はキューブたちをおおよその機動中心に、弧を描くように高速で旋回しているのはたしかだった。だが、レーダー反射波のドップラーシフトがまるで出鱈目で正確な速度は計測不能。敵はまるで数メートルもの振幅で激しく振動しているようだった。とても考えられないことだが、しかしレーダーはそうのように反応してしまっていて目標未来位置が予測できない。FCSが混乱し機能不全に陥る。こうなると電波的な追跡は不可能だった。まともなのは光学照準器だけだ。可視光線域での目標の姿は、ぶれて見える、などということとはなかった。

文字通りなんとか目で追っているという状態で、二機のキューブは再び目標への接近を試みる。ロックオンは不完全だがビームを発射。直撃を期待しない牽制攻撃。

結果的に、この攻撃はキューブ自身に致命的な隙を作った。敵はまるでそのときを待っていたというように、信じがたい制動能力でもってピタリと静止し、即座に精密射撃態勢に移ったのだ。敵が機動を止めたためか、キューブのFCSや各種レーダーシステムは正常な動

作を再開しはじめてはいる。だが二機ともビームを撃った直後、敵の精密射撃を妨害できない。

敵が右手に携えるビーム砲が青白く輝き、放たれたビームがキューブの片割れに食い込んだ。ビーム径自体は小さいために見掛け上の損傷は少ないが、機体のほぼ中央を貫かれたキューブは機能中枢のほとんどを失っている。戦闘続行不能、飛行不能、動力停止。もはや地上への落下衝撃でバラバラになるか、二次電源が切れるまで絶縁破壊部位から火花を散らし続けるだけだ。システムがそう判断し、キューブは一瞬の静寂のあと自爆。

最後に残ったキューブが大気の振動に揺さぶられながら、撃ち返す。そのビームは僚機が吹き上げた黒煙を貫き、確実に目標位置を指して飛ぶ。

しかし効果確認のいとまもなく、自身の防御システムからの緊急警告が回路内を駆け巡る。キューブは攻撃照準を受けていた。六時方向（真後ろ）、上空から。

一八〇度転回、見上げる。目標の再捕捉に成功。

強烈な太陽グレアを背負った敵が、わずか一〇〇メートルほどの至近距離からキューブの機体を見下ろしていた。

キューブの武器といえばビーム一本、そのエネルギーチャージはまだ整っていない。ビームが最大の威力を発揮するよう何度も接近を試みはしたが、一〇〇メートルなどという距離はいくらなんでも異常であった。キューブにはハイスクナ近接格闘用装備はない。こんな距離では戦えない。

真つ赤なビーム・ソードを振り上げた目標から虹色のブラストがほとぼしる。キューブの自律戦闘プログラムは自身の機能状態を走査、この局面を生き残るためのあらゆる手段を最優先で検索する。炸薬の力で突発的な軌道修正を行うリアクション・コントロール・バーニアに残弾がある——だがもう遅い。すでに目標未来位置の予測不能、最適な離脱角度が算出できない。

迎撃手段無し。回避不能。

空中衝突防止装置がフル稼働し、その警告が回路内を埋め尽くす。光学照準器いっぱい、虹が、広がる。

*

過去戦争で活躍した、戦う力を持った（へひと）は、前文明活動の究極的産物であったことは疑いようがない。であれば、彼らの恩寵を受けて駆動するFDM（中枢活動転移変換器）とそれを中心に組み上げられた装置群も、こと戦闘に於いてはやはり究極であろう。FDM。フィギュア・ドライブ・メタスタフューザー。メタスタフューザーは、メタスタサイズ（転移）とフュージョン（融合）からなる造語である、とされている。

「またそれ読んでるんですか、オリン」

声の方へ顔を向ける。ティーカップを持ったヒルデのあきれ顔が目に入る。いつの間に近

づいたのだろう。

数日前の宇宙船襲来以来、いまはようやく落ち着きを取り戻してきた地下管理セクターのセントラル・ルーム。室の最後尾、一番上のデスクで、オリンはヒルデに苦笑でこたえる。

「フィギュア、とはねえ」

FDMを備える武器システムは、パワースーツのほぼすべてを、自らを手にするオペレーターに求める。彼らが生成する組成を自身のレセプタに転移して動力として利用したり、ビームとして撃ち出したりするらしい。重く巨大なジェネレーターを自前で備える必要がないとなれば装置全体を小型にできるし、そういった武器のオペレーターとなるへひとの持つポテンシャルは、携行できる程度のジェネレーターとは比較にならないほど強大だそうだから、出力も著しいものとなるう。

オリンにはFDMがいかなる理屈でもって駆動しているのか知る由もないが、それが帯びた役割を理解するのは実に簡単だった。FDMというのはようにするに、使用者から力を受け取って武器システムに渡す、入力装置だ。エネルギーコンバーターのような機能も兼ねているかもしれないが。

いずれにせよ、オリンは思うのだ、そのまま呼んでもいいではないか、と。それなら単に、そう、たとえばコアエネルギーコンバーターとでもいいっておけばそれで済むのだ。その方がよほどわかりやすい。だがそこへきて、フィギュアである。フィギュア・ドライブ。武器の部品の名称として自然に出てくる言葉ではない。いかにも人型を意識させる語を、なんとか

引っぱってきた、という感じがする。

そしてそんな武器システムを扱う当時の〈ひと〉の異質さを、オリンは思う。繁茂^{はんも}しきった科学技術のもとに続いた戦争はまさにロボットウォーの様相を呈^{てい}し、普通の火器を携えた人間の出る幕など、もはやどこにもなかったことだろう。そんななか、主役のはずの多用な戦闘機械たちを凌駕し、戦場を席卷する〈ひと〉。その強烈な存在感を、戦争の指導者たちは最大限、あらゆる意味で、利用したに違いない。それはこんなシステムの名称ひとつとっても感じ取れるのだ。

「わたしには難しくてよくわかりません」とヒルデが言った。

「これ、そんなに難しいかしら」とオリン。「根本の動作原理だとか、特別に技術的なことには触れていないでしょう。そんなことを説明されたところで誰にも理解できないでしょうし。でもうまく概説がなされていて、なんていうのかしら、マニュアルとしてまとまっている。たぶん、まさにいまの私たちのような者のために、残された文書だと感じるのだけれど」

「使い方を讀んだって、わたしたちには撃てないでしょう」

言いながら、ヒルデはティーカップをオリンのそばに置いた。それで空いた両の拳を腰に添えると、どこかつまらなさそうに息を吐き出した。「そもそも一個しかありませんし」

「けっこうわかってるんじゃない」

FDMを利用する武器システムは、たとえばスグリのような、特別なひととセットとしてしか機能しない。なにせ普通の人間にはFDMにエネルギーを送り込むという芸当が理解

不可能だ。しかしバスターもビームライフルも、オペレーターからのエネルギー供給がなければ張り子も同然なのだ。オリンやヒルデがそれらを手にしてトリガーを引いても、なにも起こらない。

自らが手にする武器にエネルギーを流すというのはどういう感覚だろう、とオリンは純粋な興味にとらわれた。ピリリと痛いのだろうか。むずむずとこそばゆいのだろうか。

「ビームをたくさん撃ちすぎると、おなかが減ったりするのかしらねえ」

「あ、それ、わたしも思いましたよ。気になりますよね」

なんにせよバスターの常軌を逸した威力の秘密はこのFDMにあったというわけだ、オリンは、同じくFDMを備えるビームライフルの性能に期待を寄せる。デスクに埋め込みのモニタとそこに映るデータに目を這わせながら、ヒルデが用意してくれた紅茶を一口やる。

ビームライフルは単なるバスターのコンパクト版ではない。ビームの圧縮・加速器とリブーストエフェクト（発射後増幅効果）の整波装置で構成されるバスターに対し、ビームライフルは弾倉やチャンバー、排莢孔^{はいきょうこう}などを備えている。ビームライフルはその名の通り弾薬を運用するのだ。とはいえ発射の度にマガジンを交換する必要はなく、そのための機構もビームライフルは持っていない。弾倉内に直接弾薬を生成するのが、ライフルFDMの仕事だった。生成された弾薬は銃構造の機械的な動作によってチェンバーに送り込まれ、オペレーターの意志か、あるいはトリガーを引くことによって撃ち出される。

これはすなわち、オペレーターのコンディションが、最終的に発射されるビームの出力に

ほとんど影響しないことを意味している。

というのもFDMはその性質上、自らのオペレーターに対して、本来オペレーター自身の生体維持には不必要な高エネルギー活動を要求する。武器が必要とするエネルギーを生成する際にどうしても生じる余剰エネルギーの扱いもオペレーターに任せきりらしい。これは、仮に同じ武器を複数人で使い回すことを考えた場合、オペレーターの力量や習熟度合いによってその武器が最終的に発揮するエネルギー効率、ひいては攻撃力などの性能が大きく変化する、ということだ。しかしビームライフルを見た場合、オペレーターの練度、という要素の影響範囲はせいぜい弾薬の生成速度に誤差となつてあらわれるにすぎない。これは安定性の面で大きな利点である。

オリンをはじめセクターの局員らが、スグリにビームライフルを強く勧めた最たる理由がこれだった。なぜならオリンたちには、スグリが武器オペレーターとして、FDMへのエネルギー供給に慣れているとは思えなかったからだ。たとえば、バスターで小、中規模デブリを撃ち落とすときにしても、そうだ。

地下シエルターはバスターの発射時に発生する強烈なEMIから内部の機器を守るため、最外郭に高性能な電磁シールドを備えている。まだオリン自身の手で起動したことはないが、過去の稼働状態を示したログを閲覧することはできて、それを見るかぎり、バスターを扱うスグリは、射撃対象の規模などをあまり考慮しているように思えなかった——有り体にならずに言ってしまう、どうも毎回本気で吹き飛ばしている感がある。まるで加減ができていない。

だから一射毎にへとへとになっている、というわけではなさそうだが、それにしても効率が悪。自由に飛び回り、数も多いキューブたちを狙い撃つには明らかに向いていない。

その点ビームライフルならスグリがいくら力んだところで弾薬生成がわずかに高速になるくらいで、しかも弾倉がいっぱいになった時点でライフルはそれ以上のエネルギーを要求しない。弾倉がたった三発で満載となってしまうのは気がかりだが、ともかくバスターよりもスグリへの負担が小さいだろう、というのはそういう理由からだった。

逆に、スグリの調子が悪い場合でも完成した弾薬の質は一定なのだ。弾体加速に必要な突発的大電力の提供元もスグリであろうから、全体で性能低下が皆無かといえばおそらくそうではないだろうが、それでもビームの威力はある程度保たれよう。結果、相手にパワーダウンを悟られにくいとすれば大きなメリットといえた。

もつとも、オリンはそれを素直に喜べない。スグリのパワーダウンなどと、考えたくもない話だった。

考えたくないが、本当に考えなければ実際にそうなった際に取り返しのつかない事態に発展するかもしれない。互いに武器を取って戦う以上、それもあり得ない話ではないだろう。そうオリンは思う。だから考えずにはいられない。——いや、考えたところで、どうだというのだ。いつも助けられてばかりの自分たちが、スグリの助けになれるなどと、どうして思えるのだ。ここからでは彼女の戦いをモニタすることすらできないというのに。いくら考えても徒労なのかもしれない。……だが、考え続ければひよつとすれば、彼女をサポートする

画期的なアイデアを、なにか、ひらめくことができるかもしれないではないか。

スグリがビームライフルを手にして以来、オリンはそれについて書かれたデータにたびたび目を通しては、決まってそのような堂々めぐりに陥るのだった。

「わたし、思うんですけどね」

背すじを伸ばして、体の前で手を組んで、ポーズだけはよくできた付き人然としたヒルデが、オリンにぶつちよう面を向けて言った。

「わたしたちがそんなマニュアル読みふけてもはじまらないんじゃないですか」

「あらたまって、言うわねえ。私だってわかってるわよ。どうしようもないことくらい」

オリンはカップを傾けて息をつく。

「でもね、何かしらかわっていたいのよねえ」

「ビームライフルに、武器に、ですか？」

「そんなわけないでしょう……なんていうのかしら、任せっきりにしたくないの」

「オリンが、いの一歩に、任せるしかないって言っただんじやありませんか」ヒルデは目を伏せ、はふう、と大仰に息を漏らした。「やっぱり難しい」

難しいとは、そういうことか。オリンは肩をすくめる。

実際のところオリン自身にもよくわからなかった。この漠然とした不安、焦燥感のとは、なんなのだろう。

「そのうちにわかるわよ」

「あ、バカにした、いまちよつとバカにしましたね」

自嘲めいた台詞がどうやら少し偏向して伝わってしまったらしい。

「どうせわたしは子供ですよ。みなさんみたいに頭良くもないですし、かんたんな仕事も貰えないし、お茶汲みだけが能ですよ。いいんです、こうなったら将来は、給湯室に就職するんですからね」

「あら、そうなの。面接で私の名前、出してもいいわよ」

するとヒルデはいよいよふくれっ面で、「いーえつ、必要ありません。助けなんてなくたって、実力で給湯室を支配してみせますとも。オリンはそこでいつまでも、難しい顔して、難しい文書とにらめっこしていただくさればけっこうです」

「な、なんて言い草よう」

「だいたい、オリン、スグリさまのお役に立ちたいというのなら、他にもなにかあるでしょう、もつと、こう……あつたかい感じのモノが！」

「たとえば」

「ええと、おいしいごはんを用意するとか、大きい方のお風呂あけておくとかですね、あと、お日様に当てたお布団に、シーツに」

「それぜんぶあなたの願望じゃないの」

「断じてそのようなことはございません。わたしはただ、広いお風呂ではしやぐスグリさまを観察したい」

「……なんか残念な子に育ったわねえ」

「武器をたくさんプレゼントするより、きつと喜んでいただけますとも」ヒルデは腕を組んで深呼吸、幾分クールダウンした様子で言った。「スグリさまだって、決して好きでこんなもの、振り回してらっしゃるのではないでしょう。それなのに、せっかく無事にお戻りになつてもみなさん戦いの話ばかりじゃないですか。応じるスグリさまの当惑ぶりときたら……ああ、お労^{いたわ}しや。せめてここにいらっしゃる間くらい、そういう暗いお話は、なしにできないものでしょうか」

「あの子、そんな困った顔、してた？」

「それは、もう」

気がつかなかった。その通りなら悪いことをした。スグリを心配しているつもりでいたが、それがかえって彼女の負担になっていたかもしれないのか。で、ヒルデはそれが気にいらない、というわけだ。

だが戦いを忘れるというのは難しい。それには昼も夜もなく、敵はいつ現れるかわからないのだから。接敵がわずかでも遅れればすぐに人々が危険に晒される、というほどには、切迫した状況でないのがせめてもの救いだった。

一方であの機械の鳥、キューブたちに、スグリが近づかなければ戦いにはならないのではないか、と言う者もいる。しかし、それでどんなキューブの数が増えて、あるとき突然普通の人々にまで牙を剥き始めたら取り返しがつかない。そもそもキューブたちは人々に無関

心なのではなく、スグリへの対処を優先しているだけという可能性もあった。もしそうだとすると、キューブの前からスグリが完全に姿を消してしまうのはまずかった。キューブは目標を変更するおそれがある。

結局戦いは、暇を見ては空を飛ぶスグリが、攻撃してくるキューブたちに反撃するという最初の構図の繰り返しになっていた。

ところでその間オリンたちは、スグリが口頭でもたらず情報から、どうもキューブたちにはスグリとの戦い以外にも役目があるらしいと考えていた。スグリは、交戦に入る前のキューブたちは空からなにかを観察しているようだ、と言う。おそらく大気組成、温度の変化、毒の分布などを調べているのだろう、とオリンたちは考えた。あの宇宙船に乗っている者たちが、この星に降りても平気かどうかを判断する材料を集めているに違いない。

つまりキューブたちはただ戦うためだけに展開し、血眼になってスグリを探している、わけではないのだ。普段はこの星のことを詳しく調べるために飛んでいて、その際運良くスグリを見つけたならば戦闘モードに移行する、といった感じに思える。

——だから、戦いのペースはこちらにある、と？ 休息の時は楽しく、安らかに？

「そんな、のんきな」

「オリンこそ、そうあってほしいと思ってるんでしょう……それ、くださいな。もう冷めちゃってます。淹れなおしますよ」

「え……ええ、そうね、ありがとう。お願いするわ」

言いたいことは言ったとばかり、ヒルデはカップを受け取り給湯室へ引っ込んでいく。

その背が消えた扉をぼんやりと見つめていたオリンに、入れ替わりにやってきた別の局員が声を掛けた。

「やあ、室長どの」くだけた調子で彼は言った。「マツピングが終わりましたよ。我が家の、新しい地図ができた」

話す内容と声で人物の特定は用意だった。オリンは振り返り、まずその局員の手元に目をやった。

「……あなた、それ、好きねえ。ペン回すの」

そこでは彼の私物のペンが小気味よく踊っている。ひまさえあればこのように愛用の筆記具を振り回している男だった。ひまでなくとも、ものを考えながらも、やっている。器用なものだと感心する一方で、表情にはあきれを滲ませてしまうオリンである。

「けっこうな数を見落としていたもんです」とその局員は言った。「内からも外からも、そうだとわかり難いというんだから好都合ではある。気密があやしくて僕らにはとても近づけない扉も多いけど、簡単な隔壁足して毒の侵入を防げばたぶん、スグリになら使ってもらえる——これですか、どうにも癖だね。もっと太めのペンでも回せる。やってみますか」

「けっこうよ。へソードについては何？」

「そっちはまだ、なにも。まあ、カスケットが先に出てるんだからよかった。……オリン、ソードの方はライフルより情報が少なく不安というのはわかるけど、スグリ自身は、とっ

くに使いこなしてるみたいだし……」

どこか言い淀むような口調、それもこちらの表情をうかがうような所作で。オリンには、この局員がなにを言いたいのかすぐにわかった。

「バズーカの開発を優先しよう、というわけね」椅子の背に深く沈み、立ったままの局員をちらと見やる。「なんだかやたら乗り気じゃない、あなた……というか、男性陣」

「そ、そうかな。まあ、やっぱり銃だの剣だのと、格好がいいからね。あなたの考えは、なんとなく伝わっては来るんですが。正直僕は、いまの状況をあなたよりは割り切って見ていると思う。武器は、必要ですよ。不謹慎だと思われるかもしれないけど」

直接戦闘で役に立てないオリンたちはスグリが使うための武器を作る、それは一見すると当然の流れであつたが、実のところオリン自身はあまり乗り気がしなかった。オリンは武器を、強い力を恐れていた。

目の前の局員が、割り切っている、と言つたのはその部分で、彼はオリンのそういう気持ちを理解はしている。しかし彼自身にとっては、戦争で一度自滅した人間が再び武器を生み出すことの是非を問うより、すでに起こってしまった戦いに勝つか負けるかということの方が重要なのだつた。

それは自然なことだとオリンは思つた。競争に勝利したいという欲求は生物として当然のものだ、と。それは命の根幹に刻まれたプログラムだ、本能と言い換えてもよい。それ自体を否定することが必ずしも正しいとは思わない。

「……負けたくないと願うのは当然の心理だわ。男性であればなおのこと、ということなのでしょね。それを意識するだけの理性を兼ねてさえいれば、そういう感情は、むしろ大切にするべきなのかも」

この男は、件の宇宙船からの攻撃に対して負けたくない、抗って勝ちたいと感じている、オリンはその胸中を想像する。

理性的に考えればそれが自分の力でかなわないことは明らかだが、だからより強い力を持つものに頼んでかわりに敵を打ち倒してもらえばよい、というわけでは、きつとないのだ。この男の戦意の源は正体不明の敵への恨み辛みではなく、ここは自分たちの星なのだ、という主張にほかならない。突然やつてきた余所者が挨拶もなしに自分たちを追い出そうとしているのが我慢ならないのだ。そんな彼が戦いに勝つためには、彼や彼の多くの仲間たちが、あの余所者に追い出されなければそれでよい。なにもキューブをたくさん撃ち落とす必要はない。武器を作ることもそれで敵を撃つことも、あくまで手段であって目的ではない。敵を絶滅させることは必ずしも彼の望むところではない。やつつけてしまうよりも、むしろあの余所者たちに自分の主張を認めさせてこそ御の字、というところだろう。彼はそのための手段としてスグリを頼り、そして彼女を助けるための武器を作ろうというわけだ。

自分は、どうだろうか。

私は武器が怖い。自分たちの手で武器を作り出すことが怖い。強い力を手にした人々が、いつか互いに争うようになるかもしれない、それが怖いのだ。現にそうやって、この星は一

度死にかけたのだから。

だがそれをこの私の手で防ごうというのは。しかも、武器を否定するという手段でもってそうするというのは、どうだ。現状に即しているといえるだろうか。武器を作るくらいなら黙ってやられましよう、とでもいうつもりか。そんな風に人々の前で説けるだろうか。できるわけがない。まるで人類を監督するかのような自惚れた想いだ。あるいは単なる責任逃れといえるかもしれない。事実上封印されていたビームライフルをサルベージしておいて、しかしこの手で一から武器を作るのは嫌だ、というのは、ようするにそういうことではないか。それに争いを起こすのは、武器そのものではなくそれを扱う人間の方だ、オリンはやや卑屈な気分ですごう思った。

かつてこの星は戦争によって致命的なまでに傷ついた。星をどうしようもないほどに傷ける、いったいなにがあったのか、具体的な記録は残っていない。とてつもなく大きな爆弾が爆発したのかもしれないし、ゆっくりじわじわと広がった毒や傷が星の浄化の力を超えてしまったのかもしれない。ではそこで、原因は大きな爆弾であると、強い毒のせいであると、そう言ってしまうてよいのだろうか。そうではないだろう。そこには同時に、そんな爆弾が爆発してしまっても構わないという、いくらかの人々の狂気があったはずなのだ。そんな毒の容器を傾けた人間が、いたはずなのだ。そして、だから、本当にそうなってしまった。恐ろしいのはそれだ。怖いのは人々の、その気運なのだ。銃や剣など持たずとも、石やペンでも、人は殺せる。

道具の性質は使うもの次第である、当然武器もまたそうだ、そのような訓辞は多くの物語でなされているし、おそらくそれは正しいとオリンにも思えた。

そうすると、この自分が恐れているものも、武器である、とは断じることができなくなる。争いのもとを正すならば、力ではなく心に行き着く。いま感じている、武器、強い力といったものへのおそれや不安の正体は、それを手にする仲間たちを信じきれない自身の心に巣食った影なのだ……。そのように意識してみれば、オリンの気持ちは、仲間の心を疑いたくない、という方へ転がった。

スグリは、彼女自身の力にまだ不器用なようだけれど、その使い道を誤ることはないだろう。きつとこの局員、居住区や地上の人々、私の仲間たちや、この私自身も、みな、そうだ。

負けたくないのは私も同じだ。それにたとえだれも頼まなくとも、どのみちスグリは彼女自身の意志で飛ぶだろう。私にできるのはスグリの負担をほんのわずかでも減らすこと。そのためならなんでもすると言ったはずだ。たとえスグリ自身がいい顔をしないとしてもだ。

「……そうねえ」

オリンは大きく息を吸って、椅子の上で居住まいを正した。

「少しスケジュールを組み直すわ。バズーカ、急ぎましょう」

「わかりました。ビームライフルに負けないものにしましょう」

「それは高望みしすぎじゃないの」

力への恐れは、即ち仲間の心を疑うこと。であれば彼らを信じている限りは、武器といえども頼もしい味方でいてくれるに違いない。少しばかり気分が晴れた、とオリンは思った。

さてと局員は持ち場に戻るべくオリンに背を向ける。それを見送るオリンだったが、ふと背後に新たな気配を感じたことで思い直して、ああ、それから、と局員を呼び止めた。

「それから、夜は手があいた人、いったん戻してちょうだい。揃ってなくてかまわないから、スグリに顔見せてあげて」

「いいですよ、もちろん」

途端、背後の気配がオリンに飛びかかる。

「それと、デイナーの準備ですよ！」カッブを載せたトレイを片手に、空いた腕をオリンの首に巻きつけて、ヒルデが弾んだ声をあげた。

「なに言ってるのよ、それはあなたがやるのよ」

「まかせてください。でもオリンも手伝うんです」

「あなた私の料理の腕知ってるでしょう……ちよつともう離して、それも置きなさい、零れるわよ」

新たな武器を探すことも、作ることも、おいしい夕食を用意することも、理非はどうあれここで思考の堂々めぐりにとらわれているよりはいい、とオリンは思った。

だがいまだ気がかりなこともあった。いったんはオリン自身が些事として切り捨てたはずの、余所者たちの、迷惑だった。

キューブはその制作者の意志によってこの星を調査しているというのは間違いがないだろう。キューブは先兵にすぎない。それを操っている者がかならずいる。そしてその者は、この星の人間や動植物よりも、スグリに対して、特別の意識を向けている。

敵はこの星で突出した戦力であるスグリをまず攻略するつもりなのだろう、オリンたちはそう思っていた。万一そうなってしまうたら、あとに残った無力な人々は簡単に一掃されてしまう、つまり自分たちは後回しにされているにすぎないのだ、と。

しかしオリンは先ほど、自分たちはあの余所者を絶滅させたいと願っているわけではない、ということを意識した。ひよっとしたら、と思いつく、余所者たちは、彼らをこの星から追い返してしまいかねないスグリの力を恐れているだけではないのか。スグリとの決着如何にかかわらず、力を持たないただの人々をどうこうする意志は最初からないのではないか。もしそうなら、人々を守るため、というスグリの戦闘理由は消滅する。

自分たちにできるのは本当にスグリに武器を預けることだけなのか。余所者たちに、あなたたちが暴れなければスグリも攻撃したりしない、そう伝えることさえできれば、それでこの戦いは終わるのではないか。

オリンの期待にも似たその疑惑は、やがてかんばんしくない形で否定されることになる。

*

ビームの連続射撃に限界があるのはスグリにとつても同じことだった。ビームライフルは攻撃力と運用負荷が極めて高い水準で纏められた高性能なガジェットではあるが、無数のビームをばら撒いて弾幕を形成するといった趣おもむきの装置ではなかった。

現状では次弾の発射までに最低でも一秒程度は要する、とスグリは自己を分析した。いや、もつとかかるかもしれない。まだ感覚が掴めておらず、確かなことはわからない。

スグリの目の前には、この場に最後の一機となったキューブがいた。スグリはキューブの背後上空、圧倒的に有利な位置を占位している。

敵の隙を見極め、好機と見て咄嗟に接近した結果だった。うまく懷に飛び込むことには成功したのだ。だからこそ、ここでビームライフルの弾薬生成を待っているのはもったいなかった。敵の攻撃準備が整い、反撃を受ける可能性もある。スグリは考える。思い切り殴りつけたら壊れるだろうか、それとも踏みつけてみようか、……鋼鉄の外郭を？——いや、手はある。

突撃を決める。スグリの左の手のひらに、ビームライフルとは別の、小さな棒状の装置があらわれる。

戦うことを決めたあの日以降、スグリはライフルもこの棒状の装置も、毎回大気に還すこととはしなかった。すでに構成され物質化したそれらを取り出す分には、文字通りほんの一瞬あれば事足りた。

そうしていま取り出した装置もむろん武器である。それは鰐ガイドのない簡素な握グリップりで、まるで

劍身を取り落とした柄ヒルトのように見えた。しかし、これで完成した武器だ。スグリの左手にしっかりと収まった「ソード」は、たちまち燃え上がるような赤く苛烈な光の刃を形成する。

スグリはソードを手にした左腕を大きく振りかぶってキューブに向かう。キューブもスグりを振り仰いだ。スグリは一分の迷いもなく降下突撃。巨大な力に背中を押されるように真っ向から突っ込む。

キューブの機体はスグリの身長よりもずっと大きい。こんなものに剣を構えてぶつかっていくのは思い切った行動だといえたが、スグリに恐れはなかった。ビームライフルの弾薬生成に掛かるわずかな間を惜しんでの突撃、スグリはビームを撃つときよりも集中していた。来たる一瞬に向かつて加速する思考が雑念を押し流す。

その時が来る。左手に振り上げたソードを右下へ、一気に振り切る。光刃はキューブの装甲をもとめせず、その内部機器もろとも軟らかいチーズのように斬り裂いた。だがあまりの手応えのなさにスグリはかえって虚を突かれ、自らの勢いを殺しきれずに姿勢を崩す。一撃は入ったとはいえ敵の目の前、もし相手が完全に機能停止していなかったら、とスグリは慌てた。咄嗟にソードを右肩へ持ち上げ、そのまま左下方へ向かってもう一度、振り下ろす。身の乗りきらない、いささか不格好な二撃目はそれでも最初の斬撃と直交する形でキューブの機体を捉えた。結果バツの字に切り裂かれたキューブからの反撃は、ついになかった。

キューブは実質的な戦闘能力を失うと決まって自爆する。焦りにまかせた連撃によってバランスを崩したスグリはふらつきながら後方へ離脱。

四分されてばらばらに落ちていくキューブの、そのいずれのピースも爆発したりしなかった。めずらしいことだった。ソードが自爆装置を破壊したのかもしれない。

地表へ落下する前にビームライフルで質量を削るべきだろうか、思わぬミスで動揺した心を落ち着けて、額の汗を拭いながらスグリは思った。すでに機能停止しているなら、そこまでするのもなんだかかわいそうな気がする。下は密林で、周囲に街はない。火災に発展したりさえしなければ、まあ問題はないだろう。

大きく息を吸って、吐く。眼下に落ちていく残骸をスグリは見送り、それからその落下地点と、自分の周囲をよく観察した。

またなにか変わったことが起きてはいないか、戦闘後は特に注意しないと新たな敵の接近を見逃ごしてしまいかねない。敵の追尾を受けたままシエルターに戻るわけにはいかなかった。地下施設の存在はまだ知られていないだろう、とオリンたちが予想したからだ。

地下は上空から見渡すことができない。大規模地下施設の存在が敵に知れば、彼らはこの星の人々が隠しているかもしれない、スグリ以外の戦力を警戒してその調査を試みるだろう。場合によっては、敵は無力な人々を積極攻撃しないという大前提が崩れることにもなりかねない。それは避けたいということだ。

スグリやセクター局員のみならず、誰もがそのことをよく理解していた。だからキューブが危険だと知らされたいまでも地上の街からシエルターに逃げ帰りたいというものはいない。多くの人がシエルターゲートに雪崩れ込めば、彼らに対して無関心な敵といえど、その大移

動に気づいて不審を抱くだろう。それで地下の存在が暴露すれば本当に逃げ場はなくなる、単純な理屈だった。

もつと大きな理由も、別にあつた。

実際のところ……地上で暮らす人々にとつては、キューブたちよりもこの星の大自然の方が遙かに身近で、かつ驚異度が上だったのだ。地上の人々は住居やある程度の施設を建設するために、地下シエルターから技術や資材の提供を受けることはあつた、日々の生活物資まで要求することはほとんどなかった。そうしてはいつまでたつてもシエルターから離れて暮らすことなどできないからだ。

だから地上の街は、個々の家々をみれば早くから大きく頑丈だった。そこでは電気やガスも使われている。しかし彼らの衣食住はいちおうの自給自足の上に成り立っているといつてよかつた。自然と深く結びついたその生活は周辺環境の変化に大きく影響された。街は立派な機械施設を持つているとはいえ、一方で田畑や牧場が荒ればひとたまりもないのだ。それらの世話を簡単に放り出すわけにはいかないし、なにより彼らはそういった難題も多い地上世界を心から好いていた。

謎の宇宙船やキューブの飛来は確かに人々の危機感を煽り立てたが、スグリがその驚異を抑えてくれている現状、まだまだ逃げ出すほどではない、というわけだった。激しい嵐や落雷、干ばつ、それに病気。もとより地上に敵は多い。彼らは戦う力こそ持たないものの皆たくましく、したたかだった。

とはいえ不安でないはずがあるまいとスグリは思う。はやく、なんとかしないと。

乾燥した空気はよく澄んでいて遙か遠方まで見通せた。どこまでも広がる森の緑が鮮やかだ。ちらほらと花を付けている木々もあった。地平線に目をやれば、木々の頭上に淡い水色の大気が覆い被さっているのが、雲の切れ目から見て取れる。

空はよく晴れていた。もことも膨らんだウールのような雲が目止まる。あれに飛び込んだらさぞ気持ちよさそうだが、スグリはそんなはずがないとよく知っているのだが、眺める度にそう思ってしまう。いまのように上空から見下ろす場合は特にそうだ。あの上を歩くことができないというのが不思議なくらいだ。

高高度ではそうしたもこともは見られなくなり、雲は薄く細長い形にかわった。空に流した絹のように繊細な、儚くも美しい雲形。

スグリはそうした細長い巻雲が浮かぶ、高い高度を飛んでいた。そこからさらに見上げる空は、空色ではなく藍色掛かって見えた。その色合いは上空ほど深く、濃い。上へ上へと飛んでいけば、やがて大気とその色は消え去って、昼でも真つ暗な世界に出る。そこにはもはや空と呼べるものはないが、かわりにこの星の青を眼下に望むことができるはずだ。ひよつとしたら、見えない宇宙船に頭をぶつけることもあるかもしれない、などとスグリは思った。

新たなキューブの機影はどこにも見えない。しかしスグリはある違和感を感じていた。先ほどから、どうも、なにか見られているような気がしてならないのだ。

それはビームに狙われている時のようなちくちくとした感覚ではなかった。いわゆるターゲットシステムが目標をレーザーロックするときのような鋭いものとは違っている。より包括的に広く周囲を観察している、何者かの視界にとらわれているようなイメージ。しかしそれがなにを意味するのか、はつきりしたことはスグリにはわからなかった。スグリは自身の感覚を整理しながら、ただこう思った——なんだろう、この、居心地の悪さは。

既知の感覚ではなかった。この場で頭をひねっていてもはじまらない、とスグリは思った。ひとまず身体の緊張を解き、ビームライフルとソードを無造作に手放す。それらの装置は空中でかき消えた。

スグリは空いた両手をほぐすと、翼のように腕を広げて、風を受けた。風に乗る。緩降下ときおり身をよじり、気の向くままに向きを変える。戦いを終え、いつものように地下シエルターへ戻るときに所作だった。だが、いまはポーズだけだ。スグリはまだそうするつもりではなかった。心地よさに吞まれないよう、内心で気を張る。

だれかがいまも間違いないわたしのことを見ている。それでいて、見ていることを悟られたくない、というような……そうか、わかった。これは、盗み見られている感じだ。このまま戻るわけにはいかない。

スグリは大きめのもこもこ雲に飛び込んだ。いつか期待したような、ウールのようにふわりとした弾力などあるはずもなく、湿気た空気がまとわりつくばかりでちっとも気持ちよくない。だが視界は本当に真っ白になる。一寸先も見えない。

スグリは徐々に速度を落とし、雲の一番深い部分で静止した。そして身を縮こめ、息をひそめて、こんなことを考える——外からはたぶん、わたしの姿は雲を貫いて降下したように見えるはずだ。

その狙いはうまくはまった。スグリを気に掛ける何者かが、スグリの行方を見失うまいと降下してきたのだ。この自分がどこに降り立つのか興味があるに違いない、とスグリは思った。

相手の動きは恐る恐る、という感じで、決して激しい機動を取ってはいない。しかし大きく高度を下げて接近してくるその気配を見逃すスグリではなかった。相手は単独のようだった。いつものキューブとは違う、とスグリは思った。もしキューブであればすぐに襲ってくるはずだ。この相手は、とても慎重だ。新しいタイプの戦闘機械かもしれない。歓迎しがたいことだが、ありうる話ではある。なにせあんな大きな宇宙船なのだ。機械の数だけでなく、種類も豊富に違いない。

長く考えている時間はなかった。のんびりしすぎて、雲のなかに隠れていると気づかれてしまうことを、スグリは恐れた。相手の位置はわかった。もう十分に引きつけた。いまだ。

広がる虹の環ひとつ。スグリの身を隠していた雲全体が一瞬で吹き飛び、霧散する。

前方、やや上空、澄んだ青空にぽつりと佇む人影をスグリは見据える。派手に姿を現したスグリに、当然相手も気づいていた。その人影はひどく慌てた様子で周囲をきよろきよろと

——人？

「人が飛んでの？」

スグリは驚き、自分のことなど完全に棚に上げてそうつぶやいた。

その人はあまり大人びた顔つきではなかったが、スグリよりも長身の娘だった。橙色の髪をうなじのあたりで簡単に纏めている、下ろせば肩に掛かるくらいだろう。丈の長いダツフルコートにインディゴのパンツルックという出で立ちで、そのうえ首までしつかり覆うインナーウェアを着込んでいた。なんだか暑そうだ、とスグリは思う。

スグリは自身も警戒しながら、なるべく相手を刺激しないようゆっくりと接近していく。近づくスグリから娘は逃げ出さなかった。やれやれ見つかった、というあきらめの表情で、娘はスグリを見つめ返した。

この人はキューブのような戦闘メカとは違う、きつと対話が望めるはずだ、スグリは意を決して口を開いた。

「おまえら、何者？」

これこそ待ち望んだ瞬間だった。彼女はこの星の人ではあるまい、あの宇宙船からやってきて、キューブたちを操っている者に違いない、そうスグリは思った。突然の来訪者たちがいつたいなにを考えているのか、その口から聞き出す機会が、いまようやく訪れたのだ。

「なんで攻撃してきたの」

だが、スグリが望むこたえはなかなか得られない。スグリの問いかけに、娘は再び慌てた様子でなにかぼそぼそと口ごもった。なにをそんなに慌てているのか、自分の問いはそんな

に突飛とっぴなものだったろうかとスグリはふしぎに思ったが、あせらずに待った。

娘はこほんと咳払いをひとつとしてスグリに向き直った。

「えーっと、こんにちは」と、娘は言った。「私のことば、わかるかな」

「……うん？」

今度はスグリがとまどった。それでもいちおうの肯定を返すと、娘はよしよし、とうなずく。

「えーっとですねえ、私たちはただいま調査中なんですよお」

「調査？」

「私たちがこの星に住めるかどうかの調査です。でもまさか、ヒトがいるなんてー。まうく

……油断してました……」

「ヒトがいると困るの？」

「うー……それでですねえ……」娘は困ったように笑った。「原住民が存在したら、抹消しろって命令が出てるんですよ」

そう、まさに苦笑混じりの、しかし実に平然とした口調で娘は言った。聞かなくてもわかっていたでしょう、そういう態度だ。スグリは娘を上目に睨む。

確かに、あの宇宙船に属する者たちの真の目的は謎ではあったが、人々は最初から、ずつと最悪の事態を想定してきた。だからいまそんな風に告げられたところでスグリの心にさほどの動揺はなく、まあ、そうだろうな、と思ったただけだ。

結局はキューブのときと同じである。早くからの悪い予感が見事に当たったというわけだ。もちろん、向かい合ってしっかりと話をすれば自分たちの予想はよい意味で外れるのではないか、という期待は常にスグリの胸にあった。しかし、ここに最悪は確定した。

彼女たちは、わたしたちに成り代わってこの星に住み着くつもりなんだ。

「とはいっても今回はちよつと特殊でしてー」世間話でもするように娘が言っている。「アブなような方からお相手することになってるみたいですよ」

「……それで？」険を帯びた声でスグリは先をうながした。

「せっかく言葉が通じ合えたのに、残念ですけど」

娘の表情は話す内容とまるで釣り合っていないかった。残念だ、というにはあまりに朗らかな口調。だがその瞳の昏さにスグリは気づき、おののく。

姿はそのままだが娘がまとう雰囲気が一変していた。あの、なんともいえない居心地の悪さをスグリはふたたび意識する。目の前の娘から広がった居心地の悪い空間が自分を包み、さらに広範に拡散していくのがスグリにはわかる。この心地の悪さは、いや彼女の豹変ぶりは、なんだ。尋常とは思えない。

張り付いたような笑顔で娘が続けた。

「さつくり消えてください」

——こいつは、話し合いが通じる相手ではない。

弾かれたように後退しながらスグリがビームライフルを手にすると、敵の娘が、彼女の

武器であろうなにか黒い塊を取り上げるのとは同時だった。

スグリは娘の手にある武器を見る。ワインボトルのように一方が細くくびれた、鉄の棒のようだった。大きさもちょうどそのくらいだが、表面の質感を見るにかなり重そうだ。

娘は鉄塊の棒を大きく振りかぶり、躊躇することなくスグリに向かって投げつけた。

銃と剣を操るスグリにとって、手にした重量物をただ投げつける、という娘の行動は少々予想外だった。だが動転するほどではない。いまや二者の距離は十分に離れていた。見るからに重そうな鉄塊の遠投ぶりに感心する余裕すらスグリにはあった。放物線を描いて飛んでくるそれを、わざわざ受け止めてやる義理ではない。

スグリはほんの少し身を傾けて鉄塊をやりすくす。敵と、構えたビームライフルからは意識を逸らさなかった。いつでも反撃できる体勢。

——が、それではあまりに不足だった。スグリは、この鉄塊の回避にもっと集中すべきだった。なぜならすぐそばを通り過ぎる鉄塊の方では、スグリを鋭く注視していたから。

ビームに狙われているときのような、ちくちくとした感覚。スグリがそれを意識すると同時に、鉄塊のアクティブ・レーザー近接信管が作動する。しまった、などと後悔するひまはなかった。爆風と熱波と破片効果をごちゃ混ぜにした衝撃波が、触れるほどの至近距離からスグリを打ちのめした。

はじめから爆弾として作られていた、その鉄塊の爆発威力は、被解析をまぬがれるためにキューブが実行する自爆などとはかけ離れていた。不意を突かれたスグリは最大効果をま

もに受けた。スグリは黒煙が吹き上がる爆発点から、横風に煽られ流されるように、ふらふらと逃れる。顔を上げればちょうど二投目の鉄塊が敵の手を離れたところだった。冗談ではない、二度とごめんだ。

スグリは痛む身体を強引に捻り、なんとか手放さずに保持していたビームライフルを勢いづけて前方へ振り上げた。さいわい弾薬はフル充填。三発が発射可能。だがいまのスグリに構えて狙う余裕はない。ビームライフルの発射モードを近接防御に、トリガーを引きつぱなしにしてライフル自身に攻撃を委ねる。超高速射撃統御システム起動。一時的にスグリから独立したそのシステムが銃身下部のガンカメラから直近の驚異を自動選定する。全発射シークENS自動進行。自動攻撃。振り上げられた銃身から全弾、三発が連続発射。

底を向けて飛来する鉄塊のほぼ中央を、ビームの初撃が貫いた。二発目がそのすぐ隣を通り、鉄塊を大きく外へ弾き飛ばす。

もとより無茶苦茶な攻撃姿勢に加えて発射の反動が銃身をさらに勢いよく跳ね上げており、それを抑える力もスグリにはなかった。照準誤差はライフルの投射偏向許容値を上回り、三発目のビームは大きくそれた。

撃ち抜かれた鉄塊が爆発した。しかし体積の大部分を失っているためか本来の威力には程遠い。スグリは敵を自爆に追い込むことまではできなかった。咄嗟の高速射撃により動揺をさそうことには成功している。敵は、会心の連続攻撃となるはずの爆弾を目の前で叩き落とされ、大いにうろたえていた。

相手の気はゆるんでいた。こちらはいまのうちに体勢を立て直さねばならない、とスグリは思った。ビームライフルはすでに弾薬の構成を開始している。グリップ内部の弾倉に満ちていく力を意識しながら、スグリは空いている左手で、左脇腹をおさえた。二、三度軽く咳き込む。出血はしていないが、痛んだ。もうほんのしばらくは高機動は控えたいところだった。衝撃にライフルを取り落とさなかっただけでも、よくこらえた方だろう。

三発分のビーム弾を組み上げるのに五秒ほどを要し、その間にスグリはなんとか息を整えた。見れば娘も落ち着きを取り戻しているようだった。ここから仕切り直しだ、とスグリはビームライフルの銃口を娘に向ける。

娘はもう新しい爆弾を取り出さなかった。娘は、ばんざいするように頭上に向かって両手をかざした。まさか降参の意ではあるまいとスグリは思い、それは直後に確信に変わる。娘の手になにか、とても大きな力が集まっていくなのだ。自由にさせてはまずい、とスグリは思った。

スグリから仕掛ける。ビームライフルの銃口が煌めく。娘への直撃を狙ったが、ビームは奇妙にねじ曲がり、娘がかざした両手のあいだに吸い込まれた。そして、そこに生まれた小さな光球に混ざって消える。娘の頭上で、そのまばゆい光の塊は見る間に巨大に成長していく。

「これは……」

スグリの攻撃を吸い込んだ光球の表面には、内部のエネルギー密度のムラが、ゆらゆらと

始終変化する黄色い模様として浮かび上がっていた。それが空の青と混ざり、回転しながらたゆたうさまは、まるで〈シャボン玉〉が膨らんでいくようだった。しかし、見た目通りの儚い存在ではあり得ない、とも、スグリは思った。

シャボン玉の膜の中にあるのは普通は空気で、だから無色透明で透き通っているものだ。だが、いまスグリの眼前にあるものは違っていた。色付いているのは膜ではなくその内部だった。娘が頭上にかかっているのは、強大な拘束力を持つある種の結界に閉じ込められた、そこでいまなお加速を続けるビームの塊だった。

いまや光球の直径は三十メートルほどになろうか。馬鹿げた大きさに膨れあがったその光球が秘める威力を、スグリは直感で捉えていた。慌てて後退、緩上昇。距離を取ると、娘の姿は大きな光球の下に隠れてしまい、見えなくなった。

が、裂帛の気合いを込めた娘の叫びが、スグリの耳に届く。

「まううううりやあああああつ!!」

——耳を疑う咆吼にスグリは目をぼちくり。

しかしその意味内容の理解は、いまは置いておくことにした。なんにせよ娘は成長しきつた頭上の光球をスグリに向かって思いきり投げつけたのだ。余計なことに気を取られているひまはスグリにはなかった。

だがはなはだしいスケールゆえか、スグリには光球の飛ぶ速度がひどく遅く感じられた。本当に風に流されるシャボン玉のようだった。もちろん、速度が遅いからといって侮っては

ならない、という認識は変わらない。それどころか、あらためて光球を観察したスグリは、光球に働いている、周囲の空間を引き込むような力にも気づいた。

スグリはビームライフルを数射してそれを確かめる。いずれのビームの軌道も光球に吸い寄せられるように曲げられ、直進しない。スグリ自身も引つ張られるような作用力を感じはじめる。

さつさと射線から逃れてしまおう、スグリは高度を上げた。そして、この攻撃の真の厄介さを知った。まるでスグリを追うように、光球もふわりと上昇したのだ。誘導弾。スグリはうめく。これから逃げ回りながらあの娘と戦わねばならないのか。

光球の発生過程をはつきりと見ていたスグリは、その内部に追尾用センサや推進システムが仕込まれていないことを知っている。だいいちそんなものを埋め込んでいては、その装置自体が蒸発してしまうはずだった。光球は自律してはいないのだ。あの娘が、光球の飛び方を定めている。

なんとかうまく回り込んであの娘をやつつけるしかない、そうすればこの光球も消えるだろう……しかし、なぜ彼女の方からは撃ってこないのだろう、とスグリはいぶかしんだ。速度は遅いが確実に追いかけてくる光球と、彼女自身が飛び回れば、実質二対一だというのに。娘が直接的に攻撃してくる気配がスグリにはまるで感じられなかった。これはおかしいことだった。光球は追尾能力を持つとはいえ低速で、これのみではスグリを捉えることができないのは明らかだった。だからスグリは、もっと小型のビームや爆弾による攻撃で、この光

球に追い込まれてしまうような事態を恐れたのだ。しかし、娘は一向にそのような行動に出ないのである。

娘は常にスグリと一定以上の距離を保ち、光球を挟んだ反対側に逃げ込むばかりだった。

スグリは巨大な光球に阻まれて、そんな娘の姿を見ることはできなかったが、確かな気配を辿り続ける——いや、しかし娘のその気配、存在感が、徐々に希薄になっているのにスグリは気づいた。ハツとする。この感じには、覚えがある。

「ちよつと、待つて……!」

戦っている相手に思わずそんな声を投げてしまう。が、スグリは娘の、あの怖気のあるような笑みを思い出した。いいなりになってくれるはずがない。自分の能力でもって従わせるしかない。できるだろうか？

やるしかない。

スグリは増速。巨大な光球を一息に回り込もうとする。と、光球からたくさんの小粒の輝きが飛び出してスグリの行く手を遮った。不規則に揺れながらただ壁としてそこに漂う。停滞したビームの球。放つておいても寿命は短い。

スグリは即座にビームライフルを連射。いくつかの小ビーム球が相殺される。だがビーム球の数は多く、またそばにある巨大光球からの作用力によって、スグリは狙った位置にビームを飛ばすことすら困難だった。この力の影響下ではビームライフルは性能を出しきれない。ならばとスグリは左腕を振るう。赤いソードの閃き。ソードは巨大光球の干渉を受けず、

スグリを取り囲む小ビーム球を一方的に斬り裂いた。

そうしているあいだに巨大光球そのものがスグリの前に立ちふさがる。背後や横合いからではなく、あくまでスグリの前進を妨げるように前に出てくる。

このままではちが明かない、娘の気配はいまにも消え入りそうだ、時間がない、スグリはライフルを放り投げ、ソードに両手を添えて意識を集中する。そして巨大光球の中心に自ら突撃し、無我夢中でソードを振り下ろした。

まばゆいばかりの輝きが視界いっぱいに広がる。光球を形成する、渦巻くビームの流れまでもがはつきりと視える。だがいかなる衝撃も熱も、スグリに届くことはなかった。そんな猶予は存在しない。スグリの身の丈程度しかないはずのソードの剣身は、直径数十メートルに及ぶ光球を縦一文字に斬り裂くと、拘束力を失って単なるエネルギー溜まりとなった元・巨大光球をその断面から外側へ、跡形もなく吹き散らした。

視界がぱっとクリアになる。乱れたソードの赤光が収まる。スグリの目に大気の青と、森の緑が飛び込んでくる。

スグリは荒い息をつきながら周囲を見渡した。しかしあの娘の姿を見つけることはできなかった。間に合わなかった、蜃気楼の向こうに消えてしまった、落胆したスグリはがつくりとうなだれた。

娘の気配の消え入り方はただ遠くへ逃げるのとはわけが違っていた。彼女はよほど隠れるのが得意らしい。衛星軌道のどこかにいまもあるはずの、あの宇宙船の姿を隠しているのは

彼女の力かもしれない、とスグリは思った。逃がすべきではなかった。

風が、スグリの頬をひやりと撫でた。まだ日は高く、穏やかな午後。森の草木が香る。

爆弾も高エネルギー球も、この暖かな風景とはあまりに不釣り合いだ、とスグリは思った。娘との戦いはいよいよ今し方のできごとだというのに、どこか現実味に欠けていた。スグリはそつと左脇腹に触れる。ちつとも痛くない。かえって悪い冗談のようだった。不吉な夢の跡に立っているような感覚にさいなまれる。

だが、あの娘の顔に浮かんだ狂った笑みはスグリの心に強く印象付いていた。そればかりはとても夢とは思えなかった。あの娘は確かにここにおいて、そして確かに宣言したのだ、この星の人々を抹消する、と。そのうえ、まずはおまえからだともいうように、いや実際にそう言つて、爆弾を投げつけてきた……それがなぜ、あのタイミングで退いたのだろう。

疲れからか思考があやふやなまま定まらない。判断力が落ちているのをスグリは自覚する。「帰ろう……」

ひとまず、帰ろう。帰つてみんなと話そう。明るく前向きな話し合いにはなりそうもないが、それで少なくとも、この心に掛かった靄のようなものは晴れるだろう。晴れたあとにはより憂鬱な気分が残るだけかもしれないが、いまはどちらを向いているのかもはっきりしない感じだ。前向きも後ろ向きもあったものではない。こんな気持ちのままではきつと行動にも悪影響を及ぼす。みんなに迷惑をかけてしまう。もう追尾は受けていない。少し早いけれど、いまのうちだ。

緩降下。スグリは森の奥へ消える。

*

信じられない。交戦記録の再生に立ち会ったキョウコの感想はその一語に尽きた。

「サキのベルを、斬るだなんて」

サキ。シフブランズの一人。蜃気楼に消えた、橙色の髪の娘の名。

シフ・ブランズはみな多芸だ。能力は一人一人まるで違う。だから彼女らは自身の能力を仲間内で明確にするため、特に特徴的で有意な力の発現パターンについてそれぞれ簡単な名を行っている。技名、というわけだ。なかには面倒くさがってコンピュータに決めさせたものや、逆にシフブランズ同士おもしろがって名付け合いをしたものもある。

サンシャイン・ベルはサキの持つ力の中でも最大のものだ。近づくものすべてを呑み込み悠々とゆたう暴虐無人な光の塊。攻防一体の大技であり、味方に見れば、これは頼もしい。キョウコもこれまでその威力を間近に見てきた。強力だ、間違いなく。現にベルは敵の少女のビーム砲を完全に上回っていた。何発ビームを撃ち込まれても揺らぐ、わずかな衰えすら見せなかった。

それがどうして、あんなちっぽけな手持ちのビームソードで無効化されるのだ。

サンシャイン・ベルは、敵ビームソードの斬撃を受けて消滅した。信じ難いことだった。

敵のビームソードがいかに強力で、ベルとのあいだにどれほど圧倒的な出力差があるとも、ベルの性質を思えば、真つ二つに斬り裂かれて消滅する、などというのは到底考えられないことだった。なにせベルのなかでは常にビームが奔^{はし}っているのだ。ベルが力を失うということとは、その内部で加速を続けていたビームが全周に解き放たれることを意味する。サキは意図的にそういう操作をすることもあるくらいで、ビッグバン・ベルと呼ばれるその行為は、名が示す通りビームの大爆発といつてよかった。そばにいて無事なはずがない。それなのに、あの少女は……。いったい彼女はなにをしたのだ？

「俺も、信じられないね」円卓に腰掛け、モニタを横目に睨んだシフが口を開いた。「まさか戦術管制を任せたヤツが、敵の主力と撃ち合いを始めるなんてさ。あいつは自分の立場を理解していないのか？」

「それは……」

いかにも不機嫌そうな支配者の声だった。その不機嫌の理由はキョウコとは別のところにあつた。キョウコはサキを庇おうと口を開くが、咄嗟にはうまい言葉が出てこない。シフの苛立ちほもつともだったからだ。

サキの力は貴重だ。彼女の戦術管制の有無で末端の戦闘メカたちの運用効率が大きく変わる。最高の情報処理能力を有するサキは、惑星環境精査の中核を担つてもいた。その存在には直接的な戦闘能力だけでは計れない、戦略的に極めて高い価値があるのだ。絶対に失うわけにはいかない。そんな彼女が最前線で敵と対峙するなどもつてのほかだった。

「あの状況でなぜ戦闘に突入するんだ。回避するだろう、普通。俺はあいつに交戦を許可した覚えはないし、そもそも深追いしすぎなんだよ……くそ、悔しいな、まんまと騙されてさ」

「あまり叱らないでやってください」

「あたりまえだ。俺に一から十まで説明させるつもりか。すべての命令と実行手順を入力していたんじやあ機械にプログラムするのと変わらない。そうりたいのか。違うだろう。なんのための人間だよ、くそ。俺の意図を汲んで自分で判断できなきや、意味がないだろう」

「……先生の意図は、ずいぶん深いようですから」

「知るか、そんなこと。もしわかってないようなら、おまえでいい。おまえからサキによく言い聞かせろ。……いや、交戦するなというだけじやあ、もうだめだな。さっきの様子では、次は逃げられそうもない。サキは、しばらくあの銀髪には近づけるな。星の調査を優先させろ。行け。俺の手を煩わせるなよな」

「わかりました」

キヨウコは淡々と応じ、しかし嫌われ役はいつも自分だと胸中でぼやく。

あれで隠密行動が得意なサキにとつて、自らの存在が敵に感づかれているというのは思いもよらないことだったろう。焦り、慌て、もし自分が負ければこの船全体がどうなってしまうかと考えるより早く、この星の攻略はあの銀髪の少女を倒すことから、という命令を優先してしまったに違いなかった。シフが言ったように、まるで立場を理解していない、わけではないのだ。即時撤退の指令を受けた時点で本人も正しくミスに気づいているはずだった。

サキは後悔も反省もできる素直な娘だ。いまさら口を尖らせて言い聞かせることなどにもあるまい。敵からはこれまで以上に距離を置き、そう伝えて終わりだ。たいして面倒な役回りではない。キョウコは憂鬱な気を紛らわせる。統制室を出る。

「……世話が掛かりすぎる」

変わらず薄暗い室にひとり残ったシフはそう独りごちる。

シフは、ダイナミックミッシェンプランナーをはじめとする各種作戦システムに命令を入力する分には、不満は感じなかった。それは確かに必要な操作だからだ。しかし手間暇掛けて造りあげた部下たちにまで同じことを要求されるとなれば、これはたまったものではなかった。一言命じればその通り勝手に戦って、勝手に勝利して、勝手に戻ってくるよう、造ったつもりだったのだから。

現実はどううまくは運ばなかった。彼女らの戦闘能力は十分に高い。だが……。

つまるところ、子の心は親の筋書き通りには育たなかったのだ。心を持つ相手を思い通りに使役するのは、コンピュータを相手にするよりずっと骨が折れた。あらゆる行動を命令によつてがちがちに縛ることも不可能ではなかったが、やはりある程度は自分で判断させねばわざわざ人として造った意味がない。冗長性はイレギュラーに対する強力なカウンターとなり得るのだ。で、そのように振る舞う彼女らはしばしばシフの思惑を逸脱した。ままならぬものである。

それでも彼女らは強力で、少々の扱いづらさをおしてでも運用する価値があった。なにやりシフは、自分が苦勞している裏でひまを持て余している部下がいるというのが気に食わない。

「そろそろ働いてもらわないとな」

これほど美しい星を前にして、いまさら戦力を温存する必要もなかった。

*

翌日。晴天。濃い青の空に、背の高い真つ白な入道雲。その輪郭は絵に描いたようにはつきりしていて、まるでどこから切り取ってきたようだった。

強い潮の香りに満ちた大海原。遠くに見える水平線だけが空と海とを隔てている。シエルターも街も、そして森も、海面からは星の丸みに隠れて見えないうくらい遠かった。

普段は穏やかなこの群青の海は、しかしいま、異質な雰囲気包まれていた。ときおり海中で激しい閃光が弾け、その都度あちこちで水柱が上がっている。青白い光の束が海上へ飛び出してくることもあった。

その頻度は徐々に増し、やがて海面の一角が特別大きく盛り上がりはじめた。海中深くから巨大な影が浮上してくるのである。

小山のような隆起がピークに達するよりわずかに早く、隆起の頂点で、ほんのちよつとし

た爆発が起こった。それは、巨大な影に先行して空に躍り出た、少女があげる水柱。

スグリ、急速上昇。速度と機動ベクトルはそのままに海面隆起に向き直る。スグリの視線の先、勢いよく海面を割って姿を現す大質量。尾部にスクリュー、側面には四枚の安定翼を備えた、太ったミサイルのような形をした巨大な船だ。深く静かに、を信条とする潜水艦とは幾分か異なる、より積極的に機動、攻撃を行う水中戦闘艦だった。

だがその船体はすでに大部分が破壊されており、剥がれかけた装甲があちこちでくすぶっている。

戦闘艦は水中で得た加速を利用して海面から大ジャンプ、スグリに追いつがる。全ミサイル発射管開放、圧搾ガスの圧力でキャニスター（格納容器）からミサイル本体が射出される。ミサイルは畳んでいた主翼と方向舵を展開、母機である戦闘艦から離れたところでロケットブースターに点火。

数十発の中型ミサイルが弧を描いてスグリに殺到する。スグリはビームライフルによる迎撃を行わない。スグリとそれらミサイルには機動能力に隔絶した差があった。ミサイルをわざわざ一発ずつ撃墜してやる必要は、スグリにはなかった。

水中用の推進器しか持たない戦闘艦はジャンプの勢いも衰え海面にダイブ。スグリは転進、高速で、戦闘艦の後を追った。

スグリの後ろからミサイル群が着いていく。だが水中戦闘艦から発射されたそのミサイルは、空中戦用の高機動なものではなかった。スグリの急激な方向転換について行けなかった

り、兄弟同士衝突して爆発してしまったりして、生き残ったミサイルはわずかに数発となっていました。

その数発を引き連れたままスグリはあつさりと戦闘艦に追いつき、追い抜く。亜音速で飛翔するミサイルが続く。

自らを狙うそのミサイル群を、スグリは自身の機動によつて、誘導する。自由落下するしかない戦闘艦に回避の術はなかった。危険を察知した戦闘艦はミサイル群へ自爆コマンドを送信。ミサイル爆発。弾頭片の一部が脆弱なスクリーを傷つける。

敵ミサイルを引っぱつてお返しするという作戦は惜しいところで失敗に終わった。だがスグリのアタックフロアは途切れてはいない。スグリは着水までもう一秒とない戦闘艦と海面との隙間に素早く滑り込むと、手にしたビームライフルを真っ直ぐに突き出し、その銃口で敵艦首を叩きつけた。瞬間、発光。敵艦体が大きく震える。水中減衰を経えない、ビームライフル本来の破壊力がゼロ距離で炸裂。ビームは巨大な艦体を尾部まで貫通することさえなかったが、ダメージは内部にまで及んでいる。

戦闘艦に押しつぶされる前に、スグリは海面を切り裂きながら後ろ向きに離脱した。その後、戦闘艦は激しい水柱を上げて着水する。そのまま深く沈んでいく。二度と浮上してはこない。敵艦沈黙。

「ふー」

緊張から解放されたスグリは嘆息した。潮風を受けて、うん、と大きな伸びを打つ。その

まま後ろに傾いて背中から海面に倒れ込む。すると、まるでそこに薄い空気の間があるかのように、スグリの体はぼよん、と浮かんだ。これはいい、なかなか心地がよい、スグりは海のベッドに仰向けになる。ぼよん。ぼよん。

と、すぐ脇にビームが降ってきた。盛大な水柱があがり、スグリはあつという間にずぶ濡れになる。スグリは思わず半眼になった。への字に口をゆがめてぼそりとつぶやく。

「……水もしたたる……」

その先は、なんだかきまりが悪かった。

「……」

スグリは言葉を飲み込んだ。

敵ミサイル群接近中。距離五〇キロ。速度二・八、これはまだもう少し加速する。その後方にキューブの編隊と、ミサイルの発射母機がいる。

「数が増える」

遠くの空にキラキラ輝く点を見て思う、やっぱり厄介なことになったな。

スグリは勢いよく身を起こした。今度は気合を入れなおす意味で、ぐつと背筋を伸ばす。周囲の空気がパンと爆ぜ、水しぶきに虹が架かった。潮風にさらりと髪が流れる。

まずはすでに向かってきているミサイルをなんとかする必要があった。複数の小型機が相手だから、先ほど水中戦闘艦に対して用いた手は特に効果的とはいえない。となれば手堅く迎撃、とスグリは右手のビームライフルを意識する。もう少し待てばミサイルの方からライ

フルの有効射程に入ってくるだろう。

そして、気づく。たつたいま、しこたま海水をかぶせてくれた、あのビームはどこから来たのだ？

どこから来たのかという問いは正しくはない、とスグリは遅れて意識する。そんなことはわかっていた。ミサイル、キューブ、ミサイル母機、そのさらに後方から、だ。そんなところから届くのか……そう、その長射程にスグリは驚いたのだった。

アウトレンジからビーム攻撃を受けたわけだった。このままでは一方的に狙い撃たれる恐れがある。スグリはミサイルの到達をのんびり待っているわけにはいかなかった。海面を離れ、自らミサイル群に向かう。合計八発の敵ミサイルをビームライフルの射程——大気中ではおおよそ十二、三キロといったところだ——に捉える。ミサイルはすべて同型だが、その航跡から、二機のミサイルアーから四発ずつ同時発射されたものだとわかる。

スグリは三発のビームを連続発射。同数のミサイルが空中で瓦解^{がかい}する。二秒後に再攻撃。敵ミサイルは残り二発となるが、スグリとミサイルは互いに向かい合って飛んでいるためにその相対速度は大きかった。二秒もあれば、二者間の距離は五キロ縮まった。

このまま進んではもう一度攻撃するための時間的猶予がなくなる。スグリはしかたなく回避機動へ移る。すると、すでにロケットモーターの燃焼を終えているミサイルは、自分とほぼ同速度で上昇していくスグリについていくことができない。スグリは余裕を持ってミサイルを攻撃。

驚異はまだ残っている。キューブ編隊のビームがスグリを襲う。

キューブのビームは、スグリのビームライフルと比べて射程も威力も劣っていた。先ほどの長距離射撃は彼らの仕業ではないということがここからもわかる。加えて、どういふわけか以前に比べてキューブの射撃精度が落ちているように、スグリには感じられた。もつともそれはスグリにとつて都合のよい話ではある——応射。ビームライフルが放つ青い光条が、次々とキューブを撃ち落とす。

敵の数は多い。しかしスグリは決して退かず戦線をぐいぐいと押しあげていく。スグリはキューブよりも、敵ミサイル母機を早く射程に収めたかった。

三〇キロ程度に迫ったそのミサイルアーから第二波攻撃、複数のミサイルが斉射される。先ほどよりも数が多い。スグリには、現状ですべてのミサイルを迎撃するのは困難だった。キューブもまだたくさん残っているし、迎撃中にさらなるミサイルのおかわりがないとも言いきれないのだ。多少強引にでも、もつと急いで接近してしまった方がよいのだろうか、とスグリは思った。母機に狙いを絞るならばミサイルをお返しする戦法も使える。

迷っているあいだもミサイルはぐんぐん加速して向かってくる。キューブからも攻撃は続いている。そして忘れてはならないもうひとつの、おそらく最大の驚異、長射程を持つ敵のビーム攻撃にも、スグリは備えなくてはならなかった。

——その未知の敵からの攻撃が、きた。

これはしかし、あのビームとも違う。

考える余裕はない、というより、すでに体が反射的に動いている。ミサイルへ向かいかけていたスグリは突発的に真下へダツシュ。あれこれ考えたのはそのあとだった。スグリの頭上を特大のビームが奔った^{はし}。

直前まで目標に定めていたミサイルとその発射母機が、彼らの背後からの高エネルギー波に呑み込まれて消滅する。スグリが離脱する直前、周囲に残っていたキューブたちも同じ運命を辿った。まるでバスターの光線のようなだ、その様を横目にスグリは思う。もつとも、バスターほど無遠慮なEMPまでは感じなかった。周囲の戦闘メカをだめにしてしまわないために発射装置に工夫がされているに違いなかったが、せつかくのその配慮も、味方にビームを直撃させてしまつては意味がなかった。

自分を狙うためにキューブたちを囷にしたのだろうか、とスグリは思った。だが、そうだとすると少々タイミングが甘い、とも感じるのだ。たとえば、ビームライフルでミサイルを撃ち落とそうとした瞬間を、ちようど狙って攻撃する、とか。実際にそうされたら自分は困るが、囷を使ってまでの攻撃なら、それくらいの慎重さは必要だろう。

敵性の大出力ビームから逃れえたのはスグリだけだった。結果的に、そのビームはただの一発で周辺の戦闘メカを一掃した。スグリの前進を妨げるものはもはや無く、スグリは小さな違和感を感じながらも、ビームの発生源へと急いだ。

ビームの射手は、一人でスグ리를待っていた。そう、相手はまた、空を飛ぶ人だった。どこかさばさばとした感じのする少女だった。その少女はライフル型の武器を、両手にひ

とつずつ持っていた。スグリが構えるビームライフルにも臆した様子は見せず、自分の武器を肩に担いで、スグリが近づくのを待っていた。

「君がこの星のヒトか」とその少女は言った。「サキが言ってたよ、すごいスピードで飛べるとか。なんか強そうだね」

サキ、というのはきのうの、橙色の髪をした娘のことだろう、とスグリは思った。

スグリはしばらくのあいだ少女の顔をじっと見つめていたが、やがて構えたライフルをゆつくり降ろした。

「……わたしは、この星を調査してる、って聞いたけど」と、ため息混じりにスグリ。「ヒトがいると困るらしいね」

そうだね、と少女はうなずいた。

「私たちはこの星に住みたい。そのためにきみたちを消さなきゃならないんだって」

「この星に、住みたい？ それで、なんでわたしたちを消す必要があるの？」

「私にはわかんないよ。ただ、きみたちを消せと言われたんだ。命令は——」少女は肩で遊ばせていたライフルをスグリに向けた。「絶対に守らなきゃいけないもの」

「……」

スグリはひとたびその手に武器を握れば、敵を打ち倒すことに迷わなかった。敵を放っておけば自分だけでなく、いずれは大切な人たちが危険に晒されることになるのだから。しかしいま、敵の発した言葉にスグリの心は大いに揺れた。相手の目を見つめたまま動けない。

スグリは疑問にとらわれていた。この星に住みたいと望む彼女らが、自分たちを排除しようとする理由が見つからない——いやそれよりも、目の前のこの少女自身ですらも、なぜかはわからない、と言ったのだ、それがスグリには問題だった。理由はわからないが命令だから、と少女は言った。

命令、命令か。それだけで納得できるものだろうか。戦い、なんて、本当にとんでもないことだ。理由もわからないのに命令だからというだけで……。理由がわからない、ということとは、自分ではその必要性は感じていないということだ。以前の娘も、目の前の少女も、本当はそんなつもりはないのに、だれかに命令されたから攻撃してくるというのか。そんな相手を打ち倒さねばならないのか。そんな相手を、打ち倒す必要があるのか？

「どうしたの？」敵の少女が尋ねる。「戦わないのか？」

「……戦いたくないな」とスグリ。

そうだ、わたしは、この子と戦いたくない。

「どうして」

だって、とスグリは思う。だって、もしそんな命令がなかったら、きつとわたしたちは争うことなんてなかった。

「君がそうでも、私は撃つよ。命令だからね」

だって、もしそんな命令がなかったら、ひよつとしたらわたしたちは、手を取り合って暮らせたのかもしれないのに。

くちびるを噛むスグリに向かって、敵の少女はもう一度ライフルを構えなおし、そしてつぶやくように言った。

「……ごめんね」

「……っ」

ほら、見たことか。やつぱりそうだ。

「だったら……っ！」

「でも、しかたないんだ」

敵主兵装、エネルギー指向型携行兵器が二。すなわち長射程ビームライフル及び大口徑ビーム砲。携行状態であつた敵ビーム砲が展開、大型の弩弓どきゅうを思わせる戦闘形態へ。一方長射ライフルはすでに溢れんばかりのエネルギーを溜め込んでいる。

「きみにもすぐに消えてもらわなくちゃ」

敵のライフルが吼える。ビームが吐き出される。悲しみ通り越して憤りすら覚え、スグリは叫んだ。

「戦いたくなんかないって、言ってるのに!!」

超高速射撃統御システム起動。中枢掌握体接続。

二人の少女が放つたビームはちょうど互いの中程でぶつかり、大きく弾けて広がって、それぞれの敵に降り注いだ。

二基のビーム砲を操る少女は、イルといった。イルは、てつきり敵は回避を試みるものと思っていたから、ビームを迎撃されたことに驚いた。しかしイルはすぐに平静を取り戻し、生じた現象を観察する。

威力は互角か、いや、これはこういう反応だ。射程が物語る通り、出力で見ればこちらのフォトンライフルが上回る。

「この星で戦えるのは、きみだけだつてね」

拡散、減衰したビームの残滓を（さんし）へシールドの受動反応でたやすく無効化しつつ、イルは、戦いたくないと叫ぶ敵に言葉を返す。

「だから私たちは、いまはきみしか見てないけど、きみが消えたら大勢あとを追うことになるよ。それが嫌なら、きみも、きみの意志なんかに関係なく、本気で私を消しにかからなくっちゃ。それともきみは、自分が死んだあとのことなんて気にならないかな」

言つてイルはフォトンライフルをもう一発。敵のビームライフルが即応し、二人の間で再度閃光が弾けた……と同時に、青い閃きがイルの胸を打つ。イルは目を見開く。激しい衝撃に一瞬頭が真っ白になる。なんだ、いまのは。

なんだ、ではないと、イルは混乱する己を叱咤した。敵のビーム攻撃に決まっている。

つまり、二発。敵は一発目とまったく同じ軌道で、イルには悟れないくらい素早く、かつ先を行くビーム同士の反応に巻き込まれないタイミングを計って、二発目のビームを放っていたのだった。

そもそも後出してビームを迎撃すること自体理解しがたいというのに、ありえるのか、そんなことが。イルは額に汗を浮かべて敵の少女を睨む。

「関係なくはないな」と敵は言った。

弾けたビーム粒子がまだ蛍火のように漂っている。淡い輝きの向こう側から、銀髪の少女がライフルの銃口をイルに向けて、はつきりと告げる。

「これも、わたしの意志だよ。みんなを守りたいっていうのも」

イルはまだひりひりと痛む胸を、ライフルを握ったままの手で押さえた。なるほど、鋭い意志だ。イルは迷いを払った敵の瞳に小さな憧憬を抱く。羨ましい、という感情。

この子は大切なものをたくさん抱えている。それを守るために自らの意志で戦っている。

同じ望まぬ戦いとはいえ、それでも命令に縛られた自分とは違う、というわけか。……だが、失いたくないものなら、こちらにもある。

「……うん、かえってやる気出ちゃったかもね」

「……？」

いまいち飲み込めない、といった様子の敵を置き去りに、イルは急上昇、フォトンライフルを構える。さあいくぞ、というわけだった。敵は一瞬びくりと身を強張らせ、なにやら複雑な表情を浮かべ、いやいやと頭を振って、ついに戦闘機動に応じた。

敵の機動は、目標、すなわちイルを中心に据えたサテライト（円周回機動）だ。常に高い速度を維持しつつ、自由に間合いを選択できる、この敵が戦闘メカたちに対してよく用いる

らしい、いわばお馴染みの飛行パターンといえた。

本当に速い、とイルはあらためて思う。それでも、戦いたくないなどと言う相手を狙うよりずっと心はらくだった。ついでにビーム弾の撃ち合いは得意な方だ。イルはフォトンライフルを連射する。無理に初撃必中を狙うわけではない。敵の速度に目を慣らしつつ、少しずつ狙いを絞っていく。

その的確な射撃に敵は驚いたようだった。速度を増減したり、軌道面をずらしたりしてイルの狙いを逸らそうと抵抗する。たしかに有効な回避機動ではあるが、とイルは余裕の心境で思う、回避に集中しすぎているのか攻撃を忘れている……いや、あれは焦っているのだ。

射撃戦での優位はイルの方にあった。フォトンライフルは少しずつ少女を追い込んでいく。そしてついに命中弾——否、それは敵ビームライフルによってまでも迎撃された。話には聞いていたがなんという反応速度だ、思っていると敵から反撃のビーム攻撃——まるで咄嗟にビームを迎撃したことで、ライフルの存在を思い出したかのような。唯一の戦力という割に戦い慣れてないな、などと余計なことを考えながら、イルはフォトンライフルを持つ右腕で敵ビームをガード。シールドがビームを受け止める。腕が痺れる。

シールドの維持にはビームを撃つよりもずっと体力を使った。消耗が続けばそもそもビームなど撃てなくなるし、たとえそんな状態に追い込まれたとしても、加害を認識すればシールドはあらゆる力を無理矢理にでもかき集めて発現した。それはイル自身を守るためではあるのだが、下手を打てばそれによつて衰弱死することすらありえないではない。互角以上の

敵と戦って勝つにはとにかくやられる前にやるしかなかった。

イルはフォトンライフルを引き、かわりに展開したビーム砲、大出力リニアレイを前面へ。その威力をすで見ている敵はリニアレイの発射を妨害しようと攻撃態勢、敵ライフルが輝く。だが構うものか、とイルは砲撃。

リニアレイの圧倒的な出力は機動戦用の敵ビーム弾などまるで障害としなかった。一瞬でかき消し、その先の少女に猛然と迫る。と、少女はなんの前触れもなく爆発的に増速し、リニアレイの効果径から一気に逃れてしまう。敵、急上昇。

イルはその様子を事細かに確認することはできなかったが、消えた敵がどこに逃れたのか、ということとは即座に認識した。イルは、リニアレイといえど最初からそう簡単に当たるとは思っていなかった。回避されることは想定し、その逃げ道に頭の中であたりをつけていた。そうして構えたフォトンライフルの照準に、リニアレイの射線の真上に逃れた少女が飛び込んでくる。

やっぱり浅いな、とイルは無感情に思う。最初と同じように、レイの下に潜り込めばよかったのだ。そうすれば、レイそのものが壁となつて、フォトンライフルでの追撃は成立しなかったろう、こんな連続攻撃を受けることはなかったのに。

発射。フォトンライフルの銃口から伸びた光が目標を捉えた。敵少女の右斜め前方からその胸部下に直撃弾。ビームの先端が少女の身に食い込み、歪む。ビーム弾全体が波打つ。有効射程五〇キロを実現する収束率と弾速によってビームは敵の腹を食い破ろうともがく――

そうなるよりもわずかに早く弾体が潰れた。ビームはきらめく粒子となって少女の衣服を這うように広がり、後方へ散っていく。

半身を弾かれたように体勢を崩し、取り落としそうになったライフルを必死で抱え込み、身を折って血を吐く少女の姿をイルは確認する。そんなものか、とイルは思う。フォトンライフルの直撃を受けて、その程度で済ませるか。

サキのグレネードをともに受けてもほとんど堪えなかった子だ、自分たちが持つシールドのような、なんらかのバリアシステムを操るのだとしてもふしぎはない。しかしそれなりは心底満足のいくものとはいえない。もう少し、気合いを込めて撃てばよかったろうか？

もつともいまだ少女はその機動性を発揮できる状態にない。これがとどめになるか、と、イルは若干の苦しさを感じつつも追撃のフォトンライフルを、気合いを込めて、撃ち込む。身を屈めて痛みに耐えていた少女はそのビームにぴくりと反応した。被弾部位を抑えていた左腕を、さっと払う。その手の甲が迫るビームを叩き落とした。

少女の周囲に蛍火が舞う。

これにはイルも驚愕を隠せない。さらなる追撃を忘れさせる程の心理的衝撃だった。なにせ最初の命中弾で血を吐いた敵が、そのダメージも回復せぬ間に、より力の込めたる二撃目を片手で払い除けたのだ、イルの驚きは無理もなかった。これではつじつまが合っていない。見れば少女も目を丸くして、自分の左手を握ったり開いたりして見つめている。

シールドが活性化しているのだ、とイルは無意識に敵の能力を自分たちに当てはめて解釈した。シールドは明らかに致命的な驚異に対して意識的に、まさにバリアのように展開したりできる一方、完全に不意を突かれた場合でも反射的に発動するといった不随意な面も持ち合わせている。その受動反応時の出力が、一撃目のダメージに対応する形で引き上げられたのだろう。

イルは平静を取り戻すとフォトンライフルを連射した。先のできごととはイルにとっても衝撃的だったが、なにもこのビームが少女にとって驚異でなくなったわけではない。フォトンライフルも携行ビーム砲としては破格の火力を誇った。直撃すれば十分に効くはずだった。少女はただ、それを防ぐ手段を得たにすぎない。それも仮にイルが想像した通り、シールドと同じく消耗が激しいとすれば、決して好んで用いる手法ではない。

フォトンライフルの連射を受けた少女は回避機動へ。しかしダメージが残っているせいかその航跡はふらふらと定まらない。——ふらふらと、などという状態ではなかった。まるで見えない爆弾がそばで爆発し、それに何度も吹き飛ばされているような、上へ下へ、近く遠くと、まるでめちやくちやな機動だった。

体のどこかが痛いからといってあんなことにはならない、とイルは思う。めちやくちやだが、意図的な機動に違いない。戦闘メカたちのリーダーが見せられていた振動する幻影、あれはもつと小刻みだったが、それを思わせる飛び方を実際にやっている。

そのくせ全体の速度も増加しているのだ。次の瞬間どちらへ方向転換しているのかまるで

予想できず、これを狙い撃つのはイルといえども至難であった。

そんな少女からのビーム攻撃が、連続で来る。イルは必死の回避を試みるが「戦い慣れない」はずの、少女の照準能力そのものは高い。イルは何度もシールドに頼り、体力を削られていく。

格下の戦闘メカとばかり戦っていたあの子は、ともに向かい合ってビームの撃ち合いをすることに慣れていなかった、というのはいまはたしかだろう。しかしいまは……。そもそもしてビーム弾を避けたり迎撃したりしてしまう力を持っていた彼女が、あらかじめ被害を受け難くする飛び方まで覚えてしまった。

形成を逆転された、とイルは思った。いくらビームの出力で上回っても当てられないでは意味がないし、そんな高威力のビームを撃つ以上にシールドの負荷は高いのだ。このままではじきにやられる、このままでは……。しかし、どうすれば。

——フォトンライフルの精密射撃で命中が期待できないなら、最大出力のリニアレイで空間ごと呑み込むしかない。

急げ、迷うな、この体が動かなくなるまえに。イルは牽制弾を放ちつつ敵から大きく距離を取る。後ろにさがりながら大口徑ビーム砲を構え、巨大なそのフレイムにフォトンライフルを添えて連射。そうするあいだにビーム砲の表面には輝くエネルギーラインが浮かび、砲口からは滴るように光が洩れはじめる。

それを見た少女は急上昇。イルの方は高度にはこだわらず、とにかく後ろに逃げる。少女

はりニアレイの射線を空に向けさせたいのだろう、とイルは悟っていた。おそらく海や大地に被害を出さないためだ。そういうことには気が回るらしい。

ビーム砲の輝きが増していく。高度を上げた少女は一直線に突っ込んでくる。その速度はもはや一瞬前と比べて速いか遅いか、ということすら認識できないものだったが、あの厄介なジグザグ機動を止めて本当に真っ直ぐ向かってきたから、たぶんいままで一番の高速だろう。

いつしかイルはフォトンライフルの狙いをつけることも忘れてビーム砲に集中していた。敵の少女もビームを撃ってこない点は同様だった。少女のビームライフルは速射性こそ凄まじいが、一定数の射撃で長いリチャージが発生することがわかっている。いままさにそうなっているライフルのかわりだろう、少女の左手には真っ赤なビームソード。あれを喰らったら、終わりだ。

イルは迫る驚異に瞬きもできない。目が痛い、とふと思った。頭痛がする、頭が焼き切れそうだ。かつてないほどに思考が加速している。反応速度が無理矢理に引き上げられていく——だがこれ以上は無理だ。この速度は、自分の領分ではない。意識が置き去りにされてしまう……。

あの子が向かってくる。追いつかれたら負ける。……それなのに私はなにをのんびりしてるんだ？ なにか理由があったような気がする。……このビーム、もう発射してもいいんだっけ？

少女はビームソードを居合いのように構え、気持ちいが乱れたイルを見据えた。ついに最後の跳躍のために身を絞り、そして――

「っ!？」

少女はまったくとうとつに、静止した。ビームソードからは光が失せ、その手はなにかに耐えるように自分の体を抱きしめる。

バズン、という放電音と、小さな悲鳴は、ずいぶん遅れてイルの耳に届いた。それは朦朧としかったイルの意識を一気に覚醒させた。

――ホールドビット！

空中敷設型の超小型多目的スマート機雷。破壊力を伴う電磁ネット。そうだ、自分はこれ wait していたのだ。大口徑ビーム砲を大げさに構え、砲撃阻止に動くであろう敵をこれに誘い込む。

イルが逃げながら用意したそのトラップを、本来であれば少女は見逃さなかったろう。このような手に掛かる相手ではなかったはずだ。だが、

「露骨なチャージに気を取られすぎたね！」

これが最後の一撃と、いささか感情的にイルは叫んだ。そして、最大出力のリニアレイ。その光はいとも簡単に、ホールドビットごと敵の少女を呑み込んだ。

戦いの最後を飾るにふさわしい威力。耐えに耐えて、ついに爆発させた、己の発揮しうる最高の力。

そこに華々しさは微塵もなかった。

激しい戦いの熱も、交わした言葉も、少女の瞳に感じたものも、それを見て自分の心に生まれた、たぶん悪いものではないであろうなにかも。すべてこの光が洗い流してしまいうような気が、イルにはした。目の前の光景は、ただひたすらにあっけなかった。

発射の反動は、しかしそのように淡泊なものではなかった。身体の活力がそのままビームになって噴き出していくような感覚。覚悟した以上の消耗だ。そのうえでイルはシールドも展開していた。ビーム砲が指向しきれずに、溢れて暴れるエネルギーから身を守るために。

ここまでの無茶をやったのははじめてだった。ここまでの無茶が自分にできることに、イルは驚いていた。しかし、激しい倦怠感が心身を襲う。イルは堰を切って流れ出る力に蓋をすることができないでいた。なんでもいい、ぜんぶ持つていけ、霞の掛かった頭で思う。

ビームがかき鳴らすバリバリという雷鳴をイルはやけに遠くに聞いた。体に力が入らない目を開いているのに視野が狭まっていく。しかしもうイル自身はそれらを意識することができなかった。意志の失せた表情で、極大のビームを吐き出し続ける砲口をぼんやりと眺めている。うつろな瞳にふっと虹の環が映えた。虹。虹……。虹？

なんで？

稼働中の砲口に、赤い光が突き刺さる。

「え……」

突然現れた細く鋭い赤光が、ビームを逆昇りながら砲口の奥へと潜り込んでいく。イルの

目にはその奇妙な光景がひどく緩慢にうつった。開いた傘に沿うように、赤光の先端に押し広げられたビームが砲身を内側から吹き飛ばしていく。外界へ飛び出すはずだった莫大なエネルギーの一部が逆流し、砲全体に破壊が広がる。

「ちよ……！」

どうしていいかわからない、はつきり言って、なにが起こっているのか理解できない。ただこのままでは拡散するビームに灼かれてしまう。

イルが咄嗟の防衛本能によって身を退くと同時に、砲を浸食する赤光がついに根本までねじ込まれた。根本。赤い光の発生源。それは、あの少女の小さな手に収まっていた。少女の左手に握られたビームソードが、全身で伸び上がるように繰り出された突きが、真つ正面から砲口を貫いている。

レイの中を泳いできた！

呆気にとられるイルの目の前で少女はビームソードを一閃、砲を切り裂いた。少し遅れて小爆発。爆風が二人の髪を揺らす。

敵が目の前にいる。イルはハツとして右手に残ったフォトンライフルを構えようとする。が、その長い銃身は少女の左の拳に受け止められ、逆にビームライフルを突きつけられてしまう。

——そして、もっと衝撃的なできごとがイルを襲った。

冷水を浴びせられたように体を硬直させ、ライフルを突きつけられていることすら忘れて、

イルは空を振り仰ぎそうになる。が、それはかろうじて堪えた。そんな迂闊をすれば拠点の方角を知られてしまう。それだけはやってはならない、それだけは。しかし……。

今度こそ、イルの全身から力が抜け落ちた。もうだめだ。もう勝ち目はない。相手の能力以前に自分自身これ以上は戦えない。いや、いつそよかったではないか。もともと自分で望んではじめた戦いではないのだ。

戦闘の疲労は心も冒した。なげやりな気持ちになる。

イルの心境の大きな変化に敵は気づいたようだった。この期に及んで、どうしたのか、と眉をひそめて尋ねてくる。

「どうしたの」

「撃てばいいよ」とイル。「きみの勝ちだ」

「……本当にそう思ってる？」

「もちろん」イルは力なく笑って見せた。「きみ、思ってたよりぜんぜん強いね。それに、さつき聞こえたんだ。おまえの負けだ、って」

「言っていないよ、そんなこと」

「……おまえじゃ勝てない、だからもういらない、ってさ」

それはつまり、支配者からの新しい命令だった。命令という言葉の定義を満たしていなくとも、その意思に逆らえないという点で変わらない。たとえいまからこの少女を倒したところで、イルは宇宙船に戻れなくなっただのだ。支配者の心変わりを待つしかない。が、そんな

ことが起こる確率は万に一つもないと、イルには思えた。

少女は油断なくビームライフルを構えたまま、少し考えるような素振りを見せて、こう言った。

「じゃあ、きみが嫌々戦うこともなくなったってこと？」

「……いつまでそんなこと言ってるのさ。あと、たった一発じゃないか。それに、嫌々つてわけでもない。失いたくないものは、私にもあるんだよ」

すると少女は不満そうに言った。

「わたしはなにも盗る気はないよ」

そうだろう、この子の本音はそうなのだろう、イルはその言葉は信じる。しかしこの子が、彼女の大切なもののために戦い続けるかぎり、かわりにこの自分が守りたいものは傷つくだろう。

「だってきみは、こんなに強いんだから」

「……なんだかよくわからないけど」

少女は少し険しい表情になった。ライフルを握る手に、ぐつと力を込める。イルは反射的に身を強張らせる。だが、

「戦うために強くなったんじゃないよ」

そう続けた少女は、ライフルの銃口でイルの胸をとんと押すだけだった。

「余計なことさせるな」

イルの体はふらりと後ろに傾いた。限界だった。もう飛んでいるのもつらい。フォトンライフルもいつの間にか手放してしまっていた。イル自身もゆっくりと落ちていく。

「……ほんとにきみは、しょうがないね」

これは、完敗だ。

戦いに勝てなかったことはふしぎとそれほど悔しくはなかった。ただ、切り捨てられたみじめさがあった。それに仲間たちを心配する思いと、ほんの少しの、少女に対する羨望が、イルの心を占めていた。無重力感が体を支配する。

大海原にきよう最後の、控えめな水柱が上がった。

バイオレットスカイ

敵は排さねばならない

守るために戦うことに、迷いはないはずだった

だが、戦うために変えられた、敵の心に、彼女は触れる
そして命令に縛られた敵は言う

おまえも同じだ

作戦開始時刻が近い。宇宙船に残っていたシフブランドの一人、ナナコは、支配者シフの言いつけ通り出撃準備階に降りる。

ナナコが普段すごしている宇宙船中央区は、船全体から見れば細長い管のようなものである。その周囲を肉厚の円筒構造が取りかこんでおり、普通の人間が使うための施設はほとんどそちらにあった。

円筒構造内は機能や用途ごとにこまかく仕切られているものの、大きく見て内側には居住区が、外縁には戦闘用の施設が集中していた。部屋の壁や空間そのものすらもライフスペースの装甲に見立てているわけだった。巨大な戦艦や戦闘メカの発着口を設ける必要性から、また固定砲台の類との物理的距離の問題からも、戦闘用の設備を外周に配する構造は都合がよかった。

ダメージコントロールを考慮した通路の壁には分厚い隔壁を下ろすための溝が等間隔に走

っていて、薄暗いだけではない、どこか重々しい雰囲気醸し出している。だからといって気分が滅入ってしまうナナコではない。それよりも、出撃のたびに毎回戦闘区画まで出向かねばならないということが、ナナコにはおっくうだった。中央から最外縁の戦闘区画まで、直通の乗り物はいまのところない。べつに中央区からいきなり外に飛び出したってかまわないだろうに、とナナコは思うのだが、作戦システムが混乱するからちやんと予定された出口から出る、とのことだった。

鋼鉄のトンネルのような通路をマイペースに、だらだらと歩く。

やがてたどり着いた部屋の扉窓からは、すでに明かりが漏れていた。だれかいるのだ。ナナコは意外に思ったが、居住区の外を動き回れる人間はきわめて限られている。先客の目星はすぐについた。ナナコは黙ってドアをくぐった。

出撃準備室、ブリーフィングルームといってもよい。入ったドアの右手が部屋の正面だ。

壁には大きなモニタが掛かっている、その前には教卓のようにデスクがひとつ置かれている。複数人掛けのミーティングテーブルが部屋の中央に。低い天井からはシーリングライト（直付け照明）が照らす。そして、ナナコがいま立っている入り口のすぐ左脇には、この場にまるでそぐわない、ゆったりとしたソファが異彩を放っていた。

いま船に、この部屋のすべての機能が必要とする人間集団はいない。ここと同じような準備室は両隣やその向こうにもあるのだが、出撃を待つシフブランドはみな、いったい誰が持ち込んだのかもあやふやなこのソファを目当てに、いつも同じ部屋を使うのだった。

ナナコは後ろ手にドアを閉め、手にしていた薄っぺらな作戦計画書をそのソファに放り投げる。壁のモニタやテーブルコンソールには目もくれず、自身もソファへ飛び込んで、計画書をひろいあげてページをめくる。いまはじめて目にする内容ではない。作戦要項は事前にちゃんと把握しているから、ここではそれを確認するだけだった。ナナコはソファに深くもたれ掛かり、脚など組んで、もしそばに菓子でもあれば間違いなく手にとって口に放り込んでいるだろう、と思わせるくつろぎようで、お気に入りの雑誌を眺めるようにミッシヨンプランを流し読みにする。

「ちよつと」

そんなナナコに向けられる不満げな声。先にこの部屋で待っていた、それなのに置いてけぼりにされている先客からの、抗議の視線をナナコは感じる。ナナコは右手をあげてヒラヒラと振り、手元の書に目を落としたままで、「あら、キョウコ」とその名を呼んだ。なおもとぼける。「アンタそんなとこにいたの」

はあ、というため息が聞こえた。

「顔も向けずに、そんなところ、なんて。よく言えたものだわ」すっぽりと教卓に収まったキョウコが言った。

「うっさいわねえ」とナナコ。「ホントにそこだなにしてるのよ。この私に教鞭でもふるおうっての？ これでもけっこういそがしいのよ」

「だからわざわざ様子見にきてあげたんじゃない、もうちよつといい顔したらどうなの」

「はあ……？」

ナナコは奇異なものを見る目をキョウコに向けた。見返すキョウコの表情はいつもどおり、いたって真面目なものだった。いや、ポーカーフェイス、ともいったか。

「……それはどうも、ご親切に」

なんなのだ、いったい。

それきり会話は途切れてしまう。二人のあいだに確執めいたなにかがあるわけではないのだが、いまは別段これといった話題もない。だからなおさらキョウコの目的は謎だった。存外、ただひまなのかもしれない、とナナコは思う。キョウコは、次の行動のための待機中なのかも。

二人は敵の衛星軌道狙撃砲による攻撃に備えるする任を、つい先日解かれたばかりだったクロークが十分効果を發揮しているのか、それとも敵にその気はないのか、あるいは「撃てば撃たれる」状況を理解しているからか、いずれにせよ敵からの、宇宙船への直接的先制攻撃はなさそうだ、という判断にもとづくものだった。

ナナコはふん、と息をつき、計画書に意識を戻す。

作戦時間や帰投時刻、回収座標などのほか、なんの役に立つのかわからない、些細で雑多な情報紙面をいろうっている。その主な成分はミッシェンエリア周辺の環境データだが、戦闘メカ群を最適化するには有用なそれらの情報に、ナナコ自身は興味を惹かれなかった。

きわめてすごしやすい、と聞かされている星での活動だ。たとえば天候が変わろうが、多少

作戦エリアをはみ出そうが、それでいきなり命に関わるということはまずないだろう。

あくまで自身に課された作業の要項のみを、ナナコは確認する。

今回ナナコは、空中戦用メカの付随機能では解析の難しい、星の大地の調査を進めるために、その土壤サンプル採取の任務に就く。いくら空がきれいだとはいえ、いざ大地に降り立つてから土地が撒き散らす毒に気づくようでは話にならない。試料回収は重要な任務だ。とはいえじつくり時間をかけてサンプルを調べあげるのはコンピュータたちの役割であって、現場におもむく者がやることといえ、いってしまえば指定のポイントで土を掘って持ち帰る、という単純なものではない。

量が必要とされないが、できるだけ多様なサンプルが求められていた。例を挙げるならば、手では掘り起こせないくらいに深い部分の土や、堅い岩盤を削ったものがそうだ。今回はちやうど、そういった特殊なサンプルを得るための作戦だった。したがって地中掘削用の巨大なメカがナナコと同時に投入される。このメカが指定座標、指定深度までもぐっていき、最終的に、図体に似合わぬ小さなサンプルカプセルを地表へ戻す。

掘削メカは作業のすべてを作戦システム支援のもと自律的にこなす。ナナコは掘削メカの護衛兼サンプル回収役、ということになる。掘削メカ本体を回収するかどうかは、作業完了後の状況を見て検討される。

あやしいものだ、とナナコは思う。

計画書の最後は次のような但し書きで締められていた。

——但し、敵の主力と接触した場合は、これの撃破を最優先せよ——
それこそがこの作戦の目的なのだとなナコは理解していた。土壌調査など茶番もいいところだ、と。

もちろんそういう調査は大事で、いずれはやらねばならないことなのだろうが、シフは今回のサンプル入手は「ついで」くらいに考えているに違いない、となナコには思えるのだ。もし接敵したら、という前書きは、ひどく白けて見えた。なぜならシフは、目立つ掘削メカを暴れさせて敵をおびき出せ、と言っているに等しいのだから。

で、勝ちがなければ切られるわけね。

命令は、立ち会いであれデータリンク越しであれ、必ずシフ本人の口からシフプランズに告げられた。だが、多くの場合においてシフは自分の最終的な願望しか述べない。より具体的なミツシヨンプランを作成して伝達するのはキョウコの役目だった。キョウコはそれを小うるさく説明することもあったし、文書化して渡してくることもあった。この作戦計画書もキョウコが記した。この、白々しい文面も。

これまでも直接戦闘を命じられることは何度もあったのだ。誰に言われずとも、そこで負ければ次などない。わかりきったことだった。それなのに、今回にかぎって妙に回りにくい書き方をする、となナコは思い、同時に、用もないのに様子を見にきたとうそぶくキョウコの不明瞭な行動のわけを悟った。

「ナナ」とキョウコが呼ぶ。彼女は教卓のコンソールに目を落として続ける。「ビット、仕

上がったわ」

ナナコは、「そ、」と簡素な返事をひとつ返してソファから立ち上がり、うんと大きな伸びをした。

「もう？」

「土掘って来りやいいんでしょ」

「そうね」

「アンタどうせならあの子たち出すところまでやっちゃってよ、外でてきとうに拾うから。そこからできるでしょ」

「面倒ねえ」

「うっさい、どうせひましてんでしょうが」

「はいはいわかったわよ」

ナナコは生返事を返すキョウコの前を「それじゃ」と通りすぎると、ぞんざいな仕草でばたばたと左手を振った。「あと頼んだから」

キョウコを置いて出撃準備室を出る。作戦計画書もソファの上に投げっぱなしで、いまのナナコは身軽だった。腕を組んでずんずんと歩く。

通路を進み、いくつかの隔壁を抜けて、ナナコはいったん戦闘メカの整備格納庫へ。そこから艦積エレベータで宇宙港へ上がる。整備格納庫は小型メカ用のカタパルトにも繋がっていたが、そちらを使うのは癪だった。

艦積エレベータは……あたりまえだが戦艦用だから、べらぼうに広い。しかしカーゴを持たない、いわば床だけが上下するものだ。空を飛べるナナコにとっては都合がよかった。鈍重なエレベータの昇降を待つ必要がないのである。ナナコは吹き抜けになっているエレベータ空間を、発着スペース目指して自力で飛んだ。やがて壁が途切れて視界が開ける。ナナコは広大な宇宙港へ進出する。

このデッキには待機している艦はなく、いまはただただ開けっ広げな空間だ。前方に大きな四角い出口があつて、発着支援用のガイドビームが伸びている。闇に浮かぶ、青い星の姿も見えた。ようやく体感的にも、船外、という気になる。

ぼつぼつと歩を進めはじめると、足下からなにやら大きな振動が伝わってきた。隣のデッキ——この巨大な港は宇宙船の最外縁部にいくつも並んでいる——のエレベータが稼働しているのだ。ああ、掘削用メカが出るのだな、とナナコはすぐに思い至つた。

左隣のデッキからガイドビームに沿つてその掘削メカが自進していくのをナナコは見やる。あのように大きくてうるさい機械にそばで騒がれてはかなわないが、おもりをおおせつかつた身としては無視するわけにかなかった。ため息ひとつ残して床を蹴る。デッキから真っ暗な宇宙へ躍り出る。

ガイドビームの終端で複数の自律戦闘メカがナナコを待っていた。出撃準備室でキョウコに手配するよう頼んでおいたものだ。それは通常の戦闘メカとは違う、ナナコ専用の特別な空中機動砲台である。主人の名に合わせたものか、そのマイクロビームポッドの数は七。マ

イクロ、といったつづ人間の頭ほどの大きさがあつたが、内包する豊富な機能や戦闘能力をかんがみれば十分すぎる程度に小型ではある。

ビームポッドはTCDB（戦域複雑支配ビット）、あるいは単に〈ビット〉などと呼ばれ、それぞれが自律戦闘可能な高性能なものだった。しかしその真価は、専用の戦術コミュニケーション技術であるテンタクル・システムを介してナナコの思考と高度にリンクし、その制御下で体系的に運用されることで引き出される。テンタクル・システムの行使とそれによるTCDBビットの指揮、管制こそがナナコの戦闘能力のすべてであり、ゆえにナナコは自身のその手に銃を取ることはない。

ナナコが近づくともビットたちは競つて主人に群がり、その周囲をくるくると回り始める。ナナコはそれらをたしなめて、先を行く掘削メカを追う。

掘削メカは星の周回軌道から離脱するべく、使い切りの軌道制御スラストで必死に減速しようとしていた。ナナコはメカに速度を合わせる。青い星が大きく迫り、宇宙船が小さくなつていく。ある地点をすぎると、クロークの効果によつて宇宙船の姿は完全に消えた。ナナコはもう一度、課せられた命令を思い返す。敵の主力と接触した場合は、これの撃破を最優先せよ。

勝てないのだろうな、とナナコは思った。キョウコの態度が、そう言っていた。茶番だ。なにもかも。

だがそれはあくまでキョウコの見立てにすぎないのだ、とも言える。やってみなくてはわ

からない、などという積極的な精神はナナコの本分でないにせよ、茶番と知ったからといって舞台を降りることなどできないのだ。段上に上がってしまつてなお台本が気にいらなにごねるよりは、踊らされてやった方がまだましというものだろう——ナナコは無意識にビツトの装甲を撫でる。

掘削メカが大気圏突入用のサーマルシールド（熱防護システム）を展開。

ナナコにとっては別段必要のない装備だが、あれば多少のらくができるのはたしかだった。ああも見せびらかせてくれているのを利用しないのはもったいない、ナナコは掘削メカの後ろに滑り込み、その装甲に腰をおろした。しかし思ったよりも振動が激しく、ひどく心地が悪かった。これはだめだ、とナナコは周囲を囲むビツトのひとつを寝かせて浮かべ、椅子代わりにしてみた。それで少なくとも不快な揺れからは解放される。さらに背もたれも配置。不格好だが誰に見られるというわけでもあるまい、小さく安定の悪い即席椅子の上で、しかしナナコは器用に脚を組む。

星が間近に迫っていた。サーマルシールドを広げた掘削メカが莫大な空気抵抗を受け、急激に速度を落としはじめる。ビツトは掘削メカの挙動を監視しながらその大減速にやすやすと追従し、速度と突入角度を微調整しながらぴたりとついていく。座っているだけのナナコはらくなもの、それでも大気圏突入に伴う熱やプラズマの影響はゼロではない。そこで、横暴な主人に椅子にされていないうちの、ビツト五機中、四機が自機を頂点とする正三角錐を形作る。テトラ・テリトリ、立体障壁が自機と主人を囲い込む。

大きなサーマルシールドの性能に頼ったものか、掘削メカの突入角度は若干深めに設定されているようだった。真っ赤に燃える景色をナナコはぼんやり眺めながら、果たしてこのメカは無事に地上に降りられるものか、とふと思う。

自分は先をゆくメカの後ろを追っているだけだ。着陸までになにか問題が起こつても、それは自分の責任ではない――。

ナナコは掘削メカが減速しきれず大地に激突する様を思い浮かべ、つい、くつく、と笑みをこぼした。それではなんとも情けない。せいぜい踏ん張ってもらいたいものだった。

掘削メカはナナコの無責任な空想をよそに十分な減速を続け、降下予定地点の上空約一〇キロで下面のサーマルシールドを脱ぎ捨てた。いくつものタイル状に分かれて上空に昇っていく耐熱パネルの残骸をナナコは見上げる。

サーマルシールドがこれほどの低高度まで分離されなかったのは、それが熱防護に加えてグライダーのような抗力装置をも兼ねていたからだが、いまそれを放り出した掘削メカの姿は、翼すら持たない、棘の生えた鉄のボールであつた。もちろんこの姿では土中を掘り進むことはできない。掘削メカは自己機能のほとんどを装甲内部に包み込んでいて、平時の外観からはどんな能力を持っているのかいまいち掴みづらいのだ。

それはナナコの目にも例外でなかった。ナナコはだんだん笑っていられなくなった。ここまではいい、ここまでは。しかしここから、こいつはいつたいていどうやってブレーキをかけるのだろう。まだ音速に近い速度が出ている。空気があるから、地表に到達するまでにはもう

少し速度は落ちるはずだが……ようするにそれは墜落ではないか。これほどの速度と質量、どのような手法を用いたところで減速にはそれなりの時間が掛かる。急いでなんらかの機能を發揮する必要があるはずだが……まさか本当に、自分が手を貸してやらねばならないのだろうか？

逡巡^{しゆんしゆん}していると、答えは足元からきた。ばふん、という音とともに突然膨らんだエアバッグのような物体がナナコを下から突き飛ばし、天高く舞い上げたのだ。気球型バラシユートとでもいうべき、そのバリユートという空力制動裝備が大きな抗力をもたらし、掘削メカは一気に速度を落とす。

下は山岳地帯だった。上空へ跳ねられたナナコはすぐにまた落ちはじめ、バリユートに吊られた掘削メカを追い越した。ナナコは上方に遠ざかるメカを呪いの目で睨む。だが墜落の直前には気を取り直して自身を制動、ナナコはゆつくりとつま先から、星の大地に降り立った。いつとき散り散りになったビットも集まってくる。

小高い山の頂上付近だ。地面はナナコが想像していたよりは固い。掘削メカの降下ポイントになっているくらいだから近辺の地は比較的平らであるが、見渡せばあちこちに隆起した岩肌が剥き出しになっていた。岩石群に囲まれた広場、といった感じだ。だが一方で背の低い草花や低木が力強く茂り、ここが決して不毛の地でないことを物語っている。ナナコは上空からの景色を思い返した。すぐふもとは木々並び立つ大森林がどこまでも広がっているし、少し飛ばせば海も見えるはずだ。常温下で液体の水を、恒常的に、かつこれほど大量に湛^{たた}

える星はほかに見たことがない。聞き及んだことも。ほんとうに豊かな星なのだな、ナナコは足元の地面を蹴った。

バリユートも脱ぎ捨てた掘削メカが、今度はそのものずばりのパラシユートを広げて降りてくる。ナナコは先程の無礼な振る舞いに舌打ちしながらそれを見上げる。

ふいに、強い横風が吹いた。ナナコは目を細め、わずかに顔を背けて数秒の間耐える。風が止む。「なによ、もう」と苛立たしげに前髪をかきあげて、もう一度空を見上げたとき、そこに掘削メカの姿はなかった。ナナコは一瞬どきりとしたものの、視界の端に風に流されていくパラシユートを見つける。ナナコはそちらに目をこらす。

まずい状況だった。掘削メカは四本の脚、シリンダー状の降着装置を出していた。それは着陸時の衝撃を緩和するショックアブソーバでもあるのだが、いまは降下速度よりも、風に流される勢いがばかになっていなかった。そしてその進行方向には……。

接地まであと二、三〇メートル。ここで掘削メカはパラシユートを切り離し、四本の降着装置の脇にある、着陸専用補助ブースターによって姿勢制御と最終制動をおこなう、予定だった。だが、突風に流された掘削メカはパラシユートを切り離すと同時、切り立った岩盤に激突した。瓦礫が飛び散る。ナナコは思わず「うわあ」と締まりのない感想を漏らす。

とはいえそれで横方向の移動速度は打ち消されたわけだった。続いて掘削メカは四本の着陸補助ブースターに点火。……三本しか火が出ない。ナナコは頭痛を感じる。

掘削メカは空中戦への対応などきつぱりと捨て去った重量級だ。補助ブースターはパラシ

ユートやシヨックアブソーバと組み合わせて接地衝撃を和らげるためのものであり、掘削メカをホバリングさせるほどの推力は持つてはいない。地面に向けて精一杯に火を噴き出しつつ、それでもゆっくりと落ちてくるのである。すべてが順調であつても、そうなのだ。ナナコはすでにあきらめの境地で思う、いまの状況では満足な姿勢制御どころか、自身の重量バランスを取ることもできない。

ナナコの思つた通りになつた。それまでいちおうは上下正しく降下を続けていた掘削メカは、ブースターのアンバランスな推力ベクトルの影響で、空中でぐるりと回転してしまつた。ぶつかった岩壁を転がるようにして墜落同然に落ちてくる。ずしん、という大きな音。地面が揺れ、激しい砂煙が上がる。メカは落ちた先でも無茶苦茶に炎を吹き上げながらグラグラと揺れている。が、数秒でブースターも燃え尽きて静かになる。

掘削メカは、着陸が完了すれば次にはミツシヨンプログラムを起動、いよいよ装甲を展開して掘削作業に移るはずだった。だがいつまでたつてもそのような動きはない。完全に沈黙。ナナコは掘削メカに歩み寄り、その勇姿を見上げる。外観は球状だがもちろん上下左右の機能区分はあつて、それが見事に横倒し。折れ曲がつた降着装置が憐れだった。

「……どうすんのよ、これ」

途方に暮れてというより、なかばあきれ果てて、ナナコはそうつぶやいた。

シフブランズは自律戦闘メカの整備については詳しくない。そればかりはシフその人の仕事である。キョウコなどはそういったことにも少しは造詣ぞうけいがあるようだったが、少なくとも

ナナコは、そうではない。そもそもシフブランドが戦闘メカといっしょに行動すること自体あまりなかった。能力に差がありすぎて、ともに連携しようとするシフブランド側が大きく力を抑えることになるからだ。どうしてもそれが必要な場合であっても、実戦での運用に於いては、なんせメカたちは自律しているから、簡単な指示を出すのに機械知識は必要なかった。

しかしこの掘削メカは、ミッションの最中に柔軟に受令する能力は持っていないようだった。しっかりとしろ、とはっぱを掛けることすらままならない。頑固者め、ナナコは掘削メカのぶ厚い複合装甲板を蹴飛ばした。

もつとも、掘削メカは完全に壊れてしまったわけではなさそうだった。まだコイツは生きている、ナナコは響く機械の駆動音からそう思う。生きてはいるのに予定の行動を起こさない、その理由については、お手上げだ。だが、多重の並列コンピュータから構成される中枢判断システムは、そのうちの複数台が同時に異常になった場合に、まれにこのように沈黙してしまうことがある。相互監視能力を持つコンピュータたちが、いったい正常なのは誰なのか、と喧嘩してしまうらしい——いつかキョウコに聞いた話だった。

いまコイツはそういう状況にあるのかもしれない。これが戦闘中であれば、即座に、確率的に、「正常者」は決定されるらしいが、現状はそうではない。コンピュータたちはじっくり喧嘩をするだろう。そしてその喧嘩に決着がつくまでは、自分がここのですることはない。そうではなくて、もっと別の、自己修復の機能も及ばないほどの事態が発生しているのだ。

とすれば……そのときはシフが放っておくはずがない。しかしいまのところこのメカがどこかと通信している様子はなくて、だから、そういうことなのだろう。コイツは、頭が冷えてまともになればまた勝手に動き始める。それまで地下土質サンプルの採取はおあずけだ。

どうしようもないから、どうもしない。そもそも自分がどうにかしてやる義理もない。ナナコはそう結論付けた。もう一度メカの外郭を蹴って、それきり厄介なお荷物に背を向ける。

壊れたメカが直るまでのあいだ、そのそばでただ待っているというのは、想像するだに退屈きわまりなかった。さいわいこの星には、宇宙船ではお目にかかれない珍しい動植物の現物が豊富にある。それらにより近づいてみようと、ナナコは山の斜面を下りはじめた。

高い場所では、茶色い岩肌に緑の下草がまばら、開けた地面を少し進むといきなり断崖絶壁が、という案配だったが、降下を続けると徐々に傾斜は緩やかになっていった。ジャンプしなければならぬような、ほとんど垂直の急斜面は早々に見られなくなり、やがて剥き出しの岩肌も、積もり積もった土や枯葉にすっかり覆い隠された。緑の割合も増し、植物の種類が目に見えて豊富になってくる。

ナナコは落ちるのを止めた。背の高い木の頭をうまく避けて、いまはなんとか歩けそうに見える地面に着地する。ずいぶん緩やかになっているとはいえ、まだまだ普通に歩くのはきつい坂だ。足を踏み出すたび、靴の裏にたくさんの石や朽木のデコボコを感じてナナコは眉をひそめる。宇宙船の中にはこんな環境はない。

あたりはもう森といえた。どこか荒涼としていた高所とは違い、むせかえるような土と夏草の匂いが満ちている。未知の空気にナナコは怯む。まあ、少なくとも自分の身体には毒ではなさそうだ。

木々がお互いを押し合うように並んでいる。その木がつける枝葉が重なり合って空が見えないほどだった。葉っぱの屋根だ、上空からの観測には限界があるというのわかる話だ、とナナコは思った。その屋根は光を完全には遮らず、ある程度は透過していたから、周囲は真つ暗にはなっていなかった。だが、薄暗い。その一方、葉と葉のあいだのわずかな隙間から斜めに射し込む光はまったく明るいままで、それはまるでレーザービームかサーチライトのように、無数に地面に突き刺さっていた。

太い木の、幹と幹の間は、枯れて倒れてしまった木やより小さい別の種類の植物が埋めていた。ちようどナナコの背くらいの高さの低木は、踏み越えるわけにも下を潜るわけにもいかず、特にやっかいだった。いつそふたたび飛び上がった空を進めばよかったのだが、本当に嫌になったらいつでも抜け出せる、という認識がかえってナナコを寛大にかんだいしていた。スケジュール通りのミツシオン遂行が不可能になったナナコは、宇宙からの望遠では観察できなかった地域への、ちよつとした好奇心でのみ動いていた。ここはまだキョウコやシフでさえも知らない未知の領域なのだ。明確な目的はあえて設定せず、とにかく進みやすそうな方向に体を向けて歩き続ける。

いつしかナナコは草葉のない地面を踏み締めているのに気がついた。周囲の緑と容易に区

別できる、土の灰茶色をした細い道を辿っているのだ。天然の通路が伸びているようにも見え、その壁にあたる草木は、ところどころ折れたり曲がったりして地面に横たわっていた。この道を進む何者かにぶつけられたのだろう、とナナコはちょうど顔の前にはみ出していた植物の茎を自分でも押し退けながら思う。

道を踏み固めたのはこの星の原住民だろうか。おおつびらに街を破壊するのは駄目だと言われているが、運悪く出くわしてしまった少数を各個撃破するのもまずいのだろうか。

道を踏み固めたのは、もっと凶暴な大型の獣ということもありえた。人型には戦闘能力はないそうだが、こんな葉っぱの屋根の下で探査をかわしている野生動物についてはわからない。口から火を吐くくらいはやるかもしれない。

いずれにせよナナコはそれらと戦うことで得られるメリットというものをなにも思いつかなかった。面倒事はごめんだ、ナナコはパチン、と指を慣らす。すると三機のビットが木々の枝葉の高さまで舞い上がり、それぞれ別々の方向へ散っていった。ナナコの周囲をまわりながら、一定の距離を保ってついでくる。警戒飛行。

たとえば危険が近づいてきても、自分が先に見つけておいたならば、それをあらかじめ回避するのは逃げでも隠れでもない、という理屈だ。とはいえ高分解能のレーザー網を構築しようとする、ここでは情報量が多すぎて、ナナコといえども疲れを感じた。空中機動戦の感覚では通用しないのは明らかだった。ナナコはあくまで光学的な単純視覚の拡張にとどめ、そのため警戒に上がったビットたちが描く円の半径は、せいぜい一キロ程度だ。

残る四機のビットをもてあそびつつナナコは獣道を進む。足を絡めとる下草は踏み固められ、歩を進めること自体に苦勞がなくなつて、肉体的にも精神的にも余裕が大きくなる。真下の地面が固いからか、それとも単に鼻が慣れてしまつたのか、あの、森特有のきつい匂いもそれほど意識しなくなつていた。かわりに警戒中のビットの視点がおもしろいものを伝えてくる。たとえばそれは高い木に張られた鳥類の巣であつたり、最初は緑一色に思えた草葉に混じつた、赤や黄に色づいた花や果実であつたり、またその鮮やかさに誘われる小さな昆虫であつたりした。ナナコはそれらひとつひとつに対して細やかな感動を示すほどではなかつたが、どれも簡単に目にできるものでないことだけはたしかで、あちこち余所見をしながら歩を勧めた。

そんななかで、やがてある特定の地域が、特別にナナコの関心をひいた。立ち止まり、その方向に目を向ける。ふらりと足を向ける。

そこにたどり着くには歩きやすい獣道を外れ、またも草木と格闘せねばならなかつた。が、獣道を外れるほどに高くなる草の背が、すぐにナナコの身長と並んでしまつたので、さすがに地面を歩くことにこだわるのもばかしくなり、ナナコは空中へ飛び上がった。

警戒にあたつていた三機のビットは徐々にその周回半径を狭めていく。ナナコが空中を進むのを止め、草の穂先の上に立つように浮かんで腕を組んだ時、ちょうどビットたちは主人の元へ帰還した。

ナナコは目の前にそびえ立つ岩壁を睨む。一見すると、行き止まり。だがよくよく見れば、

その壁には大穴が穿たれていた。真つ暗な洞窟が口を開けているのだった。入り口は様々な植物によって覆い隠されていて、おそらく上空に飛ばしたビットからの視点がなければ、ナナコも気づかず通りすぎていたことだろう。

周辺を観察する限り、人や獣の出入りはなさそうだった。そろりと近づくとかすかに風の鳴く音がした、ようにナナコには思えた。洞窟の先はどこか別の場所に抜けているのかもしれない。

このような大きな穴はこの星でも稀な地形に違いない、これをくぐって反対側から外に出てみるのもおもしろい、この時ナナコはめずらしくもわずかばかりの冒険心を発揮した。洞窟から流れ出てくるひんやりとした空気にひかれた、というのもあった。この森の気温はナナコにはほんの少し、暖かすぎた。

痕跡を残さぬよう慎重に草をのけ、ナナコは洞窟に踏み込んだ。

外の光は及ばず、根を張るための土もない。硬く冷たい岩肌が剥き出しの、ここはすでに植物たちの生息圏ではないようだった。すぐ背後ではあれほど盛んに生い茂っているというのに。

目の前に黒いカーテンのような闇が降りている。もう数歩も進めば肉眼ではなにも見えなくなるだろう。

ナナコは再びビットを先行させる。入り口から数メートル進入したビット三機は、最初に洞窟内の移動目標を走査。目立った脅威がないことを確認するや、さらに奥地へ進み入る。

複数の対地レーダーモードを適時切り替えながら、真つ暗な洞窟内の詳細な三次元マッピングを実行。

ナナコはテンタクル・システム配下のビットが備える各種センサへのあらゆる入力をおぼろげにはあるものの、まるで自身の五感でとらえたもののように感ずることができた。ビットによる洞窟の三次元マッピングは、この闇の世界でのナナコの空間認識に大きく寄与する。だが、それでもそこは、やはり人間の頭である。センサが拾う有用不要ごちゃ混ぜの、膨大な生データを読み、解釈し続けるのはそれなりの負担になる。然るべきフィルタを通し、人間用に加工したデータの方が、より理性的に取り込めるというものだ。

とはいっても空間に立体映像を投影するというような機能はビットにはない。TCDビットはあくまでもビームポッドであって、その装備は直接戦闘を見越したものにたよっている。たとえば、電子光学センサを使った暗視はできても、闇を照らすサーチライトは装備しない、といった具合に。

そこでナナコは、身に付けているワンピースコートのポケットに手をつっ込んで小型の情報端末を取り出した。それはナナコの能力とはなんの関係もない、ほんとうにただの、一個の、多機能表示装置だ。テンタクル・システムはその支配下に入る側の機器にも専用のサブシステムと大変な情報処理能力を要求するから、はじめからテンタクル・システムの下で運用されるよう作られた装置でなければ組み込めない。

自分の手が塞がる、という点でナナコはこの情報端末をあまり好んでいない。そんなごく

ごく普通の端末でも、データリンクを用いてビットから加工済みの情報を受け取る、くらいの機能は持っていた。ナナコは端末に、ビットからのマッピングデータを二次元画像の地図として表示させる。

まだ洞窟に踏み込んで間もないものの、ナナコの目はすでに暗闇になじみはじめていた。ナナコは端末のディスプレイを眩しく感じ、少し輝度を落とす。ついでに細かいスイッチ類に爪を引っかけてやると、カード型の端末の、薄い上辺が面発光して洞窟を照らした。ディスプレイよりも眩しかった。しかもこれではとうぜん足元は照らせない。

なんだこれは、設計ミスではないのかとナナコは一瞬いぶかったが、たとえどの面が発光したとしても、じっくり地図を眺めながらでは足元が見えないのは同じことだと思い直す。地図は分かれ道の前で読めばいい、情報端末はひとまず照明がわりと割り切ることにして、ナナコはゆっくり歩き出す。

眩しい眩しいとはいっても、深い洞窟の完全な闇の前には情報端末が装備するライトなどまるで光量不足で、ナナコはビットからの機械的感覚とうまく付き合いながら進むことにした。敵性の移動体が存在しないことはわかっていいるのだから、歩を進めることに集中できた。足元の赤外線画像程度なら、ナナコはほとんど自分の視覚同等に扱える。地面の突起につまづいて転倒するような無様をさらす心配は無用だ。

それでもいささか慎重になりすぎて、はじめのうちはテンタクル・システムの負荷を軽い頭痛のように感じていたナナコだったが、目を向けるべき情報の選択に慣れてくると、次第

に情報の洪水に煩わされることもなくなっていた。ナナコ自身の目も、周囲の闇と、手にした端末が発する光の双方に順応してくる。すると、足元以外にも注意を向ける余裕が生まれる。

ナナコはときおり立ち止まって、ビットのマルチモードレーダーで空間認識を確かにした。端末の地図にとらめっこし、壁や天井にライトを向けてしげしげと眺める、ということもやった。それにしてもとんでもなく広い空間だった。奥地は入り口部分よりもずっと広がっている。縦の空間も、外の木々たちが作る葉っぱの天井より高いくらいだ。どこの星でも、まったくの偶然で、このような地形が生まれるのだろうか？

洞窟の天井からは岩でできたつららが多数ぶら下がっていた。真下を通りかかったときに突然折れて振つてはこないか、ナナコは用心して進む。いまのところそういう気配はない。そのかわりに、いくつかのつららの先端には水滴が滲み出していた。落ちてくるとすればつららそのものではなく、この水滴だろう。辛抱強く見つめっていると、やがてそれはつららから離れて真つ逆さまに地を目指した。落ちる水滴をライトで追う。ぴちゅん、と跳ねた真下の地面には、そこにも、天井に向かって逆さまに生えるつらら。

雨水は地形を削るものとばかり聞いていたが、ここでのこれは、沈積しているのだ。途方もない年月をかけて。

頻度は低いものの、冷たい水音は洞窟のあちこちから反響して響いてくる。まだ先は長そうだった。

洞窟内は凹凸が激しく歩みにくい。泳げるくらいの広さ深さの水溜りなどもあった。高い高いと思っていた天井も、場所によっては圧迫感を感じる程度に低くなっている。地面にも同じことがいえた。ときには崖のような高低差を乗り越えて進まねばならなかった。

まるで険しい障害物コースの様相だが、ナナコは探検そのものを楽しみに来たわけではない。この洞窟がどこへ抜けているのかが、はやく知りたかった。抜け出た先で興味を惹くものがなければ、そこでまた別の時間の潰し方を考えねばならない。それどころか、もし奥地で行き止まりになっていたら後戻りである。

先のことを考えると気分が沈んだ。身勝手な、気分屋で、無責任で、放任主義のあの支配者から、現状に即した作戦のアップデートが伝えられて、時間潰しなど考える必要がなくなれば一番いいのだが。しかしそのとき、たとえばこの天井が空中波を遮断なり減衰なりするとしたら、そのために命令を聞き取れなかったりしたら、それは都合が悪かった。あとでなにを言われるものかわかったものではない。

どれくらい歩き、崖を飛び降り、飛び越えただろう。先行するビットのビームエコーに大きな変化があつて、ナナコは思考を中断した。来た道に戻る心配は不要になった。レーダー波の一部が閉鎖空間の外へ飛び出していく感覚。それで、ナナコは洞窟の終わりが近いことを知った。マッピングの更新や詳細化はこれ以上必要ない、ナナコは先立ってビットを脱出させ、出口の周辺を広範に索敵させる。ナナコ自身も歩みを早める。

風が、低く鳴きはじめた。入って来たときと同様だ。天井から細い光が差しているのが見

える。出口は、上か、ナナコはそこまで歩み寄り、額に手をかざして見あげる。壁に手足をかけてよじ登れる気は、まったくしない。上昇する。

深い縦穴を昇っていくようなものだ。しかしそのまま真上に飛び出すことはかなわなかった。出口は高い場所にあったが、それはやはり横穴だ。自分にとっては出口だが、こちらから進入したらいきなり真つ逆さまだな、などと思う。

ナナコは開口部まで辿り着くと、その狭い出口に両手をかけて、まず半身だけ外に這い出した。洞窟内とのあまりの明暗差に思わず目を閉じる。それでも肌を通して伝わってくる陽の温もり。忘れていた土と草の匂いが鼻をつく。心地よいそよ風に木々の葉が揺れる音。まぶたの上からでもはつきりとわかる光の翳り。砂利を踏む足音。こちらに意識を向ける、気配。

心臓が跳ねる。ナナコは飛びあがるように上半身を起こした。

一人分の人影が、本当に目の前に立っていて、背を曲げてナナコを見おろしていた。が、ナナコの勢いにその人物も身を仰け反らせる。互いに一時の沈黙。

見知った相手だった。

ナナコは緊張から一転、空気が抜けた風船のように、脱力した。ぐたり、と自分の腕を枕に額を預け、絞り出すような声で、「驚かせるんじゃないわよ」と吐き出した。「なにを、こんなところで……アンタ、いままでなにやってたのよ」

「なにを、って……。うーん、そうだね……」

ナナコの問いにしばし逡巡した後、

「海水浴、とか」

誤魔化すように笑って、イルは言った。

洞窟を出たその場所の景色は、洞窟に入る前のものとそう変わらなかったが、草木の茂りようは幾分か大人しい。少なくとも、背丈ほどある草が一面を鬱蒼と覆い尽くしている、といったことはない。場は比較的開けている。光量も多く、明るい。それと直接関連しているかはわからないが、近くに溪流があるのだとイルが説明した。

敵との戦いに敗れ、シフに見放されたこともイルは話した。海に墜ちて、目が覚めたら砂浜に倒れていて、はるばる川沿いをさかのぼって歩いて来たらしい。

「じゃあ、アンタ、なに、」ナナコは服のよごれを払いながら言う。「たった一人を相手にまんまと返り討ちにあつて、戦力外通告ってわけ」

「傷つく」

「そのうえ情けまでかけられて？ よく、のこのこと顔が出せたわね」

「のこのこ出てきたのはナナじゅんか」

「……うっさいわね」

「それにしても、けっこうな偶然だよな」ぷっくりと頬を膨らませていたイルが、ふと嬉しそうに笑った。「ちようどそばまでは来てたんだけど。でもこんな隙間、普通にしてたら目

に入つたつて気づかないよ」

「そう言うわりには、すつごい見てたじゃない」

「そりやあ普通じやなかったもの。ビットに着いていったんだよ、そうしたら、ちょうど地面から頭が生えてきたから」

ナナコは心でちつ、と舌打ちした。ビットたちがたじろぐようにナナコから離れる。

形成不利だ、これは。自分の方が格好が悪いではないか。

「ところで、」とナナコは話の矛先をかえる。「さつきアンタ、川を辿つてきたつて言つてたけど」

イルはうなずいた。

「見に行こうか。私はあてがあつたわけじゃないから戻つてもいいよ。あ、でも」イルはナナコの表情をうかがうように尋ねた。「そういえば、いま、ナナの仕事はいいの」

戦うために降りて来たと思つてゐるのだな、そう察するのは容易だった。実際のところ、たぶん、ほとんどその通りなのだが。

「さあねえ」ナナコはイルの後ろにまわると、いいから案内しろ、という意味合いをこめてその背を押す。「ま、しばらくは暇なんじゃないかしら」

「なにそれ」

「いっしょに降りた機械が壊れちゃつたのよ。着地に失敗して」

イルは前を歩きながら「うわあ」と渋い表情でナナコを振り返つた。「なんかかつこ悪い

ね」

「私の顔見て言うんじゃないわよ……」

「それってさ、時間が経てば直るのかな」

「でなきゃ、なにか言ってくるはずでしょ」

「音沙汰なし、か」苦笑する気配。「でもそれならそれで、離れちゃって大丈夫なの。もし直っても、そのことわざわざ伝えてくれないかもしれないよ」

「んー……そーねー」

やけに質問が多いとナナコはうんざりしかかったが、しかし、付き合うことにした。いまのイルは、たしかに戦術データリンクの外にいた。敵味方識別の定期更新にすら対応できていない。システムの観点からいえば、イルはもう友軍には数えられていないのだ。

シフブランド同士であれば、あるいはTCDビットくらい高性能であれば、顔を見れば誰だかわかるし、データに頼らずともそれ以上の判断が自分の頭で下せる。どういうことかといえど、たとえばナナコがいま考えているように——イルは決つて敵になったわけではない。たしかに彼女はもはや味方の戦力ではない。しかしいちおう、その、仲間だ。共に過ごした友人——といった具合に。

だからその識別機能というのはシフブランド自身のものでなく、先ほどナナコが照明がわりに使っていたようなちっぽけな情報端末が、ついでも担っているにすぎない。彼女ら同士にとってはあまり重要でない情報。しかし自律回路内でそこまでの高度な判断が行

えない戦闘メカなどは、たとえ相手がシフブランドであっても、その識別情報をもとに敵・味方のカテゴライズをする他なかった。従っていまのイルが宇宙船に近づけば、それらからの攻撃を受けることになる。もともと、航法支援なしではクロークで隠れている船の居場所がそもそもわからなかった。近づく以前の問題だ。

イルは宇宙船と完全に切り離されてしまったわけだ、ナナコは思う。シフに見放されるとは、支配者からの支援を受けられなくなるといえるのは、そういうことなのだ。それでも……いや、だからこそというべきか、自分と出会ったこの機会に、こちらの様子を知っておきたいというのは無理なからぬことだ。

「まあ、たぶん平気なんじゃない」と、ナナコはいつもの調子で返す。「あの機械、なんせ派手な仕事っぷりらしいもの。動きはじめたらこのあたりからでも見えるかもね」

そうでなければ敵をおびき出すことができない。

イルは、取り留めのない質問を繰り返しては、へえ、だの、ふうん、だのと、わざわざこたえてやった話が頭に入っているのか疑問になるような声を出している。ナナコは前に行くイルが踏み締めた下草の跡をたどる。後頭部で手を組んで能天気さらす彼女の背中を見ながら歩く。

コイツはこれからどうなるのだろう。シフは、一度見切りをつけた手駒にもう一度チャンスをと、というようなことは、たぶんしない。イルに対しては徹底して不干渉を貫くだろう。目下の目標に敗北した彼女に対してまったく関心を失っている、というのがより正しそうだ。

つまりシフにとつても、イルは敵になつたわけではないのだ。わずらわしいからと遠くに追いやつただけなのだ。言い換えれば、イルは、シフの機嫌を損ねない限りはなんだつて好きにできるということでもある。その想像が正しいかどうかは作戦システムに問い合わせればわかる。……やはり、そうだ。イルは味方ではないが、敵でもない。

味方でも敵でもない。つまり、自律戦闘メカなどはイルのことを敵味方不明として、この星の原住民と同様に積極攻撃の対象外としているのだ。もつとも、それがわかつたからといって宇宙船への帰還がかなうわけではない。宇宙船本体の、拠点防衛システムは、末端の戦闘メカたちよりも遥かにシビアだった。敵ではないから見逃してやる、などという考えは彼らは持つていなかった。正体不明の相手を船に近づけるわけにはいかないからだ。防衛システムにとつては味方以外はすべて例外なく敵であり、それに対抗するのは、当然、宇宙船そのものに対する直接的な破壊行為となる。

もしそうなったとき、とナナコは想像する。シフは、そのように暴れるくらいならいつそ戻つてこい、と、新しい命令をイルに与えるだろうか。ありえない。それどころか、彼の中でイルは完全に敵になる。そして、シフは戦闘メカの手には負えないイルに、同じように力を与えた自分たちをぶつけるということも平気でやるだろう。いや、その必要はないのか、だつて彼はイルに命令できるのだから……。まったく、考えるのではなかった。ま、それくらいのこととは本人が一番わかつているだろう。とにかくシフを怒らせるべきではないが、幸いたいていのことであの男は怒らない。なにせ、たいていのことに関心がないから。

……だが、いつたいなにができるというのだ、こんな未知の星で、一人で。船から離れて、どうやって生きていけるといえるのだろうか。

イルが突然立ち止まった。

いつの間にかうつむき気味に、無意識的にイルの足運びを目で追っていたナナコは危うくその背中にぶつかりそうになる。慌てて居直り、抗議のために顔を上げて、そこで、水の流れる音に気づいた。

イルは半身ずらしてナナコの視線を開け、振り返って、にっ、と笑った。

「ほら川ー」

「見りやわかるわ。なんでアンタが嬉しそうなよ」

一段低くなった地面。大小の石や砂利の上を、透明な水がしぶきを立てて流れている。澄んだ沢だった。流れる水のただ中に根を張ろうという木々はないようで、周囲は陽が差しとても明るい。

「あはは、いちおう案内した身だからね」

イルは沢の縁まで進み出て清流に手を触れた。

「ナナもおいでよ。冷たくって気持ちいいよ」両手で作った器を持ちあげ、ナナコに振り返る。手のひらの上で水がきらめく。

「それこつちに撥ねたらぶっ飛ばすから」

「ナナの冷たさは気持ちよくない」不満そうにそう言うイルだったが、いきなり真顔になっ

て、「あ、そこ、滑る」

「は？　っ、と」

滑った。危うく踏み止まる。足元にあるのは苔生した大きな岩だった。

やたらと表面が滑らかだったり、水をかぶって濡れていたり、見るからに滑りやすそうな足場は他にも多くあった。ナナコは意識してそれらを避け、小石や砂利の上を選んで歩く。それらにしても、体重を乗せるとギヤリ、と崩れて安定しない。進もうと地を蹴る力の一部が転がる石ころに持っていられる。

眺めるかぎりは清涼な景観だが、実際に歩こうとすると険しい地形だった。どうにも余計な力を使ってしまうのだ。

「アンタ、元気ね。こつぴどくやられたあとに、こんなところ歩いてきたつての」

「へんに疲れるよね」とイルは笑った。「さすがにずっと歩いてたわけじゃないよ。飛んじやった方が楽。水がかかっちゃうぎりぎりの高さをさ、こう、すいーってね。……言っておくけど、たぶん、まだナナを手伝えるほどじゃないから」

「そんな意味で言っただんじやないわよ」

「ごめんごめん」

ナナコは、これからどうするのか、とは尋ねなかった。イルも、助言を求めることはなかった。二人は木漏れ日の下に並んで、しばらくのあいだ、そよぐ風としぶく水音に耳をすませた。

「つたく、のんきなもんねえ」

「たまにはいいんじゃないかなー、こういうのも」

たまには、ね。ナナコは木々の切れ間から青空を見あげる。果たしてこんな機会が二度とあるだろうか。

*

給湯室でやかんが鳴く。

ヒルデはシンクを離れ、部屋の中央にある休憩用の小さなダイニングセットまでワゴンを押していく。ワゴンの天板とテーブルは同じ高さになっているから、ちよつとした食器の移動がやりやすい。ワゴンには小さなトレーと、白い湯気を立てるティーカップが乗っていた。ヒルデはトレーとカップをテーブルに移し、椅子に腰掛ける。立ち上る湯気をぼう、と眺める。背を丸めて頬杖をつく、首から下げた飾りがカチリと鳴った。

ごく自然に手が伸びて装飾ケースの蓋を開く。小さく切り取られた二人の男女がうつる写真、ヒルデの両親が、そこにいた。そこにしかいなかった。彼らの姿は写真のなかにしかない。もちろん昔は、今年で十九歳になるヒルデがまだ九つの頃は、そうではなかった。流行病が家族を奪った。

もう十年か。

両親が世を去って、十年。その当時同じ病で大勢がやられた。ヒルデ自身も危なかった。ただ、彼女は運がよかった。シエルターで新しく作られた薬がなんとか間に合って、それが幼い身体によく効いた。

いまでこそ管理セクターなどに身を寄せているが、ヒルデは日の当たる地上世界で生まれた。天涯孤独となったヒルデは最初はシエルター居住区の施設に迎えられ、彼女はその時はじめてシエルターに足を踏み入れたのだ。

誰もが憧れる地上世界で過ごし、しかしその世界の病に罹^かったヒルデに向けられる感情は実に複雑だった。悪意や蔑^{さげす}みがあつたわけではなく、幼いヒルデにみな本当に優しく接したが、そこでのヒルデは単なる薄幸の少女ではなかった。地上に無垢な憧れを抱く人々にとつて、ヒルデの境遇は夢の世界からの人間拒絶を伝えるメッセージのように感じられたのだ。口を閉ざし、部屋の隅でじっとして動かないでいるにも関わらず、その存在は地上で生きるのは実は大変なことなのだという現実を否応なく周囲に撒き散らしてしまう。多感な少女がそれに気づかないはずがなかった。この身は呪われているのだ。

二年ほど経ったある時、当時慌てて用意された薬の経過観察のためヒルデは管理区に降りることになった。精密検査でちよつとした問題が見つかった。ヒルデは人よりもほんの少し病気への抵抗力が弱かった。もつともそれはあのかの病のせいでも、まして薬のせいでもなく、生まれつきの体質らしかったのだが、それを聞かされたヒルデはこれ幸いと、なんのかんのと理由をつけてそのままそこに居座ろうと駄々をこねた。難しい仕事ができるはずも

ない、自分はここでも邪魔者でしかない。とヒルデは思ったが、それでも地上世界と直接にやりとりをしているセクターの局員たちは、そこが決して夢だけの世界でないことに気づいていて、それがヒルデをたいへんに安堵させた。ここがいい、とヒルデは願った。わがままは通った。

カツプの紅茶をひとくちやる。我ながら、うまい、とヒルデは満足そうにうなづく。

薬で病はなんとかなくても、すでにこつそり減ってしまった人口では街は維持できなくなった。助かった人は別の街に移り住んだり、あるいはヒルデのようにシエルターに入ったり。いまやここでの生活は地上で過ごした年月を超えているのだと気づき、ヒルデは驚く。

こんな風に過去を思い返すのも久しぶりだった。すっかりセクターの雑用係が板についてしまっている。技術者としての適性はやはりなさそうだなと、ヒルデは一人笑った。いまだはその不出来な雑用係を、誰もが無遠慮にこき使ってくれるのだから、そう悲観したものでもない。

今日の紅茶は普段の合成粉末ではなく、いつだったか地上の街が送ってくれた本物の葉を使っていた。地上ではどうしてももつと実になる作物を優先するから、この手の嗜好品はまだ貴重だ。

柔らかい土に根を張って、陽の光をいっぱいに浴びて育った葉。誰が点^たてても素晴らしいものになったに決まっているが、だからといってこの味をさも自分の手柄のように誇ることは罪というわけではあるまい。ヒルデの脳裏に輝かしいビジョンがうつる。日々の仕事に疲

れ果てた技術者たちよ、この恵みの茶の味わいで心身ともにリフレッシュ！ したらば、給湯室の女神を存分に称えるのですよ!!

にやりと不気味に笑つてもうひとくち。スツキリとした渋みのあとにほのかな甘さが残る。芳醇な香りが鼻腔に広がる。ヒルデは目を閉じてその余韻までもを堪能し、上品なしぐさでゆつくりとカップを下ろすと、木目も美しいティーブルにいきなり額を打ち付けた。

「……どうしてお出しするお茶飲んでるのわたし……」

ヒルデは鈍くさかった。

「あら美味しい。外の葉っぱね」

無邪気に微笑みかけるオリンに、かたわらに控えたヒルデは肩すかしを食らった気持ちになる。「……お察しの通りで」

「なにを拗ねてるのよ」

「なんでもありませんとも」

セントラル・ルームを行き来する局員の数はいつもより少なかった。分量を見誤ったか、ワゴンの保温ポットにはまだ茶が余っている。それもしばらくすればおかわりで無くなるだろうし、それはそれで構わないが、どうせなら、たとえ一杯ずつでも多くの人に味わってもらいたいものだった。せつかくの葉から出した茶を口にできない人がいるというのは、それを用意した身としても少々残念だ。

「……スグリさまは、紅茶は好きでないのでしょいか」

ヒルデがふとそう尋ねると、オリンは横顔のままでクスクスと笑った。「雅^{みやび}やかにティータイムを満喫する子ではなさそうねえ」

「わあ、ひどい、子供扱い」

「子供じゃないの。少しませてるけど」

「でも、実際お年を召してらっしゃるんでしょ」

オリンは紅茶を嘔き出した。

「うひゃあもったいない！」ヒルデは慌ててワゴンからタオルを引き出し、デスクを拭く。

「もう、なにが可笑しいんですか」

「あなたの、その、なに、表現が」掃除をヒルデにまかせたオリンは、椅子ごと体をひいて息を整えた。「今度会ったら尋ねてみなさいな。随分お年を召してらっしゃるようですがおいくつですか、って。あの子口開けて固まるわよ、ぜったい」

「いやですよ失礼すぎますよ……はあ」デスクから退き、汚れたタオルをワゴンに戻す。

「でも、そういうえばオリンはスグリさまと親しいですよ」

「そう見える？ スグリは誰にでもあんな感じでしょう。ここに来る時は、立場上、私とのおはなしが多いだけで」

「なんだ、それじゃあ、スグリさまについて特別詳しいわけではないんですか」

「接した時間の分、人柄は知ってるつもりだけれど……そっか、あなたは、この前はじめて

顔を見たのよねえ」

特別な力を持ったひとが、その力で長い間この星の傷を癒し続けている。ヒルデも子供の頃から話には聞いていた。セクターに来てからは局員の口からもよくその名が出たものだ。

しかしスグリはセクターで生活しているというわけではなかった。理由があつてセクターを訪れても、またすぐに地上へ舞い戻っていくことがほとんどだった。用意された個室を使う機会は滅多にないのだ。雑用係たるヒルデと顔を合わせる機会は、つい先日まで訪れなかった。

ちよつと緊張したな、とヒルデはその時の心境を思い返す。それからその幼い姿に、あんな子供が、と驚いたものだが、よくよく考えてみればスグリという少女はヒルデが赤ん坊のころ、それよりもつと以前から地上を、空を、飛び回っていたことになる。

いったいどんな力を持っているのだろう。星の傷を塞ぎ、毒を吸い出す。壮大過ぎて想像がつかない。

それに、星を治す力を持っているとはいっても、あの少女自身はどうなのだ。そんなに長い間、ずっと外にいても平気なのだろうか。風邪をひいたりしないのだろうか。

「スグリさまは、人の病氣は治せないのでしょうか」

あとになって、しまった、と思つた。

オリンはこの自分の境遇を知っている。この口からこぼすべき言葉ではなかった。ひとりでに唇が動いて、気づいたときにはそう口走っていたのだ。なんということだ、さつき、へ

んに昔のことを思い出したりしたからだ。

しかしオリンは、「なによう、今日はメランコリー（感傷的）な気分なの？」と、いつもののんきでカップを差し出してきたので、ヒルデはしどろもどろな心を少しは落ち着けることができた。そのカップに茶を足しながら弁明する。

「本当、なに言ってるんでしょう、わたし。それじゃあスグリさま、お医者さんみたいになつちやいますよね。いえ、ちゃんとわかつてますとも、スグリさまはこの星を診てらっしゃるんですから」

オリンは保温ボットから注がれたばかりの熱い茶をありがとう、と受け取った。そして手元に引き寄せたそのカップにしばし目を落とし、スグリは、とつぶやくように言った。

「スグリは、人よりも星のことを目に掛ける」

「そうです、そう」とヒルデ。「それがスグリさまのお仕事なんですよね」

「……私もあの子はそうあるべきだと思っていたけど」オリンはまだ熱い茶を少し味わい、ちらとヒルデの顔を見て、ふっと笑った。「スグリのことが知りたいのなら、普通にお話するのが一番ね」

ヒルデはきょとんとして聞き返す。「お話、ですか」

「そう、お話」とオリン。「見えない力をたくさん持つてはいるけれど、でも見たままの女の子よ、あれは。スグリを知るのに、その不思議な力の理解からはじめようとするのは間違つてゐる。いまはこんな状況だけど、もう少し落ち着いたら……紅茶でもなんでも持つていつ

て、たくさん話をしてみなさいな。お友達になるといい」

「そ、それは恐れ多いですね！」

「ぜんぜん、そんなことないわよ。そういうこと言ってるのかえってあの子、寂しがるわよ」
「なるほど、そういうものですか……」

ヒルデはうむう、と腕を組み、しばし考えにふける。スグリと自分が友達に、というのは、いまいっ想像がつかない。

ヒルデにとってスグリは外見こそ幼かったが、やはりどこか大人びていたのだ。街の様子を嬉しそうに話したり、突然からかわれて慌てたり、いじらしくはにかんで見せたり、姿見そのままの子供のような仕草を振りまく少女の顔に、ふと、いまにも消え入りそうな儚い微笑が浮かぶことをヒルデは知っていた。果たしてどちらの顔が本当のスグリか、どちらもだろう、きっと。しかし、見ているこちらまでもがわけもわからず切なくなってしまうような、おそらくは決して触れてはならないその微笑みが、ヒルデの目にはどうしようもなく印象的にうつるのだった。

それに、とヒルデはまた過去を振り返る。

こちらはずっと昔から、まわりの大人たちが揃ってスグリを持ち上げて話す様子を見てきているのだ。なんだかわからないがとにかくすごい人、という印象が強すぎて、どうも気軽に話しかけられる気がしない。とはいえ当のスグリの方ではそういう反応を寂しく感じるだろう、というのもよくわかる話で……いや、しかし、いきなり友達というのはいくらなんで

も……。

やがてヒルデは思い詰めた表情で、真つ正面を見つめたままつぶやいた。

「さいしよは、わたしのお医者さんになってください、つてところからでしょうか」

「あなた、たぶん嫌われるわ」

オリンは紅茶を飲み干してそれだけ言うと、黙々とコンソールに向かう。

*

ナナコとイルは森の中のある一点を見つめて動きを止めた。イルの「おながが減った」の一声で、食べられそうな果実を集めている最中だった。

視線の先には一頭の、この星の、現住動物がいた。人型ではない。発達した四つ脚。二メートルはあろうかという巨軀。艶のある褐色の体毛は短かく、その筋肉質が見てとれる。太い血管が首を走る。頭には雄々しい二本の角。それは左右、やや前方に向かって、複雑に枝分かれしながら伸びていた。

そういう動物が、神経質そうに辺りを見渡し、外耳をびくびくと回しながら草を食^はんでいる。食事風景が肉眼で見てとれる距離で、だ。

イルと並んで近くの巨木に身を隠し、ナナコは己の油断を悔いていた。その存在を最初に認識したのはTCDビットだったのだが、それはナナコが、あの洞窟に入る前と同じような

警戒飛行をビツトたちに命じようとした矢先のことだった。その時すでに回避する機会は失われていた。

あの動物がこちらに気づくのは時間の問題だろうとナナコは思う。あるいはとづくに気づいてはいるが、よほど肝が据わっているのか。だとすれば、下手に刺激しなければなにも問題ないような気がする、このようにじつと息を潜めずともだ。こちらだけが相手の様子をうかがわねばならないのは不公平ではないか。なぜこの自分が隠れなくてはならないのだ。そもそも、なぜ隠れているのだ。

徐々に苛立ちを覚え始めるナナコのそばに、イルがそろと忍び寄って耳打ちした。その言葉に、ナナコは耳を疑った。

あれ、おいしいらしいよ。

なぜか楽しげなイルの顔を、ナナコは素頓狂な表情で見上げる。

「あ、頭おかしいんじゃないの。お肉になるのって、牛とか、豚とか、そういうのでしょ」

「鶏とか、ね。でも本当だって。ここの人たちが、あれ、追いまわしてるの見たもの」

「はあ？ 見たってなによ」

「狩り、ってやつでしょ。この近くにもいくつか街があるじゃない。そこから大勢がそろそろーってき。ちよつと興味あったから、こっそり着いていったんだよね。そうしたら」

「……アンタ、なんか、凄いわね」

のんきと怠惰は違うものだ。こいつの、この行動力はいったいどこから来るのだと、ナナ

コは目頭を押さえる。

「じゃあそーいうことで、ナナ。お願いするよ」

なにがそういうこと、なのか。口を開きかけたところで、ナナコは件の現住動物が、自分たちが姿を隠している木に突進してくるのを認識する。半眼でイルを睨むが、彼女はどこ吹く風といった表情だ。

ナナコは腕組みして巨木にもたれかかっていたから、すぐに鈍い衝撃を背中に感じることでできた。太い幹を、あの大きな角が深く抉る音も聞こえた。体軀から想像できる通りの威力だ。

「この星の牛は、みんなこんなに好戦的なわけ」

「どうだろうね」イルはふわりと空に上がり、頭の後ろで手を組んだ。「私が見たときは、どっちかというと、人から逃げまわってただけ」

現住動物が木に喰い込んだ角を引き抜く。ナナコの横手に鼻息荒く回り込む。二度目の体当たり。それはしかし、ビット三機が作る面障壁に弾き飛ばされる。

「まあ、どうでもいいけどね」ナナコは薄紫色の障壁にぐいぐいと角を押しつける現住動物を横目に、イルに言う。「なんにしたって私は、牛を掴まえるだなんて言われてないの。アスタがやんなさいよ、追いかけてこはお得意でしょ」

「素手でやるのはさすがに」イルは困った表情でそうこたえ、それからさ、と言ひ難そうに付け足した。「牛は牛で別にいるんじゃない」

「なら、こいつはなんだつてのよ」

「えー……鹿、とか」

「鹿、鹿ですって」ナナコは責めるようにイルを見上げて唇を尖らせ、やれやれと力を抜いて、大げさに呆れて見せた。「もうちよつと大人しい感じのやつでしょ、それ」

「でも角とか、それっぽくない」イルは誤魔化し笑いを浮かべて言う。

角、ねえ。

と、その角に突如現われた、ある変化に二人は気づく。変化は些細で、しかし実に意外な、まるで予想だにしないものだつた。驚愕の中にあつてナナコはすぐに確信する。出力は低い、間違いない、放電している。

ナナコの動揺はビットにも伝わった。もともといい加減に形成していた障壁が、維持できる最低の出力を下回って消失する。すると、そこに全身全霊で角を突き立てていた現住動物が勢いのままに、ナナコに向かって突っ込んでいく。

激突。土埃が舞う。前方に跳んで危うく難を逃れたナナコの足元にまで木屑が飛散する。

あーら、と他人事のようなイル。

現住動物は前肢を開いて首を低く、激しい呼吸を撒き散らしながら逃した獲物に向き直る。二本の角の間でパチパチと火花が爆ぜる。

ナナコは自分が腕を解いていることに気づく。

「……獣が」

不敵に笑い、眼前の敵を睨み返す。

巨木の支えを失い佇むナナコに、現住動物が何度目かの突進を繰り出した。猛然と駆けながら頭を一段と低く構える。振り上げる角がナナコの身体を撥ね飛ばす、その直前、一瞬で時速一二〇キロ程度に加速したビットが現住動物の左側方から突っ込んだ。ドン、という衝撃音が響く。

分厚い皮膚と脂肪の防御も、己の巨躯が一瞬浮き上がるほどの衝突に耐えることは適わなかった。現住動物は突進のコースを逸らされてナナコの脇を抜け、盛大にその後方へ倒れ込む。すれ違う瞬間幅のある角がナナコの身に触れそうになるが、ナナコは半身傾けてこれを避け、倒れる動物を目で追いながらくると左半回転、体ごと背後を振り返って「ふんつ」と得意気に腕を組み直した。その視線の先に横たわる現住動物。ぴくりとも動かない。

「なにかしたの」

木の枝に腰掛けたイルがナナコの頭上から尋ねた。

「こつちも電気ショックよ」と澄まし顔でナナコ。

「とてもそうは見えなかったけど……」

少々強くぶつけすぎなのではないか、と疑われているのがわかったが、ナナコは取り合わない。首を傾けて森の奥に視線を送る。イルもつられるようにそちらに顔を向ける。

たったいま目の前に倒れたものと同じ動物が、二人の視線の先に群れを為していた。

「なんか、集まってきたわ」

「はあ、さすがナナ。あんな遠いのによく気がついたね」

「アンタとは目の数が違うのよ」

なるほどね、とイルはナナコに笑いかけ、もう一度群れを見据えて、言った。

「向こうはまだ私たちに気づいてるわけじゃなさそうだよ」

「そう？ でも、近づいてきてるでしょ」

「……みたいだね。なんだろう、このあたりが餌場なのかな」

イルは木から飛び降りた。

「じゃあ、ちよつと移動しようか、あんまり収穫なかったけど。あっちの方に休むのによさそうな場所があったから、そこ行こう」

「休める場所ですって」ナナコは怪訝な顔付きでイルを見る。「アンタ出ていったの昨日か一昨日でしょ。ずいぶんいろんなところ、うろついてんのねえ」

「川沿いを、ほんの寄り道程度だよ。やつぱり水が近いと便利なんだろうね」

「……？ まあ、とりあえずそこでいいわ。先行きなさいよ」

「りよーかい」

イルは先導を承諾してナナコの前に立ち、その場で一度、ちらりと倒れた現住動物に目をやった。

「ちよつと残念だね。せつかくやつつけたのに」

「かついでいくつて言うなら止めないけど」とナナコは悪戯な笑みを浮かべる。「途中で起

きて暴れ出したら、今度こそアンタがなんとかしなさいよ」

「ありや、起きるの、この子」

「さあ、知ったことじゃないわ。けど別に本気でぶつ飛ばしたわけじゃあないし、運がよければそのうち起きるでしょ……人をまるで加減のできないばかりに言わないでもらいたいわね、さつきから」

「あ、あはは。まあ、それならいつか」

ナナコはイルに進むようにうながし、その背に続いて歩く。

どこもかしこも見たことのない景色。経験したことのない空気の匂い。それは言い換えれば森ばかり、ということでもあった。ナナコはそういった風景にも慣れてしまい、向かう先はどんなところかと考え始める。休むのによさそうな場所、とはいいたい。

すでに先導を任せた手前、イルに言葉で尋ねるのは気がすまない。落ち着きのない子供のように思われては癪だった。だからナナコは自身の想像力をせいっぱい働かせてみるのだが、これは簡単にイメージできるものではなかった。ナナコはまだ、それほどにはこの星を知らない。いままで見てきた森の様相が突然どこかで一変してしまうとは思えなかったのだ。せいぜい、川の近くで、適度に日当たりがよくて、腰を下ろすのにちょうどよい石や木がうまい具合に集まっている、といった程度だろう、そんなふうに想像する。

それから数十分後、ナナコはおおかた想像通りの美しい河原に、力なくへたり込んでいた。精神的な疲労が大きい。

「ね、どうかな」

疲労の元凶であるイルが、ナナコの顔を覗き込んで尋ねた。

「……まあ、らしいわね。たしかに。いちおう」

「でしょ」

ナナコの周囲に偵察を終えたビットたちが帰還する。

偵察先は、原住民たちの街だった。そしてその街はナナコたちがいまいる河原のすぐ近くにあった。

向かっていた目的地というのはその街のことだ、と聞かされれば、ナナコでなくとも、そう言うイルの耳をつねって引きずり、ひとまず腰を落ち着けて、いったいなにを考えているのか問いただそうとしたことだろう。

そこでイルはこう言ったのだった。あの街には、おそらく誰も住んでいないのだ、と。

もちろんナナコはそれを鵜呑みにはしなかった。しかしほかに二、三の街を観察してきたらしいイルは、この街だけが明らかに異質だと言い張るのだ。

人の出入りがないのはもちろん、夜でも明かりが灯らなかつた。闇に紛れて遠まきに街を俯瞰したが、やはり生き物の気配というものが感じられなかつた。それに他の街と違って周囲に作物を育てている様子も、畜産をしている様子もない。が、以前そうしていた形跡は認められて、これはつまり、この街全体が何らかの理由で、いまは引き払われたのだ、イルはそうのように主張した。

そして、確信を得たいならばビットを飛ばしてみればいい、と勧めてきたのだ。

イルは最初からそれを期待していたのかもしれない、おそらくイルの方こそ自分の予想を肯定してもらいたいのだ、そうナナコは思った。ナナコはそんなイルに対して別段不満を感じたりはしなかったが、出会ってからずっとイルの行動力に引っぱられ、驚かされ続けていることには、内心で気を揉んでいた。

船との接点を断たれたら、こうまでしなくてはならないのか——疲れを感じる原因はそういうことだった。

街が実際のところどうなっているのか、ということについていえば、それはナナコにとっても十分に興味の対象となっていた。ビットを飛ばすことに異論はなかった。そうして実行した偵察の結果、イルの言ったとおり、街に人影と呼べるものは見当たらなかった。

「いま人がいないからって、ずっとだれも来ないとは限らないわ」

思った通りだ、とはしゃぐイルとは対照的に、ナナコは冷静にそう言った。

「でも、この星の街がどんなのか、ちゃんと見てみたいと思わない」

「見たくない、とは言わないけど、それでこのやつらに見つかったらどうするつもりよ」

「大丈夫だよ。外から近づいてくるなら、ナナのビットがすぐに気づくでしょ」

「だから、勝手にあてにするなって言ってるのよ」

「うえー、いいじゃない、行ってみようよ」

「つたく、もうちょつと慎重に動きなさいよね。だいたいアンタ、ただでさえ、まだ——」

完全ではないのだから。そう言いかけたとき、

「こんにちは！」

突然背後から声がした。

ナナコとイルは反射的に口をつむぎ、腰を浮かせて振り返る。

「珍しいですね、こんなところに。お二人だけですか？」

知らない相手だった。

N-4、R-3。現在のTCDビットの装備バック構成だ。ニユートラル^N、すなわち追加モジュールなしが四機。リーコン^R、偵察用モジュール装備が三機。

TCDビットとはとにかく高性能な装置である。単体ですでに驚異的な性能を持つビットに、後付けで攻撃特化や防御特化といった性格付けを行うのは容易ではない。必然的にモジュールの方にも同程度の性能が要求されるからだ。また、当然のことながらいずれかに偏重した性能調整はその他の能力を低下させることにも繋がる。パーツの換装にしても手間が掛かるため、通常、モジュールの変更は宇宙船に戻らねばできない。もし出撃時にモジュールの選択を誤るようなことがあれば、いざ作戦が始まってからしなくてもよい苦勞を強いられることになる。だから、ニユートラルという選択も成り立つのだ。

一方でリーコンモジュールを装備したビットは、クロック形成用の外装追加によって電波の、光学的な隠密性が大きく向上する。エネルギー消費やテナクル・システムへの負荷も

同様に高く、攻撃力も防御力も落ちるのが難点なのだが、しかしこのモジュールには、ビット本来の装甲を換装しているわけではない、という大きな利点があった。他モジュールと異なりリーコンモジュールは完全な増加パーツであり、その追加分をパージしてしまうことで宇宙船の外でもニュートラルに戻すことだけなら可能なのだ。

ナナコが三機のビットを警戒飛行に向かわせ、四機を手元に残すことが多いのは、この装備パック構成のためだ。つまりリーコンモジュール装備の偵察機が三に、立体防御障壁形成のため最低限必要な護衛機の数が四、である。

だが、いま、このときは逆だった。

「こんにちは！」背後で声がしたその瞬間、ナナコは咄嗟にニュートラルのビット四機を上空高く打ち上げた。同時にリーコンモジュールを起動、アクティブクローク展開。ほぼ完全に不可視となったビット三機は、ナナコのそばからゆっくりと離れ、声の主の視野から逃れる。

「珍しいですね、こんなところに。お二人だけですか？」

声の主はそれらビットの動きを追うようなしぐさは見せない。密な森から開けた河原に抜け出ようと、ガサガサと木々の枝と格闘しながら喋っている。

原住民。この星に住む、人間。しかしあの目標ではない。

敵主力以外との交戦は禁じられていた。ビットを忍ばせていても攻撃はできない。しかしこの相手にしても戦闘能力を持つてはいないはずだった。おそれることはない、ないのだ、

なにも。そう思っているにもかかわらず、ナナコは手のひらが汗ばむを感じる。

この相手にどう対応するか、それを決めなくてはならなかった。いまずぐに。しかし交戦が許されないなら、ほかにどんな対処があるというのだ。

「ナナ」隣に立ったイルが、ナナコにも聞こえるか聞こえないか、というくらい小さな声でささやいた。「せーの、で、飛ぶよ」

ナナコは目だけをイルに向ける。

「ナナは右へ、私は左」イルの横顔が笑う。「よかったら、またビット飛ばしてよ。見つけたら着いてくからさ」

さすがの行動派、切り替えもはやい。頼もしいものだとなナコは関心する。

しかし……しかし、自分の答えは、それではない。

ナナコはイルから視線を外し、木々に邪魔されていまだ河原に出て来られない、あの相手に向き直った。一度両手を握りしめ、それからゆっくりと開く。

イルが、せーの、を言うより早く、ナナコは大きく声を張り上げた。

「ちよつと、そのアンタ」

とびあがつて驚くイルを尻目に、ナナコはいつものように腕を組んで、こう続けた。

「私たち、道に迷っちゃったんだけど！」

それは、見れば見るほど人間だった。容姿は完全に、人間の娘だ。イルよりも少しだけ長

身だ、キョウコくらいあるかもしれない、とナナコは見繕う。服装も理解できないものではなかった。いたって普通のシャツにパンツ。手にはめたグローブは木々との格闘用か。自分たちとなんら変わるところはないように見える……厳密には、自分たちこそ普通の人間ではないのだが。ともあれこの娘のような人間なら、船の居住区を覗けばいくらでも見つかるだろう。

娘は川縁^{かわべり}の石の上にしゃがみこんで、なにやら細く長い木の棒を振り回している。真後ろには立つな、と言うものだから、ナナコとイルはとりあえずはその通りに、斜め後方から彼女の後ろ姿を眺めていた。

なぜこのような行動に出たのか、ナナコは自問する。イルがうながした通り、さつさと逃げてしまってもよかったのだ。それが普通の反応というもので、自分が選択した行動はいささか異常だ。だが、自分は異常者ではない。一見異常な行動を起こす動機となった、なんらかの理由が、この胸の内にあるのだ。それなのに、それを明確な言葉に表すことができないでいる。

「やあ、困りましたね」

娘が口を開く。ナナコは思考を中断し、集中してそれを聞く。聞き漏らしてはならない。「実はわたしも、あまり道に詳しくはないんですよ。なにぶん外を出歩く方ではないものでして」

こんな場所で道に迷うはずがない、と返されなかったことで、ナナコはひとまず安堵した。

そのように断じる判断材料を、少なくともこの娘は持っていない。なぜかといえばこの娘は、外を出歩くタイプではない、からだ。ナナコは必死に頭をめぐらす。

状況から考えて、これは住処や施設内に籠もりきりという意味ではなからう、自分は街から出る機会は少ないと、この娘は言っているのだ。先ほどイルは狩りのために大勢が街を出ていく様子を見たと話したが、そこに混ざらない者も一定数いるらしい。自分たちもそういうタイプの人間をよそおった方がよさそうだ。……そんなタイプの人間が今回に限って街を離れ、あぐく道に迷ってしまうというストーリーを、どのように組み立てればよいだろうか。娘は木の棒の先になにやら細工をしながら、困った、困った、とつぶやいている。

その隙にナナコはブーツの爪先をイルの靴にこつんとぶつけてささやく。「アンタもちゃんと台詞考えなさいよ」

「そんなこと言ったって」

こたえる声が完全にうわついている。だめだ、これは。こいつはこういった状況ではまるで頼りにならない。

あつ、と娘が声をあげる。露骨にうろたえるイルの様子には気づく素振りもない。

「それじゃあ、だいたいどっちの方向から来たのか、調べてくれないなら」

「わ、わかりません!」

イルが叫んだ。ナナコはイルの足を踏みつけた。

「方角もわからないんですか」と、娘は疑いの眼差しで二人を振り返る。

ナナコは頬が引き攣りそうになるのを堪えてその視線を受け止め、「しかたないでしょ」と、わざと開き直るような態度をとった。「木と草ばかりで、どこを歩いてるのかもわからなかったわ」

娘は目を丸くする。「そんな深いところへ入っちゃったんですか。だめです、危ないですよ。このあたり、確か、怒らせると怖い動物とかがいますし」

「ああ、ナナがぶっ飛ば、いたい」

ナナコはイルの足をさらに強く踏んで黙らせた。

「ナナ、お名前ナナとおっしゃるんですか」

「……ナナコよ」

「なるほど、ナナコさん。わたしはヒルデ、っていいます……えっと、」

「い、イル。です」

「イルさん。よろしくお願いしますね」

いずれは敵対する者となにをよろしくできたものか、まったくよいけないことばかり口走る、しかしいまのはうまい言い分けたぞと、ナナコは先ほどのイルの言葉を繋いだ。「そうよ、動物。角の生えたでつかいのに追い回されて、右も左もわかんなくなっちゃったのよ」

それを聞いた娘は、ヒルデは、いつそう大きな声で言った。「それって、あの動物ですか」「あの、ってなによ」

「ええと、角はこんな感じに生えてて」手にしていた長い木の棒を脇に置いて、こんな感じ、

と開いた両の手のひらを自分の頭上に持つていく。先の現住動物とそっくり、とはいかないものの、ヒルデの言わんとすることはナナコにも伝わった。

「まあ、だいたいそんな感じだけど」

「体もおんな大しくて、全身濃い茶色みたいな色をしてて、お肉は意外においしい」

「味なんか知らないわよ。あのねえ、アンタなんでそんなまわりくどいわけ」

「ですよ、不便ですよ、名前がないと」

「……、ええ、そうね」

「おいしいことがわかったんですから、追う機会も増えているはずでしょうに。早く決めていただきたいものです」

どうやらあの現住動物はこの星の人々にとっても比較的新しい発見、いわば新種らしかった。危ないところだった。はじめて見た動物だ、名前を教えろ、そう言い放つ一歩手前だった。ナナコは冷や汗をかく。「そう、そう、まったくだわ」一言一言が大きな掛けだ。

星の広さにくらべれば街が占める領域は、すべて合わせたとしても微々たるものだ。人間の生息域が異様に狭いのだ。そのわりには不自然なくらいに高い技術水準を持っているようだが、それにしたって自分たちが保有するものと比べればずっと劣る、と、ナナコはキョウコから聞かされていた。そのうえ無力ゆえ「危険な森」に簡単には踏み込めないとすれば、この星には、この星の人々でさえ見たことのない環境や動植物がまだまだあるのかもしれない。

「それにしても、よくご無事で」いたわるような、落ち着いた口調でヒルデは言った。「ひよつとして、大きい狩りに参加されたのははじめてですか」

ナナコは咄嗟にこたえられない。

「あれ、ごめんなさい。わたししてつきり、角の動物が暴れたときに、大人の方々とはぐれられたのかと」

しめた、とナナコは思った。自分とイルの境遇について、どうやらこのヒルデ自らがつつま合わせをはじめている。自分はこの星の人々の生活について無知だ。ヒルデが組み立てたストーリーに乗っかってしまった方が賢明だろう。

「ふん。まあ結果的にそうだったのかもね」

ヒルデはにつこり笑った。まるで意地をはる子供をあやすような顔だとナナコは思う。自分はある程度のように振る舞ったのだ、まさに狙いどおりの心象を与えることができた。しかし、どこか浮かばれない気持ち。

「本当に気をつけてください。あの動物は足も速くて、角に触ると体が痺れて動かなくなると思いますよ」

「触って痺れる、どころの勢いじゃあなかったけどね」

ようやく落ち着いてきたらしいイルがそう口を挟み、ナナコもイルの言葉に同意を返す。件の現住動物の発電能力は決して強力なものではなかった。天敵からの自衛のためか、はたまた仲間内での権力誇示のためか、いびつではあるが、あくまで生物的な進化のうちに獲

得した能力なのだろうとナナコには思えた。少なくとも機械的、兵器的な感じはしなかった。人間の体の自由を奪うほどの出力を発揮することが仮に可能だとしても、それを長時間維持することはできないだろう。ほんの一瞬、バチンと、放つのだ。その経験談を語った人間はよほどの不運の持ち主といえそうだった。

体当りの威力そのものの方がはるかにやつかいだと、ビットで突進を受け止めたナナコはよくわかっていた。あんなものをただの人間がともに受ければ、ひとたまりもないだろう。「わたしは写真と、あとはお肉をいただいただけで、動いているところを見たことはありませんけど……なるほど、それはそうでしょうね、たいへんな力でしょうとも。ならなおさらです。もうぜったい奥の方に入っちゃいけません。ほんとうに大けがをしますよ」

この自分のそばを離れるな、街に帰れる目処が立つまでは一緒に行動しよう、ともヒルデは言った。ナナコとしてはできるだけ自然に、かつさりげなく、ヒルデの前から去りたかったが、しかしついつい好奇心で尋ねてしまうのだ。

「アンタに着いていけば、あの動物に襲われても安全だ、っていうの」

「とんでもございません。襲われてもしたらどうしようもないですよ」

やはり彼女らは単体での戦闘能力は持たないらしい。大勢集まってより強力な動物を狩る程度の知恵はあるとしても、そのために殺傷力の高い剣や銃器を扱うとしても、生粋の人間が振り回すそんな武器など、とてもナナコたちの脅威とはなりえない。

「でも、このあたりの地域のことに限ってはいろいろと心得ていますから」

そう言つてヒルデは立ち上がる、ずっと弄くつていた木の棒の一端を両手で握り締めて。その棒のもう片方の先端に、透明な細い糸が結びつけられているのにナナコは気づいた。

「釣り、つてやったことあります？ 見たことは？ あちこち走りまわつてお疲れでしょう。まだ、だいぶ早いですけど、お昼の準備しましょうね——これでお魚をつかまえるんですよ」ナナコはそれを知っていた。ずっと昔に見たこともある。居住区で、デイスプレイ越しに、だが。

竿と呼ばれるロッドから視認性の低い糸を水中に垂らして、糸の先に取り付けた鉤爪で泳いでいる魚を引っかけるのだ。裕福な連中のちよつとした娯楽だ。ほかでかい水槽の縁に大勢の人々が腰掛けていた。……それがこの星にもあるなんてね。どこでも同じようなことを考えるものだとなナコは呆れる。

「さー、やりますよー。……そうそう、後ろ、お気をつけて」

事前に同じことを言われていたから、いまでもヒルデの真後ろは開けてあつた。ナナコとイルは顔を見合わせ、互いにもう半歩ずつ横にずれた。かわりに少し川縁の方へ歩み出る。ヒルデの右隣りへ。

ヒルデは大きく竿を振りかぶつてしならせる。その先の糸と鉤爪を川の中に投げ入れる。「ちよつとだけ待つててくださいね」二人の方を見て笑う。「頼りになるところ見せちゃいますよ」

釣りに使う針には普通、魚が好む餌を通してある。罟と気づかず食いついてきた魚が、逆に餌食となって釣り上げられる。餌は、狙う魚の種類や大きさによってかわる——そういうことをナナコは見聞きしていたが、具体的にどんなものが餌として使われるのかは知らない。ずっと昔の、ほんとうの意味で幼い頃の、曖昧な記憶だ。

宇宙船では、というよりナナコの経験の中では、魚というのはあくまで食卓に並ぶ食糧の内のひとつでしかなかった。それらが調理される直前までなにを食べて生きていたのか、などというのは当時のナナコの関心の外だったし、そういう些細なことがらに疑問を抱くようになるより早く、ナナコはひとり居住区を出た。テンタクル・システムを受け取るために。

いったいこの星の魚はなにを食べて生きているのか、それは宇宙船の水槽で泳いでいた魚たちと同じものか、それとも異なるのか、ナナコははじめて興味を持った。

「粉の飼料を練つてもいいんですけどね」ヒルデは針を投げ入れたあたりを見据えたままと言った。「やっぱり基本は現地調達。そのあたりのちっちゃな虫なら、けっこうなんでも掛かります」

どうやら魚どもは同じ水辺に棲む水棲昆虫を捕食するらしい。そういう昆虫を採取するひと手間も釣りの醍醐味だ、とヒルデは語るが、ナナコにはまだいまいちピンとこない。

なにせ宇宙船には水路はあっても川はない。水槽はあっても池や沼はない。ひよつとした居住区にはあったのかもしれないが、間違ってもいま過ごしている中央や基幹部には、ありえない。船内に限らずとも同じことだ。この星ほどに豊かな水辺はほかのどの星にもなか

った。したがってナナコは本物の川や沼や水棲昆虫を見たことがない。もちろんそれをここで口にするわけにもいかず、だからナナコはこう尋ねた。

「そのあわれな虫とやらはどこにいるのよ」

それなら、と言いかけたヒルデだったが、突如、思い直すように口をつぐんだ。

「餌なんていいじゃないですか、お魚が釣れればそれで、ねえ」

なにを尋ねても気前よくこたえてきたヒルデが、ここにきてはじめて情報の隠匿を試みている。

だがナナコは見逃さなかった、ヒルデの視線がちらりと一瞬、彼女の足元に移動するのを。そこにはヒルデが背負ってきたリュックと、腰に下げていたポーチと、それから、小さなプラスチック製のケースが転がっている。

ナナコとイルは再び顔を見合わせる。なにゆえこのプラスチックケースはリュックから出されているのか、頻繁に手を伸ばす必要があるからだ、当然。

ナナコはすべてわかつているぞというしり顔で、つかつかと、イルはまだほんの少しだけヒルデのことを警戒しながら、そろそろと、秘密のケースに歩みよる。隠し切れないと悟ったか、ヒルデは止めず、なにも言わない。ナナコとイルは並んでその場に屈み込んだ。ナナコの指がプラスチックケースのふたに触れる。

二人は、この世には知らない方がよいこともあると、知った。

「その……ちゃんと閉めておいてくださいね、逃げちゃうんで」

言われずともナナコは身震いとともにケースを封印している、無言で。

「お魚さんにとつてはきつとご馳走なんでしょうねえー」

なんのフオローにもなっていないかった。正論くさいことを言うなとナナコは思った。いっそ主観と偏見によつて心を守らせてほしかった。

しかしヒルデの言葉を肯定するように、実際に魚たちは餌につられて針に掛かった。

竿を握るヒルデの手がなにかにぴくりと反応した、ことに、ナナコとイルは反応する。二人は針が沈んだ場所を見やる。ヒルデが竿を勢いよく振り、それから高く持ち上げると、針に掛かった魚が水面からとびだした。宙吊りになつて、振り子のようにヒルデの手元に吸いこまれる。ヒルデは片手でそれをキャッチ。

ナナコとイルが狭い空間にひしめく水棲昆虫の姿を目撃してから、三分と四十六秒後、ヒルデは見事一匹目の魚を釣り上げた。竿を小脇に、魚の口に食い込んだ針を器用に抜く。

そして突然ヒルデは「あつ」と叫んだ。その様子をじつと観察していたナナコとイルは、いったい彼女の身になにが起こつたのかと表情をうかがう。

「あの、あの、ちよつと申し訳ないんですけど」と、慌てた様子でヒルデ。「このお魚を放す、罫いを作つていただけませんか」

「は……」

「お、お願いします、石をこう、並べてですね……えつと、そう、ここなんかいいですね」
ヒルデは釣った魚を両手に抱え、ここ、ここ、と自分の足元を爪先でちよんちよんと指示

する。大小の石の隙間から水が流入している、そこはすでに浅い水溜りのようになっていたが、ところどころ隙間が広い。そのままでは釣り上げたばかりの活発な魚は逃げだしてしまうだろう。

「な、なによ、そこ塞げばいいの」と腰を浮かせてナナコ。

「はいっ、そうですお願い……その石いいですね。あとそっちのも」

まるでヒルデの慌てっぷりが感染したかのように、ナナコとイルはいそいそと囲いを補強した。その仕事に満足したらしいヒルデが囲いの中へ魚を放す。

はじめての作業に少々手間取った気がしていたナナコだったが、まだ泳げるらしい魚の様子を見て安堵する——そして、我にかえた。なんとということだ、顎で使われてしまった。

「ありがとうございます。助かりました」とヒルデ。

「あ、そう……」ナナコは疲れた口調でこたえる。

イルはなぜだか誇らしげだった。ヒルデへの警戒心もすっかり解いた様子で、どういたしまして、と笑っている。

無防備で不用心、そういう点ではいまの自分もさしてかわるところはない。まったくなをやっているのやら。ナナコは溜め息をついて腰を落ちつけ、肩越しに囲いの中へ目を落とす。

そこに泳ぐ魚は、頭から尾の先までで二十センチほどあった。腹は白く、体の側面から背にかけて濃い灰色をしている。

「塩焼きでいただくとおいしいですよ」

ヒルデは陽気に言いながらまた竿を握った。一切の迷いなく、あの餌を手にとり針を通す姿にナナコは戦慄。

ヒルデの腕は確からしかった。一時間ほどの後、手持ち無沙汰なナナコとイルの手によってなんとなく拡張され続けた囲いの中には、同じ姿、大きさの魚が七尾泳いでいた。

本来ならもう一尾くらいは釣れていたかもしれない、というのも、一度イルが挑戦して時間をくったから。

釣りの知識などあろうはずもないイルだったが、持ち前の運動のセンスを発揮して、ヒルデが指差したポイントにうまく針を投げ入れた。しかもどうやら魚を引っかけることにも成功したらしい。勢いよく戻した針から餌だけが消えていて、それがわかった。掛かったと思ったら川下に向かって竿を振るのだ、次は釣れる、ヒルデはそんな助言をしたが、イルはとりあえずはそれで満足したようだった。

そのあとヒルデがもう一尾釣って、結果、七尾。きようはなかなか調子がよいと、ヒルデ自身も得意気だった。

「アンタ、あんまり歩かないんじゃないの」

「ええ。ただ、お休みをいただいた日はたいてい、このあたりまで足を運びますから。どうしても日が開いちやうんですけどね、何ヶ月とか。でも連日糸を垂らしてるとかえってうまくいかなくとも聞きますし。ちようどいいのかも」

小型ナイフを手にしたヒルデが喋りながら囲いに近づき、一尾をひつつかんで連れ去っていく。さらば、名も知らぬ魚よ、ナイフを操るヒルデの背中を視界の端にとらえつつナナコは思う。

ヒルデは砂を払った平らな石を即席の調理台に、魚の腹に刃を入れて、慣れた手付きでわたを抜いていく。竹串を通して粗塩をまぶす。

ナナコは川辺に足を投げ出して座った。背後のイルの様子をうかがう。イルは、ヒルデに言われてリュックの中から木炭をとりだして並べ、〈着火剤〉だと説明されたジェル状のもののかをパッケージからぶちまけていた。まるで粘着炸薬のようだ、まさか爆発などするまいな、ナナコは点火の様子に注目する。火付けはマッチ棒でいいらしい。イルの手にある火のついたその行方を目で追う。イルは無造作に火を放る。ジェルに引火し、木炭が炎に包まれる。

その様子をビットが見ている。ジェルの燃焼温度はおよそ六五〇度C。反応速度も非常に穏やかだ。戦闘用の焼夷弾とは明らかに反応特徴が異なっていた。低温で長時間燃焼を持続するタイプのようだ。文字通り、いつわりなく、ただの着火剤だった。よほどうまく使えば戦闘メカたちのセンサをいじめるくらいはできるだろうか、ナナコは関心を失った。

やがてジェルが燃え尽きてしまっても表面温度は低下しない。木炭はじんわりと赤熱していた。しっかりと火が移っているようだ。

イルが関心したような声をあげた。「あつさりだね」

「ふふふ」すべての魚の下準備を終えたヒルデが、ちっち、とナイフを振る。「ちやあんと前回の消し炭を混ぜておきましたから。ごくろうさまです、イルさん。……よかった、薬（着火剤）の匂いもないですね」

その後も木炭の温度は緩やかに上昇、七八〇度C前後で安定。

「そろそろいいかな」とヒルデ。

「……それ持ったまま、うろうろするのやめなさいよ、それ。けがするわよ」

もう用はないであろうに、ヒルデは抜き身のナイフをもてあまし続けていた、おそらくは無意識に。ナナコに言われ、ヒルデは慌ててナイフの刃の背を腰のあたりに押しつける。刃は根本から折れ、持ち手の間に畳まれる。

「やや、これは失礼をば」

ヒルデはそのままナイフをシャツのポケットに放りこみ、かわりにグローブをひっぱりだして両手にはめる。即席調理台に戻り、竹串を通した魚を手にして、また炭火に寄る。魚の腹を火に向けて、串を地面に突き刺して、石を集めて固定しようと奮闘する。

「手伝おうか」とイル。

「素手じゃ熱いですよ」とヒルデ。

その会話をナナコは背中に聞く、あのグローブには耐熱性があるようだな。

「だいじょうぶだよー」

イルが笑ってそう言った。ナナコは舌打ちしそうになる。

「だいじょうぶなわけないでしょ、おとなしくしときなさいよ」

「そ、そうでした」

即席調理台へ向かいかけていたイルはすぐごと引き返し、ナナコの隣に腰を下ろした。

ヒルデが調理台と炭火のあいだを往復しているそのうちに、ナナコは小声でイルに尋ねる。
「アンタって、敵さんに名乗ってなかったのよね？」

「そういうえば、そうだね」

「なら、いいんだけど」確認しておくべきではあった、とナナコは自ら名を暴露した否を認めた。「そこは私もうつかりしてたわ」

「そもそも、ナナはどうしてあんな嘘、ついたの」

「なによ、文句あるの」

「ないよ、いまなら、ね。この方がよかったかも、つてくらい。でもすごくびっくりしたからさ。どうしてあの人と話そうと思ったのかな、つて」

「別に。ただの敵情偵察よ。だいたい、なにも私たちが逃げてやる必要なんてないじゃない」
ひよつとしたら、とナナコは思う、自分はそれを確かめようとしたのかもしれない。「アイツらから逃げたりしなくていいのよ」

「そうだね」イルはこくりとうなずいた。「ナナのおかげだ」

ナナコはその言葉の意味をはかりかねた。こちらに対するヒルデの態度が柔らかいのは、
なにも自分が特別な働きかけをしたからではない。怪訝な顔をするナナコに、イルは続けた。

「私ひとりだったらあのまま逃げてたよ。次も、その次も、ずっとね。そうしていたら、いつか顔とか覚えられて、追いまわされるようになってちやうかも、って思うんだ。でも、ナナのおかげでたくさん話ができたじゃない。怖い人じゃないのがわかった……おもしろいよね、あの人」

「なんだ、そゆこと……素性隠してるうちだけでしょ、そんなの」

「そうかなー」

「そーよ。迷った、なんて言っちゃったもの。いつまでも家に戻ろうとしないんじゃないかな」
「騙してるのもなんか悪いしね。うーん、そしたら、結局逃げなきゃいけないのかな」

「さあ、どうだか」

ただの迷子だと思っていた者が実は侵略者の手先だった、それをヒルデはどのように感じるか。普通、いい気はしないだろう。秘めた凶暴性を発揮して襲いかかってくるだろうか、それとも一目散に逃げだすだろうか……自分はなにを考えているのだ、どうでもよいではないか、そんなことは。「キョーミないわ」ナナコは天を仰ぐ。太陽が高い。

後ろでヒルデの呼ぶ声がした。振り返る。ずっと魚の焼き加減を見ていたらしい、手招きしている。

「いい匂いですねえ」

炭火に近づくナナコとイルに、ヒルデはそう同意を求めた。

「それ、あれで釣ったのよね」とナナコ。

あの、水棲昆虫で。思い出して身震いする。

「ご心配にはおよびません」とヒルデはあらかじめナナコの言葉にそなえていたとばかり言い切った。「わたしは取ってありますもの」

「ワタ、って」とイル。

「胃とか腸とか……消化器官ですね。この子の中に、あの虫が入ってたりはしませんよ」

外観がおそろしいからといって必ずしも身体に毒というわけでもない、ともヒルデは付け足した。

理屈はわかるが、とナナコは渋る。それほど強烈な見た目だった。

「でもまああいうの、の栄養で育ったんでしょ」

「それを言っちゃうとなんにも食べられませんよ!」

「うんうん、もつともだよね」食糧を目の前にしてイルがヒルデの側につく。

ヒルデが、さあ、と焼けた魚を突き出してくる。ナナコは渋々といった表情でそれを受けとる。もつとも内心ではその味に興味がなかった。

三人は熱い炭火から少々距離を置いて、並んで座った。いただきます、だれにともなくヒルデが言った。食事前のかんたんな挨拶、食材への感謝をあらわしているらしい。意味までは知らなかったな、いや、自分たちが言うのと、この星の人間が言うのでは委細が異なる可能性もある、ナナコはそんなことを考えながら、イルと一緒に、ヒルデに倣う。「ただ

きます」

腹を裂いて火にかけて、いまさら感謝もなにもない気はするが……魚を育んだ、この星に向けた言葉かもしれないとふと思った。ヒルデたち、この人間たちは、宇宙に広がる数多の星々を訪ねてまわった経験はあるまい。それでも恵まれた環境に生きているという自覚があるのだろうか。

ヒルデがするように、ひれを避けて魚の背からかぶりつく。うまかった。

この場ですべて焼いてしまつて、余つた分はどうするのかとナナコには疑問だったが、余らなかつた。骨や尻尾を除けばポリウムのある魚ではなかつたし、ナナコは頭も遠慮したから、それほど無理なく二尾が腹に収まつた。ヒルデなどは頭から骨までぼりぼりとやつた。釣れた魚は七尾。最後の一尾は「お二人でどうぞ」とヒルデが言い、ナナコの手により半ば強引にイルの口にねじこまれた。たとえシフブランドといえど体力の維持回復に栄養補給の有無は大きい。もちろんナナコは、そんな思いはおくびにも出さなかつたが。

少し休憩したあとグローブをはめたヒルデが河原を離れ、土を掘りかえしてきて炭の上に被せた。踏み固めて消化。

「それがさつき言つてた、消し炭つてわけ」

「そうです。次使うとき便利なんですよ」

「次、ね」

魚の頭や骨はそのままにしておけばいいとヒルデは言った。見えやすいところに置いてお

けば鳥たちがやってきて跡形もなく掃除してくれるのだ、と。

「あきれた、アンタ鳥に餌やりにも来てるの」

「まさか。ここに来るのは本当にただのわたしのぜいたくです。ついで、なんですよ」

そういうばそんなことを言っていた、たいていはここまで足を運ぶ、と。つまりヒルデはこの河原に到るまでのどこかで本来の目的を果たしているわけだ、それはいつたいなんなのだろう。ナナコは軽い気持ちで尋ねた。ヒルデは感傷的に微笑んだ。

「お墓参り」

口調だけはおどけていた。

墓所は、人の姿が見えない、あの街にあつた。

街は十年も昔、疫病の流行で捨てられた。その土地には大勢が埋葬されているが、他所の街から歩いてくるには少々遠いから、彼らを憶う人々の多くは移り住んだ先の街に祭地を設けて、そこで祈る。ヒルデのように直接足を運ぶ者は少ない。

それはそうだろう、ナナコにはヒルデよりもその、その他大勢の行動が自然にうつった。

死者を尊ぶ姿勢は自分自身が意識するものであつて、だれか、まして死者その人に、そうする姿を見てもらおうというものではない、祈りが心からのものであればその価値が場所によつて変動するということはないだろう、という感覚だ。そもそもナナコの常識では、故人は果てなき宇宙を漂いながら眠っているのが普通なのだ。直接眼前に立つて手をあわせるなど

ぜつたいに不可能だし、そのような発想自体がありえない。精神論以前の問題だった。

しかしひとつの星に完全に根を下ろして生きていくとなればそれも可能になるわけだな、ナナコは一步ひいた感覚でそう思う。ヒルデの口調では、物理的距離の問題さえなければ彼女以外のその他大勢もより直接的なへお墓参りをしていただろう、ともとれる。ここでは自分の感覚よりもそちらが自然なのかもしれない。

いずれにせよヒルデはその用事をすませて河原に現れたわけだが、火をおこして残った消し炭はいつも街に置いていくのだという。今回もそうするため、いま一度立ち寄るつもりらしい。イルと二人、成り行き上その後ろについて歩きながら、気づかれないようナナコは嘆息。こんなかたちで街に近づくことになるとは。面倒な話題を踏んでしまったというのが正直なところだった。

獣道から整地された——以前はそうであつたはずの、いまは荒れた路にでる。高い木々はほとんどなく、街までほとんど一本道で、もう建物の姿が見えている。広大な牧場跡、ひからびた田畑などにちらちらと視線を送りながら三人は街に接近する。

ビットを使った偵察時には生体スキャンや敵レーダーシステムの検知にばかり注意を払っていて、そのときのナナコは自分の感覚で街の雰囲気をつかえる余裕まではなかった。思ったより閑散としているな、街の様子を横目に眺めつつそんな感想を抱く。建物の数はまばらで、その建築様式も合理性を追求した宇宙船居住区の施設群とは異なっている。ほとんどが一軒家だろう、家々はさまざまな色かたちの屋根を持ち、窓枠のデザインにすら遊び心を凝らし

ている。壁はコンクリートかレンガ、あるいはなにかコーティンを施した樹脂素材でできている。もの珍しさとともに少々古臭い感じをナナコは受けた。

「なんかさみしいところだね」

イルの口からそんな言葉が洩れた。ナナコも同意見だった。人間と出会わないという点ではいまの宇宙船も同じはずだが、宇宙船ではこんな得体の知れないうらさびしさを感じることはない。そこにはただ無機的で硬質な空気があるだけだ。だがこの場所が違う。建物の劣化や侵食は見られるものの、窓を覗けば家具や食器が残されたまま。どこかノスタルジックな街並みはそのままに、生々しい生活感を残して人の姿だけが消えている。通りをゆくのは風の音だけ。まさに置き去りにされた街、ゴーストタウンだ。

「昔はすごく活気があったんですよ」とヒルデが笑う。

「そうなんだ」あらためて周囲を見渡すイル。

街の中央はちよつとした広場になっていた。たくさんのお灯と長椅子が円状に並んでいて、中心には大きな水がめのような構造体が鎮座している。もつとも、それがなんなのか本当のところはわからない。いまは水は張られていないし、満水したとしても街全体の水源になるとは思えなかった。

「決まった時間に噴水が上がるんですけどね」聞かずともヒルデは水がめに目をやってそう言った。「それがけっこうすごい勢いで。わたしすぐその時間を忘れちゃって……風のある日なんかは、あそこに座ったまま、よくずぶ濡れになって慌てたものです」

伏せ気味の瞳は過去を見ていた。ナナコは異星の娘が幼日をしのぶ顔を眺めやる。と、ヒルデは取り繕うような表情になって背中のリュックをぼんぼん叩いた。

「じゃ、ちよつとこれ片づけてきます。すぐ戻るので休んでてください」

駆け足で街路に消えていく。

「休んでろ、だって。遠いのかな」

「すぐ戻るって言ったじゃない。街自体そんな広くないし。椅子があるここで、家に帰る方法考えましょう、ってことでしょ」

言いながら〈噴水〉に接近。周囲を取り囲む長椅子は木の板を貼り合わせて作られている。ナナコは手をついて体重をかけ、壊れそうにないのを確かめてから、座る。

「なんだか気が重いや」隣に腰掛けたイルがつぶやいた。

「^{ほだ}絆されてんじゃないわよ」

「え？」

「情が移っちゃってるんじゃないか、て言ってるの」

「あー、ははは。親切にしてもらったしね」

それもそろそろ潮時だ。どこの街の出身か、本格的に詮索されればとても隠し切れるものではない。イルにもわかつているだろう。

会話らしい会話はそれっきり、ナナコはぼう、と空を見上げて待った。しばらくして広場に戻ってきたヒルデの姿を視界の左端に捉える。ふと目が合った気がした。

「遅くなりました」

ヒルデはにつこり笑って呼び掛けた。わずかに歩を早め、歩きながら喋る。

「あの、ちよつとそこで考えたんですけれどね、街の名前とかわたしは無知ですけど、親しくさせてもらつての方が詳しいんですよ。帰り道もきつと教えてもらえます——お二人の街はなんていいましたっけ」

そこまで言い切つてヒルデはぴたりと足を止めた。ナナコとイルの背後、遠い山々を注視している。ヒルデの様子に気づいたイルも、振り返った。遅いお目覚めね、ナナコはただそう思った。低い地鳴りのような音を遠くに聞く。

「なんでしょう、あれ。すごいけむり」

ナナコは静かに椅子から離れ、不安気につぶやくヒルデの前に立った。

「スミカ」

ぽつりとナナコはそう言った。

「え？」

「私たちの船の名前よ。アンタが教えろつて言つたんじゃない」

イルはなにも言わなかった。

「船……ですか」

「そーよ」 ぱちん、と指を鳴らしたナナコの周囲で眩い光が弾ける。欺瞞装置を脱ぎ捨てた三機のビットが姿を現す。「意味はわかるわよね。……というか」

ヒルデは突然の強い光に怯み、ビットが致死的な脅威であると本能的に読み取ってその出現に戦慄したが、決して動転することはない。懸命に気を張ってナナコの顔を見つめている。ナナコはそんなヒルデの視線を受け止め、にやりと笑って、言ってやる。「アンタ、たぶんどこかで気づいてたんじゃないの。なんかそんな気がするわ」

ヒルデは肯定も否定もしなかった。

「それで、みなさんを……わたしたちの街を壊すんですか」

「いまのアンタにはどうだっていいでしょ、そんなこと」一機のビットの、丸みを帯びた四枚の外装が、花卉が開くように展開する。内に守られていたビームの発振器を外界に露出。

「さつさと逃げないと死んじゃうかもよ」

「もしあなたがそのつもりなら、逃げたって意味ない」それでもヒルデは退かなかった。

「教えてください。どうしてそんなこと……」

「あんまりしつこいと心変わりしちゃうかも」

「ナナコさん！」

脅しは通じそうになかった。ナナコは折れた。ふつと肩の力を抜いて、攻撃体勢にあったビットも引つ込める。やれやれといった調子でイルの隣に掛けなおす。

「冗談よ。いまのここ、アンタらに直接手を出すことはないわ。私たちの狙いは一人だけ……ま、それが終わったら、アンタにも覚悟してもらわなきゃなんないけどね」

「い、いけません！」叫び、ヒルデはナナコに詰め寄った。「あの方と戦おうだなんて」

「ならアンタが戦うつての。無理よね。アンタらにできないから、あいつが飛び回ってるんでしょうが」

「それは……ちよつと空を飛んだり、光線出したりもされるようですけどね。でも、とても穏やかな方なんです。わたしたちとにも変わるところはありません」

空を飛んだり光線出したりは十分異常ではないのか、それをなにも変わらないと称されては自分たちの立つ瀬がない、めちやくちやな言葉にナナコは呆けかけたが、

「お願いです、考え直してください、戦いなんて。ちよつとお話すれば、きっと仲良くなれるはずなんです」

はあ、なるほどね。

「さては、アンタが言いたかったのね。そのためにつきまとったんでしょう」

「ええ、そうですとも」ヒルデは迷いなく頷いた。「お友達になれるんですよ、わたしたちは」

「つたく、たいした役者なこと。でもおあいにくさま、演技っていうならこつちだつてそうよ。あんまりなれなれしくしないでちょうだい」

「いいえ、お二人が偽りになられたのは立場だけ……」

「ずいぶんな決め付けじゃない」

「ただの決め付けじゃありません。わたしはずっとお二人のことを見ていたんですから」
「それでなにがわかるって」

ナナコは自分の苛立ちが表情に出ていることを意識したが、ヒルデは少しも臆さなかった。「わたしは、あなたがなにを考えているのか、わたしのことをどんな風に思っているのか気になってしかたなかった」よく聞け、とばかりゆつくりと、言葉をていねいに紡ぎ出すようにヒルデは言った。「あなたも同じようにわたしを見ていたはず。わたしにはそう思える。

わたしたちは、ずっとお互いの胸の内を探りあつてきたんですよ。いまだってあなたは、わたしが言葉にしなかった想いを読み取つてみせたじやないですか、もっと仲良くなりたいたいんだろう、つて。大当たりです。お見事です。……いままでお友達同士でそういう経験をしたことはありませんか。わたしとあなたの間でも同じことができるんです。それを、わたしは確かめました。きようはじめてお会いしましたけれど、わけのわからないもの同士じやないんです。お互いを知るために心を通わせることが、わたしたちにはできるんですよ」

ばかばかしいとナナコは思う。あんまりばかばかしいので苛立たしさも吹き飛んでしまった。さつと優しい風が吹いて、どこかで木立がさざめいた。ひとときの沈黙が降りる。とつ

くに背景雑音と化していたかすかな地響きが耳に入ってくる。

ナナコはヒルデの視線から逃れるように顔を背けた。

「アンタよく真顔で言い切るわね」椅子の上で身じろぎする。「なんかこつちが恥ずかしいわ」

「そんなのわたしの方が恥ずかしいに決まっています」

ヒルデは顔を赤くしてうめく。ずっと黙っていたイルが噴き出した。

「でも、こんなときだから言うんです。ねえ、どうして戦いを起こしたりされるんです。なにが、お気に召さないんですか、おっしゃってみてください。武器に頼らなくなつて解決できるかもしれないでしょう」

問いかけても祈りともつかない言葉に、顔を背けたままのナナコは目だけを動かしてヒルデを見た。また一瞬の間。こたえてやることはできない。ナナコも答えを知らなかった。

なにが気に入らないのだろう、あの男は。

おそらくシフは尋ねればひょうひょうとこたえるだろうとナナコには思えたが、理由を知つたところで自分がやることは変わらないということもわかりきっていた。それなら気にするだけ無駄、いや違うな、ナナコは目をふせる。

たぶん、知らないままの方が、まだ平静に仕事をこなせるのだ。

「さあね。それも読み取ってみればいいじゃない」

撥ねつけるようにそう言って、ナナコは座っていた椅子の上に飛び乗った。そこからもうひとつ後ろに跳ぶ。ヒルデが咄嗟に手を伸ばしてくる。ひよいと逃れて、噴水の向こう縁に着地。

「ナナコさん!!」

「う、る、さーい」

軽くあざけてイルに視線を移す。

「そろそろ行くわ。敵が来るまえに、あのぼんこつの様子見ておきたいし」

「いつてらっしゃい」とイル。「えっと、その、がんばって」ナナコとヒルデを見比べて曖昧に笑う。

「アンタだってひとごとじゃあないわよ。いまのままでもそこらのぼんこつよりは働けるでしょうが。あいつやつつけたら、すぐ別のお役目がまわってくるんじゃない。ちゃんと構えておかないと知らないわよ」

ヒルデがぴくりと反応した。「やっぱりイルさんも……」

「あー、あはは」

「ま、それまでちよつと待ってなさい。そういうわけで、ヒルデ。私もイルも、次会うときはたぶん攻撃命令受けるから。ちゃんとして逃げんのよ。逃げ場なんて残らないとは思うけどね、さっきみたいなこと言っていると真っ先に死ぬわよ」

言い捨てて、ナナコは高く飛んだ。

名を叫ぶヒルデの声を背中に聞く。ナナコはもう取り合わない。長々と見送られるのもごめんだった。足早にその空域を離脱する。

ナナコは掘削メカの降下ポイントへ進路をとる。大量の砂煙が上がっていたようだが、収まりは始めている。それも高山の風に流されて徐々に消えつつあった。メカは乾燥した地表付近をある程度掘進し、堅い岩盤に到達しているのだろう。初っ端につまづきはしたが掘削能力自体は高く評価できる……本当にそれでいいのか？ なにかおかしい。あれは、急ぎすぎではないのか。

目にした光景により現実的な疑問が鎌首をもたげてきて、ナナコの意識はそちらに向く。うまく気持ちを切りかえることに成功する。

掘削メカを投入したシフの真意は、それを囷に敵を誘い出すことのはずだった。作戦要項として示された地下土質サンプルの採取というのはついでにすぎない、と、少なくともナナコは理解している。

そうだとすると、いまの掘削メカの挙動は少々おかしい。

どんな者でも、戦闘能力を持つているかどうかなど関係なく、どこかでいまのような異変に気づいてその発生地の特長をこころみようとすると、いきなり地面に耳を当てて異常振動の震源を探ろうとはしない。普通はまず広く周囲を見渡すだろう。まして目標の敵は自分たちと同じように空を飛ぶ。高空に上がってより広範を一望しようとするはずだ。そのときあのような砂煙はまさに狼煙のように位置を主張する。もっとうまく利用すべきなのだ。

それなのにあのメカは、自己の性能を最大限発揮してすみやかに深い穴の中へ潜ってしまった。これはシフの思惑からすれば得策とはいえない。あの男が設定したプランではあるまい。いったいあのメカはなにをやっているのだ……やはり、直接様子を見に行ってみなければ。

盛大な砂煙は消えつつあるとはいえ、実際にその場に降り立てばまだまだ埃っぽいに違いない。地中を掘削中のメカに近づくのはさらに気が重かった。まあ、テトラを組めばいいか、呼び戻した残り四機のビットの飛来を視認して思う。

すべてのビットが主の元に揃い、準備は万端といったところだが、ここにきて更なる異常にナナコは気づいた。

掘削メカが地中を移動している。

それが異常だ、と気づくのに、いままで時間が掛かった。深い地下の土がほしいなら、真っ直ぐ下に向かって進むべきなのだ。それが、まるでなにかに引き寄せられるように進行しているのである。

ナナコは違和感を強くする。手元の情報端末から掘削メカに呼び掛けてみる。普通ならそれで侵攻目的地くらいはわかるのだ。しかし応答がない。

ならばと今度は宇宙船そのものを呼び出してみる。クロークで隠れている船に自分から通信を試みるなど前代未聞だったが、しかたがない。

リレー衛星がナナコの端末の信号を拾った。ミッションユニットマネージャー（作戦機しやう控御コンピュぎョータ）から応答がある。

いまは戦術管制能力を持つメカや、偵察が得意なサキが出ていないから、行動中の戦闘メカの状態はこのミッションユニットマネージャーに集約されている。このコンピュータは、より上位のシステムであるダイナミックミッションプランナーと連携していて、場合によっては、本来の予定を変更して別働隊の援護に向かえ、というような具体的な指示を出してくることがある。ようするに宇宙船から戦術管制をやっているわけで、末端の戦闘メカたちにとってこれは支配的だ。

ナナコにとってはそうではない。シフプランズに命令できるのはシフだけである。マネージャーやプランナーといった作戦システムはまれにナナコにも「お願い」をしてくるが、聞くかどうかを決める権利はナナコにある。もっとも言われる通り動いて状況が悪化するということはまずないから、優れた選択肢を提示してくれるのだと思えば、意思決定支援システムとしてはそれほどまずくなかった、ナナコの個人的な感想としては。というのもふしぎなことに、ナナコたちがこれら作戦システムに頼ることを、シフはこころよく思っていないようなのだ。

どうもあの男は、自分たちがコンピュータシステムの言葉を鵜呑みにするのが気に入らないらしい。そういえば、とナナコはいつかのシフの言葉を思い出す。せつかく自分の頭があるのだからそつちを使え、というようなことを面と向かって言われたことも、あったな。

居住区にみんな押し込めて、かわりに高性能な機械をどんどん増やした男の言うこととは思えなかったが、そういう理由で怒っているなら理解はできた。ただそれならそれで、機械ではないシフからもう少し臨機応変な指示があつて然るべきだ、とも思える。

ともかくナナコは、いまはシフの不機嫌を恐れている場合ではない、と、自分の頭で判断した。嫌な予感がする。

ナナコは作戦システムに問い掛ける。あの掘削メカはどこへ向かっているのだ？ システムがこたえる。

〈U G T - 3 からの返答なし〉

返答なし。応答なし、ではない。

システムはこう言っていた——該当機は通信には応じるものの、その質問にはこたえない。与えられたミツシヨンプランの一部を独自に再構成している形跡が認められるが、詳細は不明。上位レイヤからの要求を拒む機能をすでに構築しているようだ——後半はシステムによる戦況評価だ。テンタクル・システムの外の戦闘メカたちの命令系統などには無関心な、ナナコ自身の考えではない。ナナコにはこの評価を自分の頭で論理的に分析し、事態の全容把握に努めるといったことは、できなかった。そういうのはシフか、あるいはキョウコの役割で、ナナコはいつも言われた通りやるだけだ。

が、なにか非常によくないことが起こっているということくらいはわかる。

ミツシヨニュニットマネージャーやダイナミックミツシヨンプランナーは、宇宙船自体が装備する、作戦の全容を俯瞰するシステムだ。それらですら、掘削メカの行動理由を把握していない。それらの上に立つのはもうシフくらいだが、こんなものが彼の意思であるはずがない。

だれも、このメカの目的を知らない。聞き出すこともできない。
ナナコは背筋に冷たいものを感じる。

*

高速飛翔体接近。低空から浅い角度で上昇中の目標にナナコは向き直る。

敵との距離は二〇〇キロを切っていた。大型機相手ではないし、今回はサキの支援もない、ビット単体での探知距離としてはこんなものだろう、ナナコは交戦に備える。

もちろん敵もナナコの存在に気づいていて、それまでのなにかを探るような蛇行した軌道は、しっかりとナナコを目標に定めたものに変わっている。脇目も振らずに向かつてくるその様子は、ナナコにはずいぶん慌てているように見えた。

ビットの主力ビーム攻撃の有効射程に敵が突入するまで、三分ほどだった。敵、交戦圏内へ。まだ目立った機動はない。互いに万全で睨みあった状態、いま先制したところで利は少ないだろう、ナナコも無感動にただ見つめる。

敵はひたすら真つ直ぐ突つ走ってくる。牽制弾を放つとか、弧を描いて接近するとかいったことは、なにもない。やはり不意打ちでない先制は無駄と割り切つてのことか、はたまたなにも考えていないのか。ナナコはいつでも防御できるように意識しながら様子を見る。

先に動いたのは敵の方だった。といつてもそれは攻撃行動ではない。敵は、高速のままでぐいと身を起こしたかと思うと無防備に両手を広げ、まるでそれでブレーキをかけるとでもいうように十秒ほどをかけて減速し、ナナコのすぐ手前で止まった。

実にうさんくさい、しらじらしい、とナナコは思う。相当な機動力があるくせに。完全に静止した敵に向かってナナコは口を開く。

「遅かったじゃない」

「ご、ごめんなさい」

なんだ、こいつ。

「……まあいいわ。とにかく目標発見、つてね」

腕組みしたナナコは敵の姿をしげしげと見つめた。

見れば見るほど人間だった。人間の少女だ。空を飛べる分、ビームを撃つ分、ヒルデよりも自分たちに近いかもしれないとナナコは思う。足元からブーツ、膝上まである靴下、グレーのプリーツスカートに、前面に開きがくるアウターを着込んでいる。白い肌に真紅の瞳が映え、白銀の長髪が風に流れる。

そんな相手の容姿をたっぷり観察して、最終的にナナコの口をついて出た感想は、

「えらくちつこいわねえ」

「気にしてるんだから、背のことは言うな」

少女は目を伏せ、痛いところをつかれはしたが自分はまったく平静だ、といった口調でそう返した。

「あら、それは失礼」

「……君も、ここに住むために、わたしたちを消しに来たの」今度は少女の方からナナコに問い掛ける。

「当然、それが命令だもの」

「星に住むのが目的でしょ？」

「たぶんね」

「そのためにわたしたちを消すなんて、可笑しなこと。話し合えばどうともなるのに……なんでそれがわからないのさ」

「話し合いねえ……」どいつもこいつも同じことを言ってくれる、ナナコは辟易した。もうたくさんだった。なぜ。どうして。自分の知ったことではない。わかってない、というならおまえたちだってそうだ。知らない方がましということだってあるのだ。感情的な言葉は口にせず、軽い口調で少女の問いにこたえる。「んー、それは命令されてないもの」

「命令……君たちは命令がすべてなの」

一瞬、返答に詰まる。

もちろん、命令がすべて、というのはいささか行き過ぎた表現だ。たとえばシフブランド同士で交わすたわいない会話や、料理が得意なサキが作った甘味を取り合ったりすることは、だれかに指向された行いではない。絶対の支配者たるシフの手足であるにも関わらず、ナナコは目覚ましを黙らせていつまでもベッドから出ないということもままあったし、見かねたキョウコが叩き起こしにくることにしても、それは彼女が勝手にやっているものであって、そこに命令云々は介在していない。普段のナナコには居住区の人間たちとさほどは変わらぬあたりまえの生活があつて、シフもそれに口を挟んだりはしなかった。シフブランドは、特別役目がないときは、けっこう好き勝手に羽を伸ばした。彼女らはシフに言われていないことだつてやる。

しかし、命ぜられたことは絶対なのだ。

「命令は絶対厳守」

ナナコは、結局はそうはつきりと言い切った。それをわかってほしかった——自分がそう思っていることに気づいて、ナナコは少し混乱した。

「そもそも、私たちはお仕事のために、頭の天辺から足の先まで弄られてるからねえ」余計な言葉が口をつく。「命令破るなんて、できっこないのよ」

「そこまで……そこまで弄られて平気でいられるの」

「ホントはつらいことなのかもね。でも、弄られた脳みそじゃあよくわかんないわ。あははは」

「……なんて……悲しい」

半ば破れかぶれに笑ってみせるナナコだったが、その言葉ひとつで急にさめた気分になった。

「なに、それ。アンタに同情されたくないわ」険しい表情でナナコは言った。「見ればわかるけど、アンタも私と同じようなモノじゃない。体中弄られて、力を与えられて……そうでしょ」

「違うよ」

「どう違うっての」

「……わたしには、どうしてもやりたいことがあった。それをやり遂げるための力を、お父

さんにもらった。わたしは、わたしの意思で、この力を使ってがんばってる。だれかの命令でがんばってるわけじゃない」

「へえ」それは結構なことだ、ナナコは氣のないあいづちを打つ。

少女の主張はさほどナナコの氣を引かなかった。彼女がやり遂げたいこととはなんなのか、そのためにどんな力を与えられたのか、少女の言葉からはいくつかの枝葉が広がって見えたが、それらはいまのナナコにとってはどうでもよかった。問題になるのはその戦闘能力のみである。当然その戦闘能力も、彼女が「父からもらった力」とやりに付随するものであろう、いやそれどころか、実はそれこそが本質という可能性すらある、とナナコは冷ややかな目で少女を見つめる。

本来、戦い、などとは無縁そうな、こんな穏やかな星に住んでいながら、ふつう親が自分の子に超常的な戦闘能力を付加したりするだろうか。聞く限りこの父娘の關係は比較的良好そうだと読めるが、だからこそ言えない、なにか後ろめたい意図が、父親の方にはあるのではないか。もしそうなら、そいつの真意というものはだれにもわからない、目の前の少女にすら。

そして、たとえいかなる事情が背景にあるとしても、この少女がそれを使って戦うという点においては、やはり自分たちは似たようなモノだ、ナナコはそう思った。

「だとすると、また物騒なプレゼントもあつたものね」

「どういうこと？」

「その力、つての、ホントにアンタが思ってるようなものならいいけど」

「それって」

「ま、そんなことどうでもいいわ」まだなにか言いたげな相手を黙らせる。「なんかうつかり話し込んだじゃったけど、はやく終わらせないと……よく考えたら、あんまり時間もないのよね」

そのように言いながら、敵と会話ができるというのは恐ろしいことだ、とナナコはあらためて思った。

ヒルデにせよ目の前の少女にせよ、シフブランズの事情や立場をよくは知らない彼女らの言葉は無遠慮にナナコの心の隙間に割り入ってくる。くだらないと一蹴し、すぐにでも追い出し、忘れ去りたいところなのに、どうにも小さな欠片が隅に残るのだ。そのうえそうして残った言葉の欠片は、ナナコ自身が抱いていた、普段はナナコ自身も気づかないでいた些細な疑問や感情の機微をぐんぐん吸い上げ固めていくのである。

こいつらと喋っているとどうも調子が狂う。余計なことばかり考えてしまう。だが、探り合いならばまだしも、こんなやつらと心を通わせるわけにはいかない。敵は敵のままでもいい。主の意を汲んだすべてのビットの外装が一斉に展開する。

少女の身が硬ばる。

ビットは敵に機首を向け、狙いを定めたままナナコの前方広く間隔を開けて並ぶ。

「さっさと消えなさい」

「くっ」

テンタクル・レイ、あやめ色をした鋭いビーム束。威嚇や警告ではない、七発が同時発射。複数のビームが交差して一点に威力を集中する。だがその空間に敵はいない。敵は後ろに逃れている。その手に瞬時に収まったライフルを、ナナコは注視する。

機動戦用ビームライフル、高出力のビームソード、敵の武装については聞き及んでいた。しかし実際に出会った敵はまったくの非武装で、武器を持たずしてどうやって戦うつもりかとナナコはずっと疑問に思っていたのだ。必要にかられてから、いずこからか武器を転送するのだとすれば、まずその拠点を制圧することで敵の攻撃力を奪うこともできる。

どうやらそうではないようだ。別所から転送したというより、あらかじめ微小化して持ち運んでいたものを手元で復元したように、ナナコには思えた。

円環状に整形された衝撃波が銃身付近から広がったのを見て、ナナコは自身の想像があながち的外れではないのを確認する。あの衝撃波はきわめて瞬間的な復元に伴って発生したものだろう。環境差を吸収したうえで二点間の空間ごとそっくり入れ替える、まともな転送手段であれば、あんなことは起こらない。

なんであれ敵はある程度好き勝手に武器を出したり引つ込めたりできるらしいことがわかったわけだ、とナナコは相手の武装ピックアップ方法の推測を打ち切り、目の前の戦闘に集中する。

敵ビームライフルはイルのフォトンライフルより一回り小さいが、それで性能が劣ってい

るとは限らない。ビームソードもいつ繰り出してくるかわからなかったし、それを手にする瞬間に隙らしい隙が発生するとも思えなかった。敵はすでにビームソードも装備しているのだ、とすら思っている。接近戦は危険だ。

敵から反撃のビーム攻撃がくる。ナナコはもう三角形の面障壁を展開していた。障壁に敵ビームが突つ込み、爆ぜる。淡い霧のように飛び散った粒子がビットのセンサ機能をほんの一瞬掻き乱す。

イルを上回った敵。時間的な猶予もあまりない。勝利の条件は厳しい。だがやるしかない。三機のビットがばらばらの角度から敵を追い立て、小針のようなビーム弾を連続で吐き出した。収束型のレイと比べると、そのニードルビームは弾体が小さく速度も遅かった。しかし見た目通りに連射がきくうえに、テンタクル・システム自体への負荷も低い。

機関砲弾のように連射されるニードルビームはほとんど連なった線に見えた。射撃しながら旋回・機動するビットはどこまでも伸びるその線の一端を咥えて振り回しているようなものだ。

しかし戦闘機動中の、この敵には、電波的な追尾は効果が薄かった。照準システムは目標位置も速度も欺瞞された。目と、勘で狙った方が全然ましなくらいで、ナナコは止むを得ずそうするのだが、イルなどと比べるとそういう行為に特別秀でているわけではない。そのうえ敵の機動はビットを凌駕している。

三機のビットはナナコの管制の下、超高速で縦横無尽に切り返す敵になんとか機首を向け、

そして小刻みに震えている。線と連なったビームで空間を薙ぎ払い、敵を切り裂くように狙うのである。が、これがどうにも当たらない。ことごとくが紙一重で、しかし危な気なく避けられてしまう。

考えてみれば当然といえた。

ビーム輝線を観測しながらそれを目標位置へ「振る」わけだが、その輝線は狙われる側にも丸見えなのだ。かんとんに軌道を予測され、最適な離脱角度で逃げられるのは必然だった。なにせ、常に照準用ビームを垂れ流しているようなものなのだ。

同時にそれは、たとえビットのターゲットシステムが正常であつても命中率が上がるとは限らない、ということでもあつた。正確かつ高速な攻撃照準は、敵に回避のための大量の情報を与えることにもなる。そんな情報を得たところでどうにもならないのが普通だが、敵は普通ではない。

そしてこの自分もまた、そうだ、ナナコは気づく。自分だって、そんな風に狙ってくれた方がまだやりやすい。お互い様だ。それなのに敵はなぜ、わざわざ攻撃照準を乱すのだろう。理由はわからないものの、ともかくこのニードルビームによる攻撃が有効でないことは確かだった。ナナコは攻撃を中断。

その途端、敵のビームライフルが三度閃く。ナナコが維持する面障壁に、極短時間の間に二発が連続で着弾、防御力を大きく減衰させる。反射的に出力を増していなかったら貫通されていたかもしれないと、ナナコは肝を冷やす。自己のシールドで受けるのは避けたかった。

あれはそれなりに痛い。

残る一発は、敵に最も近い位置にいたビットに向けていた。しかしビットはぎりぎりのところで外装を閉じていて、ビームを弾いている。姿勢を崩しはしたがすぐに立て直す。もし開いた口のなかにビームを叩き込まれていたら、ビットはひとまりもなかっただろう。ナナコは胸を撫で下ろす。

敵の方は驚いた様子だ。面障壁の突破は無理でも、機動砲台の一機くらいはと期待していたことだろう。

実のところビットにもわずかながらダメージはあった。コンパクトかつ俊敏で、被照準をかわす手段も豊富に備えるビットが、高出力のビーム砲でいきなり狙い撃たれるという事態はそれほど深刻に考えられてはいなかった。装甲材そのものの対ビーム防御力に特筆すべきものはなく、ビットが無事だったのは外装に施されたコーティングがかるうじて功を奏したからにすぎない。そして、被弾部位周辺のコーティング厚はとも次弾の直撃に耐えられるものではない、と当該ビットのSME S（自己監視評価システム）が言っている。

本体機能に支障はない。ナナコは怯まず、今度はテンタクル・レイで敵を狙う。ビットの外装が再び開く。レイを放つたび、閉じる。

もちろん三機は激しく機動しながら敵を追う。ナナコのそばを離れない、機動できない防御待機の四機も、その場から攻撃に参加した。高エネルギービームの収束砲であるテンタクル・レイはニードルのような連射はできない。しかし複数のビットが射撃のタイミングをず

らし、連携して動くことで、それぞれの隙を補うのだ。

敵は一気に増速。ナナコの周囲を旋回する軌道に乗り、その旋回半径を広げて急速に離脱していく。加減速と角度変移、姿勢変化を織り交ぜながら、全体としては高速を保ったままでナナコのレイを避ける——そして、流れのままに身を捻り、ビームライフルを向けてくる。予期していない反撃だった。敵を追おうと身を傾けていたナナコは咄嗟に、その場に倒れ込むようにジャンプ、後方に脚を投げ出した。すんでのところで腹の下をビームが通過。ビーム周辺大気のプロズマ膨張圧がナナコを襲う。シールドが抗うが、これはそうと意識しない限り、ダメージを完全に無効化することはない。わずかではあるが必ず痛みを残すのだ、そのようになっている。熱した空気の塊に引つ叩かれたようだ。

息つく間もなくナナコは続く危機を察知する。ちょうどナナコと同様に、テンタクル・レイの至近弾を体捌きで回避した敵の、ライフルだけが、また真つ直ぐナナコに向いている。強引な射撃姿勢……しかし、まずい。鋭く注視されている感覚。まるで土手っ腹に敵ライフルから伸びたガイドビームを受けている、それを眺めているような気分だった。無論、本当に照準波を受けているのではない。危機感、既視感、なにか正体のわからない直感めいたものが騒ぎ立てて、ナナコを焦りのなかへ引きずりこんでいく。

相手にしたって百発百中というわけではないはずだ。しかしこれは、だめだ、当たる。障壁はもう間に合わない。果たして先ほどのように避けられるだろうか、それとも耐えるべきか。いま決めなくてはならない。もうすぐ発射される。撃たれてからではどちらも遅い。

——すべては後追いで意識した思考であつたのかもしれない。悠長に対処行動を選択している余裕などあるはずがないのだ。敵のライフルはとつくに激しく輝いてビームを吐き出していたし、高機動で敵弾をすり抜け続ける、といったスタイルに慣れていないナナコは回避の失敗を恐れてシールドに集中している。

そしていま、ビームはナナコの腹のすぐ手前にまで猛然と迫り——いったいいつの間にそこにいたのか——射線を塞いだビットに直撃。外装表面に形成された特殊皮膜をいくらか挟んでビーム束は霧散した。

恐れ、構えていた衝撃がいつまでも訪れない。被弾を覚悟した腹のあたりになんともいえない違和感が広がり、ナナコの心身はほんの一瞬萎縮する。ほんの一瞬、しかし極限状態のナナコには、それは異様に長い時間に感じられた。

ビームに弾き飛ばされたビットがナナコの額にぶつかって、もう一度跳ねた。ごっん、と間の抜けた音とともにナナコの顎も上がった。ナナコは空白の時間を脱した。ようやく、拡散して威力を失った敵ビームに気づく。なにが起こったのかを理解する。

すでに自動で自機姿勢を制御、焼けた外装を開いてレイを放ちながら、そのビットが言っている、次弾の直撃には耐えられない。

それはさっきあつちのやつに聞いたでしようが。わかつてるなら黙って見てればよかったのよ、余計なことをして。

ナナコからの指示が途切れたその瞬間にビットたちは独自に自律戦闘へ突入していた。ビ

ームの撃ち合いはいつときも止んでいない。とはいえ、電波的攻撃照準が事実上無効化されている現状、ビットの機能では敵に狙いを定めることすら困難だ。急ぎナナコはビットたちに、再び支配の根を伸ばす。

てんでばらばらの方向に走っていたレイの輝線が、逃げ回る敵の周囲に集まりはじめる。だがそこまで。半径七五〇メートルの仮想円を一〇秒足らずで周回する敵にレイを直撃させるのは、ナナコにとっても容易でない。円の中心に捉えられているのはナナコ自身であつて、この距離で許容される発射角度の誤差は、互いに百分の何度あるか、という厳しいものだ。

ナナコの方ではビットを敵に向かわせることで、この条件をいくらか緩和することができ。が、そうすると今度は敵の速度自体が問題になつてくる。度を越えて接近すれば、機動で勝る敵をろくに補足することもできなくなる。敵はそれも見越して動く。

危うい、立ち止まっていれば当たっていたかもしれないようなビームが、ナナコのそばをいくつも通り抜けていく。敵は回避と反撃を同時にこなして見せている。ビットの数を生かした間断ない連続攻撃によつて、敵に反撃の余地を与えない、というナナコの思惑通りにはいかなかった。

たぶん、こちらの照準精度が劣っているせいだ。敵は当たりそうもない射撃を無視しはじめている。危険弾か、そうでないものか、それをどうやって見分けているのかわからないが、これでは手数が多くても意味がない……自分にイルのような射撃勘があれば。

無い物ねだりをしてもしかたがない。そんなことに意識を向けている余裕もない。

向かいあつて撃ち合うだけなら敵の方に利があつた。ナナコはあつさりとしてそれを認めた。再び面障壁を展開する。

ビットを使った障壁防御は攻撃と同時にに行えない。障壁の展開には、砲身の簡単な変形とビットの姿勢変移が必要で、撃たれてからではとても間に合わないのだ。撃たれる、と意識してからでも遅すぎた。つまり、当たり前そうなビームが来たときだけ防御する、などという考えは成立しない。

しかしナナコは自身の攻撃密度を可能な限り維持したかった。現状、レイを狙つて直撃させるのは困難であり、狙い続けていずれおとずれる、一発の命中弾を待つよりないのだ。すべての射撃が敵の回避行動を誘えるわけではない、それは納得したもの、だからといって手数を減らしたくはなかった。

敵のビームライフルは一度のエネルギーチャージで三回しか攻撃できない、ということはとつくに知れている。それなら三発凌いだ直後ならば、防御用ビットも短時間攻撃にまわせるのではないか、そんなことを考える。

状況はもう少し複雑だった。というのも、なにも三発すべて撃ち尽くさなくとも次弾のチャージは可能なのだ。ナナコは誤った戦術を試す前に、それに気づく。

シフが、敵ライフルをそのように解析したわけではない。しかし普通に考えれば、それができない方がおかしかった。現実には敵は超高速の連続射撃を意図的に控えている節があり、

それはナナコの想像の正しさを裏付ける行為でもあった。エネルギーチャージの隙を確実に狙うことはできないのだ。

そのような状況があつて、敵の射撃間隔は平均で見れば、ビットの攻撃／防御のモード変更に十分な程度には開いている。が、敵はライフルを構えるだけ構えて、いったん引つ込める、というような真似までやってきて、こうなると本当に勘や駆け引きの世界だった。ナナコはどうしても早めに防御にまわり、その防御を解除するタイミングは遅れ、次第に面障壁を構成する三機のビットは攻撃の機会を失っていく。

それでも常時四機は常に攻撃体勢にあるのだ。ナナコは思うように戦局を組み立てられないことに焦れていたが、焦りは敵の方でも同様のようだった。ビットたちが吐き出す無数のレイをかいくぐりながら、敵はここにきて徐々に旋回半径を狭めつつある。自ら離れた間合いを詰めてきている。

敵ビームソードの存在が脳裏にちらつく。否が応にも緊張の度合いが高まる。ナナコはしかし、慌てることはなかった。敵の行動はまったく予想通りだった。敵ビームの威力は障壁の防御力と拮抗している。閑散な、間を開けた攻撃では突破は不可能だと敵も悟っていて、しかし連続射撃は隙を作るからやりたくない、というわけだ。ならば回り込んで撃つしかないと考えるのは実に自然で、それは距離があつては実現できない。ナナコには、自分が障壁の後ろに隠れば、いずれ敵は接近戦を選択するだろうことは最初からわかっていた。

間合いが詰まれば見掛けの速度が跳ね上がる。咄嗟に狙いを定めることはさらに難しくな

るが、そのかわりに、照準誤差が着弾点に及ぼす影響はぐつと小さくなる。各ビットの飛行間隔にしても狭い方がなにかと連携を取りやすい。それにこちらは狙い撃つばかりでなく、ニードルビームを撒き散らすことだってできるのだ。

敵なおも接近。五〇〇メートル。いまのところまったく減速する気配はない。このままこれ以上旋回半径を縮められるとビットでは追い切れなくなる。速度性能の限界にはまだまだ遠いが、回避や攪乱、最適射撃位置占位のための機動も加味すると、外装の開閉動作にそろそろ支障がでてくる頃だ。閉じっぱなしではレイもニードルも使えない。

いまや敵も、こちらが接近を迎え撃つ構えだというのはわかつているだろう、ナナコはそう割り切り、敵の旋回に付き合わず、先だってビットを呼び戻す。

仇となった。

ビットは旋回せずとも前後左右に機動できるが、どれかというなら前に進むのが一番速い。理由はビーム砲が機首にあり、尾部には推進系があるからだ。ビーム砲を敵に向け、前に進んで戦うようにできているからだ。そのままで縦にも横にも移動できるし、静止することも近づきすぎればバックもできる。だからビットのビーム砲はいつだって最大の脅威を睨んでいる。ビットの機首は常に敵に向いていなければならない。

しかしこのとき、敵を追っていた三機のビットは揃ってナナコを振り返った。ナナコに機首を向けて進もうとした。他と比較して脆弱な尾部が敵に晒され、それに気づいた敵は壁を蹴るような勢いで進行方向を逆転させる。急な切り返しの意図を察したナナコは今度こそ慌

ててビットを、ひっくり返した。回避タイミングを計る余裕がなかったのだ。敵ライフルが輝く。

一回の射撃に思えた。しかし三方で光が弾ける。それぞれ別方向に向けられた超高速射撃の全弾が、目標を捉えた。

ビットたちはぎりぎりで転回成功、装甲面を敵ビームに向けていた。外装を一枚失った機体があるものの、被撃墜機はなかった。これで敵はしばらくの間ビームを撃てない。ビットたちは姿勢制御、もう一度進行方向に向き直って加速しようとする。

そんな彼らを、後ろから敵が抜き去った。

敵はビットを撃つと同時に旋回を止め、真っ直ぐナナコに突っ込んでいた。ナナコはビームへの対処で精一杯だった。先の、敵のビーム攻撃に気づいてビットを転回させ、ビームを受け止め、全機姿勢制御を完了するまでに半秒以上の時を消費してしまっている。逃れるつもりはないはずのナナコだったが、この状況は想定外だった。攻撃用ビットの帰還を待たずに接近戦をやるわけにはいかない。

敵の左手に赤光が宿る。焦りが増す。思考が熱を持つ。

直線距離の五〇〇メートルなど戦闘機動中の敵にとつては、もちろんナナコにとつても、文字通りひとつ飛びだった。二人の間で違うのは、敵はすでに十分速度に乗っている、ということだ。いまから後方へ加速してもどうにもならない。黙っていれば敵が自分に体当たりをぶちかますで一秒とない、とナナコは感覚で捉える。どうにもならないが、押されるよう

に、ナナコはさがった。

追い抜かれたビットたちは結果的に無防備な敵の背を撃てる状況にあったが、あいにく発射機構が閉じていた。外装を展開してビーム砲を露出する、という機械的な運動を行うのにまた半秒を要した。敵はもうナナコの目の前に迫っていた。当たろうが外れようが、敵を狙うテンタクル・レイの射線にはナナコ自身も入ってしまう。しかしナナコには障壁があった。敵ビームソードと三発のレイの威力に、同時に耐えうる保証まではなかったが、そこまでは思考が追い付かない。敵がビームソードを振り上げて、ナナコは反射的にテンタクル・レイを――誘われた――気づいたときには遅かった。敵の姿がかき消えた。

いやわかつている。敵は真上に跳ねて身を捻り、この自分の背を斬り付けるつもりだ。わかつていたがナナコは振り返らなかった。敵ビームソード以前にまず三発のテンタクル・レイを防御せねばならなかった。

結局二発が障壁を叩き、一発はわずかに逸れた。障壁はなんとか保った。その間ナナコは頭上で山なりの軌道を描く敵の気配を追い続けた。

敵が降ってくる。ビームソードを携えて。もう本当に時間がなかった。追い込まれたナナコはいますぐにでも逃げ出したい気持ちに囚われたが、どうにか耐え続けた。とにかく左右いずれかに走ればそれで避けられる、ものではないのだ。

ナナコはやることは全部やっていた。あとは祈るしかなかった。間に合え。間に合った。

ナナコのそばを離れなかった、それなのに常に攻撃体勢にあった、四機目のビットが変形を完了した。ナナコの背後で四つめの障壁頂点となる。テトラ・テリトリ、立体障壁が頂点ビットごとナナコを囲い込んだ。ナナコを目標して降下突撃、完全に攻撃体勢に移っていた敵は、目標の手前にいきなり現れた力場に泡を食った。

いまさら攻撃を中断できなかったか、敵ビームソードがテリトリの一面に突き立った。ぎこちない斬撃ではあったが、ビームソードが内包する破壊力は圧倒的で、形成直後の障壁面はいささか不安定で、せっかく形成したテリトリはほんの一瞬しか耐えられなかった。しかしそれは、ナナコが敵の間合いから逃れるために必要な、一瞬だった。

テリトリ消失と同時にナナコは前方へ翔けた。振り返る。出遅れた敵はナナコを追うために機動しようとしていた。それが突如、なにか大変なものを目にしたという様子で、ぴくりと止まる。ビームライフルを放り出し、その手で竦んだ体を庇う。直後、三方から飛来した光線が敵を打った。

レイやニードルとは大きく異なる、より強力なビームを対象に照射し続けるテンタクル・ブレス。イルのリニアレイなどに近い。無論ビット一機あたりが放つビームの規模はリニアレイに劣るものの、負荷を度外視した大技だった。当たった、とナナコは思った。

だが、まだだ。ブレスは敵を貫くどころか、焼き付くどころか、かざされた腕の前で堰き止められている。敵のバリアシステム。

そのバリアが力を増していく。敵少女の肌や衣服すら離れ、球状の防御フィールドとなっ

て大気を侵食していく。境界層が薄青く発光している。とんでもない大出力に思えた。ナナコは全ビットを投入して攻撃する。敵は両手を前に突き出し、ビームソードを倒して構え、ライフルを失って余った右手を剣身に添えるようにして耐える。苦悶の表情。効いている。ここで押し切れば勝てる。ここで決められなければ、おそらく勝てない。

敵防御フィールド境界表層にブレスの収束目標点を取る。そこに威力を集中する。届け、ナナコは敵を見据える。

目が合った。

「つ……」

きまりが悪い。なんだ、いまさら。

七機のビットが哮^{ウラガ}り立つ、つまらない情動ごと焼き尽くそうとでもいうように。

敵フィールド急速に減退。境界層が色を失っていく。テンタクル・ブレスが集中するエネルギーギーが、ほんのわずか、フィールド内部に沈み込んだ。

あとは、あつけないものだつた。敵の防御フィールドは球状のまま一気に収縮した。ブレスが再び敵を打ち、まだ抵抗する身をぐいぐいと、十メートルは後ろに押しのける。ついには遮る力のすべてが失効、ブレスは完全に交差して飛び抜けた。そのままどこまでも伸びていく。

派手な大爆発は最後までなかった。戦闘メカたちなどよりずっと慎ましやかに、敵は消滅した。

ナナコの息も限界だった。照射終了。
終わった。やっと。

目標消失点を呆然と見つめるナナコの耳に、微かな、乾いた破碎音が届いた。敵が最後に残した、控え目な衝撃波。それは大気を屈折させ、背負った太陽光を細かく手折^{たお}つてきらめかせ、それから責めるようにナナコを叩いた。

まるで装飾用の着色ガラスが粉々に砕け散って舞うようだった。美しかった。鮮やかで、きらびやかで、幻想的で……取り返しがつかない。ナナコは目を細める。儚いその光から顔を背ける。

その先に、あの少女の影を見た。

予感も直感も期待もなかった。そこに目をやったのはまったくの偶然だった。そこにはなんの気配もなかった。そこにある影は、しかし幻ではなかった。目にしてようやく鮮烈な存在を意識する。ナナコの右側方、同高度に、敵がいるのだ。超高速で突進してきている。すでに手を伸ばせば届いてしまいそうな距離。

ナナコは顔だけ向けて敵を見ている。敵もナナコを見つめている。前傾し、左の手にあるビームソードを抱え込み、いままさに跳びかかると身を絞って、肩越しにナナコを見つめている。たおやかに揺れる銀の髪のおかげから、信じられないくらいに赤い瞳が覗いている。うつむき、鬚^{かげ}りの奥にあつて、射るような眼光を宿している。

ナナコは身じろぎひとつしなかった。気怠げに首を傾けて、銀の少女をぼんやりと眺めて

いた。いまさら足掻いてどうにかなると思えなかったし、事実一握りの猶予もそこにはなかった。

それに、もしこの局面を生き延びて、たとえ再び好機を得ても、二度と先ほど同じようには撃てないだろう。あの光を見てしまった、いまとなつては。

空白の時間が訪れる。

しかしナナコは忘れていた。ビットたちはいつでも自律行動できることを。ナナコの支配から独自に抜け出すことができることを。そんな行為を許しているのはナナコ自身の所業であつたが、ナナコはそれを忘れていた。

気がつけば、ナナコの前に面障壁ができていた。

気がつけば、ビームソードの間合いの内、敵はふらりと佇んでいた。

その左腕を、一機のビットが自分の外装を開き、閉じて、挟み込んでいる。残りのビットは攻撃体勢で敵に機首を向けている。

一握りの猶予もないはずだったのに。

「……なにやってんの」

相も変わらず気怠げに、障壁越しにナナコは敵に問い掛ける。と、それだけで敵はあつさり緊張を解いてしまつて、だらりと伸ばし切った自分の左腕に視線を落として、

「咬まれた」

ナナコは頭痛を感じる。

「なんで、決めちゃわないの、って聞いてるの。お手上げだったわよ私、いま。アンタ戦う気ないの」

「君は、戦う気なの」

「はあ？」

「命令、なんでしょ」

「……はいはい、そうね。そーかもね」

溜め息がでる。

「……でも私、それなりにがんばったんじゃないかって思うわけよ」ナナコは頭をかきながら言った。「けっこういろいろやったじゃない、お互い。こっちは遊びのつもりじゃなかったのよね。そこそこどうなの、アンタ、怒ったり苛立ったり、なんにもないの？ いったん落ち着いたらもう平気？ それとも実は全然余裕でした、ってわけ」

敵は左腕を持ち上げて見せた。「痛い」

「いい気味だわ」

敵の腕からビットが剥がれ落ちる。障壁解除。剥き出しのビーム砲も引っ込める。

「おしまい、かな」腕を揉みながら敵が言う。「よかった」

「そんなわけないでしょうが」

「だって——」

敵は自ら口をつぐんだ。気づいたようだ。

敵の視線はナナコの背後へ、彼方の空を見つめて眉をひそめる。腕組みしたナナコも肩越しにそちらを振り返った。お互い隙だらけだったが、お互い気にも留めなかった。

二人の視線の先、たくさんの戦闘メカが向かってきている。

ナナコはそれらに目を向けたままで、はふん、と息を吐き出して、「ま、アンタとはここで時間切れだわねえ」

「どういうこと？　まさか、みんなのところへ」

「そうじゃないわ」ナナコは向き直って説明する。「下に、いるでしょ、でっかいのが」
「うん」

少女は神妙にうなずいた。どうやら失念してはいなかったらしい。

ナナコはもう一度、ちらと後ろのメカ群に目をやって、言った。「あいつらは、そいつを壊しにきたの」

「……うん？」

「面倒くさいわね……。なんていうか、そうね、下のやつが命令聞かなくなったから、じゃあぶつ飛ばしましょう、ってことよ、つまり」

「なんでそんなことに」わけがわからない、という表情。

わけがわからないのはナナコも同じだった。「知らないわよ。事故よ、事故、たぶん。それであれ、放っておいたらそのへんの街にもぶつかっていきそうじゃない。でもそれって、アンタのことやつつけろ、ってのとおんなじくらい強く、やっちゃだめ、って言われてんの

よね。だから」

「助けてくれるってこと？ ……だったらはじめから」

「うっさいわねえ、探り入れないでくれる。作戦よ作戦。いろいろ考えてるんだから」

「……作戦はわからないけど……それならわたしも手伝えるね」

言うと思った。

「だめね」とナナコはにべもなく断った。

「どうして」

「だって私、あいつ等といっしょに下にいるのを壊す予定だったんだもの」意地の悪い笑みを浮かべる。「それをアンタがいまのいままで粘るから、あいつ等の仕事は、アンタの足止めに変わっちゃったわ……ほら、来たわよ、わかるでしょ」

ミサイルキャリアの交戦宣言をナナコは聞いた。可変速タイプのミサイルが射出される——ミサイルは普通に全力で飛ぶと射程の早期に燃料を使い切ってしまう。あとは慣性で突っ込むだけなのだ。長距離用のものほどその傾向は高くなる。しかし可変速ミサイルは、終末誘導段階で高機動するための速度を回復できるように、道中の燃焼速度をセーブする機能を持つている——ナナコは詳しいミサイルの性能までは知らない、ただ、このタイプのミサイルは目標に近づいてから加速する、ということとは覚えていた。

で、だからなかなか近づいてこない。一〇〇キロ飛ぶのに二分半も掛かる。

「それじゃあ、まあ、せいぜい頑張んなさいな」

ナナコは背を向けるまえに、もう一度敵に声を掛けた。

「こつちも終わったら、またアンタの相手してあげるわ」

「そんな……」

「なによ、あんなのたいしたことないでしょうが。アンタけっこう強かったし」

「嬉しくないよ、戦うために強くなったんじや」

「似たようなモノでしょ」

「違うってば」

「はいはいわかったわよ、もう」

「ぜんぜん、わかってないよ。わたしは、」

「とにかく！ あんなやつら背負ったままついてこないでよね」

さつと背を向ける。降下する。後退離脱。

少女はまだもの言いたげだったが、追ってはこない。最後の一言がきいた。追えば邪魔になると悟っただろうし、またこの少女自身、己が身を守るために動き出さねばならなかった。ミサイル到達はまだ先とはいえ、少女はビームライフルを放り出したままだった。迎撃手段がない。

さて、どうするのかしらね。あの武器を拾いにいく、それとも他になにか隠している、まさかそのちっぽけなビームソードだけで戦うつもり？

いまとなつてはどうでもよかった。いずれにしても戦闘メカたちでは足止め以上の役目は

果たせまい、ナナコは他人事のようにそう思った。いまやナナコの戦闘撃破優先順位は、敵主力であるあの少女よりも、掘削メカの方が上だった。ミツシヨンプランナーやユニットマネージャーといった作戦システムが、掘削メカの行動を危険と判断したから。

掘削メカは結局目的を明かさないうままだが、その単純な掘進経路の延長線上には間違いなく街があつた。偶然か、狙っているのかにかかわらず、作戦システムは自軍の作戦を台無しにするその行動を許さなかつた。システムは掘削メカ撃破のための部隊を即座に編成し、機動展開用エントリーポッド（大気圏突入艇）に詰めて打ち出した。

しかし掘削メカは地中に潜んでいる。そのうえ装甲は厚く、自衛能力も持っている。用途が特殊だけあつてそれなりにコストが掛かっているわけだ。間に合わせの攻撃機部隊での撃破は困難になると予想され、だから、システムは近辺で作戦中のシフブランドに攻撃目標の変更、つまりは支援を求めた。だめもとで。

ナナコの方ではその要請をあらかじめ予期していた。そうなるだろう、と考えたのは敵の少女との接触よりもまえで、その時点でナナコには、敵をひとまず回避するという選択肢も生まれていた。もしそうしていれば敵の少女が勝手に掘削メカを叩き潰していたかもしれない。もつともそれだと、街が襲われた、と勘違いされるおそれはあつて、そうなれば宇宙船が危険だ——であればナナコ自身が、先立って掘削メカを攻撃してさえよかったのである。

だが、ナナコは敵の少女を迎え撃った。もし彼女に勝てれば、残った楽な仕事がどこぞの能天気な割り振られるかもしれないかつた。

結局撃破はかなわず、作戦システムからの支援要請が予想通りにきて、これをナナコは了解した。時間切れ、というわけだった。掘削メカの件には適切に対処するために残された時間的猶予が少なく、間に合わせの戦闘メカたちに任せてはおけないという気がナナコにはした。

シフブランドの一人が掘削メカに向かうのであれば、編成済みの攻撃機部隊はまるまる余分になる。掘削メカ撃破の役割はナナコに一任され、攻撃機はナナコの現戦域離脱を援護することになった。ナナコの言葉に嘘はない。

ただし、いまのところシフからの明確な指示があったわけではない。そして作戦システムらの要請は、シフブランドに対しては、なんら強制力を持たない。だからその要請を受けてシステムの言う通り動くということは、最終的には、ナナコ自身の意思と判断によってそうするのだ、とみなされる。突き詰めれば一種の独断行動というわけで、これが万一シフの意思に反するものであったとすればあとで面倒なことになるだろう。

だがナナコには確信があった。シフも、あの掘削メカには手を焼いているに違いなかった。新たに大量の戦闘メカを送り込むなどという、いくらなんでも大それた計画変更を黙認したのがその証拠だとナナコは思った。それでなくともナナコはあくまで作戦システムからの頼みに応える形で行動しているのである。ナナコが敵の主力との戦闘を放り出して掘削メカを叩くつもりだ、というのは、作戦システムを通じてシフにも知れているはずだった。

それに文句を言つてこないというのは、つまりほかに手がないのだ。あの男の苦い表情が

目に浮かぶようだ。

遠い爆発音が聞こえた。ナナコは自然と後ろを振り返る。空中に黒煙の塊が浮かんでいる。ミサイルの弾体片が弧を描いて落ちていく。

うわ当たってるし。

ともかく目標地点まであと少しだ。足元に深い森の木々が近づいてくる。忘れかけていた、湿った緑の匂いが鼻をついた。ナナコは密な葉っぱの天井をガサガサいわせてかき分けながら、悪態をつきつつ、着地。

「ん……？」

覚えのある場所に見えた。小首をかしげる。

豊かな自然も寄り集まれば、貴重だなどとは思えなくなる。「森の景色」と括ってしまえばどこも同じに見えてくる。それなのに、なにか引かかる。かすかな既視感がある。この場所を知っているような気がする。

ナナコはポケットを探って情報端末を手にとると、現在地周辺の、上空からの画像を出した。森、森、森。緑一色で解像度も低い。だがこれでいい、ナナコが欲しいのは精細な地図情報ではなかった。ナナコはこの星に降り立ってからの、自身の移動経路を画像に重ねて表示させる。それから目標メカの現在地もだ。……ああ、やっぱりね、予感確信にかわる。

首をめぐるせるとすぐに獣道が目についた。ナナコは獣道に沿ってしばらく飛行し、ふいと脇に逸れる。身長よりも高い草葉と、木々が作る天井の間をゆく。やがて目の前に現れる

高い岩壁、ナナコは草葉の上に立つように浮かんで、それを睨む。

深い洞窟の入り口が覗いている。

奥から地鳴りが聞こえてくる。

飛び込んだ。

まさか地面を掘り進むためのメカが、すでにそこにある洞窟を進んでいるとは——ナナコは暗闇を高速で飛行する——ずいぶんな怠け者ではないか。まあ、それでこちらも埃っぽい道をテトラに箆もって追跡しなくてすむのだから、手間が省けた感はある。

と、行く先、左手の壁面に大穴が開いていた。崩れた瓦礫がその穴の半分程度を埋めている。もちろん最初に来たときはこんなふうにはなっていなかった。掘削メカはここから、この洞窟に侵入したのだろう。

そこから先の地面や壁には巨大な掘削メカが侵攻した形跡をありありと見て取れた。天井も低い箇所はぶつけられて崩れていて、ナナコが飛び抜けるのに邪魔になるものはなにも残っておらず、ナナコはすぐに掘削メカに追いつくことができた。

ひどい騒音と振動だった。しかし眼前のメカは少しも、前進していなかった。メカは装甲を展開し、掘進システムを露出してここまで侵攻し、そしてそれを、分離・先行させてしまっていた。わざわざそんなことをする予定はなかったから、そんなことができるナナコは知らなかった。

だが、このメカがなにを考えてそんな行動に出たのかは、わかる。

いま再び棘つきボールのような形状に戻ってナナコの進路を塞ぐ、それはもはや掘削機能を持たない、ただの巨大な戦闘兵器だった。そんな敵機の装甲の節々に走る細いスリットに光が灯り、ぼんやりとナナコの顔を照らし出す。ビットは敵の攻撃照準波を捉えている。

周囲に満足に機動できる空間はない。進路を塞がれてしまう程度には壁も天井も近かった。ナナコは障壁を展開する。ほとんど同時に、敵がビームを発射した。

完璧に防御してしまつてから、遅れて驚きを意識する。先制されるとは思っていなかったのだ。ナナコは、自分が攻撃すれば相手は自衛のために反撃してくることはわかつていた。だが現状はそうではない。単純に敵の反応が早い、というような話とも違う。あらかじめ掘進システム部を逃がし、戦闘システム部がおせんぼ、まるではじめからだれかを迎え撃つつもりでいたかのような行動だ。ナナコのことを待ち構えていたとでも言いたげな、動きだった。

「ちよーとーじゃない」

着陸もままならなかった、ぼんこつのくせに。

敵機の機動力は劣悪、というより現状ではおそらく身動きできないだろう、面障壁を回り込まれるおそれはない。立体防御への備えは不要、とナナコは判断。四機のビットを攻撃機動へ、同数のテナクル・レイで攻撃する。しかし、すべて敵装甲表面を流れて消える。

「あら……」

重装甲で固められた敵機はテンタクル・レイの直撃にも耐えた。また、撃ち返してくるビームはあの少女が使ったビームライフルに威力でわずかに劣る程度、つまりは十分強力だった。しかもそれが多数の砲台から連続で発射されるのだから厄介だ。面障壁を脅かすほどの威力はないとはいえ、このままでは消耗戦になってしまう。

消耗というならナナコはそれまでの戦闘でとくに疲労を感じていた。実に、とんでもない相手だった、あの少女は。高威力できわめて安定したビームを、障壁面のまったく同じ箇所に、同じ角度で、超高速で撃ち込んでくるのだからたまったものではなかった。それを受ける障壁は防御力を十分残しているにもかかわらず、エネルギーの均一化が間に合わないためにいつ貫通されてもおかしくない状況にあった。

まあ、いまの敵はこの棘ボールだ、ナナコは寝ぼけた目を覚ますように、軽く頭を振って敵機を見据える。

敵機のビームはどうやったところでナナコの障壁を貫通できるような代物ではなかった。たしかに持っているエネルギー量が多い、しかし弾体はやや大きすぎ、だから減衰が早く、結局大気中を進行する速度は並の戦闘メカたちのビームと大差ない。威力はあっても鋭さがまるで足りないのだ——と、その一発を簡単に評価するならそうなる。だが、総合的な火力ではあの少女のライフルをすら、明らかに上回っている。なにせ発射装置側に長いチャージ時間というものが存在しない。

やはり来てよかったと、引つ切り無しに飛んでくるビームを防ぎながら、まだ余裕のある

ナナコは思いを巡らせる。こいつは意外な難敵だ、作戦システムが編成したメカたちには荷が重いだろう、一筋縄ではいくまい。しかし洞窟を抜けた先にはいくつもの街がある。あまりのんびりとはしてられない。……ここから一番近い街が、すでに捨てられたものだということを確信しているのはたぶん自分とイルだけだ。だが、もう捨てられたその街に、いまでも執着しているやつがいることも、自分は知っている。

敵機装甲上には棘やスリットに混ざって、やや大きめの、円形の覗き窓のような発光体も並んでいる。フェアリング・ビームターレット、半埋め込み式のビーム発振器、砲台だ。そこへテンタクル・レイが突き刺さる。着弾角度が浅く、弾かれる。敵ビームによる反撃。事前に被照準を検知しているビットはこれをやすやすと回避して、そのまま離脱。別方向から入れ替わりに二機のビットが飛来し、最適射撃位置へ。同時攻撃。敵砲台が今度こそ小爆発を起こす。

すると、煙を噴き、使い物にならなくなった砲台が装甲からぐいと押し出されて落下した。パージ（破棄）されたのだ。捨てられた砲台の基部、剥き出しの内部機構が覗くであろう部位は、その周囲にある強固な装甲と同質のカバーによって、すでに覆い隠されている。

なるほどよくできている、ナナコは関心してしまう。穴掘りなどやめさせてこいつをたくさん作れば戦闘でもそれなりに役に立つのではないか。無論、おつむの改良は必須であろうが。

砲台を貫き通して内部にまで十分な威力を到達させることは、テンタクル・レイではやや

困難なようだ。それでも、ナナコは同様の攻撃を続ける。しつかり狙えば砲台そのものの破壊は可能とわかったのだから、そうするまでだった。それで事実上、敵の無力化がかなう。攻撃能力を奪ってしまえば装甲の厚さなど問題でなくなる。

ナナコが敵砲台に狙いを絞ると、敵も攻撃の主な矛先をナナコからビットに変更してきた。それで面障壁への負荷は減り、ナナコもビットもしつかり狙って撃たれたビームを避けるのはお手の物、だが、回避の手間は確実にビットの射撃効率を下げる。敵砲台の破壊には思ったよりも時間が掛かった。

そうしているあいだにも敵機から独立した掘進システム部は先行を続けている。ナナコの目標は厳密にはそちら、掘進部だった。たとえばそれがビームやミサイルを装備していなくとも、真下の地面を抉り取られた街々がどうなってしまうかはわかったものではない。

爆発が続く。敵ビーム砲台六門を破壊。たぶんこれで三分の一度度はクリアしただろう、びつたり三分の一を消化してナナコがそう思ったとき、ガコン、と突然それまでなかった機械部品の音が響いた。

ナナコは、落下していくいま破壊した砲台から目を離し、その音が意味するところを探る。見れば敵の上面装甲の一部がせり出してくるところだ。埋め込み砲台をパージするときのように、内側からなにやら四角い箱のようなものが押し出されてくるのだ。あれはミサイルのランチャーブロックだろうか、そのようだ。正面に一抱えほどもある穴が二個、並んでいる。ずいぶん大きな発射管だ、とナナコはそこから発射されるであろうミサイルの威力を想像

して沈んだ気分になる。爆煙でけむたく煤汚れるのは勘弁願いたい。できれば目の前の障壁で受けるよりも、早めに撃墜してしまいたかったが、あらかじめ迎撃位置にこうとするビツトの機動を阻むように敵ビームは飛んでくる。

ミサイルはすぐに発射管から飛び出した。思ったとおり大型で、かつパワーがある。弾体の何倍もの長さの噴射炎を伴って一気に加速。しかしナナコはなによりも、そのミサイルの弾頭部の形状に、目を丸くした。

ドリル。ドリルがくつついている。はじめて見た。

そのドリルは子供が絵に描いたような鋭くどがった円錐螺旋形ではなく、やはり真面目に岩を砕こうとするとそうなるのか、と思わせる、少々味気のない鉄の塊……なのだが、小さな超硬カッターを山と盛り付けたいかめしいヘッドを頂くその姿はどうやったってヘドリルミサイルの様相で、ナナコはそれが自分の障壁に突き立ってガリガリ喰る様を想像してふとおかしくなった。これを、あの男が、デザインしたのか。

通常の中型ミサイルを遥かに凌駕する自重を、ものともしない大推力を存分に発揮してドリルミサイルはナナコまでのわずかな距離を飛翔する。

——いやいや設計はきつとコンピュータだろうが、しかしそれにGOサインを出したのはやはりシフだろう。堅い壁を貫くための武器ならほかにもいろいろあるだろうに、なにを思っただざわざこんな——

そしてドリルミサイルはナナコの障壁に到達する……その、直前で急上昇。洞窟の天井に

突き刺さった。ドリルヘッドがものすごい勢いで回転して岩盤を削り、ばらばら瓦礫を降らせてくる。飛翔時以上に激しく長く伸びた噴射炎が弾体をぐいぐい押し込んでいく。

なにを思ってたかわざわざこんな、見上げたナナコの笑みが凍りついた。堅い岩盤や装甲を貫くだけでは不足だから、に決まっている。ミサイルなのだこれは。ただの徹甲弾ではできないことをやろうとしているのだ。岩盤や装甲に突き刺さるか、貫通するかして……たぶん、そこからがこの武器の本領なのだ。

ミサイルの噴射炎がふっと消え、深く潜った弾体に残された高性能爆薬が爆発、大小の石ころだか、岩石だかを盛大にぶち撒けた。ナナコはビットと共に後方へ逃れながら舌打ちする。こいつ、この洞窟を崩すつもりか。

ユーモア心だけで工作するような男ではない、わかりきったことだった。笑っている場合ではなかったと、服の埃を払うこともなくナナコは悔やむ。とにかくこれ以上やらせるわけにはいかない。ミサイルはみんな叩き落とす。いや、あのランチャーを破壊しなければ。

そうナナコが攻撃目標を新たにしたとき、ガコンガコンガコン、と聞き覚えのある、あの音が連続した。

敵ミサイルランチャー一二基中、地面と機体の下敷きになって展開不能の二基を除く、十基が発射体勢。ボックスランチャーだけではない、大量のミサイルハッチも開いている。

「この……っ」

ドリルミサイルが一斉発射される。

すべての発射管が使用されたわけではなかった。とくにミサイルハッチは、遊んでいるものの方が多い。発射装置の数に対して搭載ミサイルが足りていないのだ。弾薬は宇宙船からの転送が前提らしい。そして、宇宙船はクロークの向こうに隠れている上に、この敵機は作戦システムの支援を受けられる状態にすらない。

それでも大量のミサイルだ。三〇か、四〇か、それ以上か、ナナコは数えるのも億劫になった。

狭い空間に大きな弾体と高速の排気噴流が飛び交い、ミサイル同士でお互いの機動を邪魔しあっている。ドリルヘッドが壁や天井にめちやくちやに突っ込む。肉眼では見えないがそれらの誘導電波も大混乱だった。敵機の自律戦闘プログラムはやけを起こしたと思えなかったが、実際のところは自機の同時誘導能力を超える数のミサイルたちを御そうと必死になっているのがナナコにも伝わってくる。そのうえでナナコやビットに向かってくるミサイルは一発もなく、確実に洞窟の崩落を目論んでいるということが見て取れた。それにしたってこんなには要らないだろうにとナナコが思えば、ミサイルはそんなナナコの脇を抜けて、ずっと後ろの天井にすら向かっていく。退路を断つつもりなのだ、とナナコは思った。もはやこの敵機にも掘削能力はないというのに。まるで共倒れを狙っているかのようだ。

本当にそうなるもおかしくない状況だ、とナナコは周囲を見渡した。だが、それもしかたがないのかもしれない。たしかに少し悔っていた。こんなやつに負けるわけがないと、たか括っていたところもある。油断がすぎたのだ。自業自得だ。だから、今回はまあ、しか

たがない。痛み分け、ということ——無理無理やつぱりなんか腹立つわ。

そもそもナナコの目的は目の前のこの敵機と戦うことではないのだ。先をゆく掘進システムを破壊せねばならない。ここで引き分けなどもつてのほかだった。それははつきりと負けを意味する。もしそうなれば、街も、ひるがえって宇宙船も、危ない。

ああ、も、まどろっこしいわね。

三機のビットが作る面障壁が、ナナコの溜め息に吹き消されるように消え失せた。だが、その実過大なエネルギーを叩き込まれてビットは震える。わずかに開いた外装の隙間から、荒ぶる獣の呼気のごとく、あやめ色の光が洩れる。

とはいえ本当はやりたくなかったのだ、あちらこちらでドリルが元気に騒ぎ立てるなか、ナナコはやれやれと腕を組み、巨大な敵機を見上げて思った。ここまで律儀に敵を追ってきたのだから、もう少し上手に戦って、もう少しスマートに勝って、そして帰りに今度こそあのちっこいやつもやつつけて……ああ、せっかくちまちまと砲台を壊したことも、けつきよくは無駄になってしまったわけだな。

「アンタなんかにはもつたいたいけれど、ま、しかたないわ」

七機のビットが牙を剥いた。

敵機に残されたビーム砲台が反応する。

テンタクル・ブレスは自身に対抗して放たれたビームを丸呑みにし、敵本体に触れるやいなや、装甲があつたことなど忘れさせる勢いで貫き通した。なおも後方の壁や天井を蒸発さ

せながら猛進、先行する敵掘進システムに食らいつく。食い破る。構造中心で交差してまだその先へ飛び抜けようとする。

照射終了。

目標が爆発した。

眼前の敵機も爆発した。

ドリルミサイルも爆発して、天井が襲い掛かってきた。

まあ、これはしかたない。

*

太陽が沈みはじめている。空が赤みを帯びていく。

頭上の戦いはとうに終わっている。空に戦闘メカの機影はひとつとして残っていない。みんな叩き落とされた。碎かれてなお身長よりもずっと大きいメカたちの残骸がそこいら中にごろごろしている。いま、ナナコが腰掛けがわりに尻に敷に敷いているのもそうした残骸のひとつ、比較的原型をたもって機能停止したものだ。細長い機体の後部に二次元可動するフリッパ（推進びれ）が四枚ついている。高速タイプの空戦メカだ。色は黒。ところどころに緑のマーキング。

たしかこいつもミサイル撃つんだっけ。

河原には木々のざわめきと清流のせせらぎだけが静かに響いている。岸に横たわる、破壊されたメカの全高は四メートルほど。ナナコはその上にのんびんだらりと座り込み、後ろに両手をつけて脚をぶらぶら。この場に似合わぬ「兵器」の背から沈んでゆく太陽を眺めている。空が夕焼けに染まっていく。

考えてみればこれは不可思議なことだ、とナナコは思う、夕焼け、という現象は。惑星上で昼間が見る、夜は暗いというのは、ひとえにその一地点からそばの恒星が見えるか見えないか、ということではない。それが、実際大地に立つてみれば、昼と夜のあいだにはこのような赤い空の時間がある。差し込む光の量が減っていくだけのはずなのに、空の色まで変わってしまうのだ。外から眺めたこの星はいつだって青かったというのに。

顎を上げたままぼんやりしていると、河原の石ころを蹴飛ばす音が聞こえた。ちらりとそちらに目をやると、木々を押し分けて姿を見せたイルと、目があった。

イルは、うわ、と驚いて見せ、メカの残骸に駆け寄ってナナコを見上げた。

「大丈夫？」

やあこんなところとか、また会ったねとか、お疲れさまとか、たとえば中身がなくなるともそんなふうになぞぶいておけばお互い気楽だったろうに、イルは本気で心配した声色でそう尋ねてしまったものだから、ナナコは顔に明らかに明らかな不満の色を滲ませて、

「これが大丈夫に見えるわけ」

「あ、はは……」

イルも残骸に飛び乗った。ナナコの隣に勝手に座る。

「アンタ一人なのね」とナナコ。「あの、ヒルデはどうしたの」

「あー」イルは困ったように笑った。「逃げてきちゃったよ。いろいろ聞かれそうだったし……あつちも勝手にいろいろ喋りそうだったから」

懸命だとナナコも思った。お互い下手に知りすぎたら、あとでしんどいだけだ。

「ナナこそ、さ。あの子、どうしたの」

「あの子って」

「助けてもらったんじゃないの」

「助けるですって」

「だってたぶん、あの崩れた山の下にいたんでしょ、ナナ。すごいことになってたもんね」

「どうだったかしら」

「とぼけるー」
イルはふとナナコの周囲のビットたちを見回し、そのうちの一機に目を止めた。手招きする。手元に飛んできたそれを撫でる。

「やられちゃったねえ」外装を一枚失った機体だった。「三角バリアにみんな囲っちゃって、動けなくなったと見た！……舌打ちやめてこわい」

さあ、ほんとうにどうだったろう、ナナコは空を見た。わからない。気がついたら森の木に体をあずけていたのだ。そこは洞窟のあった場所からは離れていて、そのときはまだ頭上

で爆音が響いていた。

正直なところナナコは自分でも、あの少女に助けられたのかもしれない、と思った。残る戦闘メカたちといっしょに少女を攻撃するという気兼ねがどうにも湧かず、それをふしぎに思ったりもした。しかしナナコはそれよりも、自分はどれくらい眠っていたのか、そのあいだになにか、かわったことが起きていないかと不安を感じて、そこでようやく——作戦システムが呼びかけに応じないことに気がついた。

シフの声を聞くことはなかった。眠っているあいだに、聞いたのかもしれない。

「ま、アンタと同じよ。私も逃げ出してきたわ」

「ふうん、めずらしい」

「これ以上やったって、どうせ勝ち目ないし」

「疲れてるね」

ナナコはどこを見るときもなく半眼で、うめくように言った。「ホントーにね」大きく息を吸って、吐く。「……思ったより、疲れてんのよね。なんでかしら」

あの森で目覚めたときの疲労感は……いまもさして回復してはいないが、それは掘削メカを破壊したそのときよりも大きかった、と、ナナコはそんな気がしている。いろいろと状況に振り回されて、そして眠ってしまったことで一気に気が抜けたのか。

「じゃあ、しっかり休んでおかないとね」そう言ってイルは立ち上がった。「ナナはここにいてくれていいよ」

「ちよつと、どこ行こうつてのよ」

残骸から飛び降りたイルは、思わず呼び止めるナナコを振り返つて、につ、と笑う。
「借りてきちゃった」

その手には、見覚えのある長い木の棒。

この能天気が。ナナコは脱力しきつた表情で、「どろぼー」

「ひ、人聞きわるい」

「聞こえもなにも事実そうじゃない」

「大丈夫だよ、ちゃんと返すもの」

なにがどうして大丈夫なのかわからない。が、たしかにあのヒルデのことだからこれくらいで怒ったりはしないだろう、もう見栄をはる気も失せてしまったナナコはそう思う。

しかしもし魚を釣ったとしてイルは調理できるのだろうか……いいや、どうせ釣れまい、餌なしでは。いかにイルとて、あれを手にとって針に通す度胸はあるまい。本人もわかつているだろう。たぶん、川縁で釣竿を握っていればそれで満足なのだ、あいつは。

壊れたメカの広い背でナナコは仰向けに寝転んだ。いつのまにか、空には小さな光の点がいくつも浮かんでいた。新しい発見をした気分だった。昼間のそれは明るすぎて見えなかったし、宇宙ではあまりにもありふれた光景だから、あえて星の海を眺めることなどしなかったのだ。暮れゆく空を彩る星々のまたたきがしばしナナコの目を奪う。

ふと、川のさざめきが耳に滲みた。意識してみれば、いったいどこからこれほどの水が溢

れてくるのか、とナナコはふしぎに思った。下流から上流へ、水を戻す設備も見当たらないのに、ずっと流れっぱなしである。たとえそばで超音速の翼が飛び交い、何発もの高性能爆薬が炸裂していても、まったく構いなしだ。戦いをやっているあいだ、川の景観になどだれも目を向けはしないだろうに、それでも川はひっそりとさざめき続ける。一見もつたいたいようでもあるが、川を必要としているのは人間だけではないのだと、ナナコは昼間の〈釣り〉を思い返した。とすると、もつたいたい、などと人間が言ってみたところで、そんな都合は聞き入れられない、というのは当然かもしれない。

風が出てきた。ナナコの頭上を灰色の雲が、やけに早く流れていく。

この星は、あの男の思い通りにはならないだろうな、という気が、とうとつにした。森や川に命令するなどばかりしている。ここの原住民たちにしても、実際に攻撃を受ける段階になれば、たとえ力がなくとも彼らなりの抵抗を示すだろう。星も人も、めちやくちに壊してしまうのは簡単だが、きれいなままで手に入れるのは骨が折れるに違いない。風の強さや温度などを好き勝手に調整して運用するのは、さらに難しいだろう……まあ、しかしよく考えれば、命令を聞かないことと、それにたてつくこととはまた違う。森や川はあの男の思い通りに振る舞うことは決してないだろうが、それらは人間とは違ってあの男のやることに逆らう具体的な行動を取ることもできないのだから、いずれはけつきよく……いや、そうか、だからあいつが

「ナナ」

「あによ」

なによ。ナナコはまたうとうととしていて、咄嗟にろれつがまわらなかつた。

小走りに戻ってきたイルは残骸に飛び乗って、寝っころがったナナコの顔を真上から覗き込むと、「やっぱりジャンケンしよう」と言った。

「はあ？　なんでよ」

「餌くつつけるひと決めるの」

こいつ。

N.

S.

B.

言葉はときに毒ともなる

心に染み込んだ毒は彼女の力でも消せなかった
たいせつな人たちを守るために、迷いながらも彼女は戦う
そこに見えている綻びに気づかないまま

敵だった少女がわたしに背を向ける。もうずいぶん続いている、大きな地響きを止めるために、わたしを置いて降りていく――。

それは、本来スグリがやるべきことだった。スグリこそ、そうするつもりでいた。いま、少女とスグリの目的は同じになった。

それでも二人が手を取り合うことはない。スグリには新たな敵が迫っていて、そちらに対処せねばならなかった。たくさんの戦闘メカたちだ。そんなのに構つてゐるひまはないのに、戦つてばかりだった彼女たちとせつかく協力できる機会なのに、どれほど強く思ったところでメカたちは見逃してはくれない。長距離ミサイルが二発、向かってきている。

体の芯に響くような地鳴りがスグリの心を掻き乱す。このままではいけない、わたしたちはこんなままではいけない！……しかし、ではどうすればいい、どうなれば自分は満足なのだ？ 感情的な主張は同時に生まれたわけのわからない焦燥感に押し流されてしまう。も

うなにも言葉が見つからない。小さくなっていく少女の背中を見つめ続ける。

速度を抑えていた複合サイクル動力の長距離ミサイルが、自機の残燃料と、目標であるスグリとの距離を計算してラストスパートをかける。ぐんと加速。

ミサイルがすぐそこまで迫っている。しかたなくスグリはそちらへ向きなおる。いつまでこんなことを続けなければならぬのか、ふと心にさした影には気づかないふりで——回避機動へ。急上昇。しかし今回のミサイルは終末誘導用にまだ推進剤を残しており、逃れるスグリにも十分追いつがる。

射程外にまで逃げ切るのは容易だがそれでは戦場が拡大するばかりだ、スグリはミサイルに対向し、その上方を通過するようなコースで自分から突っ込んだ。ミサイルはスグリの進行方向に回り込むため噴射炎を折り曲げて急旋回、間に合わない。一瞬でスグリと交差、すれ違い、その背後を追うかたちとなってしまう。再び上昇に転じたスグリとの距離を、もはや詰めることができない。

スグリにも余裕はなかった。同じタイプのミサイルに時間差で狙われていたからだ。そこらにも意識は配っていたが、一発目の回避に気を取られすぎた。二発目のミサイルは目の前だ。ぎりぎりまで引きつけて、一瞬でかわすしかない。

ミサイルはほぼ直進する機動でスグリに接近する。スグリはミサイルの先端が服に触れるか、というところで身をひるがえす。ほんとうにぎりぎり、決して触れてはいない。だが、いったん詰まり切った距離が再び開いたことで、その瞬間にミサイルの近接信管が作動——

ああ、こういうものもあつたな。弾頭内を秒速八〇〇〇メートルを超えて爆轟^{ばくこう}が進む。ミサイルの姿が奇妙に膨れ上がり、やがて弾ける。爆発。広がる爆風がスグりを打ち、真つ黒な煙に飲み込んだ。

強い風が吹き、水に墨を流したように、袖口から黒煙を垂らしながらスグりは再び青空の下に姿を見せる。

思い切り突き飛ばされたような圧迫感に息が苦しい、スグりは右手で胸を抑えて激しく咳込む。それから深呼吸。敵機の群れを睨みつけ、自分自身に、切り替えろ、と言いつける。あの機械たちとは話はできない。戦うしかないのだ。そして負けるわけにはいかない。

スグりの背後に五本の光の柱が生まれる——薄明に浮かび上がる極光の輪郭——光の五柱は五機のビームポッドに結実する。

それはあの少女との戦いで、思い出したものだ。もつともあちらのビーム砲台は七機あつたし、それぞれの性能を比べてみてもいくらかは劣るだろう。いきなり完璧に使いこなせるとも、スグりは思っていない。それでも多くの敵機を相手にするには頼らざるをえなかった。左手にはいつものソード。右手には、新たにオリンたちが持たせてくれた「バズーカ」もすでにある。こちらは調整中に何度か試射させられていた。

バズーカは鉄でできた長い筒のような装置である。グリップやトリガーがかなり砲口に寄って取り付けられているのが、バスターやビームライフルと比べて印象的だ。筒の後部は開けっ広げになっていた。そこから弾を押し込むと勝手に装填、固定されるのだ。幾度かの改

良を経て、現在のバズーカの後部には弾倉を兼ねた自動装填アタッチメントなるケースが取り付けられており、残弾が続く限り、トリガーを引くだけで連続攻撃が可能になっていた。

『——つまり、ようは軽量な無反動砲ね。ただ、向こうさんも空を飛んでるわけだし、初速を欲張ったからどうしても少し下がると思う。ライフリングはない滑空砲だから変な作用力はないわ。こっちのアシスト弾は火を噴いて飛ぶし、ずばりロケットも作ってるところだけど、誘導弾の運用能力はないから過信しないでちょうだいね』

わかった、まかせて、などというなずいて見せながら、実際にはオリンの言っていることは半分も理解できていないスグリであつたが、とにかく使用するにあたつてこの武器の勝手はある程度知れている。やたら「軽量」を強調する割には、持ち上げるのも一苦労だ、と密かに抱いていた心配も、いまは意識しなかつた。いざ戦いになればスグリは手にした武器の重さなど忘れた。それはビームライフルにしても同じことだし、バズーカはライフルよりは、たしかに軽い。

先ほどと同様の敵長距離ミサイルが接近。

一発の命中弾を得たことで敵機群はこのミサイルは有効だと判断したようだが、スグリにはもう迎撃手段があつた。五機のビームポッドがスグリの背を離れ、それぞれ別々の目標に向かつて攻撃を開始。ミサイルは、ビームを避けることなどではしなかつた。あつさり迎撃される。

高性能なミサイルを運用するミサイル母機は、それ自身は鈍重であつた。たとえ遠距離攻

撃を防がれても、だからといって積極的に前に出ようとはしない。かわりにミサイル母機よりもずっとスピードがあり、小回りも効く小型の空戦用メカたちが増速、スグリに向かう。彼ら空戦メカは格闘戦用の短距離ミサイルを抱いていた。

スグリはソードとバズーカを携えて翔ける。ビームポッドが幾筋もの光を放ちながらその後が続く。

スグリのビームポッドは敵の少女が用いた類似兵装とは異なり、それぞれが独自に展開して空間を多角的に支配するためにはない。ポッドは俊敏な機動力と高い攻撃力を持っているが、オペレーターとの連携が困難になるほどの広域をこのポッドだけでカバーしようというのは非効率的である。ポッドはあくまでオペレーターの補助火力として有効に、強力に機能するのだ。

あいにくスグリはそんな理想的な運用方法をだれかに説かれた経験はない。にもかかわらず、ビームポッドをいきなり後方ミサイル母機に向かわせることには躊躇いを感じるのだった。ポッドの用途を敵ミサイル迎撃に絞って、スグリは戦う。無意識に「味方」をそばに置いておきたいという心情が働いたのかもしれない。

空戦メカが発射した格闘戦用の近距離ミサイルを、ポッドが次々と撃墜していく。

戦闘メカたちは、目標スグリから高度な位置・速度情報を得ることができない。彼らの主な攻撃手段である数々のミサイルは、スグリの未来位置が読めないために光学照準による純粹追尾（後追い）で飛ぶしかなく、期待される本来の能力を発揮できずにいた。最初の長距

離ミサイルの命中以降、まるで効果的な攻撃を行えないまま、やがてミサイルを撃ち尽くすメカが増えてくる。

たとえそうなつてしまつてもメカたちは離脱することなく旋回待機。スグリへの突撃、体当たりを目論んでいるのだ。空戦メカは小型といつても幅、三〜四メートル、長さはその倍以上ある。ミサイルのように爆発はしなくとも、全速でぶつかればその衝突エネルギーは大い。

周囲から六機のメカが時間差で突つ込んでくる、スグリは敵の動きを察知する。

右側方から向かつてくる一機との距離が特別に近い。一方、最も速度が出ているのは正面の機体だ。残り四機は早いものでも接触まで二秒はあり、まだ脅威度は低かった。

スグリはまず正面の敵機を狙つてバズーカを発射すると、突然その場で逆さ宙返り。左手一本で床に逆立ちするような姿勢になつて、少しでも体を高く持ち上げた。もちろんその左手には赤く輝くソードがある——真横から突進してきた敵機の行く手に、上からソードを降ろしてやる。

別段腕に力を込める必要はなかった、なんの手応えもない。まるで素通りしていくようだったが、スグリのソードはしっかりと敵空戦メカを捉えている。敵は弾道軌道を描いて墜ちていく。

そのころ、先に放つておいたバズーカの砲弾も、正面から来た空戦メカの機首に接触していた。バズーカ砲弾は空中戦で主力にするにはあまりに低速だったが、このメカは自分自身

の速度が災いして回避しきれなかった。砲弾は、当たれば強力だ。空戦メカはミサイルに負けないくらいの爆発に包まれ、木っ端微塵になる。

スグリは逆立ち状態から宙返りを続けて体勢を戻すと、緩やかに旋回してその場から離れる。四方から急速接近中の、残る四機の空戦メカから距離を取る。

否、それらが自身に、同時に激突してくる一点へスグリは移動する。

この機械たちはお互い連携しあっているだろう、自分の狙いには気づいているかもしれない、そうスグリは思うが、四機の空戦メカたちはそれまでの加速を無駄にしたくないのか、それともスグリの意図にはまったく気づいていないのか、期待したとおりの機動で追ってきた。それらを十分引き付けたスグリは、先ほど失敗した長距離ミサイル回避の要領で、さつと身をひるがえす。

空戦メカたちはスグリのその動きについていけなかった。為す術なく正面からぶつかりあった二機がひしやげる。爆発こそしないもののもう飛んでいられない、もつれあうようにして落ちていく。残る二機は急旋回してなんとか味方との空中衝突をまぬがれたが、おかげですっかり速度を減じてしまった。そして、バズーカは次弾の発射準備を終えていた。スグリはすかさず攻撃、さらに一機を撃破する。

そこへ高速で飛来するビームポッドが一。ポッドはバズーカ砲弾が作り出した爆煙を突き破り、いまだ隙だらけの敵空戦メカに向かう。ポッドは空戦メカらがやったのと同じように体当たり、とはいえこちらは「弾切れ」というわけではない。

ポッドは衝角しょうかくのように鋭く伸びた砲身にエネルギーを蓄えたまま、空戦メカの胴体側面を突破、反対側に飛び出すやいなや急転回し、スグリに向かっていたミサイル群に向けてビームを発射する。

別の空戦メカから四発同時に放たれたものである、その短距離ミサイル群は、互いが発する超音速の衝撃波の影響を避けるため間隔を開けて飛んでいた。たつたいまポッドのビームに撃ち抜かれた、先頭ミサイルの爆発に巻き込まれたものはない。だが、広がる爆煙は後続ミサイルの目からスグリの姿をすっかり隠した。

可視光を遮られてはスグリを追うことはできない。ミサイルはそのまま直進、爆煙に突入する。一瞬で飛び出して視野内を再走査、スグリを探す。どこにもいない。

スグリはとうにミサイルの下方をすれ違い、それを放った空戦メカを追走していた。その機はまだ残弾を抱えていたが、自機の下面後方から接近するスグリを照準することができない。最大加速、上昇・反転して逃れようとする。垂直ループ。

そんな相手の旋回面の内側にスグリは入り、ループの頂点付近で追い付いた。スグリは仰向けの姿勢のままソードを振り上げ、敵機を斬り裂く。——そして、その機を蹴るような勢いで下方へ離脱。

スグリと同じようなループを描いて、またも別のミサイル群が接近していたのだ。だが逃げた先にも敵がいた。スグリは真下からも攻撃を受ける。上下からミサイルに挟まれるかたち。

スグリは降下を止めない。下方のミサイルを最も近場のビームポッドに狙わせ、自分は体の向きだけ変えて上方の脅威へバズーカを向ける。着弾までラグがあるバズーカを先に発射。バズーカ砲弾がミサイルに激突するのを待って、ポッドもビームを放つ。先ほどと同様の、爆煙による目眩しを狙ってやる。上下のミサイル群の先頭が同時に爆発し、その瞬間スグリは真横へ機動変更。

ミサイル回避を完了したとき、それらを放った空戦メカはビームポッドの反撃を受けてすでに撃墜されていた。そうする余裕が、スグリには生まれていなかった。ずいぶんな数を撃ち落としたし、そうでなくとも弾切れを起こしたメカが増えていた。戦闘空域に敵ミサイルが存在している時間がどんどん短くなっているのだ。

もう一息だ——スグリは、おのおの機動を続けるすべての空戦メカたちの照準範囲外にいた。長距離ミサイル母機は次弾の発射準備の真っ最中だった。偶然、場に生まれた奇跡的な間。スグリは敵の集団の中心で久方ぶりに静止する。もう一息だ、とそう思って白い息をひとつ吐き出した、そのときだ。大地が震え、遠く背後の山で凄まじい砂塵が上がったのは。

後ろからいきなり大声で驚かされたように、スグリの体が硬直する。一瞬あとに振り向いた、その瞳に、崩れた山の姿が映った。

低い爆音はかなり遅れてスグリの耳にやってきた。そしてそれを境にして、ずっと続いていた地鳴りが止んだ。いったいなにが起こったのか、スグリにはだいたい想像がついた。あの少女の敵はおそらく地面の下にいて、彼女はそれをやつつけたのだ。いったいどんなに大

きな機械だったのだろう、山が崩れてしまうなんて。

ごく自然に、あの少女は無事だろうかと思ひ、自分にわかるのは地中の機械が破壊されたであろうことだけだ、と気づく。あの少女がどのように戦ったのか、そこでなにがあつたのかということまではわからない。彼女は強かつた。そしておそらく敵に勝つた。だが彼女も無傷ではないかもしれない。急に不安になる。

と、スグリが見つめる先、崩れた山の土砂と岩石とを内側から吹き飛ばし、鮮やかな光の柱が天に伸びた。あやめ色をした大出力のビーム照射。しかしその先にはなにもない、空と雲が広がるばかりである。

あれはなんらかの位置の目印か、でなければ合図だろう。攻撃ではない、見る者になにかを伝えようとしているのだ——スグリは直感する——あれはただただ、ここにいて、と叫んでいるに違いない。それもほかでもない、この自分に向けて、だ。

あの少女は、スグリとの別れ際の会話のなかで、戦闘メカたちの計画の推移を随時把握しているような素振りを見せていた。「命令違反をした機体を破壊するために送り込まれたメカたちが、急遽スグリの足止めをすることになった」と、少女は言つたのだ。少女と、いまスグリが戦っているこの戦闘メカたちとは、あのような^{はなはだ}甚しい手を使わずとも情報交換できるのである。それをスグリも悟っていて、そしてこう思うのだつた、自分と少女のあいだではそうはいかない、だからあんな大きな目印を打ち上げる必要があるのだ。

しかしこの場の戦闘メカたちはその目印にまるで無頓着だった。スグリはちらりと苛立ち

を感じる。この機械たちはあの少女のことが心配ではないのか？

スグリは接近する長距離ミサイルをビームポッドで叩き落とし、短距離ミサイルを斉射して全速で離脱していく敵機の進行方向にバズーカ砲弾を撃ち込んだ。さらに体ごと回転してソードを振るい、突進してくる複数の敵機をまとめて薙ぎ払うと、そのままスグリは崩れた山に向かって翔ける。空戦メカもミサイルも、まるで追いつけない。

あの少女が自分と呼んでいる、無視できるわけがなかった。少女はなにか不味い状況にあるに決まっていた。ビームを撃てても自分では動けないのかもしれない。それならたしかに、戦うための機械たちでは担ぎ出してやることはできなさそうだ。この自分になら、できる。

ビーム照射はずっと続いている。崩れる周囲の土砂岩石を融解し、蒸発させている。やりすぎだ、とスグリは思った。あまり細かい調整ができないのか……照射を止めて、また岩が転がり落ちてくることを恐れているのかもしれない。

「いま行くから」

スグリはいっそう速度を増した。そしてビームに飛び込んだ。あやめの光が虹に染まる。

ビームを使ってスグリを呼び寄せたのは、正確にはあの少女ではなく、少女が用いた七機のビーム砲台だった。少女自身は砲台が形作るバリアに守られ、眠ってしまったのだ。

どうやら砲台は少女の思考とは完全に独立して行動できるようだったが、であればなおのこ
と機械同士で連絡を取ろうとしそうなもの、なぜこの自分と呼んだのか、スグリにはわけが

わからなかった。ただ、呼ばれたのはこの自分なのだ、という考えは一度も揺らぐことはなかった。手を伸ばすとバリアは消え、少女を抱きかかえるとビームも止まった。ふたたび周囲が崩れるまえに、スグリと七機の砲台は火口のように赤熱した崩落跡から飛び出した。

地上に出ても少女はすぐには目を覚まさなかった。ひとまず崩落現場から離れ、森の木の幹に彼女の体を預けると、ビーム砲台にあとをまかせてスグリは飛んだ。聞きたいことは山ほどあった。この救出劇にしても不可解な点が多い。ビーム砲台が野生動物を撃ったりしないかという不安もなくはない。いろいろと後ろ髪を引かれる思いであつたが、まだ残っている敵のメカたちに追われていたスグリはとにかく急いでその場を立ち去らねばならなかった。残敵排除は容易ではなかった。残敵、などと形容できる数ではなかった。ずいぶん倒したと思つていたのは実は敵のなかでも速度のあるものに限つた話で、彼らの後方には、地面を掘り進むためのドリルを備えた、小型ながら堅牢なメカがまだまだいたのだ。そのような手合いにはバズーカが大変有効に機能したが、移動速度や飛行能力が低いというそのドリルメカの弱点は、相対するスグリにとつても都合がよいばかりではなかった。高く飛べない彼らと戦つているとどうしても爆発や流れ弾の被害が地上に及ぶのだ。十分安全と思える場所まで敵を誘導するのにスグリはかなりの時間を費やすこととなつた。

すべてが終わつたのは夕刻まえ。

あの少女は姿を消していた。

何度目かの、会話ができる相手との出会い。その話の内容、さらには目的の共有、様々な

ことがあった。理由も曖昧なまま「しかたなく」で戦いを続ける現状に、光が射したとさえ、スグリには思えた。だが――。

終わってみればこれまでと同じだ。自分にできたのは、攻撃してくる相手をすべて撃ち落とすことだけだ。結局あの子の姿も消えてしまつて、あとに残つたのは戦いの結果だけ。あんなに話をしたというのに、なにひとつ変わっていない。なにも、変えられなかった。

スグリはひどく気負ちした。

取り落して置き去りにしていたビームライフルにトボトボと歩み寄り、それを拾い上げたとき、唐突にあの少女の言葉を思い出した。

――アンタも私と同じようなモノじゃない。

どきりとする。ぞつと背筋が震える。スグリはライフルを抱き締めて呆然とつぶやく。

違う。

――体中弄られて、力を与えられて……戦う力を、与えられて。

違う。

日が沈み、暗くなつた森をスグリは走つた。空を飛ぶのがおそろしかつた。もう敵はいないかとびくびくしながら辺りを見回し、カムフラージュネットを撥ね除けて、生体認証もなにもない即席の制御盤を震える指で操作して、修理しないと使えないであろう非難通路から地下シェルターへ逃げ帰つた。

*

あれほどだれかの顔を見たかったはずなのに。

いざセクターに降りて非難路を抜け、広く明るい管理通路にまで到ると、今度は人々と顔を合わせるのが忍びなく思えるスグリである。

戦うと決めたのは自分ではないか、なにをいまさら怖気付いて……そのうえだれかになぐさめてもらおうとでもいうのか、そう自分を叱責してはみるものの、完全に平静を保つてみんなと接せられるという自信が起きない。頭が混乱している。考えを整理する時間がほしい。セントラル・ルームのモーター駆動の自動扉の対人センサの走査範囲の一步手前で、スグリはあともう一步をためらった。いつそのまま自分の個室に逃れてしまおうかと思う。しかしそこへ行くのに、この室を迂回するのは明らかに遠まわりだ。歩いてきた管理通路にはところどころカメラもあるわけで、途中まできて引き返したでは、ろこつすぎて余計な心配をかけてしまいそうだった。

とにかく、戦うことができるのは自分だけだという事実はわかりきっている、それは変わるものではない。自分がふらふらと揺らいでいてはみんなが不安がる。なにも必要以上に明るく振る舞う必要はないのだ。時間も遅いし、少し疲れている、くらいに見られるのはしかたない。不自然にならない程度に話して、できるだけ早く部屋に引っこんでしまおう。

そうしてようやく重い一步を踏み出そうとした次の瞬間、自動扉はスグリとは反対側のセ

ンサ入力に一瞬早く反応して勝手に——スグリの目にはそう見えた——開いた。床からわずかに持ち上がったスグリの足がぴたりと止まる。

室内からだれかが躍り出てきた。そのだれかはいま駆け出そうといった様子で、体が前傾をはじめている。まっすぐ前を見ていただれかの視線がゆつくりと下がってきて、やがて自分の顔を捉えるのを、スグリは呆然と見上げている。だれかの口元が緩む。なにか言葉を発しようとしている。

「スグ、近いっ!」

「ふえ!? ……んむあ!」

足を上げかけた奇妙な格好で固まるスグリに、室内から飛び出してきた人影がぶつかってきた。思わず洩れたスグリのおどろきの声もまた奇妙だった。相手の体に鼻をぶつけて出た悲鳴も、やはり奇妙だ。

相手は前傾していた身をむりやり起こしてぎりぎりで止まろうとしたのだが、間に合わず、身長差のあるスグリは反った相手の胸にかえって勢いよく弾かれてしまった。両手で鼻を抑えて数歩よろめき、あとずさる。

「スグリさま! ご、ご無事ですか」

この声は、ヒルデか。

「……へいき」

言いながらスグリは薄く目を開いた。相手の顔をたしかめる。

「あわわわわ」

ヒルデは、半分涙目で見上げてくるスグリにひどく動転した。本当に泡でも噴きそうな顔になって、

「は、鼻ですか！ 鼻ありますかつ！」

「無くはないけど!?」ばっ、と顔を上げて叫ぶスグリ。

ヒルデは膝を曲げてスグリの顔を覗き込んだ。

「申し訳ございません。どうしましょう、わたしったら、スグリさまを撥^はねるなんて。あの、ほんとに大丈夫ですか？ ……やだちよつと赤くなっちゃってる」

「ううん、痛かったけど、もうへいきだよ」

「ごめんなさい、申し訳ない、と何度も腰を折るヒルデをスグリはたしなめる。

「ああ、でも本当によかった。お鼻潰れちゃったのかと」

……悪気はないんだろうけど。

ヒルデは、どこか別の部屋に向かっていたというわけではなかった。通路のそこかしこにある認証扉を通り抜けたはずのスグリが、いつまでたっても姿を見せないのです、迷っているのではないかと心配して迎えにきたらしい。

「迷ったことなんてあったっけ」

「え、さあどうなんですか。わたしオリンにそう言われて」

「そう……」

あの人はぜったいにてきとう喋っている、とスグリは思う。

二人で部屋の扉をくぐる。

スグリはオリンの姿を探した。地鳴りの件はひとまずすっかり解決したことを彼女に告げて、自分は少し休ませてもらおう。

いつものデスクにオリンはいた。スグリと目が合うと、オリンの方から声をかけてくる。

「迷子センサーへようこそ」

「迷ったことあったっけ！」

大きな声を出したのでほかの局員たちの視線まで集めてしまった。恥ずかしい。なかでもオリンは特別おかしように、どうだったかしら、と笑った。「でも、みんながふだん使わない通路から降りてくるでしょう、あなた。出るときもそうだし」

それは地下の存在を隠すために続けている、ささやかな工夫だった。

「だからあっちこっち混乱して、いつか迷うんじゃないかしら、って。いつでも迷ってくれていいのよお、むしろそれ楽しみにしてるんだから」

「……」

「あー、わたしあの人に似たんですね」

隣でヒルデがなにか言っている。スグリは聞かなかったことにした。

「そ、そんなことより」とスグリ。「地震は、もう、だいじょうぶだから」

「そう」歩みよるスグリの目を見て、オリンは真摯に言った。「今回もありがとう、スグリ」

オリンはこういう切りかえが本当に早い。うん、とスグリも笑ってこたえる。

しかしいつもはくすぐったくもあたたかい、その「ありがとう」が、いまはなぜだか重く感じる。

「けがは？」

「ないよ。でも、少し疲れたかな。また部屋を借りるね」

「わかった。正直に言ってくれて嬉しいわ。ゆっくり休んでちょうだい。……あ、でもちよつと」

突然鋭い目付きになって近付いてきたオリンに、スグリは肩や背中をポンポン叩かれ、

「気を付け」の姿勢をさせられた。なんだろうと緊張する。

オリンはスグリの周囲をゆっくりまわりながら、スグリの衣服の端をあちこちつまんで整える。それから正面に戻って、一歩後ろにさがると、なにやら難しい表情で数秒間じつくりスグリの姿を見つめてとうとつに、

「寝るまえにお風呂」

と言った。

「うああ」うめくスグリ。

オリンいまはそんな場合じゃないよ、そう言いかけてスグリは黙った。ではどんな場合だというのか。なぜかはよくわからないがみんなの穏やかな顔を見ているのがつらいから、速やかにふとんを被って枕を抱いて寝てしまふべき状況だともいうのか。

そういう逡巡を感付かれることは、おそらくなかったとスグリは思う。オリンはすぐにヒルデを呼び付け、ヒルデは待つてましたとばかり有無を言わさずスグリの体をホールドし、部屋から連れ出してしまったから。おかげでスグリはうああ、うああと抵抗して見せながら、オリンに背を向けることができたから。

セクター内通路の天井はどこも少々低めで、かわりに幅は広がった。一面に白いパネルが貼られている。青白い人口照明の明かりからは少々冷たい感じを受けることもあるが、清潔だ。左右の壁にはいろいろな部屋への扉が並んでいて、通路というより廊下というのがより相応しい。もちろんひたすらに長い一本道などではなく、あちこちで折れ曲がったり分岐したりしている。勾配はほとんどないものの、突き当たりが階段やエレベータドアだったりする。たしかに迷うこともあるかもしれないとスグリは思う。

スグリは施設のすべてを熟知してはいない。ここでずっと生活しているわけではない。本当のところは、どちらかといえば、スグリは地上で過ごす方が好きだった。敵の目下の目標であるスグリがうかつに街に近づくわけにはいかないから、いまのところはここを拠点にしているというだけの話である。

廊下に通りはほとんどなかった。スグリとヒルデと二人つきりだ。それをたしかめるようにヒルデがきよろきよると辺りを見回している。なにをやっているのだろうか？ スグリがふしぎに思っていると、ヒルデはおずおずと声をかけてきた。

「あの、スグリさま」

「どうしたの」

「ええと、今日もお疲れ様でした」

「うん……？」

「それで、その……お相手の方は、いかがなされましたでしょうか……」

お相手、つまり戦った敵のことか。……相手の方、だって？

「会ったの!？」

きよう、ああいった子たちがまた現れたことをヒルデはもう知っている、スグリは思わず大きな声をあげていた。

「わあ、あ、会いました、はい。わたし朝から地上に上がらせていただいて……そこで偶然、なんですけど、あんまりふつうの方だったので最初は気づかなかったんですけど、」

「そ、それよりだいじょうぶだったの？」

心配して尋ねるスグリの瞳をヒルデは見返し、スグリの大声に慌てていた心を落ち着けるように、いつときの間を挟むと、控え目に笑ってただひとこと、「……だいじょうぶでした」とこたえた。

その微笑みはどんな言葉よりも強い説得力を秘めていた。なにが、どのように大丈夫だったのかと掘り下げる必要はまったくなかった。スグリは一瞬面喰らったが、つられるように笑って、それならいいや、とうなずいた。

「でも、ごめん」とスグリ。「よくわからない。無事だとは思っただけぞ」

「そうですか……いえ、いいんです、無事なら。スグリさまもご無事だったんですもの、わたしにとってはそれで万々歳です。……それよりも、あの、わたしこそごめんなさい。目の前にいたのに、ナナコさん、止められませんでした」

「ななこさん？」

「ナナコさんに、イルさん」

「そう」

ナナコ、がきよう出会った子のことなら、もう一人は海の上で会った子だろう。大きなビーム砲を抱えていた……彼女たちの命令者から、もういらなと言われたらしいあの子が、イルだ。二人揃ったからといってなにか悪さをするわけではない、この自分との戦い以外には。ヒルデもこんなに笑っている。だからたぶん、地上のみんなは安全だ。

「二人とも仲よくしてくれた？」

「はい。ほんの短い時間でしたけど。川でお魚を釣って、皆さんでいただいたんですよ。調理も手伝ってもらいましたし、もちろんたくさんお話も」

「すっかり友達だね」

「……そうでしょうか」ヒルデは自信なさげだった。「そうだと思いますけど」

「そうだよ」

きつとそうだ。このヒルデは、彼女たちとそういう関係になったのだ。自分もそうなりた

かったが、なれなかった、スグリは少し悲しくなった。いや、なぜいまそういう方向に考えが転がるのだ、とも思う。素直にヒルデを祝ってやればいいところなのに。しかし走り出した思考はもはやどうにもならない。

——そう、機会はあつたはずなのだ。それでもやはりだめだった。自分はヒルデとは違うから。力を持つ自分は、あの少女らと友達にはなれない。戦わなければならない。

「でも、」とヒルデが思い出したようにつぶやいて、スグリはハッと顔を上げた。

「ナナコさんはちよつといじわるでした」

「……」

いつたいなにを思い出したのだろうか、と、前を向いたまま眉根を寄せるヒルデの顔を、隣に並んで歩くスグリは少しのあいだ、ぽかんと見上げていた。が、やがてどうしようもなく笑いが込み上げてきて、ヒルデと同じようにまっすぐ前に視線を戻してこう言った。

「わたしもそう思う」

ヒルデはおそらく、エレベータを使って自分を下の階に連れていくつもりだ、スグリはそんなヒルデから逃れることを考えはじめていた。スグリは、ヒルデが自分の手を引いて、人の多い部屋から連れ出してくれたことに内心ほつとしていたが、これ以上世話になり続けることにはどうにもきまりの悪さを感じるのだった。先ほど交わした会話がそれに拍車を掛けた。自分はこの子を守るために、この子の友達と戦わねばならないのだ、逃げ出したい気分

だった。

ちやうど目の前、廊下が十字に分かれている。

逃げよう、スグリはその分岐をさりげなく自分の部屋に向かって折れようとする。

「スグリさま」

案の定、服のそでを掴まれた。

「下のおつきなお風呂行きましょう」

「やつぱりいいよ。せっかくだけど」とスグリはかすかに言い淀みながらも、「その、ほんとうは大丈夫だから……お風呂」

しかしヒルデはまるで動じた様子を見せない。意味が通じていないのだろうかと思つたが、そういうわけではなかった。

「聞き及んでおりますとも、素晴らしいお力です」

言葉とは裏腹に、なぜか苦々しさを孕んだ口調でヒルデ。スグリは、それなら、と言いかけたが、背中にびつたりとくつついてきたヒルデに両肩にそと手を添えられ、黙つた。

「……？」

首を捻じ曲げて頭上の顔を見上げると、ヒルデの視線はまっすぐ前。なぜか目を合わせようとしな。すぐに首がしんどくなつたスグリはとりあえず居直り、ヒルデに倣なまらつて前を見た。

「でもスグリさま」頭の上で声がささやく。「お風呂、お嫌いですか」

「そういうわけじゃあないけど」

「それでは、あえてお風呂を使いましょう」

「ええと」

「わたしスグリさまはお風呂好きがいい」

「ちよつと意味がわからないんだけど」

「わたしスグリさまはお風呂好きがいい」

「……」

ヒルデの体が近いにもかかわらず、なんだか背中が寒くなったスグリはそれこそ逃げ出したくなって、

「きようは部屋のお風呂使わせてもらいうから」

それでなんとか説き伏せた。

部屋や個室と表現するものの、セクター員らのなかには完全はこの区画で生活している者も多く、そんな彼らの個室には寝室は当然として、風呂もトイレもキッチンも、狭いリビングだつてある。その一方、居住区に住まいを構えており、しっかり休みを取るときはそちらに戻つて、という者の、セクターでの個室は、まさに仮眠室の如く簡素ものだった。個室以外にも公共衛生施設は整備されているからだ。

ずっと地上で過ごしてきたスグリがここ管理セクターで本来必要とする部屋機能といえ、

当然後者である。個室にはふとんさえあれば、それでいちおうは事足りる。が、管理セクターの世話焼きたちが、究極の恩人かつ苦労人のスグリを仮眠室などに押し込めておくわけがない、というのはいわば当然の成り行きで、スグリは半ば押し付けられたにも等しい、風呂もトイレもキッチンもリビングもある個室を、普段から持て余しているのだった。

だからいちおう、風呂には入った。

身体を洗って髪を洗って、そうしている最中は難しいことは考えなかった。それでも動作のときどきに得も言われぬ不安が蘇える。シャワーの湯を頭のとっぺんから浴びながら、足の先を伝って排水溝に消えていくシャンプーの泡をスグリは薄目を開いて見つめている。

汗といっしょに暗い気分も流してしまえたら、どんなにか楽だろう。

「……はあ」

ため息は、いくらか自嘲めいていた。ばかげた考えだ。たとえそれで気分が晴れても、状況までもが変わるわけではないというのに。それとも、いまよりも楽な気持ちで戦えればそれでいい、とでもいうのか。

ぶかぶかのパジャマをもそもそ着込んで、湯上がり用にいささかルーズに髪をまとめ、スグリはベッドに突っ伏した。上掛けにもぐることも、枕を引き寄せることもしない。うつぶせのまま死んだように動かない。それでもかろうじてまぶたは開いている。うすらぼんやりとした意識と視界で、白いシーツのしわの波を、見るともなく眺めている。

わたしの力は……

戦うためのものではない。もう何度繰り返したろう。戦うスグリは、そのように信じることで自らの心を支えてきた。

だが、敵として立つた少女の言い分は違っていた。戦いのために命令に逆らえないよう変えられ、そしてそのことを自覚する彼女は、スグリのことを、自分と同じようなものだ、と言った。

その言葉はただのいじわるから出たものではないとスグリは気づいている。だからこそこんなにも揺れているのだ。あの少女は、深く考えた末の発言ではないかもしれないがそれでも、ごくごく自然に、あたりまえにそう感じて、言ったのだ。彼女の目には、自分の姿はどのように映っていたのだ。

「命令破るなんてできっこない」

「アンタも私と同じようなモノじゃない」

「体中弄られて、力を与えられて」

しかしそれは違うのだ。たくさんの人たちの素敵な夢が詰まった、これは、戦うための力ではない。なんと言われようがそこだけは譲れない。そしてその力を、わたしは望んでもらったのだ。だれかの命令などではなく、わたしは、自分自身の意思で――

そこでいきなり思考が止まった。

言い様のない不安、という暗い霧中を、ろくに足元も見ずに走り出した思考が、最初からそこにあった壁に気づかないまま全速力でぶつかって、止まった。

——自分の意思で、戦いをやるのか？

胸に杭でも打たれたかと思う。

この力が戦うためのものではないというなら、それを己の意思で戦いに用いているこの自分の方こそ、戦うために在るといふのか。戦いのためではないはずの力でもって、しかしいままでも戦えてきた理由が、それだと？ それを指して、彼女は同じだ、と言ったのか。たとえ、どれほど素晴らしい目的のために用意された力であろうと、結局は扱うもの次第だと……この自分が戦いを志向する以上、この力もまた……。

乾ききらない髪もそのままに、部屋の明かりも灯しつ放し。スグリはベッドにうつぶせたまま死んだように動かない。

このままでは、信じ、すがっていたもののあり方を自分が変容させてしまうのではないか、それに気づいてもなお、状況をあらためる術はスグリにはなかった。戦いを放棄することはできない。人々を守るために、人々の友人となりえる者たちと戦って、やつつけねばならなかった。

これじゃあ、ほんとうにわたしの方こそ……。

打たれた杭、心を突き崩すほどの衝撃は、弾けて深い虚脱感に形を変える。体が重い。まぶたが重い。そうしていつしか意識すらもが、まどろみのなかに落ち込んでいく。

声がきこえる。

とても静かな声。だれかが自分のことを呼んでいるのかとスグリは思い、耳をすませる。まるで聞きとれない。なにかを知らせようとしてくれているのは、わかるのだが。

呼び付けているのとは違う。声は、進む道までは示してくれないのだ。聞き、知って、そして決めるのは、いつだって自分だ。大丈夫、わかっている、さあ話して。スグリは耳をすませる。いつものように。だが、聞きとれない。

なぜだかとてもさみしかった。こんなことはいままでもなかったのに。夢とうつつの狭間に沈んで、どちらの世界から目も背けているから、聞こえないのだろうか。

スグリは泥沼のような眠りから這い出した。

心地良い眠りではなかったように思う。そのうえ妙な胸騒ぎに起こされた。だというのに、目覚めてしまったいまとなつては、それがなにを意味しているのかわからない。

どうもすっきりしない。なにも悪い夢を見たというわけでもないのだが……いやあるいは見たのかもしれない、スグリは仰向けになって天井を見上げた。悪夢かどうかはさておき、まだ夢の尾を引きずっているような感覚だ。頭が重い。

いつそぜんぶ夢ならば。

しかし心に染みついた影は、汗とともに洗い流すことはおろか、眠りのなかに忘れてくるにも大きすぎた。意識が途切れる直前の思考が蘇えってくる。ため息。

寝室の扉が遠慮がちに二度、ノックされた。

そういえば鍵なんか掛けてなかった、とスグリは思い出す。眠っているあいだに廊下のコ

ールボタンも押されたのかもしれない。

ノックは小さく、ともすれば聞き落してしまいそうだった。休んでいるかもしれない自分を起こさないための配慮だろう。ここで反応を返さなければ、そこにいる人物はそのまま立ち去るつもりかもしれない。

スグリはベッドの上でのろのろと上体を起こし、自分は少々だらしない格好をしていると気づいた。まあ、それで居留守を使うほどではあるまい。扉に向かって、はい、と返事をする。戸惑いの気配が返ってくる。

「……、スグリさま。よろしいですか」

なにやら一泊置いてから、馴染んだ明るい声がそう言った。

「どうぞ」

ドアノブが傾いて扉が押し開かれる。失礼します、とヒルデが入ってくる。

「すみません、ひよっとして起こしちゃいました？」

「ううん。ちよっと横になってただけだから」ばればれの嘘をついた。「それで、どうしたの」

「いえ、そんなあの、たいしたことではないのですけど」

「なに？」

「ただちよっとご様子をうかがいに、と申しますか……」

「うん……？」

ベッドの脇に突つ立つたヒルデは足元に目を落として沈黙してしまう。

スグリはなぜヒルデがそうなってしまうのかわからない。戸惑う。沈黙に耐えかねて「あの」と声をかける。

瞬間、ヒルデは前髪が浮く勢いで顔を上げて、叫んだ。「スグリさま！ なにかわたしたちに、おつしやりたいことがあるのでは」

ほとんどなにを言っているのか理解できなかった。言葉として認識する以前にただただ音量に驚いたスグリは弾力のあるベッドの上で少し跳ねた。

ヒルデは構わずに続けた。

「僭越ながら、昨晚戻られてからのスグリさまのお顔、わたし、とても見ていられませんでした。きつとなにかお悩みがあるに違いないと……どうかおつしやってみてください。そのわたしはばかですけど、オリンやみなさんとも話し合えば、なにか、」

ようやく話の内容が頭に入ってくる。自分はそんなひどい顔をしていたろうかとスグリは思い、いやそんなことはどうでもいい、と今度こそ我に返る。

困った。気取られないよう、心掛けていたつもりなのに。

ヒルデが特別鋭いのか、それとも誰の目にも丸わかりだったのか。気をつかったみんなが相談したうえで選出した、聞き役としてヒルデはここにいるのかもしれない。

「もちろん、すぐに解決できることじゃないのかもしれないですけど、でもだれかに打ち明けるだけでも少しはらくになると思うんです」

それでなくともヒルデは、困っていることがあるならみんなに相談しましょう、と言っているに等しい。できるものか、とスグリは思う。

「なんでもおつしやつてください。わたしにできることなら……できなくっても、スグリさまがお望みなら、ほかの誰にも言ったりしませんから。話すだけでも」

「……」

沈黙。

ヒルデはもう、うつむいてはいない。不安と緊張に満ちた表情で懸命にスグリの目を見つめている。スグリが話すのをじっと待っている。

頼つてほしいという目だ、とスグリは思った。そしてそれはできない、とも。なぜなら、もはや自分は、自分の力が戦いのためのものではないと、だれかに保証してもらいたいわけではないのだ。たぶん、はじめはそれでよかった……しかしいまは違うのだ。力のあり方はすでに問題ではないのだ。真に恐ろしいのは、この自分自身の振る舞いなのだ……。

この力を戦いに使うのが嫌になりました。

言えるわけがない。戦えるのは自分だけなのだ。嫌でも戦わざるをえないし、なによりそんな自分の心を知ったら、優しいみんなもまた苦しむだろう。嫌だけどやる、などと、絶対に言えない。

だからスグリは、心苦しさを堪えてこう言った。

「もう少しだけ一人にさせてほしい、かな」

「スグリさま……」

言った。言えた。思ったよりもつらい。冷や汗すら出る。

「ごめんね、ちよつとまだ疲れが抜けなくて」

「……わかりました。スグリさまがそうおっしゃるなら」

「本当にごめんね」

「とんでもございません。あくまでご自身で答えをお探しになるとおっしゃるのでしたら、わたしたちが口を挟むことはなにもありません」そう言つてヒルデは立った。「けれど、貴女をお一人にはできませんね」

「それは、どういう」

「……お疲れなのは本当でしょう。長々と失礼を、どうかごゆっくりお休みください」ヒルデは弱々しく笑つて言つた。「でもスグリさま。誰にも言えない悩みを抱えることと、孤独であることは違います。わたしはそう思います」

なるほど、今度の言葉はわかりやすかつた。スグリは顔を上げて、部屋を出てゆこうとするヒルデを見る。

「いまはこれで戻らせていただきますが、スグリさまはそう簡単には一人になんかなれませんかよ。みなさんお節介ですから……なんて。ちよつと揚げ足取るみたいでしたね」

「ううん、わかるよ」たぶん、うまく笑えたはずだ。「ありがとう」

「お休みなさいませ、スグリさま」

しかし気分が晴れても、より曇っても、状況はなにも変わらないのだ。

そのとき部屋が少しだけ上下に揺れた。

ここは大深度地下施設で、ここ管理セクターは居住区のまだ下で、こんなところにまで届くはずのない爆音を伴ったそれは、地震ではなかった。

ヒルデはもちろん、セクター内の誰一人としてその揺れを意識しなかった。観測用の機械でもノイズとして見逃してしまいそうなくらい些細な振動だ。しかしスグリは気づいた。それが、知るべきことであつたから、なんとか気づくことができた。

胸騒ぎの原因はこれだったのだ。スグリはベッドから飛び起きた。

その様子に、スグリが気づいてしまったことを、ヒルデは悟った。

「待って、スグリさま！」

ヒルデは、脇をすり抜けて寝室を飛び出そうとするスグリの前に出て、その体を抱きとめた。

その様子に、ヒルデは最初から知っていたのだと、スグリは悟った。

「いつから？」

この「事態」はいつから続いているのか。

「……ほんの、ついさっきです」ヒルデは叱られた子供の体でこたえる。「いま外、急な嵐で、雷とかも落ちてて……あの機械たちも巻き込まれて、上手に飛んでられないみたいで」

墜落しているのか、爆弾を抱えたまま。

「この近くにも機械が来てるらしいんですけど、地下があるってばれたわけじゃない、つてオリンたちは……だからもうしばらく休んでも大丈夫だって。せめて嵐が収まるまでは、スグリさまが出ていなくても不自然じゃないから」

それでスグリは、ヒルデがこの部屋を訪ねてきた本当の理由も悟った。この自分が眠っているならばよし、戦いに出ようとすれば無理にでも、そう、たとえば嵐が去るまでのあいだ、ここに引き止めようと。……ばかな。

「行かないと」

「だめです、だめ」

「ヒルデ、みんなが危険なんだよ。いいかげんに切り替えないと」

「切り替えるってなんですか」

「だからね、」

「それにみんなで決めたんです。スグリさま、まだぜんぜんお休みになってない」

「気持ち嬉しいよ。でも……」

いまはそれが、つらいのだ。自分はいま、そんな優しさをとて受けられないことをやっているのだ。

しかしヒルデはかたくなだ。正面からスグリの両肩を掴んで、離してくれない。無論、スグリにはそれを払い除けるのはなんでもないことだった。すぐにでもそうして、地上へ向か

うべきだった。……けれど、どうして。どうしてこの子はこれほどまで。

「どうしてそこまで想ってくれるの」スグリは尋ねた。「わたしは、きみの友達や、きみとなら友達になれるかもしれない子たちと戦って、やつつけようとしてるんだよ」

実際に言葉にしてみても、スグリはその行為の恐ろしさをよりはつきりと意識した。だがそうでもしなければ人々を守ることはできず、それができるのはスグリだけである。なんと呪われた役目だろうと自分でも思う。口にするのははばかられる。しかし、ヒルデの優しさがこうした自分の役目に気づいていないゆえのものだとしたら、事実を隠したままでその優しさを享受するのはひどく後ろめたいことだとも思えた。だからスグリは、ヒルデに告げた。

肩を掴むヒルデの手がびくりと跳ねて、彼女は呆然とした声で、そうか、とつぶやいた。

払い除けねばならぬはずの、ヒルデの手にこもった力がひとりでにゆるんでいく。スグリはそれをふとさみしく感じる。いや、これでよいのだ、とも。

「……貴女、そういうひとに切り替わるおつもりですね」

払い除けた。

反射的に払い除けて、スグリは後ろに下がった。ヒルデを見る。ヒルデは払われて浮いた手をゆっくり下ろして、静かにスグリを見返した。

自分はなにを動揺しているのだと、スグリは混乱した。ヒルデは、なにもおかしいことは言っていない。切り替える、という言葉を先に使ったのは自分だ。それに対してヒルデは、切り替えるとはどういうことか、と聞いた。その時点でそれを疑問に感じていた彼女は、自

分がいま話した言葉が、うまくそこにあてはまりそうだと思い、そうしてみたに過ぎない。不自然なことはなにもない。はずだ。

「それがおつらいのですね。武器の撃ち合いなんて危ないって、みなさん心配されてしまったけど、貴女のお悩みはそんなことじゃなかった。危険な戦いに出られることより、戦うためにご自身のお気持ちを抑えて、戦うひとに切り替わってしまわれることを、貴女はこわがってらっしゃる」

ひぎ裏がベッドの端にぶつかって、スグリはふとんの上に尻餅をついた。

いまこわいのはむしろヒルデの存在だった。スグリが感じているおそれはとても大きく、重かったが、どこか輪郭のはつきりしない、中心がどこにあるのか捉えづらい、抽象的なものでもあった。武器の撃ち合いよりも、己のあり方に不安を感じている、などと、他人が容易に言い当てられることではないという気が、スグリにはした。なぜわかる。どこまで感づいている。畏れをたたえた瞳でヒルデを見上げる。

「そんな顔しないでください」

ヒルデはほんとうに困った表情になってスグリに歩み寄った。

「心配はいりません。スグリさまは、スグリさまです。そんなふうに切り替わるなんてできっこないんですよ……だってほんとうは、ナナコさんやイルさんと、お友達にならりたいのですよね」

ヒルデは床にひぎ立ちになり、スグリの目線の少し下から微笑みかける。

そんなヒルデに向けて、スグリはようやく声を絞り出した。「そんなこと……」否定の言葉だった。当然だ、みんなを攻撃してくる相手と、友達になりたいだなんて。

「みなさんにはひみつにしておきますから」

まるで通用しない。なんでもお見通しといわんばかりの、しかしとても穏やかな口調。

そう、たしかに思っている、どうにか戦いを避けて話し合えないかと、話をして、お互いわかりあえないものかと。一度も口にしたことのない想いだ。いったいどうなっているのだろう。ひよっとすると自分では気付かないうちに、周囲の人たちにはそうと気取らせるような態度を取っていたのだろうか。

「廊下で、ナナコさんとイルさんのお話をしたとき、スグリさま、楽しそうでした」

そんなことで、スグリは一瞬そう思い、それで納得しかかったが、振り返ってみるとやはりそれにも覚えがなかった。どちらかと言えばあのとき自分は、ナナコやイルと友達になったヒルデに対して、嫉妬心すら抱いていたはずだ。

「でも」スグリはうつむいた。「わたしはだめだったんだ。どうしても戦わなくちゃいけない」

「じゃあ、きつと戦いが終わったらお友達になれますよ」

「……そうかな」

「そうですよ」

そうならいいのだが。そうになったら素敵だとスグリも思う。もつともそのためにどうすれ

ばいいのかはわからない。向かってくるすべての敵をやっつけて、というのは、正直言つて本意ではない。向かってくるのは機械たちだけではないのだから。それをやってしまったら、それこそ友達がどうのという話ではなくなる。

ただ、たしかなのは、ここで眠っているだけではどうにもならない、ということだ。みんなの気遣いは嬉しいが、甘えるわけにはいかない。まして心を見透されたと衝撃を受けている場合でもない。本当は隠しておきたかった想いを知つても、ヒルデは優しいままだったではないか。こういう人たちを守るためにも、自分は戦わねばならない。

「やっぱり、わたしは行くよ」スグリは顔を上げてヒルデを見る。「どうすれば戦いが終わるのか、まだわからないけど」

「スグリさま……」

少しずるかったかなとスグリは思つた。戦いが終われば友達になれる、そう言つた手前、そうするためにもいま行くのだというこの自分を、ヒルデは引き止められはしないだろう。

ヒルデは少しのあいだ逡巡して、深く息を吐いて、わかりました、と言つた。

「そのかわり……危なくなったら、逃げてでも戻つてきてください。ぜつたいですよ」

「うん」

よかつた、なんとか納得はしてもらえたようだ。止める手を振り切つて戦いに走ることとは、できることならやりたくなかつた。守るべき人々に、行くな、と言われてしまったら、自分は何のために戦うのかわからなくなつてしまう。

そういう気持ちを知ってか知らずか、オリンなどは、お願いします、と言ってスグリを送り出すのだった。帰ってきたら、ありがとう、だ。それでスグリはどういうわけか、ただ心配されるよりも救われた気になる。本当はヒルデにもそうしてほしい。だが、おそらく彼女にそれは望めないだろう。

とにかく、行かなくては。

立ち上がりかけたスグリの肩を、しかし無言でヒルデが押さえつける。スグリは再びベッドに尻餅。なんだ？

「あの、」とスグリ。おずおずとヒルデの顔を覗き見る。

「それから、ちゃんと着替えていつてください」

「え？」

ヒルデは立ち、両の拳を自分の腰に添えて言った。

「わたしいちおう貴女のお世話をあずかってるんですよ。いくらなんでもパジャマで外出だなんて、承服いたしかねます」

「そ、そうなんだ」

たしかにこういうところ、ヒルデとオリンは似ているかも。スグリはつられて、的外れなことを考える。

小さな背中が廊下を駆けていくのを見送ったヒルデは、オリンらのもとへ戻る前にもう一度、空っぽの寝室に足を踏み入れた。

ベッドの上に放られたパジャマが目につく。おやおやとヒルデは苦笑する。にべもなく寝室を追い出され、驚異的なスピードで着替えを完了したスグリが脇目も振らずに飛び出していくのを慌てて追い掛け、見送ったヒルデは、そのときは散らかった衣類にも気づかなかった。一分一秒を争う状況ではない、というのは、スグリの耳にはなかなか届かないらしい。そんなことはオリンたちが想像で言っているだけだ、と、スグリは思っているのかもしれない。くて、それなら慌てるのもしかないといえそう。

だが、オリンらのその想像は正しい、信用してよいと、ヒルデにはわかっていた。ヒルデは、機械たちはまだ自分たちを直接狙ってはこないということを、想像ではなく事実として知っていた。ナナコが、そう教えてくれた。

なぜ攻撃してくるのか、一番知りたいそれについてはナナコはこたえてくれなかった。ヒルデの方でも地下のことは明かしていない。まだまだお互い秘密だらけだ。いや秘密ならばよい、なにもかもひけらかす必要はない。しかし、とヒルデは思う、自分たちのこれは、騙し合いだ。友達になるにはもう少し時間が掛かりそうだ。

ナナコたちはきつと街を襲ったりしないと言っているとスグリにもちゃんと説いてやれば、彼女はもう少し落ち着いたろうか、落ち着いたスグリはこの自分を寝室から強引に追い出したりもしなかったのではないか、パジャマを手を取ってていねいに畳みながら、ヒルデは切なげに細い

息を吐き出した。いまになって口惜しさが込み上げてくる。

この手で、着替えさせたかった。

一方、実はスグリもそんなことはとづくに知っているのかもしれない、という気もした。

ナナコはちよつといじわるだった、と語ったとき、それに同意を返すスグリの顔をヒルデはつきり覚えていた。彼女らの「戦い」がいつたいたどのようなものなのか、ヒルデにはまるで想像できない。ただ、口論や罵り合いと、あのとき言った「いじわる」は意味合いの異なるものだ、スグリにそれが伝わっていないはずがなかった。たぶん、どの程度かはわからないが、あの二人は話をしているのだろうとヒルデは思った。スグリはナナコになにかいじわるを言われているのだ。イルもスグリと戦つたらしいから、そこでも会話はあつたろう。だから、ナナコやイルたちの、目下の狙いというものを、スグリが知っていたとして不思議はない。

それでもスグリは、ああなのだ。自分が寢室を追い出されるのは必然だったのかもしれない。

畳み終えたパジャマを持て余す。首を巡らせると、壁の衣類チェストの引き出しも開きっぱなしになっていた。

ヒルデはチェストにパジャマを仕舞いながら、そういえば自分も、スグリの質問にこたえていなかったと思い出した。まあ、無理もない、一人苦笑い。

どうしてそんなに想ってくれるの？

いきなりそんなことを聞かれても即答できるわけがない。

そもそも、これまでヒルデ自身にも疑問だったのだ、自分はなぜスグリという少女のことをこれほど気にかけるのだろうか、たしかに名は昔から知っていた、しかしまだ顔を見て、知り合つて間もない少女のことを、こんなに。

すごい力を持った、たつた一人の存在だからか。星を救つたとんでもない恩人だからか。それとも、大変な役目を甲斐甲斐しくこなそうと走り回る健気さに心打たれたのか。あるいはそれらの力や、役目ともまったく無関係の、彼女の生来の性格がそうさせるのかもしれない。あれはいい子だ……子供ではないらしいが。

どれを取つても理由として十分だとヒルデは思う。そういう理由から彼女に特別の思いやりを注ぐ人は多いだろう。しかし自分がスグリを気にかける理由は、そのどれでもないようだ。きょう、ついさつき、ようやくそれがわかった。

あの、儂い微笑みのせいだ。スグリの顔にときおり浮かぶ、見ているこちらまでもがわけもわからず切なくなってしまうような、おそらくは決して触れてはならない、あの微笑みのせい。あれは、いつも明るく振る舞う彼女が、密かに抱える悩みから生まれたものに違いない、だから自分はそれを気にかけてしまうのだ。

スグリの悩みというのは、嘔みくだいていえばたぶん、とヒルデは自分なりに想像する、戦いなどやりたくないのに、やらざるを得ない状況を誰よりもよく理解している、ということだろう。しかしそれを語れば守るべき人々をも悩みに巻き込んでしまふともわかつてい

から、決してだれにも知られまいと想いを抱えこんでしまう。そんなことだから心がすつかり行き先をなくして、最後の逃げ場は孤独の内、というわけだ。で、ついには周囲の優しさに締め付けられてしまう。

ヒルデはベッドを少々拝借して、椅子代わりに腰を下ろした。同じ場所に尻餅をついて自分を見上げた、スグリの表情を思い返す。少し悪いことをしたかもしれない、あそこまでうろたえるとは思わなかった。

あのとき自分は、スグリのあの微笑みの根っこに手を伸ばしたのだ。スグリはそれに触れようとした自分から必死に逃れようとした。なぜならスグリはそこに、どうにもならない、だれにも明かせない不安のかたまりを隠していたから。まったく自分の思ったとおりだ、あのときの表情といったらなかった……しかしそれこそ、強く前向きな少女には似つかわしくない、あの怯えきった表情こそが、この自分がスグりを気にかける一番の理由でもある。

ベッドに腰掛けたままで、ヒルデはぼふん、と真横に倒れ込んだ。ちょうど枕も借りる格好になった。

まるであの日の自分を見るようだった。部屋の隅にうずくまって口をつぐみ、変えようのない境遇に己が身を呪い、優しくしてもらった価値などないのだと心も呪って、ただ擦り切れた毎日を送っていたあの頃の自分と、あれは同じ表情だった。

いつも首から下げている装飾ケースが、焦点も定まらぬほどの間近にある。そつと手を伸ばす。ケースを開くことはしなかった。指で表面をなぞった。

スグリはつらい役目でもなんとかやり遂げようとするだろう、しかしその過程で己を呪うようなことがあつてはならないのだと、ヒルデは思った。スグリには、みんなの優しさがつらい、などと感じてほしくない。なんとかしてあげたい。ばかな自分ではなんの役にも立たないかもしれない。なんとかしてやるのは、なにも自分でなくてもいい。スグリなら自身身でやるかもしれない。せめてそれまで見守っていたい……そこまでいくともはやこちらのわがままのようにも感じられたが、しかしここでは、いま自分は間違いなくそう思っている、というのが大切で、それが本当にスグリのためになるか、というのはまた別の問題だった。もしそんなのは迷惑だと言われたなら、そのときはスグリと距離を置くことも考えねばならないだろうが、たとえそうなつてもこの想いまでは変わりはしない。つまるところ——失礼ながら、いまの貴女は幼く愚かだった昔のわたしにちよつぱり似ていて、だからわたしは貴女のことを放っておけないのです——と、質問のこたえとしては、おそらくそういうことになる。

ヒルデはむくりと体を起こす。人様のベッドで眠ってしまったてはことだ。そもそもお世話をするという名目でもって、勝手にあがりこんでいるのだ。のんびりくつろいでいるわけにはいかなかった。

さて、そう思つて見渡すとなんと世話のしがないの部屋である。かんたんにベッドを整えたヒルデはいきなり手持ち無沙汰になった。もう少し散らかしておいてくれてもいいだろうにと思う。部屋の主が生真面目だとか、綺麗好きだとか、そういうこと以前にまず散ら

かるほどの、ものがなかった。寝室に限らず、据え置き of 食器や家具もさほど使われた形跡がない。この個室をスグリは本当に休むためだけに使っているらしい。いや、しかし昨晩は風呂には入ったようだからと思ひ立ち、ヒルデはそちらへ。

水栓はしっかりと閉まっているか、タオルの補給は不要だろうか、いつそ洗濯でもしようかしら、でもさすがに嫌がるかもしれない……。

ふだんはスグリ相手にもあれだけ無遠慮に絡んでいるくせに、当人が留守となるとかえつてどこまで生活に踏み込んでよいものか躊躇してしまうヒルデである。ひととおり部屋を歩きまわつてみたものの「手頃なお世話ポイント」を見つけるには到らず、けっきよくなにもせずに寝室に戻つてきてしまった。それでもどこか手心を加えたいという欲求が収まらない。ヒルデはベッドの脇を右往左往した末に、シーツの替えならまだあったらうと、つい先ほど整えたばかりの、たいして汚れているわけでもないそれを引っぱがしてしまった。カーゴもなにも用意しておらず、両腕でぐるぐる巻き取つて胸に抱え込む。

ようやく寝室を去る段になつて、ここでヒルデは衣類チェストにも目をつける。

ヒルデの見立てでは、この個室にある家具・調度品も、室そのものと同様にだれかが勝手に用意したもの、だ。チェストの容量の多くを占めている部屋着もそうだろう。そちらは特にスグリに合わせたものではないようで、いかにも可愛げのない、ひたすら清潔感を漂わせるものばかり揃っている。ヒルデはスグリがそれらを着てうろうろしているところを見たことがないが、おそらくサイズも合っていないと思われた。パジャマにしても、あの少女の体

には大きすぎだったではないか。

「お店何時^{いつ}から開いてたかしら」

チエストを横目にたわいない腹案^{ふくあん}を練りながら、シーツを抱えたヒルデは軽快な足取りで寢室を去っていく。

*

スグリは廊下をひた走る。ほんとうはもつと急ぎたかったが、狭い施設内では急げなかった。スグリ自身がよくてもすれ違う人を驚かせてしまうし、完全に道を塞ぐ扉は避けようがない。まさかぶち破るわけにいかない。

すでに機械たちが飛んでいる以上、地下と地上の出入りには重々気を払わねばならない。こういうときは、なるべく機械たちから離れた場所のゲートを使うようにしようと、みんなで話して決めていた。とはいえスグリは複雑な地下の地図を丸暗記しているわけではないし、現状ではどこから飛び上がるのが最適か、自分ではわからない。だれかに案内を頼んでいる余裕もない。だから今回はしかたがない、スグリはとにかく手近のゲートに向かった。本心では、なんでもいいから早く地上の様子を確認したかった。

雨が降っていた。

「……空が荒れてる」見上げてスグリはつぶやいた。「風が強いな」

密集した木々の下、空などとても見えはしない。しかし激しい横殴りの雨に草木が騒ぐ。昨日は比較的晴れていたのだ。これほど急に空模様が変わることは近頃では稀だ。ここが森の中でなければ立つていられないほどの風雨ではなからうか、スグリは心配になった、街々にとつてはこの天候こそ脅威かもしれない。

さいわい顔を出したゲートの付近に機械たちの姿はなかった。寝室で聞いたヒルデの言葉とは少々異なる状況だが、機械たちはこの強風の中、どこか一点に留まろうという努力はしていないのかもしれない。スグリはゲートから離れると慎重に上昇、高度を上げていく。

辺りは真つ暗だった。真夜中だから、というあたりまえの理由に加え、分厚い雲が空を覆つてしまつており、下界には星々や月の明かりすら届かないのだ。おかげで空中に浮かんだ人工の光、というものは大変目立った。風下の方に小さな輝点がいくつも揺らいでいる。あれが機械たちだろう。

そこは街々からはかなりの距離があつた。自分がいまいる、この場所に向かつて来られるよりも、こちらから接近した方がよい、スグリはそう判断する。しかし武器を構えて一直線に突っ込んだりはしない。機械たちはまだスグリに気づいておらず、だからまだ戦うと決まつたわけではない、という理屈である。大きく旋回しながらアプローチ。

この真つ暗な世界のどこかに、あの少女たちも息を潜めているのだらうか、スグリはいつとき眼下の森を見渡した。「もういらない」と言われた子が、昨日ヒルデと会っているのだから、おそらくそういうことになるう。彼女らはまだこの星のどこかにいるのだ。戦いを強

要され、家に帰ることもできずに。

「……みんなあの子みたいになされてるのかな」

不意に肌がちくりとした。感傷的な気分のせいかな。違った。スグリは攻撃照準を受けていた。機械たちがスグリに向かい加速する。

高速タイプの空戦メカの姿はない。暗い嵐の空に浮かぶ輝点は、キューブの大きな単眼に灯った光だった。

しかたがない、スグリは気持ちを切りかえる——切り替えるなんてよせ、と、ヒルデは言ってくれたが……いや、いまはそんなことを言ってる場合ではない、だいたい、いまのはそんな難しい意味ではなくて、ただ気持ちを切りかえるというのは悪い意味では……

もたもたしているうちにキューブの攻撃圏内にスグリは入っていた。キューブのビームが直撃コースでスグリに迫る。少しも切りかえられていないスグリは、それでもぎりぎりで攻撃に反応していた、咄嗟に蹴り出した右足がビームを捉える。ビームは粉々に砕け散って周囲にきらめき、やがてエネルギーを失って消える。

「い、たい……」

右足がじんと痺れた。思いきり蹴ったつもりだったのに。キューブのビームは以前より強力になってるのかもしれない。なかった。

鋭い痛みがスグリに現実を突き付ける。油断をしていたら自分だって危ない、あたりまえだ。

スグリはビームライフルを応射、自分を狙ってくるビームをかいぐぐつて、キューブたちとの距離を一息に詰める。

戦いを煽^{あお}るかのように嵐はいっそう勢いを増す。一時は収まりを見せていた雷雲がまた荒立ちはじめた。闇夜に幾筋もの稲光^{はし}が奔り、落雷となつて大地を、ときにはキューブをも襲つた。スグリですら危うく巻き込まれるところだった。

激しい風雨は確実にキューブの飛行性能を低下させていた。スグリの接近をあつさり許したキューブたちは、スグリをろくに照準することもできないまま次々と撃墜された。四〇機ほどいたキューブのうち半数ほどは、即席の接近戦用装備として新たにミサイルを抱いていたのだが、これが使われることもほとんどなかった。実に優れた機動力を誇るこのミサイルは、しかしビームとは異なり、発射されてから実際に命中するまでの数秒間ものあいだ、真つ暗闇の中でずつとスグリを見失わずにいなければならなかった。それだけでもまったく現実的でないのに、編隊を掻き乱すように飛ぶスグリのそばには常に味方のキューブがいて、ともすればミサイルはそちらへ向かおうとさえするありさまだった。

敵ビームの威力に気後れはしたものの、結果的にはさほどの苦勞もなくスグリはキューブたちを制した。一息ついて、上空に目を凝らせる。

雲を破つてまた別の光が降りてきた。キューブではない、ずっと大きく、その光は機械の部品が発光しているというよりも、なにか火の玉が揺らいでいるように、スグリには見えた。ある意味それは確かに燃え盛る火の玉であつた。

実体はやはり戦闘メカには違いない。背の低い六角柱をした機体である。その側面から三方向に巨大なノズルが張り出していて、そこから凄まじい勢いで炎を噴き出しているのだ。

見上げるスグりに火球の欠片が降り注ぐ。スグりは思わず左の手のひらで顔を庇った。今度は痛くはなかった。そろりとその手に視線を落とすと、なにか、粘度の高い液状の薬品が燃焼しているのだとわかった。手のひらの上でまだ燃えている。

こんなものを撒くなんて、スグりは火の玉を握り潰す。豪雨に晒されても衰えなかった炎は、それで跡形もなく消え去った。スグりはびつ、と手を払い、かわりにソードを握り締める。

雨が降っていてよかったとスグりは思う。火の玉が森に落ちればそれが触れた部分は焼けてしまうだろうが、この天候ならば、どこまでも広く燃え広がってしまう、ということはないはずだ。

スグリのビームライフルが輝く。放たれたビームはプラズマ爆風と衝撃波を伴い、降りかかる火の粉に触れずとも吹き飛ばしてへ火炎放射機へ突き刺さる。だが、装甲を貫通するには至らない。

火炎放射機は機体規模が大きく、その一撃での損傷は軽微。ぐるぐると回転しながらでたらめに飛び回り、スグりに負けじと炎を噴きあげる。

しかしいかんせんその攻撃は圧搾ガスと燃焼剤の高速噴流でしかなかった。密度の低い投射物は莫大な空気抵抗に逆らえず、すぐに減速してしまう。初速を高めても射程の伸びは芳かんば

しくない。巨大な本体の機動性にも特筆すべき点はなく、素早いスグリに炎はまるで届かなかった。ついにはスグリが風上に陣取ってしまうに至り、火炎放射機は手も足も出せなくなった。

あるいはこんな天候だからこそ、こんなものを出してきたのかもしれない、スグリは火炎放射機を観察しながら、ふとそう思った。晴れているときに使えば地上の被害がばかにならないから、この機械の性能を試せるのはいましかない、ということではないだろうか。いや、ひよっとしたら試されているのはこの自分の方かもしれない。あの機械の性能そのものではなく、それがわたしに通用するかどうかを確かめようというのではないか、わたしの、戦う力に。

そうだとするといいい気分はしなかった。そんなところで自分を評価してくれるなとスグリは思った。そして、そもそもなぜそんな考え、自分の戦闘能力が試されているなどという発想が、どこから湧いて出たのかとスグリは首を捻った。たぶん、ようするに、自分はやはり怖^{おし}気^けているのだ。ちよっとした疑問にも卑屈に構えて、自分自身でなんでもかんでもをより悪い方へと持っていくてしまふ。

と、そう気づいたのならそんな不吉な考えはきつぱりと捨てなければ。スグリは小さく頭を振ってライフルを構える。

スグリは火炎放射機のノズルを撃った。炎を噴射している部分はきつと他より脆いだろうと考えたのだ。そのとおり、脆弱な噴射口内部に直接ビームを放りこまれた火炎放射機は、

しかしスグリが予想した以上の大爆発を起こした。そのノズルは一撃で完全に吹き飛んでしまった。

おどろいた、だがこれなら無力化は容易い、スグリは続けてノズルを攻撃する。

火炎放射機は逃げる間もない。あつという間にノズルを三基とも失った。真つ黒に煤焦^{すす}げた破片がばらばらと強風に飛ばされていく。

空はまた真つ暗になった。火炎放射機はもう炎を吐けないのだ。六角柱の本体だけが、ふらふらといまさらに離脱を試みる。

逃げようとするのだから本当にもう戦えないのだろうか、いつかまた火を噴くパーツを着けて戻ってくるかもしれない、そういうことができそうな形をしていた。撃つべきか、撃たざるべきか。ビームは先ほどはあまり効かなかった。連続で攻撃すればどうだろうか。

しばし逡巡するスグリの真後ろから、なにかが猛スピードで突っ込んできた。

はたとその接近に気づく。スグリは左へ逃れながら、同時に左転回、後ろを振り返って、それを見る。速かった。赤い弾丸のようだ。いや弾丸というにはあまりに大きい、ミサイルのような……。

スグリはぎりぎりで衝突を回避した。赤い影は、左転回を続けるスグリの正面、すぐ目の前を通過して、あろうことかそのまま火炎放射機に命中した。遅れて爆発が起こる。

目を細めて爆風に手をかざす。赤い影がどこから飛んできたのか、ということに気にする必要はなかった。スグリは赤い影とすれ違う瞬間に、触れんばかりの至近距離からその正体

をはつきりと捉え、それがミサイルなどではないと知った。
スグリよりも少し大きいその影の正体は、赤い服を着て、赤い髪をした、一人の娘だったのだ。

「あはははは、ぶつかっちゃったよ」

炎に包まれ、二次爆発を繰り返す火炎放射機の残骸から這い出して、その娘は笑った。

「風、強いね！ あはははは!!」

険しい表情で見つめるスグリ。

「お！」娘は、スグリがいまそうだと気づいたような口振りで、「銀髪発見！」

「へんな呼び方しないですよ」

「あはははは！ ごめんね！ キミの名前、いままで誰も報告してこなかったから」

報告もなにも、とスグリの気分はまた沈んだ。言われてみれば、そもそも名乗った覚えがない。これで、仲良くなりたい、とは。

「……スグリ」

つぶやくように言う、わたしの名前はスグリ、きみは？

「スグリかー。私カエ。よろしくねー」

よろしく？ でもきみは、

スグリは尋ねる。「カエ、きみも、命令を受けてるの」

「うん、そだよ！ いっぱい暴れていいんだって！ 素敵！」

「……」

「ねえ、スグリ」カエは実に人懐こそうな笑みを浮かべて、あるいは期待に瞳をきらめかせながら、言った。「思いつきり戦おうよっ！ 本気と本気で！ この広い空で！ 戦おうっ！ スグリって、すごく強いんでしょ？ それならきつと、ものすごく楽しいことになるよ！」

「楽しくなんかないよ。けど……」スグリはカエの求めに苦々しくこたえる。「けど、みんなを守るためだったら、がんばって戦う」

「いいねっ！」

スグリの葛藤など素知らぬふうでカエは笑った。

が、当のスグリはまだどこか踏ん切りがつかない。カエの瞳をうかがうように覗き込んで、言ってみる。「本当は……助けられたらって思うけど……」

「あははははは!! 助けるってなに？ 私はずっと楽しいのに、なにを助けるの？」

「……なんでもない」彼女はほんとうに戦いが楽しいのだろうか、それとも戦いが楽しいと思うように、変えられてしまったのだろうか。「こんなこと、さつさと終わらせる」

「お？ やる気!? あはははは！ いいねっ！ いいねっ！」

カエはいよいよ高揚し、対するスグリもビームライフルを構え――

「いま、最高の気分だよ！」

――そのライフルが突然外へ弾かれる。

しまった。

スグリは、カエが自身の右手を左上方に向かって振り上げたのを見ている。宙を薙ぐような動きだった。たつたそれだけの動作で生み出された大気圧変動の波が、ビームライフルを煽ったのだ。雨粒を弾き飛ばしながら迫るその衝撃波をスグリははつきりと見ていた。ただ、あまりに出し抜けだったので反応するのがわずかに遅れた。彼女はこんなふうに戦うのか、いまになってそう認識するような始末だった。

もちろん衝撃波はスグリの体も打った。息が詰まる、しかしスグリには零れそうになるビームライフルを保持することの方が先決だった。ライフルごと跳ねられた右腕は伸び切り、体も仰け反っていたが、スグリはなんとかグリップを手放さずにすんだ。

隙だらけのスグリの懷にカエが飛び込んだ。右の拳を絞り、開き切ったスグリの左脇腹を狙う。スグリはあごを引いてそれを確認、左手のソードを手首から先で操り、長い剣身をカエに向けて振る。

カエは攻撃中断、バックステップと同時に腕を振るう。最初のものとは比較にならない高圧・高温・高密度の衝撃波。空気を圧縮して作った槍のように鋭く、伝搬速度も大きい。

それが発生するところにはスグリも体勢を立て直している。超高速射撃、単発。

ビームはカエの槍を貫通、その近傍波もプラズマ爆風が拡散する。ビーム束そのものは、カエに迫りはしたものの、彼女の爪に斬り裂かれてしまう——それを爪、と言っているものかどうか、スグリにはわからなかったが、カエの拳や指先に高いエネルギーが集中している

のは明白であつた。振るえばその場に残る赤い軌跡にすら、何らかの力が宿っている。ビームはカエの指ではなく、その軌跡に相殺されたのだ。

間を置かずに再びカエが突進を仕掛ける。スグリも再攻撃、しかしカエは始めから燃える拳を前に出し、それでスグリのビームを受ける。

カエの回避行動に追従しようとしていたスグリは意表を突かれた、自分が逃げるはめになる。右ヘスライド、左転回、カエに体の正面を向けながら後方へ離脱。背進はいしんしながらのビーム攻撃。

カエは突進の勢いを少しも殺さずスグリの方向へ直角に軌道変更、ここでスグリがビームライフルを発射するが、攻撃タイミングをカエは読んでいたらしい、ぐつと力んで耐えるような所作、ダメージはあつても動揺はない。お返しとばかり素早く槍を放つ。スグリは反射的に槍を迎撃。

するとその瞬間、カエは目を見張る加速でひとときスグリの離脱速度を上回った。二人の距離が一気に詰まる。慌ててライフルを向けるスグリだが、カエの狙いはスグリよりもそのライフルで、スグリは、自分の予想よりも早く伸びてきたカエの左拳に、ライフルの銃身を跳ねられた。強い力だった。今度は保持にこだわってはいられなかった。潔くライフルを手放す。

ライフルを叩いたカエの左腕が引き、右の打ち上げがスグリのあごを狙う。スグリは後方へ倒れ込んでこれを避け、そのままカエの股下に体を滑り込ませる、やや高度を下げながら

のスライディング。ソードを左から右へ、真下からカエの腹を薙ぐように振る。カエは急上昇、ぎりぎりですwordの剣先から逃れる。即座に槍を投射し、槍の後ろに隠れるように、再度突進。

ソードで槍を払えば後方のカエに対処できない。といつて避ければおそらく回避位置に攻撃を合わせられるだろう。それならとスグリは、槍に向かつて真つ直ぐソードを突き出した。全身で伸び上がるような刺突^{しとつ}。ソードが槍を打ち砕く。

だが、あと一步カエを捉えるところまでいけなかった。それどころかスグリは、身を捻つて突きをかわしたカエの左手に、ソードの持ち手を掴まれてしまう。

まずい、振り解けない。力比べではスグリに勝ち目はなかった。それでもなんとか離脱を試みる――逆に思い切り引つ張られる。腕がちぎれるかと思う。為す術なくぐいと体を引き寄せられ、伸び切ったスグリの肘に、カエの右手は掌打の構え。絶望的なまでの危機感がスグリを煽る。

ビーム攻撃。

しかし次の瞬間カエはスグリを放り出していた。打撃が決まる直前、二人を引き離すように幾筋ものビームが降り注いだのだ。スグリは胸をなでおろす。危なかった、というよりも怖かった。左腕を庇うように抱きしめる。

スグリの周囲に五機のビームポッドが並ぶ。揃つてカエに砲身向け、威嚇するように前に出る。

「それ」不意にカエが口を開いた。「ナナに似てる」

ここで話し掛けてくるとは思わなかった、スグリは攻撃を踏み止まる。

カエはじつとビームポッドを見つめていた。が、やがてスグリに視線を戻して、叫んだ。

「銀髪にいじめられたって、ほんとうだったんだ！」

その剣幕にスグリは息を飲んだ。

「ナナをどうしたの！」

カエは明らかに激昂していた。スグリは気圧されるばかりでカエの問いに答えられない。先ほどまで、楽しく戦おうなどと余裕を見せていたカエが、どうして突然……ビームポッドを出したからか。

カエもいつまでも回答を待つてはいなかった。敵愾心てきがいしんを剥き出しに、カエはスグリに飛び掛かった。

こちらはビームポッドがある以上、無理に格闘に付き合うことはない、そんなことを考えていたスグリの心には、それゆえに生じた小さな弛みが確かにあった。なにより先の、突然の非難による狼狽が大きかった。

気づけばスグリは、カエに当て身を見舞われていた。

カエの機動は総じて直線的で、そのかわり高い瞬発力があつた。肩からの強烈なタックルを受けたスグリは堪らず後退……というより、激しい衝撃に吹き飛ばされている。密着した二人の体の間で爆弾が爆発したようなあんばいで、そして爆弾などよりずっと威力があつた。

仕掛けたカエ自身も少なからず傷ついていた。

スグリは必死に姿勢制御、自らの機動でカエから離れる。左胸の上部から肩にかけて特に痛んだ。たぶん、カエの肩に打たれたのだろう、カエは激情に身を任せて突撃してきたように思えたが、ある程度は狙いがあつたのかもしれない、そうスグリは想像した。痛みで腕を大きく動かせないのだ。左腕は、しばらくともにソードを扱えない。スグリはソードを右手に握り直す。

カエはすでにスグリを追撃する気配を見せていた、そこへビームポッドが立ち塞がる。前進しかかつていたカエは左右から狙われていることに気づき、やりすごすために急停止、目の前をビームが横切る。

動きの止まったカエの真後ろに攻撃体勢のポッドが滑りこむ。全身で振り返るカエ。右拳の裏打ちでビームを弾き、そのまま左腕を大きく薙いで、刃のような幅広の衝撃波を放つ。打たれたポッドは一瞬体勢を崩し、その一瞬に間合いを詰めたカエの爪がポッドの基部を穿つ。ポッドは火花を散らして落ちていく。

別の機から放たれたビームが今度こそカエの背を捉える。被弾したカエは、しかし崩れた体勢をろくに整えることもしないまま反撃。強引な突進を繰り返す。

ビームポッドとカエの戦闘——スグリ自身はそこから距離を置いて、ようやく回り始めた頭でカエの言葉を追思^{つし}している。あれほどの憤りをぶつけられた経験はかつてなかった。彼女はこうしてあんなに怒っているのだろう。

ビームポッドを見て「ナナ」のことを思い出したからに違いないとスグリは思った。「ナナ」が、ナナコのことを指しているであろうことも、まず間違いない。カエは、この自分がナナコをいじめたと思っているのだ……。

いじめるだなんてとんでもない、スグリは咄嗟に弁解しようと言葉を探す。だが、どんな言い訳も成り立たないのだとすぐに気づいて愕然とする。

事実、戦って傷つけたではないか。

槍が飛んできた。

カエはビームポッドと戦いながらもスグリから意識を逸らしていなかった。

槍は音速程度にまで減衰していたものの、直進性は損なわれておらず、立ち竦むスグリの右手を正確に捉えた。柄だけのソードが宙を舞い、我に返ったスグリは慌てて手を伸ばす。と、ビームポッドの包囲を破ったカエが後方から突っ込んできた。焦る。自分の「パンチ」がカエに通用するなどとは到底思えなかった。ソードまで失うわけにはいかない。

どうにか右手がソードに届く。指先で引き寄せ、握り締める。剣身の形成は一瞬である。

もう、すぐ真後ろに迫ったカエの気配に向けて、スグリは振り向きざまソードを一閃。だが、際どいこの攻撃は惜しくも空を難いだ。カエはソードの剣身に触れる寸前にジャンプ、前方への宙返りでスグリの頭上ぎりぎりを飛び抜けている。

スグリは瞬時に互いの位置関係を把握するも、カエの運動には回避と反撃の区別がまったくない、前転の勢いも乗せた後ろ蹴りがスグリの背中を打った。閃光。どん、と重い衝撃。

体が仰け反る。スグリは大地に向かつて深い角度で吹き飛ばされる。急激に高度が下がり、上空からはそれ以上の速度でカエが追撃してくる。

スグリはソードは手放していない。歯を食い縛つて体の向きだけを変え、落ちながらカエと向かい合う。だめだ、近すぎる。カエはすでに構えていた。灼熱を湛えた赤い爪。迎撃は間に合わない。スグリは必死に身をひねる。その右脇腹に爪が触れる——避けきれなかった。あるいはそれは痛みを感じるよりも早かったかもしれない、スグリは即座に反撃に出た。速やかな切り返しというには程遠い。もう無我夢中だった。斬撃を放つには近すぎる位置、自分の真横を追い抜いていこうとしているカエに向けて、スグリはソードを逆手に握り、降り下ろした。

カエから本気の焦りが伝わってくる。もつとも当たったかどうかまではわからない。

それでスグリのアタックフロアはいったん途切れた。あとの行動を組み立てていなかったのだ。せっかくカエの意表を突いたというのに、離脱に繋げることもできなかった。完全に受け身にまわり、なんの備えもない状態で、そんなスグリがカエからのさらなる打撃を交差した両腕で受けられたのは奇跡的であった。

二人の体が接触するたび決まって生じる閃光は、幾分小さく、短く消えた。かわりに甲高い破碎音が鳴り響き、暗夜あんやの空に砕けた虹の欠片が舞った。

巨木の連なる深い森に、スグリは背から墜落した。

視野が狭い。色も輪郭も、すべてが暗くぼやけた世界に沈んでいく、意識さえも。

そこへ飛び込んでくる痛烈なまでの光と音。スグリは刺激に呼び起こされる。

束の間気を失っていたのかもしれない。スグリの体は地面に仰向けに倒れていた。墜落の衝撃のせい、付近の草木は軒並みなぎ倒され、根の浅いものは吹き飛んでしまっている。

雷光、雷鳴、暴風、雨、激しく揺れる木立のざわめき。それらはスグリが目覚めてもなお騒いでいた。立ち上がれと急ぎ立てているようでもあったし、負けるなと鼓舞するようでもあった。だが、もはやスグリはその声に気づくことすらできない。

スグリは雨風に寒けを覚える。そのわりに不快な熱で全身が火照っていた。高熱に冒されたときのようにひどく気怠い。信じられないくらい四肢が重く、呼吸をするにも体力を消耗するようだった。そしてなによりまずいことに、いつもの、あの力がほとんど感じられない。濡れて額に張り付いた前髪がいまいましい。

そういえばビームポッドの反応も鈍かったとスグリは思い、いや、鈍っているのは自分自身なのだとようやく気づく。

キューブのビームを蹴ったとき、やけに痛かったのも、火炎放射機の炎を手にしてなにも感じなかったのも、自分の力がどこかおかしかったのだろう。あそこまで痛いはずがないし、まったく熱くないわけもないのだ。

いまになって脇腹のずきずきとした痛みが意識に上ってきた。それほど深い、致命的な傷

ではなさそうだ……そう信じたい。触って確認する気にはとてもなれない。空中での最後の攻防からどれくらい時間が経っているのかわからなかったが、いまでも出血が止まらないのは事実である。あまりに消耗が激しく、回復は遅すぎる。こんなことははじめてだった。

投げ出した足の側へ、カエがゆっくり降下してくる。

カエの表情にも疲労が色濃い。打撃を放てば自身も大なり小なり反動を受けるものだ。戦鬪メカ相手なら一方的に打ち抜くはずの打撃でも、相手がスグリとなれば、大きな反動に加えて、互いが持つ防御能力が打ち消し合って一気に消耗してしまうのだった。カエは五機のビームポッドを撃墜するあいだに何発かビームを食らってもいる。決して無傷ではないのだが、やっぱり怒っている、とカエの顔を見上げるスグリはそんなことを思う、本人もあんなにしんどそうなのに、「ナナ」を心配して怒っている、と。スグリはいつかのイルの言葉も思い出した。「失いたくないものは、私にもあるんだよ」あのとき自分は、なにも奪ったりしないと、そう言った。それなのに自分はカエから「ナナ」を奪ったのだ。イルとナナコにしても、この自分をやつつけられなかったから、宇宙船に戻れなくなったのではないか。スグリは転がってうつぶせに、地面に手について重い体を起こそうとする。その行為が脇腹の傷に響いた。声が出そうになる。ぬかるんだ土に朱色の染みが滲む。自分の腹から流れた血だ、その事実が恐ろしかった。はやく治れ、どうしてこんなに時間が掛かるのだ。いつもならこれくらいの傷、なんでもないはずなのに……まさか、本当に、力を使い果たしてしまったのだろうか。

自分の体はこんなにも脆かったのかと愕然とする。こんなにも、痛いものか。これが戦いか。こんな痛みを相手に押し付けるのが、この自分の役目なのか。

これほどつらい思いをしてまで、どうしてそんなことをやらねばならないのだろう、傷の痛みか、それとも他のなにかのせいかな、秩序立った思考ができない。衝動に任せていつすべて投げ出してしまえたら――混濁しかかる意識を、ふたたび雷鳴が繋ぎ止める。

どうにか立ち上がる。ふらりと後ろを振り返る。

カエはとつくに着地していて、少し離れた場所に立ってスグリが起きるのを待っていた。だがもうなにか話をしようという雰囲気ではない。ナナコのことがなくとも、最初からカエはスグリを倒せという命令を受けているのだ。向かい合って、とどめの一撃を放つつもりでいるのかもしれなかった。

対するスグリの右手にはいまもソードが握られている。もっともそれに宿った赤光は、スグリの状態を表すかのように、見るからに細く短く、弱々しく、かつ乱れていた。

これは本当にやられるかもしれない、不穏な考えがスグリの脳裏をかすめていく。それも、ただ倒れるのではない。いまの状態でやられたら、そのまますべての力を失って、本当に消え失せてしまうのではないかという気がする。

もしそうなってしまったら、みんなは、この星はどうなってしまうだろう。カエたちは、この自分をやつつけた後はみんなのことも傷つけると明言しているのだ。星にしたつてようやく傷が癒えたばかりで、これからどうなるかわからない。みんなのためにも、星のために

も、ここで負けるわけにはいかない。

それなのに。

体が重い。痛い。苦しい。なんの力も沸いてこない。何故。みんなが言うとおり、しっかりと休みを取らなかつたから？ それとも——力エの当て身を受けて以来、まだごちない左の手のひらに視線を落とす——たとえみんなを守るためとはいえ、戦うことへの抵抗感が大きくなりすぎたせい、だろうか。ナナコに言われたように、やはり自分は戦いのために力を振るう存在で、だから……だから、守らなければという気持ちだけでは、力を出せないというのか。ばかな。いまさら、いったいどうやって、戦うことに前向きになれるというのだ。

脱力感。パシャ、と泥の飛沫が跳ねる。スグリは地面に両膝を付いていた。

対照的に力エは拳に炎を纏う。力エは、どうやらもう向かつてくる気力も失つたらしい敵に対して、最後の一撃を繰り出すために身構える。

首をうなだれたままのスグリにも力エの気迫が伝わってくる。

いったいどうすればいい、絶対に負けるわけにはいかないのに、このままでは確実に負ける。そして永久に消えてしまうのかもしれない。そうなれば……みんなを守ることも、星を癒すこともできなくなる。それだけではない、二度と青い空を飛ぶことができなくなるのだ。風と踊ることもできなくなる。草原を走ることも、川辺で釣り糸を垂らすことも、街で牛の世話を手伝うことも、おいしい料理をみんなで囲んで笑いあうことも、なにひとつ、できなくなる……嫌だ。

嫌だ、心がそう叫んでいる。わたしが消えてしまったら、わたしはどこへも行けなくなるではないか、誰と会うこともできなくなる。そんなのは、嫌だ。わたしはこんなところで終わりたくない。わたしはまだ生きて、みんなと一緒にがんばりたい……。

胸の奥で、なにかがちりりと燻った。

「わたしは……!!」

わけもわからず声に出して顔を上げた。

そこには力工の拳があつた。

プルウィウス・アルクス

ただ、それを認めればよかったのだ

長身のカエは、地面に膝をついてしまったスグりを打つため大きく前傾して飛び込んだ。

まるで弾丸かミサイルのように、弾丸よりもミサイルよりも高速で突撃する。うんと身を絞り、全身のばねを利かせて右の拳を真つ直ぐ突き出す。その拳はスグリの額を捉える直前に、突然止まった。なにかにぶつかって、突然。カエは驚愕に体を硬直させる。完全な無防備を晒すスグリの手前に、打ち抜けぬほど強固な、見えない壁がある。カエがそれに気づいた瞬間、壁は青白い爆発の如く輝いた。カエの拳に宿った、真つ赤に燃える炎すらもが、青い光と衝撃に姿をかえて、壁の輝きを助長した。青い衝撃は円環状に収束し、壁に沿って幾重にも広がった。地面が深く抉られる。左右の木々が薙ぎ倒される。カエは危険を感じて後方へ跳ぶ。

この目に捉えることもできないままやられてしまうのかもしれない、それほど悲観していたというのに、スグりはカエの突撃をどこか他人事のような面持ちで眺めていた。実際、そ

れほど意識して見てはいなかった。スグリの意識はまだ自分の内に向いていた。

奇妙な感覚だった。負けて、やられて、消えてしまったら、どこにも行けずだれとも会えない。ようするにそれは、単に人々の身を案じるというのではなく、この自分が人々と語らえなくなることこそが嫌だ、ということではないか。そんな自分本位の気持ちでいてよいものだろうか。しかしその気持ちの強さといったら、スグリ自身も驚くくらいなのだ。

善いか悪いかはわからないが……、スグリは青い光の環をぼんやり見つめながら思う、とにかく、みんなと会えなくなってしまうことが一番怖い、と感じているのは、どうしようもない事実だ。もう少し肯定的に言うならば、自分は、なによりもみんなと一緒にいたいと思っている、ということだろう。それが守るための戦いにも繋がるわけだ。……ぜんぜん、意識しなかった、つまり自分は、みんなと一緒にいたいから、戦うのか。

あたりまえのことではないかという気がした。意識しなかったのは、あまりにもあたりまえ過ぎてその必要がなかったからだ。……しかしいまはどうだろう、スグリは自分に問い掛ける。いまも間違いなくそうだといえるだろうか。どうも、あやしい。いま自分は戦うことが嫌になりはじめているではないか。みんなと一緒にいたいとこれほど強く思っているにもかかわらず、そのみんなを守るための、戦いができなくなっている。いったい、どうして戦うための存在と言われるのが怖いから。

戦うほどに本当にそうなってしまいう気がしているから。だから次第に戦うこと自体が怖くなったのだ。それでも守るためには戦うしかなくて……いつからか、戦えるのは自分だけだ

からと、この自分がやらなければならないのだと、守るという行動を起こすその理由が、本来の己の願いから、なにか使命感のようなものにすり変わってしまったのではないか。戦いというおそろしい行為であっても、課せられた使命としてこなしている限り、この自分自身は潔白でいられるとでもいうように。

だがそもそも自分の力は、自分にはどうしてもやりたいことがある、そうわがままを言つて貰ったものだ……だから、なのか。だから、どれほどに強く、守らなければならない、と念じたところで、それで戦うことはできないというのか。

そうならいい、とスグリは思う。力が出ないのがそういう理由であれば、まだこの心は救われる。そうであれ。きつとそうだ。責任感とか使命感とか、大切な気持ちというのはわかるが、それだけではこの力は引き出せないのかもしれない。少なくとも、そういう気持ちを傘に着て、責任逃れのようなことをやっていてはだめなのだ。

それは思えば戦いに限った話ではなかった。力を得てからいまこの瞬間まで、途方もなく長いその時間を、スグリは使命感のみによってがんばり続けてきたわけではない。スグリのがんばりに対する、星からのささやかなお返しに常にあり、スグリはそれを糧にしてまたがんばった。巻き上げられた土砂や塵で真っ黒な空から、ほんのわずかな晴れ間が射しただけでも、海の水が昨日より少しだけ澄んで見えたというくらいでも、スグリは心から喜んだ。いつしか毒の雨が恵みにかわり、死に絶えたはずの大地に芽吹いた、小さな花の芽ひとつ見つけたときの感動といったらなかった。感動は希望に形を変え、希望はスグリの心を満たし、

支え、引っぱった。そういうものがあつたからこそ、これほどの時をがんばり続けられたのだとスグリは思う。それがなければ、きっと自分は、この使命の重さに押し潰されていたに違いない。

そしてようやく、ようやくだ——スグリは懸命に、もう一度立ち上がる——その感動を共有できる人たちと、一緒にがんばれるところまできたのだ。自分は、まだまだこんなところで終わりはしない。この星はこれからもずっと素敵になるのだから。

いまにも崩れそうになる体を奮い立たせるスグリの心は、一瞬前とはどこか大きく違っていた。スグリは真に自分の意志で立っていた。しかしいまだソードの剣身は普段の半分の長さにも満たず、そのビーム密度も低い。威力の落ち難いライフルは遠くに取り落としたまま、まして二基目を再構成するような力があるはずもない。

傘に着ていた使命感の下を覗けば、とスグリはまた手のひらに視線を落とす。そこにはみんなを守りたいという、自分自身の想いがいまもあるはずだ。心からそう願っている。それなのに、なぜ、こんなにもつらいのだろう。

距離を離して立ったカエの気が再び高まっていく。スグリは顔を上げる。見えない壁、スグリの未知の防御を今度こそ打ち破らんと、カエが力を集中しているのがひと眼でわかる。

ああ、とスグリは気がついた。戦いを躊躇わせる、暗い要因が、もうひとつあった。

本当は助けられたらって、そう言ったな。

助けなどいらないとカエは笑ったが、それは偽りだとスグリは思った。「ナナ」をどうし

た、と憤る彼女からは、激しい怒りとともに、どこかやりきれない悲しみが伝わってくるのだ。いまこのときも、そうだ。だれかに手を差し延べてほしいと叫んでいるように思える……そうしてくれるのが「ナナ」だったのかもしれない。

もちろん、自分にはそう感じられるというだけの話で、本当のところはわからない。人の心などというのはだれが言うまでもなく複雑で、まして自分は、どうだ、自分の心にすら戸惑いっぱなしだ。まだ彼女らと親しいわけでもない自分のこんな憶測は、まったくの的外れということもありうる。

しかし、それでも。たとえカエが、この自分を本気で打ち倒したいと思っているとしてもだ。自分は打ち倒されてなどやらない、そしてそのうえで、返してやろうではないか。カエと、ナナコを会わせてやろう。

その行いが善いか悪いかはやはりスグリにはわからなかった。人々の安全を最大限確保するためには、そんな考えでは甘いと言われるかもしれない。だが、ようやくスグリは、どうなれば自分は満足なのか、その答えに至ったのだ。スグリはどうしてもそうしなかった。

もう心は決まっている。もう自分は、それがたぶん、カエを救うことになると思っていてしまっている。そしてそうするためにならきつとまだ戦える。もう止められはしない、この心は。——けっこう、わがままだったんだな、わたしは。傷の痛みも忘れてスグリは笑いそうになる。

ただ、それを認めればよかったのだ

守るべきを庇護するだけでなく、たいせつな人たちの幸せを願うこと

そしてそこで共に幸せになりたいと願う、己の心に気づくこと

そんな人としてあたりまえの望みにこそ、彼女の力は応えるのだった

たった一人のひとは、そのように、造られたから

スグリの瞳にうつった力エの姿が陽炎のよう^{かげろう}に揺れる。力エが発する高熱のせいだ。力エは、とどめのつもりでふるった拳をすら防ぐ、不可視の壁を打ち抜くため、自身の戦闘能力を強制的に活性化させていた。本来なら突発的に、ごく一瞬にだけ達するはずの、限界の水準にまで自分を高め、強引に維持しようとしているのである。副次的に生まれ続ける光と熱はシールドを介して外界へ輻射され、それによつて力エの全身が緋色^ひの輝きに包まれていた。豪雨の中にも関わらず、周囲の木々に火が移る。

熱を持っているのは力エだけではない。

揺らめく炎がスグリの顔を照らしている。スグリは、先ほどまでの体の重さを忘れていた。全身に纏わりついていた不快な熱気は引いている。しかし、ちりと痛んだ胸の奥の奥の一点だけが、かわらず熱い。ますます熱を帯びていくようだ。鼓動が高なる。早鐘のように打つ。激

しい脈動に乗って超高熱が身体をめぐり——ようやく塞がりかけていた脇腹の傷口から、まとも鮮血が溢れた。突然の激痛に危うくくずおれそうになる。が、なんとか耐え、そして見れば、もう傷跡すらも残ってはいない。むろん痛みも。

この熱は、人々が託してくれた願いをそのように感じているのだ、スグリはそれを心地良く感じる。胸を張って立つ。周囲の大气がパンと爆ぜる。つい先ほどまで、濡れて肌や衣服に張りついていたスグリの髪が、そよ風に流れるようにふわりと揺れた。枯れ果てたかさえ思えた力が止め処なく湧き出てくるのをスグリは感じる。

これなら、戦える。わたしはまだがんばれる。

しかしそれは常に彼女のそばにあったのだ。ただ気づくことが、触れることができなくなっていただけなのだ。心を見失ってしまったから。いまはもう、そうではない。焦心と苦慮と遠まわりのすえ、彼女はついに己の力を縛る枷の正体を知る。知ってしまったら、その枷すらも彼女を支える大きな力のひとつとなった。彼女に夢を託しながら、同時に、どうかその夢の重さに吞まれるなど叫ぶ、どうしようもなく切ない、その願いも。

賦活するスグリに同調し、カエに撃墜されたビームポッドたちも活性化していた。五機それぞれの高速統御システムが中枢掌握体に自動で接続。スグリがその手に触れずともポッドたちは損傷部位を再構成している。だがスグリはそれらをこの場と呼び戻すことは、取えない。ビームポッドはいたずらにカエの心を乱す。それに……、陽炎の向こうに揺れるカエをじっと見つめる。あの子を受け止めるのにビーム砲は不要だ。

するとカエもスグリの瞳を見返して、スグリ、と呼び掛けた。いま、カエは間違はなくこれまでで最も強い力を発揮していたが、その口調はいくらか静かで落ち着いていた。

「スグリ。ナナをどこへ連れていったの」

「わからないよ」とスグリ。「わたしが連れ出したんじゃない」

「ナナを探す」とカエ。

「それなら、わたしも手伝う」

「ううん。先にスグりをやっつけないと」

「……そうだったね」

カエを命令から解き放つ、直接的でスマートな方法をスグリは知らない。そもそもそんなものは存在しないのかもしれない。先の子らのように戦いで打ち負かして見せれば、命令者は命令を取り消すだろうか、そのような憶測を立てることしかできない。そしてそれはカエにとっては、「もういらない」と言われて一人放り出されることを意味するのかもしれない。どうにも気に入らなかったし、そのような憶測に頼って戦うのは実際に危険でもあった。だが、可能性はある。そしていまのカエには命令よりも「ナナ」が必要なのだ、そうスグリは信じる。カエを倒す、一時的にでもカエの戦闘能力を奪う。この自分がやっつけられずに、カエとナナコを会わせるにはそれしかない。

スグリはソードを構えてはつきりと言った。

「でも、わたしは負けない」

活動^V転移^M最大^A同期^X速度。赤い、これまでよりも苛烈な光の刃が、スグリの両手に握^Xられる——二本目のソードである。二刀。

カエが地を蹴った。

カエは、次の瞬間にはスグリの眼前にいた。右の拳が突き出される。スグリの手前に光壁は発現しなかった。

スグりは右方向へのステップで攻撃をかわし、ソードをふるおうとして、やめる。咄嗟に一步さがる。体のすぐ前を、カエの左手が爪の軌跡を残して通り過ぎる。

連続攻撃をやりすごしたスグリの反撃、前に出ながら左のソードを地と水平に払う。するとカエは、爪を空振った左手を握りなおし、拳の裏打ちをソードの剣身にぶち当てた。恐れ知らずのその攻撃はしかしソードの軌道を逸らすことに成功する。ソードはわずかに身を屈めたカエの頭上を薙いだ。

二本のソードを操るスグりは、斬撃ごと跳ね上げられてしまった左腕を素直に引きながら、右手に力を集中する。カエも裏打ちを放つあいだに、すでに右の拳を腰溜めにしていた。それで二度目の斬撃に対応するつもりだ——そんなカエの表情が突然凍り付くのを、スグリの鋭い視線が捉える。

カエは気づいたのだ、スグリの右手に握られているはずの、ソードが消えていることに。超高速の攻防、刹那の駆け引き、その最中に、致命的な威力を秘めた敵の刃を見失ってカエは肝をつぶしているに違いなかったが、スグりが狙う一撃はその刃に頼らぬものだった。

バリアのように展開していた不可視の壁が、スグリの小さな手のひらに収束していた。フ
ォースエッジ。いまやなにに触れずとも青く輝くその手のひらを、スグリはカエに叩き込む。
消えたソーダの行方意識を取られたカエには対処のいとまなどなく、スグリの掌打はカエ
の胸をまともに打った。

二人の体のあいだで大爆発が起こった。幾重にも荒れ狂う衝撃波が、カエとスグりをうち
のめす。急激に膨れあがる緋と青の光が混じりあつて周囲を照らす。

鮮やかな燐光もやがて薄まり消えていく。それは去り際、戦いの気配もすっかり包んで奪
つていった。森にはふたたび闇が降りる。風と雨と木立がざわめく。

*

キョウコは中央管理統制室のドアを、穏やかではない心境でくぐる。

冷えた空気が。陰鬱な雰囲気。多数のコンソールディスプレイや計器パネルが光を放ってい
るが、照明そのものは落ちていく。くぐったドアが背中に閉じれば、室は外の通路よりも薄
暗い。いつもとなにもかわらない光景。

シフは円卓に腰掛けていた。肘をついて、室前方のメインモニタを横目に眺めている。

「先生」とキョウコはシフに呼び掛ける。「カエの端末が」

「応答しない、つて？」シフは振り返らずにこたえた。「知ってるよ」

キヨウコもメインモニタに目をやった。作戦システムからの報告が文字やグラフで描き出されている。リアルタイムの画像データはない。姿を隠している以上は、こちら宇宙船からもあまり柔軟な観測は行えない。条件が整えば観測機も降ろすのだが、今回は出ていないらしい。

今回。キヨウコの与^{あずか}り知らぬ作戦。

戦闘メカたちがエントリー（大気圏突入）したことはキヨウコにはわかっていた。だからなんらかの作戦が実行中であることも、自然と予想できた。しかしその作戦に力エが参加していたことは知らなかった。些細な惑星の環境調査か、せいぜい相手に揺さぶりをかけ続けるための小規模な作戦だと思っていたのだが、どうやらそうではないらしい。なぜなら力エという娘は、シフブランズの中でも特に直接戦闘に秀でていて、逆に言えばそれ以外の細やかな作業には向いていないからだ。

戦いはすでに終わっていた。目標の達成は成されていない。作戦失敗。

「いったいいつ降ろしたんです」不服だという感情を隠さずにキヨウコは尋ねる。「私はないにも聞いてませんが」

「言わなかったさ。おまえを通すと、どうもおかしなことになるようだから」

「……なんのことです」

「さあね」

キヨウコは意識して語調を落ち着ける。

「呼び戻さないのですか」

「必要ない」と、にべもなくシフ。「あいつ、ヒートモードに入ったらしい。それでも勝てなかったんだ。回収したところで当分戦闘は無理だ。消耗しきってるよ」

「だからって、追い出すような真似しないでいいでしょう」

「なにか勘違いしてるようだけど」と、その言葉とは裏腹に、シフはキョウコが食い下がるのを見越していたかのような態度で、あしらうように説明した。「俺はまだあいつらを完全に切り捨てたわけじゃないぜ。いまわざわざ回収しても、どうせ使い物にならないから、やらないだけだ」

「でも、敵地に置き去りだなんて」

「放っておいてもどうってことない。なんのつもりか知らないけど、あの銀髪が、生かさず殺さずをやっているんだからな。ほかの連中にはあいつらをどうこうする力はない。だいたいい、仮に呼び戻したとして、どうする。どのみちあの銀髪をなんとかしないとろくに動けやしないんだ。だから使い物にならないと言ったんだ。使い道が、ないんだよ。それともいきなり再戦させてみるかい。勝ち目はないだろう。で、何度負けても凝りないとなれば、次こそ再起不能にされるかもな」

キョウコは押し黙った。

「もういいか」とシフ。

「は？」

「もういいだろう、つまらないことで口を挟むな。わかったら、さっさと部屋に戻っているよ。せいぜい休んでるがいい——どうせ、またどこか痛むんだろうが」

「そんなことは」

「俺にはわからないとでも思ってるのか」

どきりとする。シフは振り向いていた。鋭い目付きだった。

そしてその言葉は、果たしていままでの会話の、どこに掛かっているものか……。キョウコは気後れしそうになるのをこらえる。

「たいしたことありませんよ」

「寝てろ。こっちの気が滅入るんだよ」

シフはいたって真面目だった。部下が自分の言葉に素直に従わないので、むしろ不機嫌さをあらわにしている。

しかしキョウコは支配者のそんな責めるような口調にも、あなたがそれを言うのか、と、そう思わずにはいられない。なんともこっけいな印象を受けてしまうのだった。少しでも気が持ちが大きくなる。

「でしたら、一脚お借りします」言いながらシフの返事も待たずに歩く。「いちいち戻るのも面倒ですから、ここで大人しくしていますよ」

シフに言われるがまま部屋に戻るの、彼から逃げるようで癪だった。

キョウコは壁際のコンスールのひとつに勝手に収まった。円卓からは離れている。この位

置からは、首を曲げねばシフの顔は見えない。メインモニタを眺めるシフの視界にもキョウコの姿は映らない。邪魔にはなるまいとキョウコは思う。気が滅入る、などと、そんな繊細な精神活動をシフが本当にやっているのかどうかは少々疑問だが、それが事実だとしても、この自分の存在が彼の意識にのぼらないかぎりには、ここに居座ろうが、部屋で寝ていようが同じことだ。

シフはもうなにも言わなかった。円卓にも小さな、埋め込みの卓上コンソールが備わっていて、それを使ってなにかコンピュータに指示を出している。

キョウコはそんなシフの様子をわざわざ首を曲げてたしかめたあと、円卓のものよりずつと簡素な、あまり心地よいとはいえない椅子に深く座りなおし、体を楽にした。

力エでも及ばなかったのか、といまになってキョウコは思う。やはり本当に欲しいものを手に入れるのは難しい、ということか。この星は一筋縄ではないかない。あの銀色の髪をした少女の力は想像以上だ。いまや〈改造人間〉は自分と、サキの二人だけになってしまった。

サキは強力な固体との一対一の直接戦闘に長けているとはいえないし、この自分も、攻撃力ではほかの面々に見劣りするだろう。イル、ナナコ、そして力エが勝てなかった相手を、自分が制することができるのか……戦う覚悟はあれど、倒しきれるという自信は、正直言っていない。

シフが現状を理解していないわけではない。彼は残された戦力を、この自分を、いつたいう使うつもりだろうか。

キョウコはしばし物思いにふける。

「——こっちだ」

耳慣れた青年の声がする。

「はやく来いよ」青年はだれかを呼びつけている。「なにをきよろきよろしてるんだ。そんな、なんにもないところで」

「そうね。なんにもない。だれもない」耳慣れない、少女の透き通った声が近づいてくる。「ずいぶん静かになってしまった、と思って」

おかげさまでね、と青年がこたえる。

青年と少女の声が並ぶ。

二人の歩みが止まって、また青年の声。

「こいつだ」

「あら、この子たしか……」

「なんだ、知ってるのか」

「あなたのお気に入りでしょう」

「俺の、じゃあない。あのばかどものだ……やっぱりいまいち掴めないな、おまえ。わかっているようで、わかってない。そうかと思えば、逆の場合も……普段どこまで視えているんだ？」

「うふふ」

「……まあいい。それより、こいつをなんとかしろ」

「なんとか、つて？」

「わかつてるんだろ、はぐらかすなよ」

少女のため息と、少しの間。

「あらあら、ずいぶん好き勝手に弄くりまわしたのね。女の子の身体を」

「しかたない。素質があつたんだ。おまえなら、見ればわかるんだろう」

「あの人たちはそう言つてみたいね、適性がある、つて。でもそれを認めなかったのは、あなたでしょう。この子は体が弱いからつて、嘘の診断までして、囲い込んでいたくせに」

「知らないな」

「それなのに、けつきよく自分の手で、変えてしまったのね」

「でなきやとつくに死んでたよ、こいつは。やつら、丸腰相手でもお構いなしだったからな。俺が見つけたときにはもう遅かった。見殺しにするよりはましだろ」

「ここまで変えてしまうことはなかったじゃない」

「これくらいやらなきや、わざわざ俺が助ける意味がない。だめもとだったけど、うまくいった。資質だか適性だかは本物だったな」

「あなたの世話を焼く才能まであるとは限らないわ」

「試さず死なせるには惜しい。見ろ、いったんは保たせたけど、このままじゃいつか死ぬ。」

俺にできることはやった。でもまだなにか足りない。どうやっても、起きない。なんとかしろ」

「気がすすまないわね」

「できる、できないで言えば、できるわけだな。俺に強制されたと思えばいいさ。それでだれにも責められない。俺の言うことを聞け」

「まるで傲慢な王様」

「実際そんなようなものさ。俺を、やつらよりはましだと言ったろ、おまえ。だからこうなつた」

「同類に見えてきたわ」

「なら俺も排除するか」

——間。息の詰まるような。

「……わかつているの、あなた」

「なにが」

「あなたや、あなたが作った機械たちにも治せない人を、わたしが治すことの意味」

「まわりくどいな」

「こう言うてはなんだけれど、もうぜったいに助からない命、ということでしょう。それをあなた、わたしを使ってなんとかしようとしているのよ」

「命、とはね。命を弄ぶなつて？」

「お医者さんごっこでは済まなくなる」

「そいつは穏やかじゃないね」

「怖いとは思わないの」

「……数え切れないくらい奪ってきたんだ。いまさらひとつ与えるくらい、なんだ」

「……あなた……」

——間。

「要件は伝えた。終わったら呼べ。俺は少し休む」

「待ちなさいよ」

「まだ文句があるのか」

「責任はあなたが取ってくれるんでしょう」少女の声が近い、とても。「ちゃんと面倒見てあげなきゃ」

私は薄目を開ける。眩しくてすぐにまぶたを閉じる。もう一度開く。

「お目覚めかしら」

耳元で、知らない少女の声が言っている。

「え、ええ」これは、私だ、私の声。「えっと」

「……なんだよ」耳慣れた青年の声。「もったいぶる程度には、時間が掛かるのかと思ったら」

「……先生？ どちらに」

「おまえのベッドの足元側……待て、動くな。いや……言うとおりに動いてみる。起きられるか？」

私は真つ白なベッドに寝かされていた。ゆったりとした患者衣と、薄いふとんを羽織つて。ここは病院だろうか。だとしたら、少しよい病室ということになるだろう、個室のようだから。

言われたとおりに上体を起こす。少女が傍らに控えて、背中に手を添えてくれた。

先生と目が合った。

「おはよう、キョウコ」と先生。

「はあ、おはようございます」

「体の調子は。違和感ないか」

「悪くないですね」

「腕を動かすな」先生の言葉が私の動きを素早く制する。「針が入ってる。点滴の」

気がつかなかった。

ほかに、私の体のあちこちに、たぶん、筋電モニタ用だろう、小さな電極が張り付いていた。

「私、どうかしたんですか」

「……頭はだいじょうぶか」

「言葉を選んだらどうなの」と少女が口を尖らせる。それから私の方を見て、「少し混乱し

ているのよね」

でも、先生のこういう態度には慣れている。私は少女を見返して曖昧に笑った。

「錯乱しないことを祈るばかりだ」と先生。「おまえ、撃たれたことも覚えてないのか」手でピストルの形を作って、私に向ける。

撃たれた、ですって？ 私が？

「どうした、自分のことだろ。だれかに銃で撃たれたんだよ、おまえは。この船の人間同士で殺し合いをやったのさ、それに巻き込まれて。ばかげた話だ。せつかく増えた人口が少し減ってしまったな。……ま、そんなのはどうでもいい」

「なんてこと」

それが本当ならたいへんなことだ。どうでもいい、だなんて、だれにも、まして先生の立場では、言っていられないはずだ。

「どうでもいい。気にするな。そのときの状況も、それがいまどうなっているのかということも、他人の安否も、気にするな。だいたい記録されている。いつでも確認できる。あとにしろ。いまは、おまえ自信の身になにが起きたのか、ということにだけ意識を向けろ」

そうして言葉を切った先生は、しばらく無言で私の顔を見つめてとうとつに、「力を感じるか」と言った。

「……わかりません」

「わかつているんじゃないか」

愉快そうに先生は言う。表情や口調に大きくはあらわれない、それはほんの些細な感情の変化だけれど、先生は確実に喜んでいた。難しい仕事をやり遂げた、達成感のようなものを漂わせている。

私はいくらか時間を使って、うまい言葉を探して、言ってみる。

「私は……手術を受けたんですね」

「目が醒めてきたらしいな」と先生はうなずいた。「そうだ。俺がやった。死にかけのおまえを拾ってきて、勝手に改造した。余計だったか？」

「……いえ。そもそも私が中央に連れてこられたのは、その手術のために、見繕われたからでしょう、知ってましたよ。ただ、」あごをひいて、自分の体に目を落とす。「思っていたより普通だ、と。思ってた。点滴まで打たれているし」

「がちがちのサイボーグにでもされると思ったか。機械の身体か？ そんなの、同じサイズでロボット作った方がよっぽどましさ」

「私はこれからどうなるんでしょう」

「どうもならない。意識が戻ったんだから、もう点滴の必要もない。なにかしたいというなら、ものを食べるよ。食って寝ろ。それと適度な運動だな。体力を取り戻せ」

そんなはずがない、と思う。それでは私が手術を受けた意味がない。ロボットや戦闘機にまざって、戦いをやることになるに違いない。少なくとも私を中央に引っ張ってきて、様々な検査を受けさせた人たちは、それを望んでいた——変わってしまった自分を自覚するにし

たがって、私はどうにも追い込まれた心境になり、思ったことをそのまま口にしてしまう。

すると、それを聞いた先生は事も無げに、その人たちはみな死んだ、と言った。その人たちがやたらと私を戦えるように改造したのがたのは、その人たちと一緒に船の中で暴れる戦力として使うためだろう、とも。開いた口が塞がらないとはこのことだ。

「おまえを使つてなにかしようとかくらむ輩は、もはやこの俺ただ一人、というわけさ。で、かくいう俺も、そいつらと考えることはたいしてかわらん。いつか戦いはやつてもらふことになるだろうね。しかし、そいつはもう少し先の話だ」先生はちらりと、私の傍らの少女に目をやった。「だろう？」

「いまから争うことを考えていてどうするのよ」

あきれた、とても言いたげに、少女は小さく肩をすくめて見せる。

「わたしはあなたの戦力を増すために手を貸したんじゃない。それに、そうそう文明のある星とばかり会えるとも限らないわ」

「こここのところ衝突続きだった」と先生。

「そうだったわね」と少女。「いずれにしても、次の目標はまだ遠い、ということと言える」
「まるで他人事だな」

つぶやいてから、先生はまた私を見た。

「……わかったか、まだ先だ。いざというときは役に立つてもらおう。おまえにはたしかに、戦闘用の力があるから。曖昧にしか感じられないだろうけど、それは、それでいい。いちい

ち手順を思考してたんじゃとても扱えない。ただし力加減はちゃんと覚えろ。そのための時間は十分ある。とにかく倣うより慣れろ、だ。俺にも、使い方を教える、ってことはできないんでね。だからって俺を実験台にはするなよ」

「なにも教えてくださらないんですか、先生。私にはまだ、自分になにができるのかもわからないんですけど」

「銃の撃ちかたが知りたいなら教えてやる。弾の籠めかたや安全装置の外しかたなら、教えられる。だけど引き金を引く、人差し指の曲げかたを、だれが説明できる。呼吸のしかたはどうだ。まばたきの方法は」

「そういうものですか……」

「そのうち嫌でも馴染むさ。なにができるかわからないと言うが、なんにせよ強い力だ、そこらのロボットよりもずっと。おまえの役目は、それを使ってこの俺を守ることだ。それと自分自身を」

「先生を、ですか」力の扱いどうこうよりも、私にはその言葉が意外だった。「船ではなく？」

「まだ銃を持ったやつが潜んでいるかもしれないからな」先生は私のベッドの端っこに腰を降ろすと、疲れた様子を隠さずのため息をついた。「死に物狂いで俺を殺そうとしてる連中だ。外からの敵以前に、まずこいつらに備えないといけない」

命を狙われているというわりに、口ぶりからは恐怖のようなものはまるで感じられない。

この人はそんなシビアな状況をすら、自分の作業や探求の足を引っぱるちよつとした障害、くらいに思っているようだ。そんな余裕を持って構えていられる程度には、「事件」の山は越えたのだと考えられる。

加えて先生には、自分が殺されるまえに相手を……殺す、自信があり、そうすることになんの気負いも感じないのだろう。

もつとも私は、そんな先生であつても、純粹にただ騒ぎの巻き添えになつて傷ついた人たちに対しては人並みのちよつとした同情くらいは持つていると思う。しかし一方でこの人は、自分を脅かす相手に対しては、それが外から襲つてくるへんてこな生き物であれ、彼自身が作つたロボットであれ、たとえ同じ船で生まれ、昨日まで一緒に食事をしていた人間であつても、まったく同様に、一概に、容赦しないだろうなという妙な納得も私はしているのである。

いま私の目に映る先生の横顔は、たしかに疲れている。しかしそれは心理的なストレスに追い詰められ、焦燥しきつてゐるわけではない、単に煩わしさにうんざりしているだけだ、という感じがする。……それは私をはじめて見た先生の表情と似ている。私が中央に連れてこられて、手術に耐えられるかどうかを調べる検査のために先生と引き合わされたとき、この人はこういう顔で私を見た。厄介の種があらわれた、という顔。もしかすると、先生はすでにその時点で、事件の首謀者たちの企てや、彼らが船の中で暴れる戦力として私を改造したがつてゐる、ということにも勘づいていたのかもしれない。

「問題はそいつらだけじゃない」

脚を組み、膝に肘を置き、その手で頬杖をついて、先生は気怠げだった。

「もつと身近にも、あつさり敵にまわりそうなやつが一人、いるな」

私はちらりと傍らの少女に目をやった。先生の言うその「一人」とは、この少女以外に思いつかない。

少女はいまもベッドの脇に行儀よく立っていて、視線に気づくと私を見返し、にっこりと笑いかけてきた。完璧な微笑みだ——投げ掛けられた疑惑を自分は否定も肯定もしない、判断は委ねる、という意図をたしかに含んでいる。

こうなるとこちらの方がどう返してよいかわからなくなる。私は逃げるように少女の瞳から目を逸らしてしまう。すると少女も笑みを崩して、しかしそれで機嫌を損なったようなふうもなく、また静穏にたたずむのである。

彼女も手術を受けたのだろうか、ふと思う。たぶんそうだろう。私よりもずっと幼い顔立ちなのに、この少女の言動はやけに落ち着いていて、作り物ではない余裕が見受けられる。危ない人たちがうろろしているかも、と聞かされて、ただのふつうの女の子であれば、こうではいられないだろう。なによりあの先生が、この少女にはどうも一目置いているようなのだ。

この少女を見る先生の目は、私を見る目とは、少し違っている。先生は、手術で変わったいまの私のことは、自分の駒として見ているのは間違いない。完全にコントロール下に置こ

うとしているのがわかる。しかしこの少女に対してはそうではない。先生は彼女をそばに置きながらも、「いつ敵になるかわからない」と定義している。彼女の存在を必要としているにもかかわらず、信用はしていない。おそらく、いまのところはこの二人の利害関係が一致していて、そうであるあいだは下手に事を構えることもない、といったところなのだろう。つまり、コントロールできないのだ、彼女は。いったいどうして。先生が手術をしたのではないのか？

「居住区で落ち着いているように見えるやつらだつて、腹の底じやなにを考えているかわかったものじゃない。いつ、また新しい集団が暴れだすかもわからない」

「居住区は無事なんですか」私は考えを中断して言った。「あそこの人たちは、そんな心配はいらないでしょう」

「騒ぎの場になったのは中央だから、あのあたりは設備的にも問題はない。でも混乱は伝わってるよ。もしやつらまで暴れ出したら面倒だ。危険分子の切り分けは難しいだろう。俺は治世には興味がないからね、うまくはやれない」

「考えすぎですよ。ふつうにしてる人たちまで疑っていたら……」

「今回暴れたのはふつう以上に船を守ってきた連中だ。戦闘員が中心なんだ。で、そいつらがこっそり抜け落ちた。制御系のオペレーターたちも、ほとんどやられた。中央はからっぽだ。穴を埋めなきゃならない。防衛システムの再生と強化を急がないとな。簡単じゃないけど、それができれば以前よりも船は強力になる」

居住区から中央に人を呼ぶ、ということはまるで考えていないわけだ。それら簡単ではない作業のすべてを、この人は自分で完全にコントロール可能な存在だけを使って、やろうとしている。けっきょくそれは自分一人でやると言っているに等しい。

「先生は、そうでしたね」私は半分笑いながら言った。「ぜんぜん、人を信用していない」頬杖をついたままの先生が首を傾けて私を見た。目を丸くして、

「なんだ？」

「いえべつに。ただそう思っただけです。いつも、そう思っていた。それを思い出しました」
「……まあ、その通りだ。とくに今回ので、いつだれが敵になるかわからん、ということが、よくわかったよ。でも、」

首を戻して、また壁をぼんやり見つめていた先生が、今度は横目で私を見た。

「おまえは俺の敵にはならない」
ちよくせつ

直截すぎると思う。いや、説明不足だ。この人はときどきこういう物言いをする。それで私には意図が伝わると思っているのかもしれない——もちろん、伝わっている。私にはもうその言葉の意味するほんとうのところがわかつている。でもいつも真意を汲み取れるとは限らないし、齟齬を生じることもあるだろう。だから私は、先生のこういう物言いには、すぐには応じないようにしている。

「どうかしら。実は先生のこと恨んでいるかも。人の身体に、勝手なことをして、つて」

「それはこわいな。しかし勝手ついでに、おまえは俺の命令に逆らえないようにも、なつて

いる。俺を守れよ。そのために自分の身も守れ。……試してみるか。俺を殺せるかどうか」

「いいえ、けっこう。ちゃんとわかっています」

「余裕だな。思ったより」

「そうですね。なんていうか、操り人形という感じはしないからかしら。改造してくださいってありがたい、なんて言うつもりはないですが、背中を刺したいほど恨んでもないですよ」

「そういう錯覚をするように、改造したのかもしれないぜ」

なるほど、と私は一瞬考える。命令されたことをすべて、自分の意志だ、と錯覚するようになっていたとしたら……それはたしかに操り人形と言えるだろう。そんな私がなにをどんなに偉そうに語ったところで、他人から見れば哀れな傀儡以外のなにものでもあるまい。

でも、私自身はその傀儡ぶりを自覚することは決してできないだろう。「目の錯覚」ならば対象をよくよく観察することで見間違いに気づくこともできようが、自分自身の感情がほんとうに自分のものか、それとも、いつのまにか他者に刷り込まれてそう思い込んでいるだけなのか、たしかめる術はどこにもない。それはたぶん手術を受けるまえから変わらない、誰だって、そうなのだ。

それならいまの、この感情、これも私の本心なのだと考える方が、まだ健全というものだろう。わざわざ自分で自分の心を疑うことはない。きつと私は、本気で先生を殺してしまいたい、とまでは思っていない。これは私の本心であって、洗脳されて思い込んでいるわけではない。

もし実際に、明らかに私の本心に反することを命令されたらどうなるだろう。そのときは、私はそれを自分の意志だと錯覚したりせず、嫌だ、と感じたまま、渋々引き受けることになるう、たぶん、そのようになっていく。なぜなら……先生はいつも相手の感情には無頓着だから。ようするに――、

「錯覚を起こして、こころよく命令を受け入れさせる、なんて、そんな余計な細工は、先生はしないでしょ」

「あなたはそれでいいの？」

先生がなにか言うまえに、そう、少女が口を挟んできた。

「そういう細工をされていた方が、むりやりよりは、良くはない？」

「はじめのうちはそれでいいかもしれないけれど」私は、いま考えていたことを少女に話す。「けれどそれは、先生の言うことを、なんでも自分の気持ちのうちに勘違いしてしまうということよ。手術を受けるまえの私だったら、嫌だ、と思ったはずの命令でも、すんなり受け入れてしまうというのはそういうこと。嫌だ、と感じることさえなかったら、これはほんとうの気持ちじゃないって、自分で気づくことができないでしょう。でも逆に、先生の言うことが、私の気持ちとはじめから一致していることだってあるかもしれない……これじゃあ、いろいろな命令されるうちに、どこからどこまでが命令なのか、それとも私の気持ちなのか、わからなくなってしまうような気がしないかしら」

私は先ほど、自分自身の身も守れと命令を受けた。ようは勝手に死ぬなど言われたわけで、

そんなことは言われなくともあたりまえだが——しかし実は私には自傷癖や自殺願望があったとしたら？ それを命令と錯覚で、認識できないようにされているのだとしたら？ そんなふうに疑いはじめたら、もはや私はまともではいられなくなるだろう。それでも私は命令通り動く、勝手に死ぬことはない、だから自殺願望などあってもなくても構わない、悩むようなことではない……そうやって自分の心を守ることはできるだろうが、しかしそれは同時に、私の気持ちはどこにあるうが、なかるうが、大差ない、どうだっていい、心ない人形でも構わない、ということにもなりうる。

「それはちよつと嫌でしょう。むりやりの仕事を引き受けるのもつらいけど、つらいと感じることができるといえるのは、大事なのよ……どうかしら、わかるかな、とにかく私はいまのままで大丈夫だって言いたいんだけど……」

「きつとわかったと思うわ。思慮深いのね、あなた」

「そ、そう？」

「ええ」少女はなにやら楽しそうに体を揺らして、「ばかな王様にいじめられないか、心配だったのだけれど。でも、あなたの方がうわてみたい——ねえ？」

少女の視線を受けた先生は、なんとでも言うがいい、という感じの表情。

「まあ、察しがいいのは悪いことじゃない。それよりおまえ、キョウコ」

「はい」

「自分の名前を覚えているか、こちらへ移ってくるまえの」

「……はい。もちろん」

そうだ。私はキョウコ、ではない。なかった。

「でも、なんです、いきなり」

「人間相手には、そつちを名乗ってもいいぞ、べつに。まだ中央はがたがただからな、ここ
の設備だけに頼って生活するのは厳しいだろう。飢え死にされてはかなわん。船内の移動を
許可する。居住区に降りるなら、そのときは、そちらの方が都合がいいだろうさ」

「はあ、なるほど」と私は氣のない返事。「でもご心配なく。あそこには、なにも残してき
ていません」

「そうなのか。まあなんでもいい、勝手にしろ。ただしなにか識別名が必要なときは、ひか
えろ。システムからすれば以前のおまえは死んでいるから。いらぬ混乱をきたすおそれがあ
る」

しかし現実の私は死んではない。生まれかわったわけでもない。ただ新しい名と、少々
特殊な力を得た、というだけだ。命令の強制力には不安があるけれど、それで私の本心が捻
じ曲げられてしまうということはない。

きつとヘキョウコは、なんとかうまくやっていけるだろう。だから、昔の名前にこだわ
りたいという氣は、いまの私には起きない。

——実際うまくやってきた。

薄暗い統制室の片隅のコンソール、傾いた体を壁に預けて、薄目を開けたキヨウコはそう思う。

夢のようで、夢ではない。記憶の断片から組み上げられたリアリティに富むストーリー、ではない。まどろみの中で想起した、かつてこの自分がたしかに体験した、現実のできごとだ、いまのは。

あのあとキヨウコがうまくやるのは、そう簡単ではなかった。

手術を受けたからといって心まで変えられたわけではない、そう思うための理屈を当時のキヨウコはいろいろとこねまわしていたわけだが、日々を生き抜くということに目を向ければ、身体の方も、手術前とたいして変わってはいなかった。腹は空くし、喉も乾く。長いあいだ睡眠を取らなければ、どうにもぼんやりしてしまう。いったん病室を出たキヨウコには、こねあげた理屈で自分の心を守っているような余裕はなかった。なによりも変わってしまったのは船内の様相であり、問題なのは自分よりも、自分の周囲の環境であった。おかしな力に馴染む以前に新しい生活に馴染む必要があり、そうすることの方がよほど困難で、時間がかかった。食べて、寝て、それなりの健康を保つだけで、キヨウコは精一杯だった。

健康といえば、キヨウコはときどき体のあちこちを理不尽な痛みにおそわれた。先ほどシフに指摘されたのが、それだ。どうやら改造手術の影響によるものらしく、キヨウコ自身がいくら健康を心掛けたところで、これはどうにもならなかった。後に似通った手術を受けた後輩シフブランドたちの、同様のうったえをキヨウコは耳にしたことはない。この面倒な問

題を抱えているのはキョウコだけだった。キョウコは、シフが自分を指して、手術に耐える力がない、と診断していたのを知っているから、やはりこの自分の適性とやらは一〇〇パーセント完璧ではなかったのだらうと、勝手に納得してあきらめている。そんな手術でも強行しなければ死んでいたのかもしれないのだから、それよりはましだ、と。

さいわい痛みは耐えられる程度で長引くこともなかった。それに、そのまま無理に体を動かしていても「性能」には影響ない、とシフは言った。シフのそういう言葉——とくに実利に影響を及ぼす部分の説明——は、その言葉通りに受け取ってよいとキョウコは思っている。ほんとうにただ痛むだけというわけだ。戦闘中などの緊急時には、究極的には、無視できる。とはいえ得体の知れない痛み慣れるというのも難しい話で、なにか作業中ならそちらに集中して気をまぎらわせるということもできようが、いまのような待機時に痛みを意識しはじめると、がまん強いキョウコといえどもまいってしまふのだった。

しかしそれをシフに気取られているようでは——そうキョウコは思い、ようやく、とびあがるように、覚醒した。寝崩れてすっかり壁に寄りかかっていた体を跳ね起こし、そうしてしまつてから、もう少し沈着に振る舞えなかったのかと後悔する。

いまさらどうにもならない。キョウコは気を取りなおして、ゆっくり首をひねって室内を見渡した。

「先生？」

いない。どこにも。

ほっとすると同時に、体裁を取り繕おうと一人で慌てていたのがばからしくもなる。ため息ひとつ吐き出して、気がつけば身体はまったく正常だった。すでに痛みはなく、いまさら自室でもう一眠りという気も起きない。キョウコは椅子に掛けなおして、そのまましばらく待ってみた。

シフは戻ってこない。

めずらしいことだった。シフは普段、一日の大半の時間をこの統制室ですごしている。船内の重要な施設ステータスの監視・監督は……そもそほとんど自動化されているのだが、なんらかの操作が必要になった場合、それはここから行える。作戦システムへのアクセスも可能だ。シフ自身があちこち動きまわって、それぞれの施設に直接足を運ぶことなどないのである。

もつともシフといえども健康に生きるために最低限の努力をせねばならず、起きているあいだは室から一步も出ないというわけには、もちろんいかない。が、かといってあまり長いあいだここを留守にするということも考えられないのだ。キョウコは冷静になってきた頭を働かせる。いまはとくに力エを失った直後、シフはいそがしいはずだった。

シフの居場所には心当たりがあった。大型機動兵器の製造工場である。それも艦船の組み立てが可能な、造船ドックだ。ここ統制室と同様中央ブロックの施設だが、そのドックは人々が日頃「中央」と呼び習わす領域よりもずっと、構造的な意味で宇宙船の中心に近かった。遠心力を利用した疑似重力がほとんどない場所だから、巨大なパーツを組み立てるのに適し

ていた。

とはいえこの中央ドックは日常的に稼動しているわけではない。というのも、似たようなドック設備は宇宙船外縁に位置する戦闘区にも設置されていて、それなりの大型機も含む戦闘メカの補修や整備はそちらでやるのが普通だった。また戦闘区ドックは設計システムや生産ライン、すなわち一から機体を建造する能力も十分に持っていた。できあがった機体はどのみち戦闘区で運用されるのだから、可能ならばはじめからそこで作ってしまった方が無駄が少ないというわけだ。

したがって中央の特別なドックで作られるのは、とにかく巨大なものか、あるいはなにかまったく新しい構想のもとに企画された、実験的な意味合いの強い兵器、と自然と限定されていた。言ってみれば新型専用というわけだ。それまでになかった斬新な設計思想や戦術思想が果たして有効に働くかどうか、様々な状況設定のもとにシミュレーションを重ねる能力は中央のコンピュータ群の方が優れていたし、それらに試作機を詳細にモニタさせるためにも、モニタ対象の実物を中央ドックに飾っておくのは都合がよい。そしてそうしているあいだにも、すでに性能が実証されている実戦的な機や艦を、戦闘区のだッグを使って建造、増産することができる。

しかし時を経て宇宙船の戦力が十分に安定してくると、そういった新しく斬新な、言い換えれば型破りで冒険的な機体の提案は徐々に減ってゆき、中央ドックが使われる機会はどんどん減っていった。船をシフが支配するようになってからは、とくに、である。シフは技術

者のなかでも抜きん出た天才であつたが、独創的なアイデアというものは一人の天才から底無しに溢れ続けるものではないのだ。そのうえシフは自らの手による最強の改造人間を擁していた。数が少ない改造人間、シフブランドは全体の主力とはなりえないものの、性能だけ見れば大型機動兵器をゆうに上回る。戦力の要、最後の砦、ボス、そのような役割は大型機から改造人間たちに移り、シフ自身は小型、中型の、主力となる量産戦闘メカの能力向上や、改造人間用の武装類の開発を優先した。それらを作り出すにあたつては、中央ドックのような広大な製造工場は分不相応、無用の長物だったのである。

そんなドックにシフが手を入れたのは、ナナコ用のTCDビットがロールアウトして間もなくのことだった。ドックの工作機械たちはもともと以前から自動で働いていたことをキョウコは知っているが、そこでの作業進歩にシフが気を払いはじめたのは、その頃だ。

シフはそこでひとつの機動兵器を組み立てていた。宇宙船に現存する、既存の兵器の枠組みからは少々逸脱したものだった。それは手足を備え、地に直立する、巨大ロボットそのものだった。機体規模もきわめて大きい。

そのロボットの調整をシフ自らやっているのではなからうかと、キョウコは思ったのだった。シフがわざわざその場に体を持っていく理由は不明だが、ほかに彼が行きそうな場所はどこに思いつかない。

コンソールに両手をついて立ち上がる。ひとり統制室をあとしたキョウコの足は、自然とドックに向かつていた。

中央ドックは基本的に工作機械たちの領域だ。いったん機や艦の建造がはじまってしまえば、生身の人間が中に入って作業する機会は少ない。本来その必要がない、というだけで、いくつもある整備用通路とドアが封鎖されてしまったりもしない。ドック内最上部のドアをキョウコはくぐる。

ドック内は明るかった。統制室と違って照明がちやんと機能している。

キョウコがくぐったドアはドック側面の隔壁に抜けていた。本当は数百メートル四方の広さを持つドックだが、使用時には遊動する隔壁が、建造物にとって最適な広さに空間を間仕切った。深い縦穴にすっぽり収まるように、ずんぐりとした体型のロボットが立っているのをキョウコは俯瞰する。ドックはまるでこのロボット専用の格納庫のようだ。

ロボットの周囲には工作機械が行き来するための頑丈な骨組も走っているが、組み立て作業自体は止まっていた。機体はほとんど完成しているのだ。骨組は、機を固定する役目も兼ねているから、そのままになっているのだろう。

キョウコの足元からは転落防止柵に囲まれた幅のあるステップが伸びていた。が、対岸の隔壁まで橋渡しがしてあるわけではない。ロボットの頭上まで歩いていくことはできない。

ともかくステップに歩み出る。転落防止柵から身を乗り出して見渡すと、いま立っているステップの真下にも、隔壁から伸びた構造物が走っていた。ロボットを固定すると同時に各種の工作機を内蔵・支持する巨大なアームだ。ロボットの腕より頑丈なのではないかとさえ思える。同じアームが反対側の隔壁からも伸びていて、二本はロボットの胸の前でがっちり

噛み合っていた。都合のよいことにそのアームには人間用の足場も仮設されている。

キョウコは迷いなくステップをとびこえ、降下、アーム上の仮設足場に着地する。うしろを振り返ると、そこにも上と同じようなドアがついていた。どうやら最初からこちらを歩くのが正解らしい。

徒歩でロボットに接近。ロボットの胸部上面装甲が変形、前方へ迫り出しているのをキョウコは見る。ハッチドアが口をあけているのだった。手前のアームから階段上のステップが伸ばしてあるから、そこから乗り込むのだろう——乗り込む、ですって？ キョウコは階段ステップのすぐそばでびたりと足を止めた。これは、有人機なのか？

「なにしに来た」

ハッチの奥からシフの声がした。ロボットの内部で反響したのか少しくぐもっている。キョウコは一瞬、なにをしに来たんだっけ、などと思う。

こたえられないでいると、シフがハッチから這い出してきた。実に大儀そうにしている。ドック内はほとんど無重力だが、それでも乗り降りはらくではなさそうだ。キョウコの位置から見る分にもハッチはかなり手狭である。

「先生」

シフの姿を目にしたキョウコは、彼の質問をひとまず置いて訊いた。

「そのままの格好で来たんですか」

シフはいつもどおりの、ぺらぺらの白衣姿だった。

「そうだけど……なんだ」なぜそんなことを尋かれるのかわからない、という顔をキョウコに向けて、シフ。

「ゼロG活動用のアシストパックがあつたでしょう。RCS（リアクションコントロールシステム）が入った、背中に背負うのが……もし足場から落ちたらどうするつもりです」

そうなれば空を飛べないシフは微重力の広大な空間を、相当な時間ふわふわと漂うことになるだろう。

「いくら俺でもこんなところでこけたりしない、と思いたいが」

ようやくのことで全身をハッチから引き抜いたシフは、ロボットの装甲上に意外に器用にあぐらをかいて、ふむ、と息を吐き出した。

「もし落ちたら、面倒だな、たしかに。考えなかった」

だからどう、ということもなく、シフは操縦室から持ち出した大型のアタッシュケースと一体になったラップトップコンピュータを開き、それに向かって打ち込みはじめる。ケース側面のコネクタからは何本ものケーブルが垂れ、ハッチの奥に消えていた。

シフは単に操縦席の居心地が悪くて出てきただけらしい。そういえば、これだけ近づいてもロボットの駆動音はずいぶんおとなしい、とキョウコは気づく。ロボットはまだ眠っている。テストシステムが走っているだけだ。操縦室の空調もまわっておらず、だから、あのラップトップの熱が籠もったのだろう。

「いつから作っていたんです」とキョウコ。「こんな大きなロボット」

「知らないな」とシフ。

「わからない？」

「何世代もまえのデータバンクから、なんとか引き上げたデータがもともになってる。基礎設計は古いなんてもんじゃない……が、驚くほどよくできてた。それでおもしろくなったのさ。いろいろ手を加えた。俺以外にも何人か関わってる、もう生きちゃいないが」

「そんなに昔から」

「たしかに起工からは時間が経ってるけど、しかし長いあいだ完全に頓挫していたからな。おまえらの方がよほど手間が掛かってる。……もともと暇つぶしみたいなものだっし、それにいまとなつちや、こんなもの、完成しても使う機会はないと、思ってたんだけどねえ」
つまり、いまは使うための準備中というわけか。

「……なるほど」

ロボットは見るからに重量級だ。詳しいスペックはわからないものの、機敏な立ち回りはぜったいに無理だ。あの少女の高機動にはついていけないとキョウコは思う。ついていく必要はないのだろう。一点に踏み止まって攻撃に耐え、手痛い反撃で確実に敵を叩き落とす、それがこのロボットの運用スタイルといえそうだ。逃げる敵を追いかけてまわすような機動性はいらないのだ。敵はこのロボットを無視することはできない、かならず向かってくる、だからそれを、圧倒的な装甲と火力で迎撃すればよい、そういう考えのもとに設計されている。相手から向かってくるのが前提というのがなによりも肝で、ようするにこれは、拠点防衛用

の移動式兵器ブラットフォームなのだろう。

そんなロボットを使うための準備をシフはやっていた。シフは、自ら拠点を守らねばならない事態に即し、それへの対応を急いでいるのである。キョウコへの命令などそっちのけで、なにしに來た、キョウコはシフの質問のこたえを得た、と思った。もはやシフは、この自分を使う気すら失せているのだ。戦うまえから見限られたということだ。自分は、もしかするとそうではないかとおそれ、そしてそれをたしかめるために、ここに來たのだ。

「どこへいく」

無言で踵をかえしたキョウコの背にシフの声がぶつかった。

キョウコは立ち止まって言った。

「時間を稼ぎに」

「倒しきらなきやなんの意味もない。やつはもう、おまえではどうにもならん」

「でしょうね」肩越しに振り返る。「じゃあ、どうしましょうか」

「……知るか」シフは顔もあげなかった。「勝手にしろ」

まったくとりつく島もない、予想通りの回答にふいとおかしさすら感じる。

キョウコはいったん目を伏せて気持ちを引き締めた。まえを向く。出ます、とひとことつぶやくと、それきり黙って歩き出す。

シフはもうなにも言わなかった。

*

次にスグリが目をあけたとき、辺りにカエの姿はなかった。二人の激突の瞬間、スグリのフォースエッジとカエが纏った緋色のバリアは共に激しく弾け、お互いしこたま吹き飛ばされた。だからスグリは当然カエもどこか遠くに倒れているものと思つたのだが、自分がやけにうまい具合に巨木に背を預けていることと、その木に立て掛けられたビームライフルに気づいて、そうではないと悟つた。

カエはスグリが起きるのを待ちきれずに、ナナコを探しにいったに違いなかった。

いまから周囲を走り回つてもカエを見つけることはできないだろう。だがナナコのと時のような大きな落胆はない。自分はひとつの望みを叶えられたのだとスグリは思つた。そして自分の想いを通したことで、かわりにカエの心を追い込むということにも、なつてはいないはずだ。また寝坊をした自分が、いまもこうしてやつづけられずにいるのだから。

ちよつとした満足感。だがこれですべて終わつたわけではない。これからどうすればいいかな、とスグリは思う。カエを倣つてあの子たちの行方を追つてみようか。命令がなくなつたであらういまなら、これまでよりも少し落ちついて話ができるかもしれない。

……そして、そうこうしているうちにまた別のひとが命令を負つてやつてくるのかもしれない。彼女が置かれた状況も、その身に負つた役目というものも、これまで通りだった。

スグリは地べたに座ったまま、カエが拾ってきてくれたであろうビームライフルをちらりと見やる。これは武器だな、などといまさらながらに思う。元来宇宙ゴミ焼却システムであったバスターとは根本的に在り方を異にするものだ。ビームライフルは間違いない、最初から、敵対するなにかを効率よく撃ち抜くために作られている。

そんな武器にもずいぶん馴染んでしまった。

はじめて手にした瞬間からスグリはこのライフルをそれなりには扱えた。まるであらかじめだれかに操作を教わっていたかのように。だが一方でへビームライフルへに関するさまざまな事柄は、長らくスグリの記憶から抜け落ちていた。それが、オリンに存在を指摘されることで突然思い出されたのだ。

そんな状態でも、戦えた。ずっと使う機会がなかったから、存在ごときれいさっぱり忘れ去っていたが、体はちゃんと撃ちかたを覚えていたのか——たぶんそうではないだろう、スグリは目を伏せて思う。思い出すのではない、まったく突然に理解するのだ。

理解する、といってしまうとまたあやしいものだ。装置そのものの構成組成も、組み立て方も、駆動原理も、たとえば図や式に表すといったことは、いまのスグリにもできない。むずかしいことはよくわからない。しかしごくあたりまえのこととして、その手の中に造り出せるようになる。見たこともない装置のはずなのに、ずっと使いなれたペン先を運ぶように、操ることができる。ビームライフルも、ソードも、そうだった。考えてみれば奇妙な感じがスグリにもしたが、しかしいままでは考えることすらもなかった。それはとにかくあた

りまえのことだったから。

あたりまえに造り、あたりまえに狙い、あたりまえに撃つ。練習したわけでもないのに。ようするに、そういう力が自分にはあるのだろう、武器を造り、操る力が。どうやらこの身には、たくさんの戦うための力が眠っているらしい、それをスグリは否定できない。

だがそれによってスグリの心が揺らぐことも、もうなかった。これ以上誤魔化してはいられない、認めた方がよい、認めるべきだと感じるのだ。ほんの少し以前の自分だったら暗い気分になっていたろうな、スグリはどこか晴れた気持ちでそう思う。戦うための力を認めることは、それを持つ自分も戦うために造られたのだと認めることにも等しかったから。

それはしかし、心が弱ったときに陥る悲観的な思考の坩堝^{るっぼ}とでもいうべきものだ。能力の有無でその人の存在意義を決めつけようというのは錯覚でしかない。武器を作ったり、操ったりする者は、すなわち戦うために在るのだ、とは、なんともばかばかしい。それは真実ではない。

スグリは、自分の無事を願ってビームライフを探し、バズーカを作って持たせてくれたオリンたちを指して、戦うことしか考えていない、などと思ったことはない。そのような論は成り立たないのだ。そして、我が身に眠る武器も、それを操る力も、同じようにして用意されたものだ。スグリは信じる。無下にはすまいといまなら思える。これもみんなが託してくれた数えきれない願いのうちのひとつなのだから。ぼろぼろになったこの星を治すという、途方もない願いを叶えるための、途方もない力のうちの、ほんの一部だ。

そして、わたしは自分の意志でその力を受け入れた。そんな途方もない願いをどうしても叶えたかったから。……そう、わたしの力は、そのためにこそある。

ではその力を振りかざして、なぜ戦うのか。みんなを守るため、この星を守るためだ。こんなわかりやすいことはない。そのためならわたしはいくらでもがんばろう。がんばって、戦おう。守るためにと言いつつ戦うのか、という問い掛けは、もはや後戻りの思考でしかない。戦ってでも守ってみせる、そう決めたのだから。

状況はなにも変わっていないが、変わらぬ立場に置かれたスグリの心持ちは幾分か変わった。あたりまえすぎて、それゆえ見失ってしまった大切な気持ちに、スグリは意識を指向することに成功した。

いつたいどんな気持ちで武器なんてものを遺したのか、いつかのオリンの、苦しそうな言葉と表情をスグリは思い出す。さて、それに対して自分はどのようにこたえたらうか——きつと、オリンたちと同じ気持ちだ。

思わず笑ってしまう。あのときの自分は、ライフルを手にすることにもずっと前向きだった。これさえあれば機械たちからみんなを守ることができる、そんなふう zu 思っていた。それでよかったのだ。自分には、それを使ってみんなを守ることがたしかにできるのだ。

そして、その「みんな」の中には、いつかきつとあの子たちも。

自分の夢は星を治すことだけではなく、そうするためにみんなと一緒にがんばることだ、スグリはそれを再認識する。あの子たちは、この星に住みたいと言った。もし、彼女らを縛

る命令さえなかったら……。

それはずっと考えていたことだ。日を増すほど、言葉を交わすほどに、その思いは強くなつていった。自身や、大切な仲間たちを傷つけようとする彼女らを、それでもスグリは心から憎むことはなかった。本人の意思でそうしているのではないことを早くから知っていたからだ。彼女らは退けねばならない脅威ではあったが、その心は、スグリにとっての敵ではなかった。本当にだれか大怪我をさせられたりしていたらスグリももっと感情的になったかもしれないが、いまだそうはなっていない。彼女たちとの戦いの中にあるのは悲しみだけだ。怒りを向けるべき相手はいつも目の前にはいなかった。守るためにと決めたはずの心が揺れる原因はそこにあった。空を飛びまわりながら、ビームを撃ちながら、傷を負い、心を痛めて、スグリはそういう不条理と戦っていた。スグリは敵に会ったことがなかった。

あの子たちも、機械の鳥たちも、そういう意味での敵ではない。敵を敵たらしめている存在に、わたしは会ってみたい。命令を出している人に。

それこそが自分の敵だろうかとスグリは思う。まだそうと決まったわけではない、なにか不幸な思い違いがあるのかもしれない。しかしそれならなおさら言葉が意味を持つというものだし、たとえばそうでなくとも、どうして攻撃してくるのか、せめてそれを聞き出したかった。いずれにしてもその者に立ち向かうことでなにかしら事態が動くことは間違いないのだ。戦う決意を新たにしたいという思いは当然あった。それによつて相手はより態度を硬化さ込むような真似は避けたいという思いは当然あった。それによつて相手はより態度を硬化さ

せるかもしれない、というようなことも考えた。だが、命令を受けて向かってくるだれかと互いに理由もわからずぶつかりあうことこそ、スグリは避けたかった。相手が動くのを待っているだけでは、いずれまたそうなってしまうだろう。

会いに行こうとスグリは思った。そのために必要な力がいまのスグリにはある。

ひとつ大きな伸びをうって立ち上がったスグリの背に、新しい装置が浮かんでいる。一抱えほどもある、真っ白な機械翼が、二基一対。本体は分厚い卵形板であり、後方に向かってプレート状のフェアリングやフィンが張り出している。全体的に丸みを帯びたその形状からは戦いを思わせる厳めしさは感じられず、一見すると鳥の風切り羽根をデフォルメした飾りのようですらあった。

機械翼の名は「アクセラレーター」、事実直接的に攻防に用いるものではない。これはスグリが自身の力により深く向き合うことを助ける装置だった。スグリがそうすることによって、アクセラレーターは結果的に加速器アクセラレーターとなり、増幅器ブースターとなり、負荷軽減器ロードバランサーとなり、抑制器リミッターともなりうるのである。

もつとも……スグリにはむずかしいことはわからない。ただ、この機械翼に限らず、これほどたしかな形として顕れるあわものであっても、ふと気がつくまではその存在に思いあたりもしない、ということに対して、ずいぶんおかしいな制約をかけてくれたものだと言えりだ。もつともなぜそんなふうになっているのか、その理由には見当がついていた。たぶん、とスグリは一人で納得し、得意気な顔になってビームライフルに手を掛けると、ふん、と鼻

で息をつく。

たぶん、必要に迫られなければ、ずっと識らないままでいられたのだ。武器も、戦う力も。あの人が考えそうなことだ……。スグリは懐かしい人を想う。

のんびりしているように見えて、ひどく心配性だった。みんなの夢と、このわたしの幸せを、なぜだか分けて考えて、よくおかしい気をつかう人だった。わたしの身体が変わってからも、それを一緒に喜んでほしいのに、複雑な表情ばかりするものだから、星を治すのはわたし自身の願いでもあるのだと、何度も何度も言わなくてはならなかった。

ま、心配してくれているのを笑ってあげてはかわいそうだ。だいたい、その心配の通りにわたしは沈んでしまっていたのだし。なにもかも見通されていたわけだ。わたしなんか、まだまだ子供だという証拠だろう。……けど――

雨は止み、風は風いでいた。カエとのたび重なる衝突の余波によって森は荒れ、見上げれば、乱れた樹木の切れ間から、嵐の去った空が見えた。流れる厚い雲の向こう側から大きな満月が覗いている。

姿を消して隠れている、あの宇宙船もそこにあつた。

すべての元凶は船の中。命令を出している人がそこにいる。

命令者に会うために、スグリは宇宙船に乗り込むつもりでいた。そこは戦いのために変えられたひとたちの本拠地だ。機械たちもきつとたくさんいるだろう。だがスグリは恐怖は感じなかった。戦うことをおそれるはすれど、彼我の戦力を比べて悲観的なことなどは、あ

りえなかった。なぜなら、

「止められるはず……わたしの力なら……」

そう、止められるはずだから。

これほどの力、これほどの願い、これほどの夢。重ねて束ねて、それができないはずがない。——だから、もう大丈夫。今度こそ、大丈夫。

「父さん……がんばるよ」

ライフルを手に、ぬかるみを蹴り、木々を飛び越え、スグリはふたたび闇夜に躍り出た。月を見る。大気が爆ぜて、肌と衣服の余分な水気が弾け飛ぶ。幾度となく地に伏したために濁った泥水の飛沫となったが、それは月明かりに眩しくきらめいた。

*

空に浮かぶ宇宙船、とはいっても、ただそこにあるだけでは星の重力に引き寄せられ、やがてはこの大地に墜落してしまう。文字通りその場に浮かぶためには重力に釣り合うだけの相応のエネルギーを常時発揮し続ける必要がある。

目標宇宙船は、一定の軌道と速度を維持して星のまわりを周回し、そうして生じさせた遠心力を浮かぶためのエネルギーにあてていた。その場に漂っているのではなく、秒速数キロメートルという速度で飛び続けているわけだ。スグリには、あの宇宙船はこの星に住むだれ

にも想像のつかないような、高性能な機械のかたまりに違いがないと思えるのだが、それでも浮かぶためのエネルギーを自分の内部から絞り出し続けるよりは、かつての人工衛星の真似事をしている方が、いくらかは、らくなのだろう。

宇宙船の存在はいままでバスターで処理してきたどの人工衛星の残骸よりも遠く高い位置に感じられた。距離があればあるほど、戦う機械たちをこの星に送り込むのに不便だろうに、なぜそれほど離れたがるのか。ふしぎに思うスグリだったが、以前あの船にバスターを引っ掛けてしまったことをすぐに思い出して、小さく舌を出した。

手を振って見れば止まってくれるわけではないから、宇宙船には当然、走って追いつく必要がある。目標と同高度にまで上昇してから、その真後ろを追い掛けるのでは、いかにも無駄が多いというのはスグリにもわかる。低高度をゆけば宇宙船の旋回半径の内側に入ることと同義となつて、より簡単に追いつけそうだ。機械たちに迎撃を受ける可能性も考慮すれば、接近に費やす時間はなるべく短縮すべきだった。

が、それがわかつているにもかかわらず、結局スグリはのんびり加速し、のんびり上昇した。自分の姿を宇宙船に晒すように、わざと時間を使って高度を上げる。

迎撃を恐れるあまり最短ルートを超高速で接近すれば、それに気づいた相手は当然慌てるだろう、奇襲を目論んでいるのだ、などと疑われてはたまらなかつた。また、同時にこの行為には、これからそちらへ会いに行く、という考えを知らせる意図もあつた。

上昇し、雲の上に出たスグリの表情に一瞬影が射す。その目にはより高空から降ってきた、

たくさん影が映っている。

影の正体は耐熱パネルに守られた大きなカプセルの群れだった。機動展開用突入艇、もちろん目標宇宙船から投下されたもので、船で作られた戦闘メカたちを惑星大気圏内へ輸送する能力を持っている。

カプセルはやがてばらばらと細かく崩れ、中から溢れ出した戦闘用の機械たちが行動を開始。キューブ、ミサイリアーに、高機動の空戦メカ、それらがスグリに向かって加速する。

スグリは、自分が姿を見せながら宇宙船に向かっていていることの意味を、相手は正しく感じ取っているはずだと信じていた。いままで出会って、戦いの前後にわざわざかばかりの言葉を交わした人たち、彼女たちにこれくらいのこと伝わらないはずがない。そのうえでなお攻撃してくるというのなら、それは受けて立つ覚悟でもいた。態度だけではあらわせないことも当然あって、たとえば、戦いたくないからといって黙ってやられるわけにはいかず、したがって反撃はしなければならぬ現状というのは、その真意を態度でもって伝えることがむずかしいシチュエーションといえる。だからたとえ一言でも言葉を交わすとスグリは決めている。それを阻む障害は、排除する。

いまやスグリの頭の中では、命令者と話をするのはぜったいだった。それで相手の意識が変わって戦いは終わるかもしれないのだ。あるいは自分の意識が変わって、相手を敵だ、と認めねばならない事態になるのかもしれない、しかしそうやってようやくお互いの関係がはつきりするものであって、それなら納得もいくというものだし、納得したうえでなら、がんば

れる、もう迷うまいと、スグリは思うのだ。敵は排さねばならない。みんなと、自分自身の夢のために。

交戦^{エンゲージ}を決める。スグリは一度静止して敵機群を見渡した。大気圏突入から戦闘メカ展開までの無防備な状態を撃ち抜かれるのを警戒してか、カプセルの投下空域まではずいぶん距離がある。散開した敵機群はいずれもビームライフルの有効射程以遠。

構わずスグリはその場で照準、ライフルを構える。ひとつ大きな深呼吸をすると、背に浮かぶ機械翼、アクセラレーターの中心に覗くプリズムが煌めいた。後方フィンが左右に展開し、柔らかな光の帯が流れ出す。

ビームライフルも普段とは異なる挙動を示した。ライフルは必須のはずの弾薬生成プロセスを飛ばし、オペレーターからの供給組成を直接ビームに変換して、吐き出した。ハイパーアタック。ビームライフルにあるまじき、高エネルギーの持続的照射だった。銃身先端部には小規模のリブーストエフェクトが一段。その虹の環によってビーム径は銃口径の何倍にも拡大された。

射線は機械たちが最も密集した空間を貫いていた。多くの機械と降下カプセルのいくつか丸ごとビームに飲み込まれる。

撃墜を免れた機械たちはしかし臆するような素振りもなく、より速度を増して一直線に突っ込んでくる。スグリも彼らをライフル本来の射程に収めるため五機のビームポッドと共に前進する。ハイパーアタックはビームライフル発射モードのひとつではあるが、機動戦に最適

化されたライフルにとって、それは自らが備える機能とはいえ負荷が大きく、無闇に連発することはかなわないのだ。

最初にビームライフルの射程に飛び込んできたのは、ミサイリアーから発射された長距離ミサイル群だった。複数目標を限られた時間内に撃破するのに、三発ずつしか発射できないビームライフルが向いていないことはもう身に染みてわかっている。スグリは五機のビームポッドを先行させる。

ポッドはその砲身兼衝角にフォースエッジを纏っており、それぞれが体当りで手近のミサイルを撃墜。それから反転、撃ち漏らしをビーム攻撃。

同時に発射されるミサイルがどれだけ多くとも、同時に一つの地点に到達するミサイルの数が十を数えることは今回に限らず稀で、次のミサイル群が迫るころにはビームポッドも再攻撃が可能だった。もしそれ以上の飽和攻撃を行う能力が敵にあり、今後そうなるのだとしても、ミサイル間の密度が高ければ「兄弟殺し」が起きやすくなるし、スグリの方ではわずかな射撃で意図的にそれを誘発することもできる。またスグリ自身がフォースエッジを全周バリアのように扱うこともできるのであって、仮にそうした場合、強大な破壊力を伴うそのビーム膜をミサイルの爆風や弾体片は決して貫けはしないだろう。現段階ではそこまでする必要はないものの、究極的には自分からミサイルにぶちかましをかけて一方的に吹き飛ばすことすらできる、ということだ。いまやスグリは多数の高性能誘導弾を前にしても、ビームライフルの弾薬生成時間を稼ぐために減速したり、突撃をあきらめて回避機動に移ったり

しなくてよいのだった。

そうして速やかに敵機群の中央に飛び込んだスグリは、戦闘メカたちの連携を阻害すべく彼らの編隊を引っ掛きまわすように大立ち回りを繰り返した。とにかく目についた敵を思いついた方法で攻撃する。相手の想定外の行動には、相手が想定する以上の反応速度でもってカウンターを叩き込む。実力差にものを言わせたその戦術には戦いはじめた当初からまるで進歩が見られなかったが、やっかいだったミサイルへの過度な警戒が解け、それに行動を制限されることなくなったスグリの戦闘機動は飛躍的に効率化した。いわばやりたい放題といった状態で、スグリはそれまで以上に敵戦闘メカを圧倒した。

弾切れを起こした高機動空戦メカたちは、独自の判断によつてミサイルよりも複雑な機動でスグリにぶつかってきたが、速度自体はより低速であり、すぐそばに密着しても信管が作動して大爆発というわけではなかったから、万一射撃の隙を突かれるようなことがあつたとしても左手のソード一本で易々とあしらうことができた。

それよりも危険なのはキューブたち、というよりも、彼らが持つビーム砲だった。

しかしキューブの機動性は空戦メカよりずっと低く、なによりスグリとの交戦回数が他の種類の戦闘メカと比較して多い。そのためスグリには、キューブの行動様式や戦闘時の限界性能——最小旋回半径、転回速度、照準完了からビームを実射するまでの平均時間や、次弾発射に要する時間など——がある程度把握できていた。スグリは場当たりの攻撃を繰り返しつつも、そろそろビームが飛んできそうだとか、あるいは逆に、いまこの瞬間を狙い撃た

れることはないはずだ、ということくらいは自然と予測できていたわけで、そんなスグリが実際にキューブから致命弾を見舞われることは、最後までなかった。

もつとも、「当たったら痛い」攻撃を持ち、本体性能では劣るキューブたちは、必然的に早く壊滅していた。続いて積極性の高い空戦メカが返り討ちにされる形で姿を消し、そしていま、わるあがきの如くありつただけの搭載ミサイルを斉射した最後のミサイリアーを、ビームライフルの二連射撃が襲う。ビームの一段目がミサイル群を蹴散らし、減衰しながらもミサイル母機に到達、その装甲を浅く抉ると、高威力を保った後続ビームがまったく同じ箇所突き刺さり、とどめを刺した。

爆煙が風に融け消えるのをぼうと眺めたあと、スグリは先ほどよりもゆっくりと、歩むようなペースで上昇する。

その様子を、一人の女性がじつと見下ろしている。

地上からはおよそ四〇キロメートル。ストラトスファイア、成層圏と呼ばれる大気層。彼女は最初からそこにいた。はじめて見たビームライフルのハイパーアタックにも無感動に、機械の群れといっしょになって戦うでもなく、ただそこに浮かんでスグリが来るのを待っていた。

だからスグリも、放っておくと前に出ようとするビームポッドを背中に背負って、その女性に近づいた。

青くて長い髪。白いコートに茶のロングスカート。落ち着いた出で立ちに加えて眼鏡を掛

けているせいか、その女性はまるで技術者のような、理知的な雰囲気を纏っていた。こんな場所に平気な顔で浮かんているのだから、かしこいだけの人ではありえないのだが。

「おつかれさま」

眼鏡のテンブルを弄りながら、青髪の女性がそう言った。

「そこを退いて」とにべもなくスグリ。

「退かない」と女性。

「じゃあ無理にでも通る」

「力ずくで止めるよ」

「……戦いたくないよ」

「そういう訳にはいかない」

「……命令？」

女性はうつむき、そうそう、と肯定しながら、自嘲するように笑ってみせる。このときのスグリはただ悲しい笑顔だと思い、彼女が背負わされたつらい役目に胸を痛めた。

「それにあの船には」女性はその方向を見ることなく続ける。「大勢の仲間が乗ってるの。いまあれに、なにかされるわけにいかないのよ……まあ、戦闘なんて面倒な仕事、したくないんだけどねえ。命令きかなきゃ痛い目あうし、アンタとその仲間にや悪いけど、全力で潰させてもらうわ」

突き放すような口ぶりに、小さな違和感。それがなんなのかわからないままスグリは言う。

「させない。みんなを傷つけさせるもんか」

「抵抗する気？ おとなしく消されてほしいんだけど」

「嫌だよ。わたしはまだ生きて、みんなともつとがんばりたいもの」

だからこそ、スグリにはこの女性が自分の邪魔をしようというのわかる気がした。守りたいものが彼女にもあるのだ。あの船に乗っているという大勢の、彼女の仲間……しかしそれは戦いによってしか守れないわけではない。わからないのは、彼女らはなぜそれを認めようとしなかったのかということだった。

「それにわたしは、きみたちの船を壊そうっていうんじゃない」

「壊そうと思えば壊せるんでしよう、私たちはそう思ってる。だめね。行かせやしないわ」

——この星に住みたい。たしかに聞いた、それが彼女らの望みなのだ。この女性自身はたぶん気がついていだろう、その望みを叶えるのに、戦いをやらねばならない理由などない……しかし彼女は命令には逆らえない、というわけだ。

そして、だから自分は、そんな彼女の棘のある言葉に、なんともいえない不自然さを感じるのかもしれない。

不自然さというより、スグリにとってそれは既視感ともいうべきものだった。この人はいま、本来ではない別の自分に切り替わろうとしているのではないか、そう思えてしかたがなかった。

狭い通路でとおせんぼされているわけではない、この女性を全力で回避して宇宙船に向か

うことも、ひよつとしたら可能かもしれない。しかし勝手のわからない宇宙船内で追い付かれては不利だし、間が悪ければ、命令者との話を邪魔されるということもありうる、それは避けたい。

道を塞ぐこの女性が、いったいどんな心情でもってここにいるのか、多くをうかがい知ることとはできない。そんな彼女と事を構えるのはつらかった。だが、彼女はなにかしら大きな決断をしてこの場に立ち塞がっているのはおそらく間違いないところだとスグリには思え、であれば戦いから、彼女のその思いから、目を背けるべきでも、なかった。ただしそれは己の意志を曲げて彼女に従うことを意味しない、そうスグリは自らの心に言い聞かせる。逃げないが、負けない。戦いに勝って命令を打ち消すだけではなく、彼女にも、この自分の意志を認めさせる必要がある。そしてそれはおそらく叶うだろう、スグリは女性の眼鏡の奥の瞳を覗く。この人はたぶん、わたしの意志を認めてくれる。

スグリの前面にビームポッドが扇のように並び、一拍の間のあと弾かれたように目標へ突っ込んでいく。体当たりの直前に轉身し、砲身を目標に向けたまま、上下左右、斜め方向に高速機動。

目標、当面の敵、青い髪をした女性は、しかし身じろぎひとつしない。ただ、自身を閉じ込めるように動くビームポッドたちにちらりと目を走らせて、

「面倒ねえ」

彼女は戦闘行為によってスグリの進行を止めようというにもかかわらず、武器らしきもの

は手にしていない。かつナナコのように専用の移動砲台をはべらせたりもしていなかった。格闘主体という風体ではないのだが……見た目で判断するのは、危険か。

「躊躇なんかしてられない」アクセラレーターの活性が急上昇。スグリはライフルを構える。発射モードはハイパーアタック。「いくよ」

目標を取り囲むポッドたちが後進しながら一斉射撃。同時に、ライフルから放たれた光線がポッドがしりぞいた空間を灼いた。

直撃したように思えた。女性は一ビームの効果界の中心に消えた。攻撃継続中。彼女の離脱をスグリはまだ確認していない。だが——おかしい、手応えがない。

ソードによる斬撃ならいざしれず、ビーム照射に手応えもなにもあるものか、とスグリの理性は自身の感覚をいったん否定した。いままで機械たちを撃ち抜くたびに、手応えなどというものを感じていただろうかと。しかし戦闘時におけるこうした直感めいたなにかは、理解できないからといって無視してはならないと、スグリは幾度かの経験を経て悟っている。そもそもスグリの理性は上手に戦いをやるための技術や知識、ノウハウといったものに精通してはいない。現状では、「理性的な戦況判断」が必ずしも「曖昧な感性」を凌駕するとは限らないことを、理性的に、認めているのだ。想いを通すためにも、まず戦いに負けないことは必要だ、ということも。

そこで勝率を上げるために、手応えがない、と感じた理由を探る必要があったが、なにせ戦術知識が能力と状況に追いついていないわけだから、既存の判断材料から確実な回答を得

るのはむずかしく、また長考する時間もなかった。——スグリはビームライフルの悲鳴を聞く。高速統御システムからの加熱警告だった。

ハイパーアタックを行うために、ビームライフルは本来の手順で弾薬を運用する場合に比べて桁違いの高エネルギーを扱う必要があった。ライフルの高速統御システムは、スグリからエネルギーを受けとる直接の装置、FDM（フィギュア・ドライブ・メタスタフューザー）が備えているリミッターを一時的に解放することでこれをまかなっている。

このFDMは通常、必要なエネルギーをオペレーターに要求はできても、勝手に吸い上げる能力までは持たない。スグリは「手応え」に氣を取られるあまり、リミッターの外れたFDMに少々力を、押し込みすぎていた。もともとビームライフルは瞬間的大出力を犠牲にして近く中距離での撃ち合いに特化したガジェットだ。設計思想に矛盾する、ハイパーアタックという形態はいわば奥の手。運用限界はすぐに訪れた。照射開始からすでに三秒以上が経過して、ライフルの負荷は設計上のマージンを食い尽くしつつある。ビームライフルは自壊寸前だった。

この攻撃で勝敗が決したとはどうも思えない、いまライフルを機能停止に追い込む事態はさけない。

止むを得ず攻撃を中断したスグリは自身の感覚が間違っていないかったことを知る。相手の女性、体の前、空中に盾を作り出して、スグリのビームから身を守っていたのだ。

彼女の盾はナナコが用いたバリアとはまた様相が異なっている。盾の見た目の印象をひと

ことで表現するならば、巨大な氷のかたまりだ、と言えた。もちろんありふれた氷などであるはずがなかった。なにせビームを防いだのだ。しかしその周囲にはうつすらと白い靄のようなものまで漂っていて、スグリはその、少し青みがかった美しい結晶体に、暖かい部屋に置かれた冷たい氷を思わずにいられない。実際にかんりの低温だろう。

「——もう終わり？ 意外とたいしたことないわね」

氷山のようにそびえる結晶体の上端から、女性がひよっこりと顔を出し、スグリを見下ろして言った。では今度はこちらの番、という感じだ。彼女の挑発に付き合うつもりはスグリにはなかったが、ハイパーアタックがまるで効果を上げていないという事実には、事前の予感があったとはいえ少なからず当惑した。

女性が片手で結晶体を軽く前に押し出す。スグリの方ではその結晶に不用意に近づくわけにはいかない、押されるように後退する。と、結晶体の中心で光が弾けた。そこから粗い亀裂が広がって、次の瞬間には、結晶体はひとりでに砕け散った。驚いたスグリはさらに距離をとる。

よくよく見れば、結晶体は粉々に散り消えてしまったわけではなく、いくらか小さな複数の小結晶として再構成されたのだった。それぞれスグリの身の丈ほどの大きさがまだあったが、身長何倍もの径を持つビームから敵の女性が身を守るにはあまりに小さい。

おそらくハイパーアタックが連続使用できないことは読まれている。そのうえアクセラレーターの高活性はいかにも目立つから、それを確認してからでも大結晶の準備は間に合うと

いうことだろう……

十数個の小結晶が突然ぱつと輝いた。直後、それら結晶から一斉にビームが投射される。スグリにはなにが起こったのかよくわからなかった。結晶体の中に砲台が仕込まれているような様子はなかったのだから。ただ、自分に向かつてビームが飛んできたという事実に対しては素早く反応した。迫る脅威を身をひねって危うくかわし、ソードをふるって叩き落とす。

「まったく、非常識ね」

距離が開いた敵の女性が、あきれ果てたような口ぶりですんなことを口にするのがかろうじて聞き取れた。

女性とは新たにいくつも小結晶を作り出し、自分のまわりに環状に配置している。回転するクリスタルリング。あれで攻撃を受けとめるつもりだろう——それからスグリの理解は先ほどの事態にも追いついた。結晶体は、ビームを放つこともできる。放置してはおけない。

女性の周囲でリングを形成する結晶体、そのひとつを、スグリはビームライフルで攻撃する。命中。しかし撃墜はかなわなかった。結晶体はぴくりとも揺がず、それどころかまるでスグリのビームを跳ね返すように、即座に反撃のビームを撃ち返してくる。

実際に跳ね返されたのかもしれないとスグリには思えた。まさか、とも思う。鏡と懐中電灯の関係でもあるまいし。だが、結晶体はあれほどたくさん浮かんでいるというのに、反撃してきたのはスグリが狙い撃ったそのひとつだけなのだ。

確認のために再攻撃。ビームは結晶体に着弾すると——実際には刹那のできごとだが——内部にじわりと染み入るように、消えていく。そして、今度は複数の結晶体が光を放った。数発のビームが多方向から同時に発射される。

スグリは結晶体の動向には広く注意を払っていたし、敵の照準が正確だったこともあつて、ビームの回避自体に問題はなかった。ひらりとかわす。だが、結晶体の反応が予想を違えたのは事実だ。ビームを反射されたのではないかと感じたのは、誤りのようだ。

そもそも敵からの最初の攻撃も、複数結晶からの同時ビーム攻撃だった。その直前には自分はいフルを撃っていないではないか、とスグリは思い、はつとする。大結晶にハイパーアタックを撃ち込んでいた。

結晶体は受けたビームを直接反射しているのではない、反撃のためのエネルギーに換えて一時的に蓄え、最終的には自身のビームとして撃ち返すことができるのだった。また結晶体同士は互いにリンクしており、攻撃を受けた結晶が別の結晶にエネルギーを渡す、ということとさえた。もつともそうするためには若干の時間を要するし、複数結晶からの同時攻撃を行おうとすれば、その分エネルギーも分散してビームの威力は低下する。一方、外部からのエネルギーの吸収なくして完全に自力で攻撃を行うのは、結晶体たちは得意ではなかった。理想大氣中に投射可能なビームを生成するには長い時間を要する。

それら結晶体の持つ性質を、スグリは数回の攻撃である程度、正しく推し量った。「常識」はどちらだと言いたい気分だった。ビームが効かないどころか、吸収されてしまうだ

んで。こんな相手と、いったいどのような戦えばよいのだろう。

敵女性がたまた手近な結晶体に手を伸ばすのが見えた。子供の頭に手を乗せるような、実にあつさりとした所作だったが、触れられた結晶体はぱつと輝き、大量のビームを一挙に撃ち出してくる。

あれはたぶん、ライフルのビーム束よりも取り込みやすい形で、自ら結晶体に高エネルギーを叩き込んだのだろう、そのようにスグリは、女性が結晶体に手を置く動作が攻撃の前兆であることを予見してはいたが、その攻撃は散弾銃のビーム版とでもいうべき激しいもので、ビーム束の間隔は体を通せるほどには開いていない。体捌きでやりすごすことは不可能だ。

スグリは思い切りジャンプ、ぎりぎりで拡散ビームの効果界を飛び越える。そのまま縦方向のサテライト機動へ移行——女性の周囲のクリスタルリングは地平線に水平の横並びで、頭上と足元には隙がある。

しかしスグリの位置にあわせてリングは随時角度を変えた。それらを操る女性も体ごとスグリに向き直り、手元の結晶に力を込め続ける。リングを構成する結晶たちは、連続的に供給されるその潤沢なエネルギーを連絡しあい、次々とビームを発射する。

空中戦に上も下もなかった。当のスグリも、いざ機動をはじめれば水平線など意識したりしない。そんなことはあまりにもいまさらだ、浅はかだったと、速度を増して敵のビームから逃れながらスグリは歯噛みした。狙い通りにいかなかったことよりも、焦っている自分を意識することでよけいに焦慮してしまうのだった。

スグリはまったく、責めあぐねていた。

自力ではビーム生成が苦手な結晶体たちだったが、敵の女性自らがそれに力を叩き込む、などという荒技をやっている以上、スグリ側が攻撃を控えるメリットはほとんどない。かといってビームライフルの威力では結晶体を壊せなかった。五機のビームポッドと連携して敵女性を直接撃つ以外になかったが、結晶体群は単に、いまはリング状に集中配置されているだけなのであって、なにも一本の環でなければならぬ理由はないだろう。彼女がその気になれば、自分の姿を結晶体で取り囲み、その中に完全に籠もってしまうことも可能に違いなかった。

現に結晶体はリングとはまるで無関係の位置、女性から離れた場所にも現れはじめた。もちろんそこからビームは飛んでくる。まるで設置砲台だ。かわしたつもりのビームが近くの結晶体に吸い込まれて、背後から再度攻撃される、ということさえあった。いまやこの場は敵の女性が作り上げた、彼女に都合のよいバトルフィールドで、スグリは次第に機動も制限されることになった。

しかしどんなに飛び難くとも、厳しい状況ならばなおのこと、立ち止まることはできなかった。一瞬先の自分の位置を、相手に予測させないような機動を考え、実行し、そしてそれによって自分自身を激しい緊張状態の中に置き続けなければならなかった。そのうえで、現状の打開策を思案せねばならないのだ。

ビームに追い立てられ、逃れて進むスグリの目先に白い靄が漂っている。結晶体から放た

れる冷氣であるが、正確にはまず靄が先にあり、それが凝縮して結晶体に成長するのだということをスグリは確認している。

結晶体はひとつひとつを取り上げて見れば、それほど優れたビームの連射能力も、速射能力も持つてはいない。エネルギーを渡されて発光してから実射までに存在するごく一瞬のタイムラグは、スグリにしてみれば回避の意識を整えるのに十分すぎる猶予時間だ。機動の邪魔になる結晶体の、攻撃の合間を縫って一息にそばを通り過ぎてしまう、ということとはむしろかしくなく、すでに何度かそうやって回避機動を維持している。

いま目の前で生まれた結晶体も同様、ビームを撃たれるまえに距離をとることはできそうだった。だがすれ違う瞬間、その結晶体はスグリに向かってぶつかってくる。

「くっ」

避ければいいのに、いや、避けていたのに、攻撃が効かない相手を前に気持ち焦っていたスグリは思わず手を出した。左手に赤光。進行方向右へ跳ねて結晶体を左に置き、身をねじりながらのソードスラッシュ——スグリの動きが、ぴたりと止まった。

振るったソードの剣身は、結晶体に中程まで食い込み、そしてそれ以上動かなくなってしまったのだ。

見る間に剣身の赤光が失せてゆき、かわりに結晶体が光を放つ。それは明らかにビーム攻撃の前兆だった。背筋が凍りつく。この結晶は、斬りつけられながらもソードのエネルギーを吸っているのだ。

即刻離脱しなければならなかったが、スグリは結晶体からソードを引き抜くことができないでいた。結晶体はやはりとんでもない低温で、それが放つ冷気でソードを持つ手が本当に凍ってしまいそうだ。そうなるまえに、次の瞬間には至近距離からビームに撃たれてしまうだろう。クリスタルリングから集中砲火を受けるのが先かもしれない、いよいよ慌てたスグリはソードを捨ててでも逃げるべきかと逡巡し、しかしふと、ソードを引き抜けない、ということに、なにか根本的な疑問を感じる。

剣身を吸収されてしまえばソードは持ち手しか残らないはずではないか。それでなくともビームの刃、対象に食い込んで止まる、という時点でどうもおかしい。これも結晶が持つ力だろうか、餌を捕えて離さないための。

すべての疑問の答えを探すひまはない。とにかく、自分で剣身を完全に消してしまえばソードという装置を失わずして離脱できるはずだと気づく。

そうしようとした矢先、しかしスグリは、結晶体に無数に走るひび割れに、はたと気を取られた。心なしか先ほどよりもソードに赤みが戻っている気もする。ひび割れは、いまこのときも増え続けている……。

離脱中止。咄嗟にソードに集中する。と、剣身が激しく燃え上がった。対して結晶体には爆発的に破壊が広がる。無数の亀裂を這う赤光が血のように溢れ出す。いける、とスグリは確信する。すでに斬撃としての勢いは残っていないソードを、思いきり振り抜く。

結晶体は真つ二つに切断された、手応えすらなく。内部で生成中だったビームが収束され

ぬままに解放されて炸裂し、結晶体はさらにばらばらに、文字通り粉々になる。白い靄に形を変え、そのまま大気に消えてしまう。

微粒子化する一步手前の結晶片とビームの余剰エネルギーはスグリにとっても脅威だった。横殴りの衝撃。くちびるを固く結んで耐える。まともな攻撃を食らうよりはましだ、内心で強がっていると、まともな攻撃が次々と飛んできた。クリスタルリングからの連続攻撃だ。避け切れない。

スグリの体にぶつかったビーム束はすべてその場で崩壊し、肌や衣服を流れて消えたが、そのたび貫かれるような痛みと衝撃をスグリは感じた。たまらず体を庇い、弾かれるままに後ろに下がるも、敵ビームからは逃れない。後退はなんの意味も持たなかった。

こんなことで判断力を削がれてはさらなる致命傷を受けてしまう、そうは思うものの、いま痛む体でたくさんのビームを避けたり、迎撃したりするのはスグリにも無理だった。脅威を見分ける余裕が残っていない。

致命弾を選んで避けることをあきらめ、スグリは左腕で大気を払った。球状の輝線が大きく広がりスグりを包む。ナナコの大出力ビームにも耐えた薄青色の空間装甲、しかしこれは消耗も激しい。身を守るための力ではあるのだが、無闇に使えばすぐにへとへとになつてしまうだろう、あつさり自滅を招きかねない。

今回は、痛みから逃れたいという思いが勝った。そのかわり展開時間はごくわずか。バリアは弾けて割れるほどの一瞬に、迫るビームのいくらかを受け止めた。その間にスグリ自身

はバリアを置き去りにするように空を蹴っている。

前後移動で敵の照準から逃れられないことは、わかっていた。目の前を高速で横切る相手こそ狙い難いものだ。敵を中心に据えて旋回を続けるということは、速度と間合いの調整に有利だけでなく、敵から見た自分が横移動を続けている状態を作り出す、ということでもあるのだ。

自身の戦闘機動に新たな見解を混じえつつスグリは再びサテライトへ。だがまだ平静ではなかった。敵の攻撃から逃れなければならないという気持ちが先走る。いくらなんでも不必要な高速で、自分でも思いがけない方向に跳ねてしまう。負荷の一端を肩代わりするアクセラレーターから長い光の尾を引いて、スグリは空にいびつな軌跡を残す。回避のための機動というより、きりもみ状態だった。息が乱れる。力を制御しきれないというのは、ビームを数発食らうこと以上に危険だと気づく。

みんなに貰った力があれば負けない、そうスグリは信じたが、信じればそれで戦いに勝てるというものではありえなかった。せつかく貰った力をもっとうまく扱うために、自分自身も努力を続けなければならぬ、体の痛みが引くにつれて冷静になってきた頭でスグリは思う。さしあたっては、そう、これ以上ビームに当たらないように心掛けよう。

勘を取り戻すようにていねいにビームをかわしながら、敵の女性をちらりと見やる。相変わらずの涼しい表情、結晶体をついに撃墜されたことなど彼女は気にも留めていないように、スグリには見えた。

實際結晶をひとつ減らした程度で戦況がひっくりかえるものではなく、それだけのために隙を作ってスグリは手酷くやられてもいた。だが、かわりに得たものも大きい。一個壊したという実績以上に、壊せるのだとわかったことが、大きいのだ。

結晶体は無限にビームを吸収できるわけではなかった。結晶間のリンクがある以上、全体としてプール可能なエネルギー量は凄まじいものになるうが、一個の結晶が単位時間に入出力できるエネルギーには限りがある。そして、ソードの出力はそれを上回ることを、スグリは知った。

攻撃が効かないという思い込みは拙速^{せつそく}に過ぎた。しつかりそのつもりで望めばソードは結晶体をたやすく斬り捨てるだろう。

ビームライフルにもまた可能性を見出せた。超高速射撃、三連。それで足りないようならナナコが好んだ方法、五機のポッドからのビームも集中させる、ということもやってみるべきだった。

途方に暮れるにはまだ早い。敵の防御は完全無欠ではない。試すべきことは多い。

わかっていたことではあるが、銀髪の少女の機動はとにかく高速だった。

対するキョウコは定点に留まり、戦闘を開始してからほとんど機動していない。持ち前の結晶体による防御能力が少女からの攻撃を無効化するために十分に機能していたから、逃げ回る必要がなかったのだ。つい先ほどまでは。

銀髪の少女はなおも激しい機動を続けていたが、キョウコとの間合いを大きく詰めたり、離したり、ということとはしてこない。キョウコの近辺は結晶体の配置密度が特別高く、そこへ突撃を掛けるのはまだこわい、というところだろう。付かず離れず、少女はもう何周もキョウコのまわりをぐるぐるとまわっていた。三〇G程度の維持旋回になろうかとキョウコは試算する。ミサイルが当たらないわけだ。

もちろん追いつくことはできる。もつと早く飛ぶこともたやすい。しかしその高速度を戦闘機動として成り立たせるのは、いまの自分には困難だ。そこまで加速するのに秒単位の時間が掛かってしまう。あの少女にしても、あれが最高速度というわけがないだろうし、しかもあちらは実際には「ジグザグ」をやりながら飛んでいるのだから、なんとも恐れ入るというものだ——ふつと思考を中断して、キョウコは結晶体を環状に配して作った防御帯に意識を向ける。防御帯、クリスタルリング、その傾斜が変わる。敵ビームライフルからのバースト射撃が迫っていた。

その青白い光弾はほとんど一本のビーム束のように見えたが、三発の弾体がぎりぎりで独立して飛翔しているのがキョウコにはわかる。単発の大出力ビームよりもこういった小細工を嫌うバリアシテムは多い。直撃を受けた結晶体が、鉄が軋むような不快な音で鳴いた。さらにそこへ多方向から五本の光条が収束する。少女が率いるビームポッドからの同時攻撃だ。すでに安定を欠いていた結晶体は、それで完全に破壊されてしまう。

結晶体の破壊には、その結晶体が変換・貯蔵しようとしていたエネルギーの「無責任な解

放」を伴うが、そんなことは百も承知のキョウコがこれを恐れることはない。隣接して浮かぶ無傷な結晶体と、周囲空間を満たす冷たい霞が、溢れ出したエネルギーを貪欲に吸い尽くす。即座にビームとして発射、しかし敵の意表を突くことまではできない。なぜならこれももう幾度か繰り返した手法だからだ。

つまるところ、結晶体による防御は打ち破られつつあった。

敵の少女の高機動と彼女の手にある大出力ビームソードの破壊力が、遠方に配置した結晶体のすべてを撃滅するのにさほどの時間は掛からなかった。複数ビームの一点集中を受けて、いまやクリスタリングすらも削られつつある。

キョウコは押されはじめていた。残っている結晶体の数を維持することで精一杯、というほど追い込まれているわけではなかったが、再び確実な優位を得るためにどうしていいのかわからない。このままでは勝てない。勝てないということは、いつかおとずれる敗北を待つことと同義だ。少女が扱う、ビームを撃ち出すという唯一の目的のために設計されたであろうビームライフルと、外界からのエネルギー吸収、変換、蓄積、それから再変換を経てようやく自分用のビームを生成する結晶体と、稼動効率でどちらが優れているかは言うまでもない。たしかに「高機動」に伴う負荷というものは、ともすれば破壊的な攻撃力の行使にも匹敵し、相手の少女はその分だけ消耗しているはずではあった。だが、キョウコはキョウコで、多数の結晶体を運用するために力を尽くしている。結晶体は作って置けばそれで終わり、ではないのだ。その機能を維持するためには絶えず冷却し、極低温以下に維持せねばならな

った。現状の膠着状態が長く続けば、先に力を失うのはおそらく自分の方だと、キヨウコは悟っているのだった。

結晶体のキャパシティは、いくらでも向上させることはできる。敵ビームライフルの変則砲を受け止めきるレベルのものを量産することも可能だ——しかしそれがなんだというのだ、キヨウコは熱を持ちはじめた思考を追い出すように、かつそれが致命的な隙とならないように、小さく息をつく。

まったく自分は、あんな子供を相手になにを意地になっているのだろう。強力な結晶を生成するには高い集中力とわずかな時間がどうしても必要になる、いまそれを作ろうというのはどう考えても無謀ではないか。やるなら最初から……結晶体の能力を見せつけて、それにあの少女が怯んでいるうちに、やっておくべきだったのだ。しかし当初はこんな事態になるとは思っていなかったから、数を、攻撃力を、優先した。決定的な間違いだった。

とはいえこのような事態を目の当たりにしてはじめてキヨウコは、間違いだった、などと言えるのであつて、キヨウコが当初から持っていた認識から判断すれば、攻めにこだわった選択は必然でもあつた。なにせ、「倒しきらなければなんの意味もない」のである。

そして結果こうなつてしまつては、もはやどうやったところであの少女を倒すことはできないのかもしれない、自分のなかにある冷めた気持ちにキヨウコは意識した。シフは、こうも言っていたではないか、「やつはもう、おまえではどうにもならん」

これは、結果を見たいまだからやはり彼の言うとおりだったと認められる、わけではな

った。投げやりなシフのその発言に、たしかな根拠やデータがあるかどうかはあやしいものだったが、それでもキョウコは、ああ、そうなのか、と思ったのだから。彼がそう言うのなら、そうなのだろう、と。

それなのに自分はこの場へ降りた。おそらく勝てないのだと認めていながら。

クリスタリングに複数の光条が突き刺さり、またも一個の結晶体が消滅する。形ばかりの反撃すらもおざなりに、キョウコはぼんやりとつぶやいた。

「面倒ねえ」

クリスタリングの一端で炸裂したビーム、結晶体を巻き込んで崩壊するエネルギー、闇夜に漂うその青白い螢火を、スグリはじつと見つめている。

そういったビームの残滓は、本来なら近くの結晶体がすぐにでも吸収してしまうはずだった。しかしいま、おそらくはそれを操っていた女性の意志によって、すべての結晶体が消えていた。

ビーム砲台でもあった結晶体が消え去ったことで、スグリもひとまず強烈な回避機動を中断、緩やかなカーブを描きながら、身ひとつで浮かぶ女性の様子をうかがった。ついに集中が切れたのか、などと思ったのは一瞬だ。女性の周囲はいまだ極低温が保たれていた。

スグリは女性の左の手のひらに白い冷気の靄を見る。すでに周辺大気が極限まで冷却されているから、温度という点では差がないが、その手に特別の力が集まっているのは疑いよう

がない。

彼女はなにか、別の力の使い方をやろうとしているのだ、結晶体による防衛を解いてまで。あまりにも突飛な女性の行動だったが、スグリはそれをさほど衝撃的には捉えなかった。あのようにじっくり力を溜める隙を、この自分が突くことはない、彼女は思っている、それがスグリには自然と感じられるのだ。そして実際に構えていたライフルを降ろす自分を、スグリは、甘い、などとは思わなかった。女性をやっつけることはスグリの目的ではなかった。スグリがやりたいことといえば、あの女性に自分の意志を、宇宙船に乗り込んで命令者と話をする、認めてもらうことなのだ。

戦いという枠で見れば、結晶体を消去した時点で女性は勝利を放棄したに等しかった。彼女がこれから繰り出そうという攻撃がどれほどの威力を秘めているようが、それは関係ない。勝敗はすでに決している。それくらい理屈はスグリにもわかる。

あの女性は、戦いの最中に自らを縛る命令を打ち消したか、それとも彼女自身になにか大きな心境の変化が起こったかして……ともかく、この自分の望みを認めてくれる方向に、彼女の心は動いたのだろう。けっきよく彼女も、切り替わり損ねた、というわけだ。

で、だから「あれ」は単に彼女の意地か、でなければ彼女の仲間たちに筋を通したいといった気持ちのあらわれだろう、スグリはうつむき気味の女性の、その左手を見て思う。

なんにせよ彼女は自分から退いてくれたのだ。最良の結果だった。スグリにとってはこの場はもう、それでよかった。「あれ」は、言ってしまうと彼女のわがままにすぎない。これ

以上の戦闘行為は無意味だ。

顔を上げた女性と目があつた。スグリは旋回半径を少し縮め、減速しながら女性に近づく。高度を合わせ、腹這いの飛行姿勢からゆっくり身を起こして、最終制動。

スグリに向き直つた女性が、すつと左手を引く。接近戦か、思わずスグリも身構える。

女性には拳を握ることなく、平手のままで突進してきた。手刀といつてよかつたが、カエとの戦いを経たスグリから見れば、やはりどこかきこちない。最初の印象通り、この女性には格闘には不慣れなのだろう。打撃は本質ではないという感じがする。彼女が蓄えた力は打撃を強化するためのものではないのだ。それ故に、わずかに触れただけでも致命的な事態となろう。

しかしスグリは腰を据えて迎え撃つ。極低温を歯牙にもかけない、絶対零度を否定し尽くす超高熱が身体を巡る。——最後に彼女の意地につきあうのも、やぶさかでない気がするスグリだった。

シンキング・ザ・キングピン

その人は、だれかをかえりみることがあまりない

彼女はずっとまえから気づいていたが

幼い彼女に知れるのは、それだけだった

その人を見ているだれかは、彼女が思うよりは多くいた

なぜこんなところで、こんなことをやっているのか。あの少女には勝てなかったのだ、これ以上、なにをどうしようというのか。自ら面倒事を引き伸ばしてまで、自分は、だれに、なにを望むのか。

思うところはいろいろあった。走り出したら、ぜんぶ忘れた。

キヨウコが夢中で突き出した左の手刀は、少女の両の手のひらに、挟み込むようにして受け止められた。しかしそのとき、加減の効かない域まで高められたキヨウコの力は、キヨウコの支配をすら離れ、広くこの惑星の空へと広がった。

受け止められた手を通し、伝わる暖かさにキヨウコはとまどう。咄嗟に少女の手を振り払い、逃げるように距離を取る。と、ぐらりと体が傾いた。なんとか気を張って意識を繋ぎ、リニアレイを暴走させたイルもこんな状態だったのかと、ふと思う。なるほど、力加減は覚えるものだ。

少女は追ってはこなかった。身じろぎもせずじつと空を見上げている。

その先でなにが起こっているのか、キョウコにはわかっていた。手刀に纏った冷氣は少女の熱にすっかり相殺されてしまったが、キョウコの手の内に留まらなかった、正確には留めきれずに、解き放たれた力が幾分かある。その余剰エネルギーはじきに上層大気に拡散し、この星の熱を奪うだろう。

本当にこんなことをしてなにになるのか、いまになつてうしろめたい気持ち湧き上がる。だが力を使い果たしたキョウコには、これ以上、なにをどうすることもできなかった。あとは少女の裁定を待つだけだ——それなのに、少女はただただ空を見上げて動かない。

茫然自失といった体ではない。少女は冷えた夜空になにか真剣な眼差しを向け続けている。怪訝に思ったキョウコは気怠い体を起こすと、少女の視線をようやく辿る。

そして見た。爆発的に広がっていく、己が撒いた冷たい力と、それをすっかり包んで封じ込める、薄青色に輝く光のラインを。

あれはたぶん、とキョウコは出し抜けに思いつく、シルドだ、それも内向きの。ありえるのか、あんなに大規模なものを、任意座標に展開できるというのか。

紡錘形をした青い輝線が、やがて縮みながら球状になると、少女は両手を前に出して手のひらを重ねた器を作る。それを機に、輝線は閉じ込めた力を圧縮しながら急速に収縮、またたく間に数センチほどの光の球に、そして手のひらに収まったその眩い光球を、少女はゆっくりと抱き締める。胸の奥に融けゆく光——喰った、とキョウコは思った。

ほんの少しの静寂のあと、今度は少女の背中のウイングスラストが青く輝く——そこで、ついにキョウコは、くらりときた。意図せず急激に高度が下がる。慌てた様子の少女が手を伸ばしてくる。

スグリは、放っておくと地面まで落ちていきそうな女性に駆け寄って、両手で彼女の左手首を掴まえた。

細身とはいえ、大人の女性の体重を支えるのはらくではなかった。いっしょになって高度を下げたりはしないものの、ふとした拍子に手を離してしまいそうだし、突っ張った肩や肘も痛い。莫大なGや空気抵抗に身を晒しながら片手でライフルを振り回す、そんな力をいま発揮するのははばかられた。人間一人の重みを支えようというのだ。たやすくはないのが、あたりまえだ。

「けっきよく私が、一番面倒な人間」

すっかり力の抜けた腕をスグリに掴まれた、宙ぶらりんの女性のつぶやきだった。

「え？」

「あのままこの星が寒くなったら」女性は見えない宇宙船を見上げていた。「少しは後悔したかしらって、ね」

「……ううん？ たしかに冬にはずいぶん早いね」

「そう」

女性はほんの少し微笑んだようだった。

「そうだよ。あんなことしなくなつて、このあたりにも雪が降るよ。一面に積もつて真っ白になつた景色を見たら、きつとおどろく」勢いづいたスグリは饒舌になつた。「あ、でもそうなるまえの森とか川も、見てほしいかな。春からきれいな花がたくさん咲いてるし、いまなら食べられる実をつけた木も多いよ」

説明するうち自分の気持ち盛りが上がる。しばらくぶりに森を散策したくなってくる。

「豊かな星ね」

目を伏せてあいづちを打ってから、もう一度顔を上げた女性は、スグリの目を見て、こんなことを言つた。

「あなた、私に怒らないの」

頭の中でうっかりお勧め景観のリストアップなどを始めていたスグリも、女性の真剣な眼差しと声色に気づく。気を取り直して彼女の瞳を見返す。

「最後のは、ちよつとびつくりしたけど」

「防げたからお咎めなし、で済ませるようなことでは、なかったでしょう」

「そうかも。……だつたら、あとでちゃんと仲直りしよう。わたしだけじゃなくて、君たちみんなと、この星の街のみんなとで。わたしは、その話をするために、君たちの船を訪ねたんだ」

「みんな、ねえ」煮え切らない表情で、女性。「むずかしいわね、正直。たぶん、あなたの

思い通りにはいかない。素敵な考えではあるけど」

「そう思ってくれるなら、きつと叶うよ」

女性、実に複雑な表情を浮かべた。

いふなればそれは、あきらめを含んだ寂しい笑いだった。なにか困らせるようなことを言ったろうかとスグリは考え込みかけたが、困るというなら、この自分が宇宙船に近づくことこそが、そうだろう。彼女がそれをまだ手放しで喜ぶことはできないであろう心情は、まあ、わからなくはない、そのように納得した。

それでも彼女は、認めてくれたのだ。素敵な考えだと言ってくれた。

「……私は、少し疲れた」と女性。「あなたにあとを任せても構わないかしら」

スグリは努めて明るくうなずいた。

「もちろん」

「それじゃあ、お願いするわ。いつてらっしゃい」

女性はいいにスグリの手を振りほどく。そのまま背中から落ちていく。突然だったのでスグリは反射的に、もう一度彼女の手を取ろうとしかけたが、思い止まった。

——ずるり。スグリの視線の先、なにもない空間にやおら二本の人間の腕が飛び出した。スグリのかわりにその腕が、落ちる女性を受け止める。

見られているという感覚がスグリを包んでいた。しかしふしぎと以前ほどの不快感はない。スグリは意を決して声を掛ける。「久しぶり」

虚空から腕だけを生やした、その何者かが纏っていた真つ黒なボールが剥がれ落ちて、月の下に全身像があらわになった。目に鮮やかな橙色の髪。たっぷり着こんで暑そうにしていた、最初に出会ったときのままの格好。爆弾を投げつけ、シャボン玉のような大規模ビーム球を操ったあの娘がそこにいた。スグリは、イルが彼女のことを、サキ、と呼んだのを覚えていた。

「お久しぶりですー」

サキは間延びした口調でそう返すが、顔にはどこかばつが悪そうな表情が浮かんでいる。スグリとサキは互いに敵として戦った間柄だし、サキはいまのいままで、その戦いの最中に姿を眩ませたきりだった。ぎくしゃくしてしまうのは当然だろうとスグリには思え、同時にサキがそんな当然の感情を滲ませていることを嬉しくも思うのだった。いまのサキからは、敵意はまるで感じられない。

スグリはサキの腕に収まった女性に目をやった。わずかなあいだに彼女は眠ってしまったようだった。

「大丈夫かな？」ふわりとサキに高度をあわせて、スグリ。

サキは女性を背中におぶって、「大丈夫だと思います。少し休めば」

「そう、それならよかった」

沈黙。ばつが悪いのはスグリも同じだった。

互いに所在なくさまよわせた視線が、ふとした拍子に偶然絡んで、二人はどちらからとも

なく、はにかむように笑いあう。

「きみは」スグリは思いきって切り出した。「どんな命令を受けてるの」

サキに戦うつもりがないのは明らかだったが、スグリと宇宙船の人たちとの関係はまだまだ繊細で、邪魔をされなければそれでよい、というわけにはいかない。スグリとしては、もし自分が地上を留守にしているあいだに、サキたちがなにかするつもりでいるなら、その活動の内容を聞いておかないわけにはいかなかった。だが、

「なにも」

サキは笑ってそう言うのだ。

どうして彼女たちはみんな、こんなに寂しい笑い方をするのだろうか。

「勝手にしろ、とは言われました」サキは続ける。「といってもですね、しばらく船には帰れないですし、偉い人に嫌われるようなこともできないので、あなたのお手伝いをするのは、無理なんですけれども」

「帰れないって」

「たくさん機械が出てるので」

「攻撃されるの」

「いろいろあるんですよ。人が乗ってない機械ですから、融通が効かないと言いますか」
「そっか……」

もちろんそう言われたところで、なぜサキまでもが機械たちに狙われるのか、確信にいた

ることはスグリにはできない。しかし、そう、彼女らにもいろいろある、というわけだ。サキに道案内を頼むことはできそうにない。

「それじゃあ……ね」サキの顔をうかがいながら、スグリ。「ひとつお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「そう。船を見えるように、できないかな」

「あれっ」意外だ、という驚きの声をサキはあげる。「見えてなかったんですか」

「あはは、そうじゃなくって。うーん、なんとなくは、わかるんだけど」

どこにあるかわからない場所を目指せるわけがない、もちろんいまのスグリは宇宙船の存在を感じる事ができる。現状のままでも乗り込むことは十分に可能だ。姿を隠したままのサキの接近にも、薄々感づいていたくらいだから、それは間違いない。

「でも、」とスグリ。「せっかくだから、きみに頼みたくなって。——わたしを助けてくれないかな」

サキは一瞬きよとん、としたが、すぐにスグリの心の機微を感じ取った様子で、明るい笑みを浮かべた。

「ははあ。へんなことにこだわりますねえ」

「むう、笑わなくなつてさあ」スグリは膨れっ面になる。「……それで、どうかな」

「いいですよ」

「怒られない？」

「だって隠しきれないっぽいですし、それなら私にとつても無駄な負担ですから。もしあなたが、本当は全然見えてなかったとしたら、怒られちゃいますけど。——はい、どうぞ」

サキは少し顎を上げて、スグリの背後の空を目で示した。もうそれができたのか、スグリモサキに背を向けて、彼女の視線を辿っていく。

「どうですか」サキの声が言っている。「もうよく見えるでしょう」

しかし背中越しに話しかけるサキの気配が、徐々に希薄になっていくのにスグりは気づいた。この感じにも覚えがある。

「ほんとに見えてました？ ちゃんと思ったとおりの場所でしたか？」

サキの気配はいまにも消え入りそうだった。スグりは少しだけしんみりとした気分になったが、ふと思いついて肩越しにサキを振り返ると、いたずらな笑みを作って、しれつと言つてやった。

「どうだったかな」

「……まう!？」

サキとその背に負われた女性は、いまいち締まらない叫びを残して、深い闇のとばりへと消えた。

かつてこの宇宙船にヴォリスという男がいた。それがいったいどれくらい昔のことだか、過ぎ去った月日を数えることはシフにもできない。ヴォリスが生きた証は船内のいずれかのコンピューターが記録しているはずだが、シフはヴォリスのパースナルデータを閲覧したいわけでもなかった。どうしていまになってあの男のことを思い出したのか、シフにも謎だった。

シフが乗り込んだ巨大ロボットは、もういつでも動かせる状態に仕上がっていた。シフはロボットの操縦室に、宇宙船統制室の環境を一部再現して、普段どおりに周囲環境をモニタしている。

あの銀髪の少女が近づいている。

クロークが剥がれ落ちたいま、船の防衛システムは自身の機能で直接敵を補足し、対抗すべく活発に働いている。だがそのことへのシフの関心は薄い。敵はもはや無人機でどうこうできる相手ではなくなっていると、シフは思っていて、だからダイナミックミッションプランナーが提示してくるミッションプランをいちいち精査したりしなかった。無駄なことはするな、と指示することさえも、なかった。これから来るは決戦である。そんな無人機たちを温存する必要を感じなかったのだ。また敵は、そうやって出撃した大量の迎撃機たちとごていねいにも真つ正面から交戦を続けており、これなら疲弊させることくらいはできるかもしれないな、といったかシフにも若干の期待が生まれていた。シフは作戦システムらに口を挟まず、徹底的に好きにやらせた。

で、ぼんやり出番を待つあいだ、不意に脳裏に浮かんだのがヴォリスの顔だ。作戦システムに直接的な裁量を下す必要がいまないとはいえ、さして親しかったわけでもない、もう死んだ人間のことに思いをめぐらせて、なんになるのか——しかしあの男の、まっすぐな意志に満ちたいましい目が、シフの心にあぶりだした画のように思い返されて、消えないのだ。

ヴォリスは技術者仲間ではなかった。彼は武力によつて宇宙船を外敵から守る戦闘要員だった。戦闘区での序列は比較的高く、多くの部下を抱えているようだったが、彼自身もさまざまな戦闘メカを操縦する戦士だった。

孤独を愛し、己の知識を深めることだけを生き甲斐とするシフと、このヴォリスという男のつながりは、ある戦闘メカに対する不満をヴォリスが訴えたことから始まった。「サステナのオーバードライブ中にビーム砲を使うと、まれに不可解な電力低下が起こる」モニタ越しのヴォリスは、当時主力だった宙間戦闘機が抱える欠陥を主張した。「異常は平均で二秒ほど続く——俺たちはこういう操作はけっこうやっちゃうんだ。といつてもサステナの負荷がレッドをまたいだわけじゃないからな。もしブースト中にビーム撃つのがまずいんなら、隠さずにそう言ってもらいたい。すぐには直せなくてもな、学者さんが安全値を設定してくれさえすれば、運用の仕方でとりあえずはなんとかできる。上の連中、俺たちの愚痴なんかじゃ、戦術を見直す材料には足りん、ときててね」

こいつはおもしろい、とシフは思った。

問題のメカは、複数の開発チームが競争試作を行ったなかから採択された新型機だ。しかも機種更新、つまり旧式の機体を置きかえるかたちで運用が開始された。本当に欠陥があったとしても、認めたがらない者は多い。暴露したがる者も同程度いようが。

ともかくヴォリスが隠すな、と言ったのはそのあたりの事情を受けてのことだが、この程度の問題、組織間での足の引つ張りあいなどは、さしてめずらしいことではない。シフがおもしろいと感じたのはそこではない。

シフは技術者同士の張り合いも、欠陥機を採用した権力者たちの威信の行方でもよかった。なによりそう言い切るシフを咎められる者が、いなかった。シフは他人に個人的な悪意を持って接することは、そうなかったのだが、しかしだれもがシフの機嫌を損ねることをおそれていた。

ヴォリスも、組織の派閥争いに関心が薄い点では同じである。仲間とともに前線に身を置くヴォリスとしては、なんであれ自分たちが乗り込むメカの異常を解消することが一番なのだ。しかしまっとうな機関や組織に情報をリークしたところで事実揉み消されるのがおちだ。……もし、シフという個人の理解を得ることができたならば、ヴォリスがそのような考えにいたったのは自然な成り行きだった。

とはいえヴォリスはシフに支払う対価を持たなかったし、当時のシフは人間嫌いで通る「孤独な天才」。勝ち目の薄い賭けに違いなかったが、そんなヴォリスの無謀をこそ、シフ

はおもしろいと感じた。

自分が一種超法規的なオーバードロードとして扱われており、それゆえ好き勝手ができていることをシフは自覚していた。だがシフと違ってヴォリスは一介の組織人だ。――下位の構成員が、おそらくは独断で秘密裏に、上位レイヤの意志を無視してこのような行動に出ることは、一步間違えれば組織の破滅にも繋がる。もちろんこの男、ヴォリスの立場も危うい――彼がそれすら覚悟しているらしいことが、シフには可笑しかった。

もし自分が介入することで、本当にいまの体制が崩れてしまったとしたら。……どうせ、すぐに新しい集団が立つことだろう。

シフはヴォリスに手を貸すことにした。

開発チームに件のメカの設計データを渡せと迫ることはできない。シフは一匹狼であることを黙認されているだけで、発言力のあるリーダーではなかったからだ。盗むしかなかった。シフは「グランブルー」と呼ばれる宇宙船の中枢掌握体――古くからある、船の基幹機能をつかさどる自律エージェントのようなものと認識されていたが、とにかく高性能な「中央コンピュータ」だ――に人為的にアクセスする手法を唯一確立していて、それを介して開発チームのデータベースから設計データをかすめ取った。それから、ヴォリスが寄越した当該メカのセルフテストや各種機動評価装置の情報を参考に問題の原因をあっさり突き止めると、ドックで生産中の機体のデータを、自ら再設計した改良型のものにすり変える、ということまでやってしまった。実際に数機の改良型が組み上がるそのときまで、二人の暴挙はだれに

も知られることはなかった。

シフもヴォリスも、オリジナル機が抱えていた欠陥を暴露したいという気はなかったが、ヴォリスは上層部に自らの行動を認めさせるためにその秘密を有効利用した。上層部にとつてヴォリスの行動は決しておもしろいものではなかったが、一方でメカの欠陥が解消されるのは彼らにとつても望むところで、しかもそれが秘密裏に行えるというなら願ってもないことだ。改良型は整備も運用法もほとんどオリジナルと変わらず、導入に掛かるコストも大差ない。結果、彼らは利を取った。

戦闘による損失や訓練時の事故などで機が失われるたび、予備機として控えていた改良型がこつそり投入された。機の損失がなくとも、欠陥のあるオリジナル機は点検や調整といったもつともらしい理由でドックに入れられ、その穴は改良型が埋めた。戦闘区上層部はもちろんメカの開発チームとも繋がっていて、事態を知らされた開発チームは開き直ってシフから再設計データを譲り受けると、自分たちの作品はさまはじめからそういう設計であつたかのようにふるまい、そこへさらなる改良をくわえるなどしていったのだつた。

ヴォリスはその後さまざまな訓練や実戦のデータをかけてに送りつけてきた。戦闘区上層部はこの一件で、ヴォリスを、シフとのコネクションとして確立しようとしているようだった。シフの目から見ればまだメカを強化化できるのではないか、という受け身な期待を彼らはしていたのだ。こたえてやる義理はなかったが、自分の研究のあいま、シフは気まぐれにいくつか指示を出してやった。するとそれはいつしか戦果としてあらわれた。また、ときに

はシフの意見にヴォリスが個人的な反論をしてくることもあった。技術者の理想と現場の見地との相異というやつで、シフはそういった溝も考慮したプランを練っているつもりでいたが、やはり限界はある、シフは戦場に身をおく戦士ではなかった。で、ヴォリスの現場見地に合わせた方がよい効果をあげることもたしかにあつて、これもシフにはおもしろかった。

シフはまるでゲーム感覚でヴォリスにつきあつた。それに対してヴォリスが腹を立てることもなかった。事務的な間柄だ。シフにとってヴォリスは決して友人ではなかったし、そのように呼びならわされる仲になりたいなどとも思わなかった。

だがシフは、自分のまわりにだれも近づけたくないと思つてゐる、わけでもなかった。人間は一人では生きていけないと、シフは思つてゐた。一人で生きていけるほどの能力がシフにはなく、真に一人になつたシフを生かす機能が、宇宙船にはまだなかった。

シフはヴォリスという個人ではなく、彼と自分を繋ぐ関係を、好ましく思うようになった。わずらわしい人間感情が介在しない、互いの能力を公然と利用しあうスマートな関係。自分が関わる人間のすべてとそんな関係を築けたらと、シフは本気で思つてゐた。

その点ヴォリスとの関係は理想に近い。ヴォリスとつきあうのはらくだった。ヴォリスと情報をやりとりするのに、ヴォリスという個人を意識する必要はなかったのだ——ある一定の期間はある。

シフとヴォリスが直接会つて話をしたのは、ただの一度きりだった。

*

「なんだおまえまた来たのか」

シフはドアモニタに見知った顔を認めてそう言った。仕事の相談は多くとも、部屋まで訪ねてくる人物となるとまれだ。最近知り合ったキョウコという女性は、そういう珍しい人間のうちの一人だった。

キョウコはドアモニタ用のカメラをちらりと見て、無言で開ける、と訴える。このドア監視システムでは双方向通話が可能なのだが。

「おじやします」入室したキョウコが口を開いた。

「なにか用が？」キョウコに背を向け、デスクに着いて私物のパーソナルコンピュータを眺めたまま、シフ。

「統制室にいらつしやらなかったの」

「きようは呼ばれちゃいないからな。こたえになつてないぜ、診察の予定はなかったらう」

「すみません。でもこつちではほかに居場所がなくて」

「部屋で寝てればいいだろうが」

「はやく先生のこと説得しろって、うるさく言ってくるし」

「あの口ひげか、熱心なことだな。しかしいまのおまえには無理だよ。こちらで対応しようにも、技術も施術法も、改良には時間が掛かる。改造手術だぜ。あの口ひげは事の大きさが

わかつちやいない」

シフがいらだたしげに吐き捨てると、キョウコはめずらしくおずおずとした口調で、あの、と言った。

「なんだ」とシフ。

「それ……」

背を向けたままでは、それ、がなにかわからないので、シフは振り返る。振り返ったシフの口元をキョウコは指差して、そこにある物体の名称をそのままつぶやいた。

「歯ブラシ」

「寝起きだからな」

シフはさりとらうなずいた。さすがに磨きながら会話していたわけではないものの、ずつとブラシを唾えたまま、もごもご言っていたのだ。

「だらしない」

「うるさいな」

「なんでこんなところで」

「馴染み客を出迎えにね」

シフは立った。広い部屋ではないのでデスクと洗面台はそれほど離れていない。「馴染むほど寄せてもらってはないはずですが」そう言うキョウコの声もよく聞こえる。

「おまえじゃあないさ」

口をゆすいで戻ったシフはデスクのパーソナルコンピュータを目で指した。

「ビホルダーだよ」

はあまたですか、とキョウコはすげない表情。

ビホルダーは、中央コンピュータ・グランブルーが放つ「目」だ。グランブルーはあらゆるコンピュータネットワークと繋がっているながらも独立した一個のシステムであり、他のいかなるコンピュータからの干渉も受け付けず、自らも干渉せず、自律稼働を続けている。だがグランブルーはときおり自分以外の、人間たちが使用しているコンピュータがなにをやっているのか、覗きにくることがある。ビホルダーを使って。

ビホルダーがなにを読み取ったのか、ということは調べればわかる。だが奇妙なことに、読まれたデータがコンピュータネットワークを通じてグランブルーへ送信された例はない。ビホルダーが読んだデータはその時点で、同時に、グランブルーにも見えているのだろう、というのが人間の認識だった。技術者たちでさえも、そういう漠然とした認識で良しとしている。生まれたときからそういうことになっているのだ。大切な研究データが、ビホルダーに見られたためにほかの人間の手に渡る、ということもありえない——ごく最近シフはその前提を覆したが、それを知る者はまだいない——から、それでよかった。

「あれって、先生でも防げないんですか」

「たぶんな。本気で試したことはないが……」

それでも無理だろうな、とシフは思う。グランブルーは、シフにとってもなにか得体の知

れないものだった。

「どうして」どうして試してみないのか、とキョウコ。

「どうして防ぎたがる」とシフ。「害はないんだから好きにさせておけばいいんだ。その方がおもしろい」

「おもしろい？」

「ビホルダーが持つていくデータは中央コンピュータの関心事だ。やつがなにを考えているのか、それで探れる——なんだ、その顔」

「いえ……。たしかにグランブルーは、自律エージェントのようなのだとよく聞きますが、でも」

「関心事、といったのが引つ掛かったか。いいやあれは自己の興味関心で動いているよ。自律エージェントというよりは、すでに十分学習を重ねた人工知能か……もつと複雑な意識体かもしれない」

「先生の個人的な見解ですね。かんたんに喋ってしまつていいのかしら」

「構わない。だれも相手にしないだろう」

「そうでもないと思いますよ。だつてグランブルーが居住区でなんて呼ばれているか……知つてますか、守り神、ですよ」

「知らなくはないさ。でもこちらではそう耳にしない。俺が言ったことも秘密にしておけ。笑われるぜ」

シフはデスクの脇を抜け、ハンガーラックに掛かった白のラボ・コートを取って羽織った。それを見て、どこへ行くのか、とキョウコ。

「買い物。せっかくだ、おまえも来い。荷を持たせてやる」デスクを指して、「そこにリストがある」

購入物のリストは手のひら大の紙を束ねた卓上メモに書きなぐつてある。デスクに寄つて、ちらとメモを覗き込んだキョウコは怪訝な顔つきになった。

「食べ物ばかり。意外だね。先生でも人を呼んだりするんですか」

「水とレーションでパーティか？ さぞ盛り上がるだろうな」

シフの言葉にキョウコはもう一度メモに目を落としてじっくり品目を確認し……その視線が、とつぜん逸れた。キョウコの目はパーソナルコンピュータのモニタに釘付けになる。緊張した面持ちに気づいたシフは、咄嗟に、「ビホルダーか？」しかし、こんな頻度で？

「あ、いえ。そう思ったんですが……私書が届いたんですね、これ。音かなにかで通知するようにしておけばいいのに」

「なんだ」拍子抜けする。「放っておけ、そんなもの」

「でも暗号強度すごいですよ。なにか大事なんじゃないや」

「……だれからだ」

「ええと——ヴォリス、ですか」

シフはため息。コンピュータには目もくれずにキョウコの後ろを通り過ぎる。

「出よう。メモは持つてこいよな」

ドアロックコントロールに手を掛けて待つ。メモを手にしたキョウコは小走りに寄つてきて、訊ねた。

「本当にいいんですか、あれ」

シフは肩をすくめる。

「いま一番聞きたくない名だ」

それから数日。

診察日だった。キョウコは指定の時刻に指定の場所、医療施設の一角に足を向け、シフを待った。

手術室のような部屋だ。広いが、寝台は中央にひとつしかない。周囲を生体モニタ用の機器が物々しく取り囲んでいる。まだキョウコは部屋のすみっこで長椅子に腰掛けているが、あれに寝かされるかと思うといまから憂鬱になる。

この定期的な診察は、「改造人間計画」推進者らの不満を紛らわせるための、形式的なものだった。診察でシフがまともにデータを取ったのは最初の一度きり。その一度でキョウコは、問題なし、と太鼓判を押されるはずだったのだ。だがシフは、だめだ、と言った。既存の技術ではキョウコの身体は変えられない、機器の改良が必要だ、と。そして改良した機器を操作して効果のほどを確認する、という名目で、診察は続いているのだった。ようするに、

どちらかといえばキョウコの身体ではなく機器側のテストなのだ。診察など名ばかりの「ふり」だけだ。

だが、見るかぎりシフが実際に機器に手をくわえた様子もないのである。

シフはこの自分への施術を先送りにしたがっている、キョウコはそう感じていた。きょういきなり腹を裂かれることはないだろう。……では、いつやられるのか。いつまで彼らを騙していられるのか。

そもそもどうして先生は作業を先延ばしたがるのだろうか。できない、と言って相手が聞かないなら、やってみせて、ほらやつぱりだめだった、というのがシフという男だ。もちろんその場合私の身は破滅だろうが、面倒な人間を手取り早く遠ざけるという目的のためなら先生は平気で失敗してみせるだろう。つまり、先生は私の身を案じているわけでは、決してない。先延ばしの原因、理由は、私にはない。

ではその理由はどこにあるのかとなると、わからない。自分は改造人間計画の中心にいる、そう聞かされているのに、計画を取り巻く人間たちの思惑がキョウコにはなにひとつ知れなかった。ここに一人でいるとどうも不安になる。診察は嫌いだ。

予定の時刻を過ぎてもシフはあらわれなかった。

統制室はしんと沈まりかえっていた。戦闘服を着込んだ大男がぞろぞろと入室してきたからだ。

戦闘区から、形ばかりの護衛を連れた役人が、船の設備責任者になにかしらの相談にやってくるということがある。そういった役人は戦闘とは無縁の人々を怯えさせないよう、身なりにもそれなりの気をつかうものだ。だがこの男らは真つ黒な屋内戦闘服のアタツチメントにごてごてと装備をぶら下げ、手には小銃を抱いて、威嚇するような目つきで周囲を睨んでいる。おとなしくしている、という意味表示だ。

居並ぶコンソールに向かっていたオペレーター、意見交換が白熱して通路で掴み合っていた技術者、配給分では足りないからと山盛りのパンとミルクを抱えて戻ってきた男、デスクで船をこいでいた寝不足の女――大勢が固唾を飲んで見守るなか、十人ほどのその戦闘集団から、リーダー格の男が歩み出る。彼だけは仕立てのよいスーツ姿だった。いくらか小柄で、立派な口ひげをたくわえた初老の男だ。彼も昔は戦士だったのだろう、衰えたいまも背は曲がってはいない。

戦闘集団とその「口ひげ」の前に、顔馴染みの技術者と立ち話をしていた、シフがいた。周囲の視線に、またあいつが問題を起こしたのか、という嫌忌^{けんき}めいたものが混じる。シフはやれやれと口ひげに向かい合った。

口ひげが言う。「ごきげんいかがですか、ドクター」

「たつたいま急落した」とシフ。「今年のワーストだな」

「それはそれは。しかしあなたはいつも難しい顔をされておられる」

「鼠の死骸を見たときくらい、と言えは少しは伝わるかな。真上にダクトが口を開けてたよ。」

——なににきた。納品にはまだ掛かるぜ」

「その件ではずいぶんお手をわずらわせてしまったようで……」口ひげはニタリと笑った。

「これ以上、ドクターの貴重なお時間をいただくわけにはいきませんまい」

「ほう」

「少々粗暴なやりかたになってしまふのが残念ですが」

「なにをやるのかな」

「おとなしくしていただければ、なにも」

口ひげはスーツの懷に手をつ込み、取り出した拳銃をシフに向けた。予想していた通りだったので、シフに驚きはなかったが、自分に銃口が向いているというのはなかなか恐ろしいものではあった。

「ドクターと、室長どの。是非いつしよに来ていただきたい。部屋をご用意しておりますので」

すぐとなりでぐくりと息を飲む気配。先ほどまでシフと立ち話をしていた男だ。この男が、室長だった。口ひげの狙いは自分よりもむしろこの室長だろうな、とシフは思う。シフは口ひげたちの目的に見当がついていた。

こいつらは技術者になりかわって船を統治しようとしている。その手始めに統制室を制圧にきたのだ。自分はここでは腫れ物扱いだが、実効的な権力を握っているわけではない。政治的な価値はこの室長の方がずっと高い。自分のことは、なにをしでかすかわからないから

とりあえず拘束しておきたい、といったところだろう。

シフは、口ひげが持つ銃にざわざわとしたプレッシャーを感じながらも、まったくの平静をよそおって言った。「嫌だと言ったら？」

「お決まりの文句ですな」

「あんまり展開がベタなんで、つい、ね」

「左様で」

銃声。

さしものシフも肝を冷やす。

撃たれたのはシフではなかった。室長が倒れる。横からもたれかかってくる室長の体、シフはあとずさり、足元にうつぶせて動かない室長を見下ろす。床に血が広がる。一斉に悲鳴が上がり、大男たちが騒ぐな、と怒鳴る。

「おわかりいただけましたかな」と口ひげ。

シフは動悸をおちつける。たしかに驚いた。だが室長の死は、自分が銃口を向けられるプレッシャーと比べればずっと軽かった。拳銃弾一発で、あつけないものだな、などと思う。撃たれたひょうしに意識が飛んだのだろう。同じ状況で、もう少し苦しい死もあつたに違いない。彼は運がよかった。

シフはゆらりと背を正すと、口ひげを横目に、不敵に笑う。

「手が早いんだな。殺すとは思ってなかった。やつは便利に使えたらうに」

「われわれは本気だとお伝えしたかった」

「しかし俺のことまでは撃てまい」

「……ドクターはこんなときでも冷静でおられる」

あまりに多くのライフシステムにシフが手を入れているからだ。シフの手による装置は本来にいたるところで利用されている。すでにあった装置の、制御システムの改良にもシフは積極的だった。重要なコンピュータ類も例外ではない。おかげで人々の生活はずいぶん豊かなものになったが——それらの装置に、シフがなにか仕掛けをしていないとは限らないのである。人々はその懸念があるがために、シフの勝手気ままなふるまいを認めざるをえなかったのだ。シフは日頃から自らの言動によって、人々のそういった疑惑を深めるよう誘導してもいた。

「ですが足を撃ち抜く、くらいのことはさせていただくやもわかりませんぞ」

「ふむ……」シフは室長の遺体に意味深に目を落とし、「それはあまり考えたくないな」

その様子に口ひげが満足そうな笑みを浮かべる。

「ドクターは損得勘定ができるお方だ。私はよく存じあげている——どうぞ、こちらへ」

シフは、天井を見上げるほどの大仰なため息をついてみせ、言った。

「嫌だね。冗談じゃない」

言い終わるやいなや、室の明かりのすべてが消え落ちた。ぼんやりと薄らんでいくタイプの照明はない。大スクリーンが、レーザーディスプレイが、すべてのコンソールディスプレイ

イが、まったく同時に沈黙する。電力の途絶などぜったいに起こりえない統制室に、突如おとずれる完全な闇。

だれもなにも行動を起こせないまま一秒が過ぎた。それは、暗くなった、とみながようやく認識し、周囲に目を凝らそうしたときだった。今度は眩い閃光と、気を失うほどの爆音が部屋を包む。音響閃光弾の炸裂、人々のこれへの反応は早かった。あちこちでうめき声と、怒号があがる。

口ひげの声が喚き立てる。くそつたれだの、逃がすなだの。しかしだれの耳もやられていた。唯一筋書きを知っていたシフだけが、暗闇のなかで身を屈め、自分の目と耳を塞いで保護していた。それでも足元がおぼつかないくらいだ。

とにかくこの場から離れなければならない。シフはふと、奥の連絡口からとなりのミーティングルームに抜けようかと思い――結局は当初の予定通りに直接廊下へと向かう。もし別グループが待ち伏せているとすれば、この騒ぎで動きがないのはおかしい。持ち場を離れて突入してやることはないにせよ、室の様子をうかがう、くらいのことはしたくなるだろう、閃光弾の炸裂と同時に、室のドアは開け放たれているのだから。

大男らとすれ違いざま彼らの様子を見る。感覚がまともそうなものはいなかった。いつてパニックを起こしてもない。自分たちがどのような攻撃を受けたのか彼らはわかっているのだ。いまは完全になにも見えていないはずだが、視力は徐々に回復していく。おぼろげなままの視界でも行動を開始できるよう、彼らは集中しているのだった。いちおう本物だな、

とシフは鼻を鳴らす。殺されはしない、というだけでは安心できない。身体能力で勝ち目はない。手を講じ続けねば逃げきれないだろう。

廊下へ飛び出す。待ち伏せはなかった。スライド式のドアが危ういほど素早く閉まり、自動ロック。もう内外どちらからも開けられない。シフは駆け足気味にドアから離れ、体を低く、両手で耳を抑える。背後に爆音。音響閃光弾、二発目。

シフが統制室にほどこしておいた仕掛けは、ここまでがワンセット、ワンボタン。スイッチは履いている靴のかかと付近に。倒れる室長を避けたとき操作した。時限式だ。

もしあそこでまだ爆発が起きるとすれば、それは内側からドアが吹き飛ぶときだろう。彼らはそうするための装備を持っているに違いなかった。シフは走力を増す。

ほどなくあちこちで銃声があがりはじめた。散発的なものではない、どうも銃撃戦をやっている感じだ。しかし口ひげたちにしては、展開が早すぎる。

統制室のドアに待ち伏せはなかったが、別働隊というのはやはりいたのだ。で、自分が逃げたことで彼らは慌てた、シフはくつくつと腹で笑う。本当に設備に仕掛けをしていることを見せつけてやったのだからな。おおかたここの保安員連中に騒ぎを聞きつけられて、やむなく交戦、といったところだろう。

とはいえ戦闘区の荒くれどもに対して中央の保安員では分が悪い、ということは想像にかたくない。また、統制室のものほどあからさまな仕掛けが、あちらこちらにあるわけでもない。あの室の仕掛けは、今回の口ひげたちの行動に直接備えて作ったものだ。ほかの場所に

も手を入れるつもりではいたが、間に合わなかった。もう少し時期を引き伸ばせるつもりでいたのだ。だが口ひげたちは存外に、手が早かった。正直なところ、きょうあの室で彼らの第一撃を迎え撃てたのはさいわいだった。ほかに使えそうな仕掛けといえば、廊下のいたるところに設置されている防災隔壁が関の山だ。

だが口ひげたちへの、より直接的な報復手段はしつかり準備ができていた。このときのために用意した、屋内対人戦闘用のロボットがそうだ。自信作だった。口ひげたちに存在を知られてはならない、という事情のためおおよけのドックは使えず、研究棟にある自分の専用工房でちまちまと組み立てていたものだ。それでもすでに三七機が完成しており、うち三四機が即時戦線投入可能。これに火を入れれば、あとはどこへなりと籠城しているうちに事態は収まるだろう。

敵と戦うのはこのロボットの役目であって、シフの戦いは、このロボットになんとかして命令を下すことだった。というのも、先ほどから手元のリモートスイッチが機能しないのである。

明らかに電波妨害を受けている。省電力携帯機器の通信出力では突破できない。軽度のものでからじきにだれかが対処するだろうが、それを待っている時間的猶予もシフにはない。だから、走っているわけだ。ロボットに起動命令を出せる場所へ。

なにせ秘密のロボットだから、発令所として使える施設は少ない。具体的には、組み立てにも使っている専用工房と、自室、それから統制室の三個所だ……が、実は「統制室」は、

ふたつある。

これは秘密というわけではなく、だれでも知っている事実だ。現用の統制室とほぼ同等の設備機能を持った部屋がもう一箇所、予備として設けられている、というだけの話である。今日明日で統制室の業務すべてをそちらに移すことはできないが、ロボットの運用だけならいまずぐ、完全に行える。

発令所として使え、ある程度の船内設備制御能力もある、籠城にはうってつけの場所といえた。そこに潜んでいることが知られれば突入されない保証はないが、そうさせないために護衛のロボットを呼び寄せればよいのだ。それに、いまとなつては自室や工房には敵の手がまわっていると考えるのが自然だった。目指すべきは、この予備統制室以外にない。

騒がしい場所は迂回しているものの、徐々に激しさを増す銃撃戦の痕跡はあちこちに見えとれた。血と、伏して動かない人間たち。

シフは目の前に転がる遺体を飛んでまたぐと、ふと思い立って振り返った。体格のよいその男の遺体は、ここではめずらしくないラボ・コートを身につけている。うつぶせの遺体にシフはおもむろに手を伸ばす。苦勞してひっくり返してやると、思ったとおり、彼は護身用の拳銃を握りしめたまま絶命していた。こんなものをちらつかせたばかりに非戦闘員の身でありながら撃たれたのだ。だがこの男と違い、シフは明確に狙われていた。

シフは暴発させないよう注意して拳銃を拝借する。男の手はまだわずかに暖かった。

暗闇に赤いひとつ眼が揺れる。四本の主脚を奇妙なほど滑らかに運び、パイプとダクトの足場を駆け抜けていく。ときおり頭を振っては生体反応を探り、目星をつけた集団に清々と近づく。頭上から観察し、やがて関心を失い、また頭を降って、次の生体の集団へ。

「やってくれたな小僧」

硝煙を漂わせる銃口を構え直して、苦々しく言ったのは口ひげだった。

「気にいっちゃあもらえなかったか。苦勞して準備したんだけど」

嘲笑するシフの足元に一発分の弾痕が残っている。これがシフを立ち止まらせた。「うまいこと撃つものだ」とシフは床の弾痕をつまさきで蹴り、廊下の壁に寄り掛かる。

息が上がっていた。身体能力では勝ち目はない——といって、口ひげをリーダーとする集団に足の速さで負けたわけではなかったが。廊下の四つ角で、運悪く鉢合わせてしまったのだ。即、威嚇射撃、である。

落ち着いて口ひげを見やれば、取り巻きの大男は半分の数に減っており、残るものもみな深い疲労を滲ませていた。彼らもここに来るまでに、保安員らと交戦したのだろう。

「仕事に熱が入りすぎだな。無理をするなよご老体」

シフ自身も荒い息を落ち着けようと努力しながら、言う。

こんなに走ったのははじめてかもしれない。目指す予備統制室は、飛び出した現用統制室からは距離がある。不測の事態に備えるバックアップが、その事態にいつしよくたに巻き込

まれてしまつては意味がないから。

危機的状況にもかかわらずシフの思考は冴え渡つていた。こういったシチュエーションに慣れているわけでは決してないのだが、冷静でなければ切り抜けられないことはわかりきっている。この場を切り抜ける、そのための手はまだ残されているのだ。それに集中しなければならぬ……そう、ここは四つ角、シフと口ひげたちは十字路を挟んで向かい合っている。逃がれるために残された数少ない仕掛け、防災隔壁が使える。

「そう思われるのなら」と口ひげは口調を戻して言った。「ドクターにもどうか助力を願いたいものですな」

隔壁は、十字路に繋がる四本の道それぞれが装備している。口ひげたちをおびきよせ、同時に四枚の隔壁を降ろし、十字路のど真ん中に彼らを閉じ込めてしまえば申し分ないのだが、さすがにそれは高望みというものだ。いま立っているこの道、自分の目の前に、一枚の壁を作ることに尽力すべきだろう、シフは考えながら軽口を飛ばす。

「助力とはな。まだ俺を生け捕るつもりでいるのか？　こちらは好きに撃てるんだぜ、足一本よりずっと広いのを、どこだつてさ」

べつたりと壁にもたれたシフは、技術者の遺体から持ち去った拳銃を、左手、口ひげたちから見える方に、だらだらとぶら下げている。

その拳銃に視線を走らせて、口ひげ。「失礼ながら、銃はそれほどかたんに扱えるものではありませんぞ。ドクターの早撃ちが私の胸を捉えるか、われわれの銃がドクターを死な

ない程度に痛めつけるか、どちらが早くて確実か、わからぬドクターではありますまい」

あたりまえだ、だから構えて見せちゃいけないんじゃないか——もつとも相手がそのような余裕を振り撒いてくれる方が、シフとしてもありがたい。

口ひげたちの言うように、シフにとくべつな射撃の腕はない。しかし手にした銃はまぎれもない本物で、まぐれ当たりでも命を奪いかねないものだ。またシフの余裕の態度に口ひげたちは、このやっかいな技術者はまだ腹に一物抱えているのではないかと疑わざるをえなかった。

シフがのらくらと時間稼ぎをやっているには理由があつた。隔壁を降ろすには、ラボ・コート¹の右ポケットに手をつ込んで、そこにある汎用の情報端末から、隔壁閉鎖のシグナルを飛ばさなければならぬのだ。この端末はだれもが手にできるごく一般的な装置であるが、ほかの技術者たちが持つものにそのような機能はない。プログラムはシフの即席オリジナル。どの区画のどの隔壁を降ろすか細かく設定できるが、とくに指定しなければ、シグナルの発信源、つまり端末を持つシフから最も近くにある隔壁がひとつ、降りる。いまはそれでよい。その場合の操作は実に単純で、端末を目で見なくても行える。たとえば、現状で突然ポケットに手をつ込んだとして……口ひげに動くな、と言われるころには、操作は完了しているだろう。

ではなにをためらうのかといえば、ひとつには、隔壁閉鎖シグナルが、危機管理システムに確実に受令されるという保証がないことがあげられる。まさにいまこの一帯には微弱な妨

害電波が飛び交っているのだ。

しかしいくらか思考をめぐらせたシフは、これについて問題ないと判断。

ここから遠い研究棟のロボット専用工房まで、直接に、極秘の命令を飛ばすことは、たしかにできなかった。しかし防災隔壁を降ろしてくれ、という叫びを受け取るアンテナはいたるところで聞き耳を立てているのだ。この手の緊急シグナルは、ほとんどの電波受信機器に受け入れられるようになっていく。シフの持つ情報端末がこのシグナルを発信できることは異常だが、発信されるシグナルそのものは、真に災害対策用として規格化された正規のものである。それこそ他人のポケットに入っている情報端末をリレーしてでも、危機管理システムの耳に届き、応急指揮コンピュータは直ちに隔壁閉鎖処理を履行するだろう……少なくともそう期待せねばこの場で完全に行き詰まってしまう。大丈夫だ、見込みは十分にある。ひよっとすると、すでにだれかが妨害電波を除去してしまっているかもしれない。

「さあ」と口ひげが焦れたように言う。「もうよいでしょうドクター。銃を置いて、こちらへいらしてください」

「おかしいことを言うな、追われているのは俺の方だと思っていたが。掴まえてみるよ。なにをためらう」

懸念すべき事項はもうひとつあった。この問題はきわめてシンプルだ、すなわち、隔壁閉鎖が完了するには少々時間が要する、ということである。

隔壁の開閉速度は五〇〇ミリメートル毎秒、自動扉としては高速だ。三メートルもない天

井から降ろされる耐火扉が、下床から三〇センチほどに迫り上がる扉受けとドッキングするまで、五秒もあれば事足りる。口ひげたちが慌てて駆け出したところで、閉じゆく隔壁の隙間を潜り抜けられるとは思えない——ただし、彼らが本当にその努力をした場合、挟み込み防止センサーが反応して隔壁の動きがストップするおそれがある。突発的な事態の変化に対する、口ひげたちの認識力、判断力、決断力、ようするに彼らの初動の迅速さ如何では、半端な閉じ具合で停止した隔壁に、這って抜けられる程度のゆとりが残されていないとも限らない。そうなったとき、どうするか。

撃つしかないだろうな、という冷めた思考。敵を殺すことに戸惑う理由は微塵もない。

ただ、とシフは思いとどまる、撃てば間違いなく反撃を受ける。そもそもこの場での目的は殺人ではなかった。それはあとでできるのだ。いまは隔壁を降ろすことが第一だ。できるだけ、安全かつ確実に。撃たずにすむに越したことはない。

シフは、敵の初動を遅らせるなにかを求めている。保安員でも通りかかってくればよいのだが、そこまでの運はないようだ。あるかないかもわからないシフの企みへの恐れも薄れ、口ひげは見るからに焦れてきている。時間稼ぎも限界だった。

こうなったら、敵の背後を指差して大声ではったりをかましてやろうか、などと思う。まったくなにもしないよりはましだろう。いいや、かえって自分の方に注意を向けてしまいうだろうか？

口ひげが意を決した様子で言う。

「あまりゆつくりとはしておれんです。指揮系統を回復しませんと……おお、そうだ、それもドクターにご助力ねがいましょうかな」

「なに？」

「どうか妙なまねはしないでください——おい、」

そう、口ひげがとなりの大男に目で指示を出し、シフが腹を決めて右手を持ち上げようとしたとき、がらがらと瓦礫の崩れるような激しい音が響いて、全員の動きが止まった。

音は口ひげたちの背後からした。遠い。長い直線の先がT字路になっていて、そこをどちらかに折れた先で、なにか異変があつたらしい。

「なにをした！」

われに返った口ひげが叫ぶよりも一瞬はやく、シフはポケットの上から端末のパネルスイッチを叩き込んでいる。

直後に叫び声と銃声、しかし口ひげのものではない。これも後方のT字路から。口ひげがびくりと身を震わせて振り返り、大男たちも小銃を構えて警戒する。間違いない、T字路で新たに銃撃戦がはじまったのだ。

その様を、シフは身を屈め、閉じゆく耐火扉の隙間から覗くようにしてうかがっている。口ひげが気づくが、あまりに遅い。シフは立ち、身をひるがえして走り出す。曲がり角で一度だけ振り返る。閉じた隔壁のために銃声と悲鳴はなお遠い。——いったいあそこでなにがあつたのだ？

シフは実戦の空気というものに長く身を晒した経験はない。自分は戦場を知らない、という自覚もある。それを差し引いても、一口に銃撃戦が起こった、といってしまうのは正確でない気がした。どうも、大勢がわめき散らしながら、恐怖に駆られてめちやくちやに銃を乱射している感じがしたのだ。訓練を積んだ戦闘員としては避けるべき行為だろう、しかしそれが、あそこで起こった。だから口ひげたちにもあれほどの動揺が生じたわけだ。ともかくにも危機は脱した。あの隔壁の向こうがどうなっているのかは、予備統制室でじっくりモニタすればよい。

予備統制室はほかの様々な施設とのアクセスが悪い。だれしも現用統制室のまわりを便利にしたいから、当然そうなる。単純に立地だけを見ても、予備室は宇宙船の構造的中心にやや寄りすぎている。コア・ナセルを擁する大空洞の下部、外縁に位置しているのだ。ライフスペースからは距離があり、日常的に利用するには適さない。

そんな予備統制室にシフはついにたどり着いた。念のために周囲を見回す。人気がない廊下は狭く、照明がセーブされているために薄暗い。シフは追手がないことを確認してから、ドアロックを解除、入室する。

先客がいた。

シフは目を疑った。室のほぼ中央、コンソールデスクの一脚からたつたいま立ちあがった、というふうな、一人分の影がたたずんでいるのだ。なんだあいつは、シフは金縛りにあったように硬直する。

しかし室の対人センサはシフに気づいた。高い天井から可変配光パネルライトがシフを照らす。それから、ライトはいまさら思い出したかのように、先に室にいたはずの先客の影にも、向けられた。

女の子だった。年端もいかぬ少女だ。金色の髪。白と黒と金縁のドレス。

女だから、幼いから、自分を殺す術を持たないとは、シフは考えなかった。しかもここ予備統制室は最終目的地なのだ。これ以降どこにも逃げ場はない。心拍数が上昇するのを感じる。こいつには油断も情けも不要だ……そして焦りも。

相手は明らかに自分を待っていた、すでに先制攻撃は成立しない、シフはいたずらに銃を構えることはせずに、短く問う。

「ここでなにをしてる」

「あら……思ってたのと違うわ」少女はシフに正対し、わずかに微笑んだ。「こんなとき、おまえはだれだ、って尋くものじゃない？」

「悪いが、いま俺には余裕がない」とシフは慎重に言った。「こたえろ、ここでなにをしている。それとも……これからするのか。俺の邪魔を？」

「邪魔なんてしないわ。そろそろ来るころだと思って、待っていたのよ」

「俺をか」

「そう」

「なにか用か」

用がないならどこかへ行け、という意味だ。すっかり口ぐせのようになってしまったそれが、無意識に出た。これは気のゆるみからだろうか、とシフは思う。たしかにこの少女に敵意はないように思えるが……、感情を偽るのがうまいだけかもしれない。

少女は困った顔で言った。

「言っておかなければと思って。あなたが秘密で作っていたロボットを、貸してもらったこと」

シフは慎重さなどかなぐり捨てて、手近のコンソールに飛びついた。少女からの妨害はなかった。素早くコンソールを操作、ロボットの管理ツールを呼び出すと、稼動可能な三四機が、すでに工房から出動していた。ロボットにはごく単純な行動パターンを設定済みなので、遠隔操縦するかのように事細かに指示を出す必要はない。おそらく全機が自動戦闘モードにあるはずだ。スイッチひとつでそうなるように、しておいた。

ロボットを起動させることは当面の目標だったが、どういうわけかそれが為されている。

あとは自分が殺されなければそれでよい、その事実は一ときシフを安堵させた。いま一度、隔壁を降ろすときの騒ぎを思う。あのときあそこでなにがあつたのか、実に単純なことだ。口ひげたちの背後、あのT字路付近にいた人間たちは、このロボットを見、そしてこれに襲われたのだ。直前に瓦礫が崩れるような音がしたのは、おそらくロボットが天井を突き破って落ちてきたからだろう。

しかしそもそもなぜロボットは起動したのか。リモートスイッチによる起動コードは秘密

工房までは届かなかった、これは揺るがぬ事実なのだ。それなのにロボット管理ツールのログでは、まさにそのコードが正常に受令されたことになっているのである。

つまり、妨害電波によって攪拌かくはんされた起動コードを拾い上げて、だれも知らないはずの秘密工房へ届けたものがある。そんなことが可能かどうか、シフをしてもわからなかったが、仮に可能だとすれば、そうしたのがだれなのかはわかっていた。ロボットを借りた、などとのたまう、この少女に決まっている。

それにしても、いったいどこから情報が漏れたのだろう。ロボットの存在は、自分と、自分が持つわずかなコンピュータしか知りえない。そこに侵入できるものなどどこにもいないし、事実いままで一度たりとも侵入された形跡は……いや……、

ビホルダー。

シフはコンソールを見つめたまま、先ほどまでとは異なる緊張と、胸の高なりを感じていた。口ひげが指揮系統の回復に協力しろ、と言っていたのを思い出す。妨害電波を発していたのは彼らではなかったのだ。彼らもその影響を受けて混乱していた。もし中央に潜伏していた敵グループ間の連携が完璧であつたなら、自分はここにたどり着けなかったかもしれない、シフは本気でそう思った。いまだつてけつこうな綱渡りをなんとか成功させて、ここにいるのだ。

ではだれが妨害電波をばら撒いたのか。この自分が、無事にこの場にたどり着くのを望む者、だ。想像するに、そいつは口ひげたちの目的も知っていて、そうはさせたくないと思っ

てはいるものの、どうすれば彼らの目的を挫くことができるのか、その具体的なやり方がわからない。だから、同じように口ひげたちの企てを阻止しようと動いている、この自分の計画を利用した——ようするに、この自分を口ひげたちに勝たせたい者がいて、そいつがそうなるように手引きをしたのだ。

シフはコンソールを離れ、無造作に少女に向かって歩き出した。少女は体の前でやんわり手を組み、じつとシフの顔を見上げている。やがて少女の前に立ったシフの指が、金色の髪を撫でる。少女は顔色ひとつ変えない。軽くウェーブの掛かった毛先にまで、やわらかな指通り。

「立体映像の類ではないな」

「それがわかったのなら、乱暴にしないでちょうだい」

「手厳しいね」

シフはぱつと手を引つ込めると、話がしやすい程度に下がりながら、「おまえはだれだ」と訊いた。「名前はあるのか」

「——ヒメ」

「……グランブルーというのは改めるべきかな」

「べつにいいわ。おばあちゃんのお姫さまだって、いるかもしれないじゃない」

「その『なり』で言えたものかよ」

だれかがビホルダーを使って極秘情報を持ち去った、わけではない。この少女こそがグラ

ンブルーと呼ばれる存在そのものだ、大胆な仮説だとシフは自分でも思うが、思いついたが最後というやつで、もはやそれ以外に考えられない。守り神、はともかくとして、自律エージェント、中枢掌握体、大昔からの呼び名はなるほど、うまくぼかされている。中央コンピュータなどと言っているのは、ごく最近の技術者たちだけだ。

シフはもつとこのヒメと話がしてみたかったが、そのまえにやるべきことが残っていた。なるべく早く、死傷者数を抑えて、騒ぎを収束させる必要があった。おそらくヒメもそれを望んでいる。ヒメは澄まして見せてはいるが、いま起こっている事態に直接的に介入する手段を持たず、内心では弱り果てているに違いなかった。彼女を困らせても得るものはない。シフとしても、いたずらに死人を増やすのは本意ではない。

コンソールに着く。それで室はロボットへの発令所となる。

ついとヒメが寄ってきて、興味深そうにモニタを覗き込んだ。

「なにをするの」

「敵を明確にするのさ」

すでに破滅的行為に出た敵に対して手を抜くつもりは毛頭なかった。シフは、殺人ロボットを停止させることは考えない。むしろ、より早く効率的に敵を殲滅することだ。それでより多くの、敵ではないだれかが助かる。

ロボットたちには、動く人間を皆殺しにするような行動設定はしていない。だれもが携帯している身分証明用のIDチップから情報を読み取って、個人を判別する能力がロボットに

はある。目の前の相手が中央の人間か、戦闘区からきた人間か、ということがロボットにはわかるのだ。だがシフは、戦闘区の人間すべてが敵だとは思っていないかった。あの口ひげの目的に、すべての戦闘員が賛同しているとは思えない。だから、いまロボットが敵としてマークするのは、自身に対して攻撃行動を取ったものと、非戦闘員に対して攻撃行動を取ったもの、たったこれだけだ。

あまりに消極的といえた。ここまで単純な行動パターンでは、いずれロボットは無力化されてしまうだろう。敵はロボットの前でだけ、おとなしくしていればいいのだから。

敵を絞り込まねばならなかった。どうすればそれができるだろうか。同じ戦闘区に所属している人間でも、敵と、そうでないものがある。中央の人間になりすましている敵もいるかもしれないし、そんな相手はチップの身分情報も偽っていることだろう。なにか新しい目印が必要だ。

「……おまえ」とシフはヒメに声を掛けた。「もうジャミングは必要ない、解除しろ」

「じゃみんぐ？」

「ああ、もう。いい、俺がやる。手を出すなよ」

「どうするというの」

「やつらは指揮系統を回復したがっていた」シフはコンソールを叩きつつ、「さいしよにこの俺を取り逃がした時点で、適宜^{てきぎ}作戦を組み立てながら動かなきゃならなくなつたんだ。いまみたいなのは表立つた戦闘は、本来なら避けたかったはずなんだよ、やつらも。そのうえわけ

のわからないロボットが攻撃してくるんだ。仲間同士連絡を取りたいと思うのは当然だろう」

「そうね。わかるわ」

「もしかすると、イレギュラーに備えた増援なんかも、いるかもしれない。通信が繋がらないでは、そいつらを呼び寄せることもできない」

「つまりあなたは、その人たちがお互い連絡を取り合えるようにしてあげよう、というのね」
「そうだ」

「どうして」

シフはヒメを横目に見て、「敵通信の流れを追跡する」と言った。「やつらはいま混乱してる。通信が回復すれば、体勢を立て直すために活発なやりとりをするはずだ。敵としてマークするにはこのうえない情報が、大量に飛び交うことになる。これなら、隠れている増援だつて叩ける」

その準備を進める。通信傍受用モニタリングツールを先に起動。効率的な戦闘のために通信の回復を願っているのは中央の保安員らも同様だろう、まだ生き残っていればの話だが。彼らを敵と誤認しないよう、通信内容の振り分けパターンは慎重に設定せねばならない。これはさほどむずかしくなかった、IDチップの身分情報が有効に使える。

「乱暴なのね」とヒメ。

妨害電波を解除してないので、傍受モニタにはまだなんの情報も入ってこない。続いて電波環境をクリーンにすべく、シフはコンソールに向かい続ける。

「なにもかも丸くおさめる魔法はおれにはない。あるとすれば、おまえにだろう」

「そうね……わたしにもないわ。あればとづくに使っている」

「そいつはどうか」

ヒメは怪訝そうな顔でシフを見た。

「……なあに？」

「いや」最後のキーを叩く。「なんでもない」

ジャミング解除。傍受モニタが働きはじめる。傍受内容を解析して作る、敵区別の妥当性は、参考情報が多いほど高くなる。それがいちおう信頼のおける水準に達するまで、少々待たねばならない。ロボットに攻撃目標を送信するのはもう少し先だ。

しばらく二人とも無言でいた。

やがてうつむいていたヒメがふっと顔を上げる。シフもコンソールモニタから目を離し、ヒメが見る先、室の出入口に目をやった。

扉の向こうに人の気配がある。一人だ。もともとは数人のグループを組んでこの室に向かっていたのだが、ロボットの待ち伏せを受けて、その人物だけが残ったのだった。ロボットに個別の指示を出してさらなる追撃をおこなうことも可能だったが、シフはそうはしなかった。この人物を向かえ入れたかたちだ。

「いるのか」

扉の向こうから男の声。

「いるさ」シフは銃を取って状態をチェック。セイフティを解除してヒメの前に立った。

「なにか用か」

「話したい」

「俺を殺してもロボットは止まらない、いちおう言っておくけど」

「そんな気はねえよ。……やっぱアレはあんたのしわざか。なら、あんたを殺しても、アレを止められるやつがいなくなる、ってだけだろう」

「そのとおりだ」とシフ。「いま開ける。でもあまりおどろかすなよな、なにをするかわからないぜ」

ドアロック解除。

声で予想していたとおり、顔を覗かせたのは、ヴォリスだった。さまざまな戦闘メカの改良のため、何度も情報交換をしたことのある男だ。

「——なんだそりゃ」

室に踏み入ったヴォリスは、シフのそばにたたずむ少女の姿に目を丸くした。

「あんたの子か」

「ふむ」シフは、困ったように微笑むヒメを見て、「似てるか？」

「いや、これっぽっちも」

「そうか。で、なんだって」

ヴォリスは真面目な顔になった。

「シフさんよ、なんで俺たちの誘いを蹴った」

「そんなことを尋きに來たのか。わざわざ」

「そうだ、いや、ホントはそれじゃあだめなんだが」

「なにが言いたい」

「つまりだな」とヴォリスは思案しながら、「あのロボットがむちやくちやしやがるだろ。このままだやまずい、いまからでも遅くはねえ、ってんで、仲間が自分犠牲にしてまで、俺をここまで寄越してくれたんだ。アレの親があんただってことは、だれにでも想像つくからな。だから俺はあのロボットを止めるべくがんばらなきゃなんねえ。けどな、俺はほかの連中よりはあんたのことを知ってる。いまさらロボット止めてくれ、って言ったところで、あんた聞きやしねえだろ」

「あたりまえだ」

「だよな。つうか俺でも断るわ、虫がよすぎるって。だからってあんたを殺してもだめ。捕らえるほどの力もねえ。脅迫するような材料も、とくりやあ……お手上げだよ。あんたを逃がしちまった時点で俺たちの負けだったんだ。わかつてはいたが、あいつらには言えなかった」

「それで？」

「この計画で、俺の役割はな、事前にあんたをこつちに引き入れることだったんだ」
「だろうな」

「わかるだろ、俺は仲間にあわせる顔がねえ。ここへは死にきたようなもんだ。あんたに撃たれるか、戻ってロボットに殺されるか、だ。だが……どうしても腑に落ちねえ、なあ、あんた、俺を殺すまえに、せめて聞かせちゃくれねえか。なんで誘いを蹴ったんだ。もしあんたさえこっちにいりやあ……。提示した待遇は、結構よかったろうが」

「……そうだったか？ 覚えてない」

「あんだけの好条件そうないぜ……だいたい俺の見方じゃ、あんたつて男はいつも実利を取る。学者連中との仲間意識も薄いんだろ。面倒が同じなら安全な立場を選ぶはずだ、明確な不利益さえなけりやあな。あんたが俺たちに向けて使った仕掛け、ああいうやつを俺たちの側に立って作っていたら、計画は完璧だったに違いねえ。いま、結果的にやあ、あんたの勝ちだが、こっちについてた方がずっと安全だった」

「それなら、ひとつの不利益がその好条件とやらをゴミに変えうることも、知ってるだろう」シフは拳銃をもてあそびながらコンソールデスクにもたれ掛かる。「不利益は、あったのさ。俺はおまえたちの計画そのものが気に入らなかつたんだ。待遇だの見返りだの、関係ない。おまえが責任を感じることはない。はじめから無理な相談だったというわけだ」

「なぜだ」とヴォリス。「なにが気に入らん。……あの娘のためか？ 俺も改造人間なんてのはよせと言ったんだが」

キョウコか、そういえばやつはどうしたかな、などと思いながら、「そうじゃない」とシフは否定。「気に入らないのは、おまえたちの最終的な目的だよ。無闇な戦闘行為を控える

だの、可能なかぎり戦闘の回避に努めるだの、口先ではいろいろとごまかしていたようだけど……おまえたちの本音は、星巡りをやめることだろうが」

ヴォリスは無言。

「前線の連中の意識というのかな、命がいくつあつても足りない、つてところか。それはまあわからないでもないけど、しかし、人員の戦闘損失が嫌なら無人化しろ、と提案すれば、それも嫌だと言う。けつきよくおまえたちは、絶対安全な宙域でスミカに引き込もつたまま、戦闘区での居場所も残しておきたいんだ。俺はそれが気に入らない。なにより俺は、これでもちゃんという星を見つけないと思ってるんだ、手を貸すわけがないだろう。それに……どうやらおまえは、俺がそっちにつけば勝ていたと本気で思ってるようだけど、それも間違いだ。もしそうしていたら、俺のかわりにこいつが」

シフはヒメの頭に手を置こうとしたが、ひよいとかわされる。

「……こいつが、計画を叩き潰していたらうな」

「その子はなんなんだ」とヴォリス。「そんな子供でも、あんたがビビるほどの学者さんなのかい」

「こいつはなかなか笑えるぞ」とシフは本当に笑いながら言った。「星巡りに関していうなら、めぼしい星を見つけてくるのも、スミカの航路を決めているのも、こいつだ」

「……なんだ？ いつからそんなことになったんだ。俺たちはみんな、グランブルーが勝手にやってるもんだとばかり思ってた。中央の連中はみんな、得体の知れねえコンピュータの

言いなりだ、ってな。けどよ、ならひよつとして、その子を説得すりや……」

「いや、グランブルーが勝手にやっている。だから、こいつがグランブルーなんだ」

「なにを言ってる」

「おまえたちの感覚ではむずかしいかな……グランブルーの化身、とでも言えがいいか？

たぶん本質からは遠ざかるけど、まだわかりやすいだろ」

「本気なのか。あんたがそんなことを言うとは」

「そうだ、俺はこういうのは得意じゃあない。こんな状況で、この俺が言うんだから、信じておけよ。——しかし、説得とはな。やめておけ、ロボットを起動したのはこいつなんだぞ。このあたり一帯にジャミングをかけたのも、こいつだ。こいつがいなかったら、俺はおまえたちに掴まってたかもしれない。さっきおまえが言ったとおりだ、危ない橋だった」

「……あんた、グランブルーを味方につけたってのか」

「そんなわけがないだろ……」シフは疲れた声で言う。「まだわからないのか。グランブルーはある意味、だれよりも星巡り推進派だ。それを理解するのに、こいつが何者かを考える必要はないよな？ いいか、俺がこいつを懐柔したわけじゃない。おまえたちが、勝手にグランブルーの敵になったんだ。どうやっても勝ちのない戦いをしかけたんだよ、おまえたちは」

ヴォリスはまた黙り込んだ。

室に沈んだ空気が満ちる。もつともシフが気まずさを感じたりすることはなかったが。

「話は終わりだな」とシフは言い、ヒメが視線を向けてくるのを感じながら、立ったままでコンソールを操作する。

「おい」と慌てた様子のヴォリス。「なにやってる」

「ロボットに目標データを転送する」とシフ。「気づいていたかな。ロボットは反撃を主軸に行動していたはずだ。でもこれで、自分から敵を探して駆逐するようになる」

「容赦がねえな」

「でなきや終わらん。泥沼だぞ、このままじゃ。戦闘区には、おまえたちが待機させていた増援部隊と同程度、反抗勢力もいたようだな。そういった騒ぎに気づいて動きだしてる。まったく、わざわざ中央まできて、やりあいやがって」

それからシフは、さて、と一息ついてヴォリスに向き直った。

「さて、どうする、おまえ」

「どうする、だど？」

「仲間のところに戻って、ここで話したことを伝えてやるか。降参するか、ということさ。おまえにそれを決める権限があるとは思えないけど、しかし口が上手いからな、おまえは。上の連中を説得できるか、試してみるかい。それまでロボットの修正を待ってやってもいいぜ」

ヴォリスはしばし考えにふけた。が、静かに顔を上げると、そんなつもりはない、と言いきった。

「俺たちはみんなこの計画に賭けたんだ。絶対に成功させる気でいたが、失敗を覚悟してないやつなんざいねえ。いまさらダメでした、つつたつてな、だれも銃を捨てたりしねえよ。お嬢さんには悪いがね……やっぱ俺たちは船を止めたい。降伏はありえん」

「ふむ」シフはヴォリスに銃を向けて、言った。「そうすると、おまえを生かしては帰せないんだけど。おまえの失敗を知ったら、かわりのやつがここに来るかもしれないからな」
「ちよっと」

ヒメの静止の声。もちろんシフは取り合わない。それどころか、銃を向けられたヴォリスまでもが、そうだな、とうなずいた。

「俺もどんな面^{つら}で戻っていいかわからねえ、それがいい。つつーより、もともとそのつもりで来たんだったわ。いいぜ、やりな」

ヴォリスは拳を握り、立てた親指で自分の胸を指す。そこを撃てということか、シフは銃に両手を添えて、狙いを定める。

「本気なの」

「手を出すな」ヒメを背中に押し退けて、シフ。「俺がやる」

なにか思うところがあつたのか、強引に視界を遮られたヒメはたじろぐように黙ってしまふ。

「外すなよ学者さん。俺だつて無駄に苦しむのはごめんだ」
「なら黙っている。舌を噛むぞ」

発砲。だいたい狙った位置に着弾したようだった。ヴォリスは衝撃を受けて突かれたように仰け反った。が、がっしりした体は倒れない。胸を抑えて数歩たたらを踏み、ついにひざをつく。

「じゃあな」と小さくつぶやいて、ヴォリスはくずおれた。

ヴォリスの最期を見届けたシフは、拳銃に手動のセイフティを掛け直して、それをデスクの上に置いた。それからコンソールにつき、数回キーを叩いてロボットへの目標データ転送を確定する。ヴォリスにはああ言ったが、この室に敵を近づけてはならないこともロボットは理解している、当分銃を使う機会はないだろう。

「やれやれだ……」

一仕事を終えたシフは椅子に深くもたれてため息をついた。発砲の反動で少々手首が痛かった。ぱたぱた手を振っていると、ヒメが静かに歩みよってきて、シフが使っているコンソールデスクのそばに立った。

「なにか言いたそうだな」と手首をほぐしながら、シフ。

「ええ」ヒメはうなずき、「……けれど、なにを言っているかわからない」

「なんだ、それは」

「自分でも可笑しいことを言っていると思うのだけれど」

「俺がやつを殺したのが気に入らないんじゃないのか」

「それは、そうね。そう」

「ふむ。まあ、気持ちにはわからないでもないけど」

「わたしの気持ち、わかる？」疑いの眼差し。「それならどうして」

「言つてたろう、やつらは降伏しないってさ」シフは頼杖をつく。「星巡りをやめて一定の宙域に留まることが、自分や仲間のためになると本気で思つて……そのために命懸けの計画に乗つた連中だ。そんなやつらと、どんな折衷せっちゆうが成り立つというんだ。やつらは、ようは外敵を恐れているわけだけど、戦うのがこわいとかつて話じゃあない。スミ力を危険にさらしたくない一心なんだろう。敵と出会う確立自体をかぎりなくゼロに近づけるため、星巡りをやめさせるという結論にいたつたわけだ。どうやつてかしてこの場をうやむやに騒ぎを収めることができたとしても、なにも変わらないよ、やつらの頭の中は。次はもつと綿密な計画を立てて、おなじようなことをやるんだろうさ。それも、それこそみんなのためと信じて、だ。――で、笑えることにだ、実はおまえにもそれがわかつている。だから俺を責めにくい、というわけだな」

「……」

「おまえは人間だな」

シフはやぶからにそう言った。まったく予想外の言葉にとまどつたヒメは、本当に外見相応の少女がするように、首をかたむけてシフを見た。

「正直、もう少し機械的なものを想像してた」

そう言うシフの方では、ヒメを見てはいなかった。明確な目標データを与えられたロボッ

トは大きく行動パターンを変えているはずで、それが望ましい戦果としてあらわれているかを確認する必要があった。コンソールに指を這わせながら、シフはひとり言のように続ける。「俺は昔からグランブルーには自我のようなものがあると思っていた。グランブルーが、ずっと言われてきたように自律エージェントだとすれば、そいつにとつて人間というのはまず間違いなく学習の対象になる。スミ力を維持するのに人間を使わない手はないからな、人間に無関心でいるはずがない。人間を利用するために人間感情の理解に努め、有事にはなんらかの形でそれを行使するだろうとは、思っていた。あるいはさいしょからそういう機能が組み込まれているはずだ、とね。だけど、グランブルーに本物の人間性があるとは思ってなかった。人間を動かすには人間感情の理解が不可欠だが、自分までそれを備えてしまったらおしまいだ。確実に性能が低下する。だからそれはありえない——」

ロボットは概ね期待通りの働きを見せている。非戦闘員を敵と誤認した形跡もほとんどない。敵か味方かわからない相手への先制攻撃は、いまだに保留しているから。

「それがふたを開けてみれば、『これ』だからな」シフはようやくヒメに顔を向けて言った。「効率よく敵を消すと言え、乱暴だと言う。目の前で一人殺して見せれば、なぜわかり合おうとしないのかとゴネる」

ロボットへ起動コードを渡すタイミングを、この自分のリモートスイッチの操作と合わせたのも、そのあたりの心情が絡んでいるのだろう。

ヒメはずっと黙って聞いていた。シフは再びモニタに目を向ける。

ロボット自体の挙動にはなんの問題もないのだが、ジャミングを解除してからというもの、対処せねばならない戦闘員の数が増え飛躍的に増えていた。加えてロボットが攻撃的になったことで、敵の動きも、保安員含む「敵の敵」の動きも、活発になっていく。戦闘は激しさを増しているのだ。

「これをすべて丸くおさめる魔法、というのはさ」

大量のデータが踊り狂うモニタに、シフは虚ろな目を向けて言った。

「ようするに完璧な人心支配か、洗脳だろう。あればとくに使っている、とは、よく言えたものだ。あってもおまえは使わないだろう。いざ使う段階になって、どうせまたあれこれとゴネるんだ——何千年も、得体の知れないコンピュータのふりをしていたのは、おまえ、理由はどうかあれ正解だよ。おまえには船の守り神が似合っただ。人間を守ろうなんて考えない方がいい。おまえみたいなただの人間に、人間集団のお守り_もが務まるものか」

「だから、あなたがやるというの」

「冗談じゃない」

シフは笑う。

「俺だってこれでも人間だ。自分を守るので手が一杯だよ」

人心の掌握になど興味はなかった。まして人間集団をまとめ上げてその頂点に君臨しようなどとは、シフは夢にも思わない。他人と関わることで生じるさまざまな軋轢^{あつれき}や負の感情の処理は面倒だが、だからといって他人をコントロールしようとすれば、その他人はけつきよ

く自分の能力の範疇に収まってしまおうだろう。それではおもしろくない。他人は他人で、勝手に生きてもらうのがよい。勝手に高めあい、勝手に潰しあって生きていくければ、それでなにも言うことはない。ようするに、これまでどおりでかまわない。だが人間のお守りをするかなどと考える必要は皆無だ。「守り神」は、各々の勝手な想像から飛び出してくるべきではないのだ……

だが、シフはたしかに、いまや予想外に激化した抗争の、漁夫の利を得られる立場にいた。シフには人々をよりよく導く能力もそのつもりもなかったが、人々がいまより少しだけましに生活する環境を整える能力はあった。シフから見れば、スミカにはいまだ性能向上の余地が多く残されているのだ。とくに今回のできごとで大幅に減じてしまおうであろう、スミカの戦闘能力を回復・強化することは急務で、そのために時間を費やす覚悟はシフにもあった。中央にしても、ほとぼりが冷めるのをただ待っているだけでは全機能の修復にいつまで掛かるかわかったものではない。スミカの能力を最大限引き出すために、非常に多くの設備に大胆な改修をほどこす必要があるかもしれない。ヒメの協力があれば、それは可能だろう。

「ま、こうもあちこち壊されてはな、さすがにのんびり眺めてもいられない。これが一段落したら、いろいろと手を入れてみよう。今度はおまえが、俺に力を貸せよな」
それまで受け身でいたヒメが、すっと目を細くする。

「心配するな。星巡りは続けるさ」

ヒメの視線を感じながら、シフはそう言った。いつの日か、人間が住める星を見つけ出す

ために。

*

シフがそれを強く意識したのは、あのときはじめてだった。なにせ船が星々を巡るのは当然だったから。生まれたときからそうなっていた。それに疑問を感じるきっかけを、ふつうの人間は持ちえなかった。

だがヴォリスらは違った。先の見えない旅を続けるため、多大な犠牲を払い続けることに、彼らは疑問を覚えてしまった。生まれたときから星巡りは続いている、それを言うなら、生まれたときから人間にはこの船以外に安息の地はなかったのだ。多くの人々はまだ見ぬ新天地に想いを馳せつつも、必ずしも自分の世代でそんな星に巡り会えるという確証がないことも、正しく理解していた。

それでもヴォリスのような価値観は一般的ではなかったろう、自分の目で新天地を拝める可能性を自ら放棄することはない、シフはそう思う。そして他人からそうしろと迫られたとき、つまりヴォリスらの真の目的を推し量ったとき、己の胸中に沸き起こった強い反発心にシフは驚いたものだった。星巡りをやめるなど、とうてい看破できない——自分はこれほどまでに星への移住を望んでいたのか。

そう感じているのは自分だけではないことも、シフはあるときはじめて知った。

ダイナミックミツシヨンプランナーからしきりに呼び出しがある。敵はどうに絶対防衛圏に侵入している。作戦システムらは慌てていた。船内で待機中の全作戦機を投入したい、と言ってきている。シフは許可しない。それらには空間機動戦闘には適さないメカも多いのだ。温存の必要はない、とは再々考えたが、あえて不利な状況に放り出すこともない。

すると作戦システムは、いったん軌道をかえて船ごと離脱するだとか、潜伏中の特装機を即時集結させるだとか、まるで現実味のない提案まで出してくる。作戦システムはとにかく船に敵を近づけたくないようだった。無理もない、そう作つたのだから。だが、いまのシフの考えは、彼らを設計したときとは違っていた。

ようやくたどり着いた、シフは銀髪の少女の背にある青い星を見て思う。移住先としてこれ以上は望めまい。宇宙船は、永遠を約束されたゆりかごではなかった。宇宙船はこのときのためにこそあつたのだ。そこに住まう人間はこのときのために生きてきた。かならず手に入れる。これを得られなければ、次はない。あの少女を倒さなければ自分たちは破滅なのだ。いまや船への多少の損害すらも止むを得ない。こちらが破壊し尽くされるまえに、やつを消せば、それでいい。

*

スグリにとって宇宙空間での戦いは難事だった。スグリ自身の意識は惑星大気中での機動

戦と大差なかったのだが、敵として向かってくる機械の種類が一変してしまったのだ。風を切って飛ぶタイプものは姿を消し、かわりに、砲台そのものが浮かんではいるだけ、といった様相のものが多くあらわれた。それらの主な攻撃方法も、ミサイルからビームへと変移していた。

とりわけやつかいなのが「宇宙戦艦」だ。数は少ないものの、それぞれが大きく、強い。無骨な艦体から突き出すいくつもの砲台から、強力なビーム攻撃を仕掛けてくる。スグリも、宇宙では自分のビームライフルの有効射程が伸びていることにずいぶん経ってから気づいたが、戦艦の交戦距離はそれとは比べるべくもなく長大だった、というより、スグリはこれらの戦艦の射程以遠に位置することは一度もなかった。まともに対抗するにはハイパーアタックを使うしかなく、それは連発できないから、スグリは光の壁のように迫るビームを避けながら、戦艦との距離を詰めていかねばならなかった。だが戦艦は、護衛の「砲台メカ」やつこいミサイルを多数放出してスグリの接近を阻むのである。

そんな宇宙戦艦といえどもスグリにとってまるで手に負えない存在、というわけではない。どうも戦艦は近くの相手を攻撃するのが苦手らしく、どうにかして接近さえてしまえば、砲台を壊して戦艦を無力化することはさほどむずかしい仕事ではなかったのだ。

本当のやつかいはそのあとに待っていた。

スグリのビームライフルやソードでは、全長二〇〇メートルに及ぶこれら宇宙戦艦を手際よく完全消滅させることができなかったのである。たしかに無力化は可能、航行能力も奪え

る。しかしそのままそこに捨て置けば、動力を失った戦艦は眼下の星に墜落してしまう……。

——押すしかない。

押して人工衛星とするしかない、せいっぱい知恵を絞って出した結論が、それだった。

スグリは戦艦を後ろから押した。といつても適切な軌道速度の算出などできるわけがなかったから、しかたなく戦艦には、目標宇宙船とだいたい同じくらいの高度と、だいたい同じくらいの速度を与えた。理屈からいえばそれで墜落はないはずだ——これっぽっちも自信が持てない。機能停止した戦艦を軌道へ投入して一息つくたび、スグリの頬をひとすじの汗が流れた。それが単なる疲れからのものでないことは、言うに及ばずだ。

落ち着いたら、オリンたちにもことわりを入れてバスターを使おう。きっと、それはそう先の話ではない。

戦艦メカのいきおいは徐々に衰え、いつしか増援が送られてくることもなくなった。機を逃さずスグリは巨大な宇宙船へと急ぐ。

眼前の威容、視界いっぱい広がる宇宙船をスグリはあらためて眺め、あらためて、困った。宇宙船の外壁にはどこも複雑なディテール、深い凹凸が走っており、それでいて全体像は、一本の軸を中心として浮かぶ巨大な環や円筒の集合体なのだ。前後左右の区分がどうなっているのか、どこがどんな機能を持っているのか……どこから入ればいいのかが、さっぱりわからない。

どうしたものかと漂っていると、思いがけず宇宙船に動きがあった。環や円筒の軸となっ

ている細長い構造体の、最下部から、四本の明るい光が並んで伸びていくのである。光のトンネルができたようだった。

スグリは迷わずトンネルへと向かった。そこに開いている扉を見つけたのだ。まるでここから入ってこいと誘導してくれているようだ、スグリは少しだけ浮かれた気分になる。スグリは無意識に最外の円筒のどこかに入り口を求めていたが、考えてみれば、偉い人たちの家、あるいは部屋は、宇宙船の中心である、この軸の部分にあるのかもしれない。

全体からすれば針のように細く思えた軸構造も、近づいてみればこうも大きい。扉の広さは先ほどの宇宙戦艦がらくに出入りできるほどもある。まさにそのための扉、ゲートだろう。径の絞られた下部先端付近でこれなのだから、まったくんでもない大きさだ。

光のトンネルを抜けたスグリはそろそろとゲートをくぐった。さらにその先に広がる空洞に、思い切って飛び込んでいく。今度は鋼鉄のトンネルだ、そう思っただけで少し進むと、すぐに行き止まりにぶつかってしまった。トンネルというよりは大広間のようなだった。ただ、目の前にあらわれた行き止まりの壁も、実は巨大なゲートであろうことは想像に難くなかった。

さてどうやって開けようか、新たな難題を前にスグリが思案をはじめると、背後のゲートがゆっくりと閉まりはじめた。入ってきたゲートが、である。スグリはぎよつとした。このままではこの空間に閉じ込められてしまう。速やかに判断を下さねばならなかった。逃げ出すのなら、いまだ。

スグリは逃げなかった。わざわざこのゲートを示しておいて、閉じ込めて終わりというこ

とはないだろう、それに、慌てて外に出たところで別の入り口を見つけられるとも限らない、そのように考えた。

巨大なゲートは複雑な構造をしていた。一枚の板ではなく、複数のパネルが折り重なってできている。四角い出入口の四辺から、見るからに丈夫そうな厚い鉄のパネルがスライドしてくるのだが、その数は四枚ではきかないし、それぞれのパネルの形状にも意味があるようだった。もちろん、最終的にはすべて隙間なく、ぴったりと閉じる。

不安気に見つめる先でゲートは重々しく閉じきった。「がこん」とスグリは口で言ってみる。もつとも音の伝搬などなかった。無音。真つ暗闇にたった一人。

まだなにか動きがあるはずだ、なかば祈るような気持ちでいると、周囲がぱつと明るくなった。反射的に目を細めつつ、室が起動した、とスグリは直感。まもなく軽い圧迫感を感じはじめる。目と耳が痛い。

「ううー」

つばを飲み込んで「耳抜き」をやる。二枚のゲートに挟まれたこの空間は、巨大なエアロツクチェンバーだった。現在加圧中。少々気分が優れないのは宇宙船の設備性能が悪いからではない。生身で真空中をうろうろしているスグリの方がおかしいのだ。自覚があるので文句も言いにくいスグリだったが、強烈な気圧変化にもじきに慣れ、不満はなくなった。

広い空間にもかかわらず思いのほか早く加圧作業は終わり、次にはこうこうと機械の駆動音。周囲が空気で満たされたので音も響くというわけだ。前方ゲートが解放されていく。ま

だ残されていた誤差程度の気圧差が風を作った。スグリは髪をおさえながら、開ききらないゲートの隙間をくぐろうとして……踏みとどまる。

ゲートのすぐ奥に、通過を監視するためのセンサ網が掛かっているのにスグリは気づいた。それは網というよりは、膜だった。左右の壁に一基ずつある装置から、薄いエネルギーフィールドが張られている。それ自体は破壊力を持たない出入感知層で、かわりにこの層と連動する砲台が、壁、床、天井に並んでいた。もし好ましくない相手が入ってきたら、その瞬間を狙い撃てるようになっていたのだ。

残念ながら、自分はいまだに好ましくない相手、ということらしい。ここへは誘い込まれたというところだろう、そうスグリは悟る。それでも引き返すつもりはなかった。船の設備を壊してしまうのは忍びない、だが、いまにきつと、お互いにとつてこんなものは必要なくなるのだ。

スグリは決心して感知層に飛び込んだ。配備された砲台が一斉に火を噴くが、スグリが飛び抜ける方がずつとはやい。

背後で起こった大爆発に思わず振り向く。閉まりはじめていたゲートはさすがに丈夫で壊れてはいない。それよりもいまいるこの通路、その壁面に、煤汚れさえないことにスグリはおどろく。見れば壁一面にびっしり赤い光のスリットが走っていて、どうやらそれが微弱な障壁を張り巡らせているようだった。

これはスグリにも有利に働いた。スグリには、壁一枚隔てた向こう側に、宇宙船にとって

どんな重要な装置があるかわからないのが不安だったのだ。この分なら、ライフフルやポッドのビームが過剰に船を傷つけることはなさそうだ。

ゲートの砲台はみな固定式で射角も狭い、出入感知層周辺しか狙えないのだ。スグリは放っておくことにした。それよりも、前方から多数の戦闘メカが押し寄せてくる。

また新しいタイプの機械だった。円盤形で、中央に照準センサーが埋めこまれている。円盤の縁には小口径ビームとロケット砲弾を撃ち出すための孔が交互に並ぶ。

ロケットを斉射したあと、周囲にビームをばら撒きながら目標に突進していく、というのがこのメカの戦闘スタイルらしい。ビームの狙いは甘い、おそらくあえてそうしているのだとスグリには思える。だから味方の攻撃で傷ついている機体も相当数見てとれたが、そこは割り切っているようだ。

こういった手合いからは距離を取ればそれでよい。いつもなら軽くあしらえただろう、しかしここでは難敵だった。広い広いといったところで所詮は閉鎖空間、壁をぶち抜かねば距離など取れない。

狭い領域に多くの敵、厳しい状況に置かれていることをスグリは自覚した。たとえビームライフフルと五機のポッドを総動員し、誘爆、貫通までを利用して、一度のアクションで撃破できる敵機はせいぜい十を数えるかどうか、といったところ。次の十機を攻撃するのに一秒も二秒も費やしていたのでは、すぐに囲まれてしまう。

いったいどうすれば、スグリはひとまず十機を迎撃して考える。考える時間は一秒もない。

——が、ひらめいた。壁をぶち抜かずして敵機群から距離を取る方法が、ひとつある。逃げ場がないなら、進めばよいのだ。

きわめて強引な戦法を実践すべく、スグリはポッドを自分のまわりに浮かべて併飛行。わずかに前に出たポッドが前方の狭い範囲に狙いを絞って連続攻撃を敢行、戦闘メカの群れの真ん中にぽっかり開いた突破口に、スグリとポッドは飛び込んでいく。高速機動だ。進路に被らない敵はこのさい無視、ロケット砲弾にとおせんぼされたらフォースエッジで突き抜ける。先ほどの光のトンネルではないが、ポッドのビーム余波は敵ビームの威力を削ぐのにも役立った。それでもときおり体を打つ衝撃に顔をしかめながら、スグリは速度を増す。

敵はついてこられない。うまくいった、と見てよいだろう。少なくとも、真っ向から立ち向かうよりずっとましだったに違いない。

ただし、これでスグリも歩みを止めるわけにはいかなかった。未知の宇宙船内を、休みなく高速で進み続けなければならない。

スグリは宇宙船中央の軸構造内部をぐんぐん昇っている。だからいずれ入ってきた最下部先端とくらべて周囲は広くなるはずだ、と、スグリには思われたのだが、船はそこまで単純にはできていなかった。ある程度進むと空間は大部屋や隔壁で区分けされ、広大な一本のトンネルは、いささか窮屈な複数の通路へと枝分かれした。どう進むべきかじっくり考えたいところだったが、置いてきた大量の円盤メカのことを思うとそれもむずかしい。どのみち考えたところで判断材料はなにもないのだ、スグリは勘にしたがって通路を飛んだ。どの部屋

にも、どの通路にも敵がいた。

大部屋ではこれまでの戦闘メカより一回りも二回りも大きいミサイリアーに襲われた。これは相当数のミサイルを一挙に射出、同時誘導する能力にくわえ、ビームの運用能力まで持つ強敵だった。そのうえビームライフルによる複数回の射撃に耐えるしぶとさも兼ね備えている。これほど豪華な戦闘メカが、並んで先へと続く通路を塞ぐものだから、スグリはおおいに苦しんだ。敵は誤爆も誘爆もおそれず部屋中にミサイルをばら撒いては、合間にビーム攻撃を混じえて回避のリズムを狂わせるのだ。

この強敵を撃破するためスグリは自分自身をおとりとし、そのあいだに目標機体にポッドをざくざくと突き立て、装甲を跨いだビーム攻撃をおこなう、ということをやった。これはポッドも損害を被る乱暴な手法であったものの、最も有効な攻撃となった。というのもミサイリアーの「しぶとさ」は、高い装甲強度はもちろんのこと、機体の一部が損壊しても別のパーツは無事、生き残った部位機能を使つて戦闘続行が可能、という構造的堅牢さにも支えられていたのだ。つまり、極小領域に高エネルギーを集中するソードや、ビームライフルの超高速射撃では、なかなか必殺の一撃を見舞うことができなかったのである。

そういったとくべつ強力な戦闘メカはそれほど数が多い。スグリはほとんどの敵機をすれ違いざま撃破して翔け続ける。やりすぎにしても多少痛い思いをせねばならない円盤メカが、あれ以降姿を見せていないことをスグリはさいわいと思う。

もっともあの機は一定数以上を集中運用せねば効果を發揮できない、小出しにしてこない

のは当然といえば当然なのだが……あいにくとスグリの頭にあるのは、ちよつとした苦手意識だけだ。

狭い通路では砲台が主な障害だ。宇宙船の入り口で待ち構えていたような、感知システムと射撃システムのペアがいたるところに設置されているのである。感知システムは一個のセンサ装置からなる簡易なものだが、その視野は広く、入り口のものより高性能だという気がスグリにはした。しかも連動する射撃システムである砲台は、必ずしもセンサ装置のそばにあるとは限らなかった。センサの存在に気を取られ、砲台位置の確認をおこたったまま急いで飛び抜けたりすると、遙か前方から放られた砲弾に、自分から突っ込んでいってしまう、ということにもなりうる。

センサ装置は、見つけ次第破壊する。実際に何度か頭をぶつけたスグリはそう決めた。

それにしても意地の悪い仕掛けだった。スグリは、これらの仕掛けはすべてこの自分を迎え撃つために、わざわざ設置されたものだろう、と思っていた。なぜなら通路も大部屋も、本当はだれかを誘い込んで倒すためになどあるのではない、と推察できるからだ。

どの部屋にも、戦いのために使うとは到底思えない装置がいくつも備えつけてあるのだ。それぞれの部屋には、それらの装置を使つてする、戦い以外の役割がなにかしらあるはずだった。そこへ繋がる通路にしても、戦闘メカが飛び交うよりは、作業用の乗り物や箱詰め資材が行き来している方がよほど似つかわしい。

そんな場所に、こんな危険な仕掛けがあるわけがない。ごく最近、急遽設置されたものに

違う。こうまで嫌われる、なにを、自分はしたろうか、やるせない想いでスグリは翔ける。

通路の先が開けていた。また大部屋に抜けるようだ。ずいぶん進んできたはずなのだが周囲の景色はなかなか変化しない。新しい部屋に近づくと、なにか目当たらしい展開を期待してしまふスグリである。

しかし通路の入り口と出口付近には仕掛けが集中していることが多く、いま目の前にも多くの砲台と感知センサが覗いている。まずはこちらに対処せねばならない。

スグリは減速しつつライフルを構え、手前のセンサ装置を撃つ。瞬間、爆発。

破壊したセンサが大爆発を起こしたのだ。スグリは慌てて急ブレーキ。爆風に乗って渦巻く炎が壁いっぱい押し寄せてくる——その炎の向こうに、赤く巨大なビームの閃き。見えずとも視てスグリは目を見開いた。どの砲台からのものでもない、通路の先に開けた空間からの攻撃だ。

そしてそのビームの径は、通路の幅と高さを超えている。

真つ赤なビームは狭い通路にむりやり頭をねじ込むと、そこに残っていたセンサも砲台も、壁面ごと跡形もなくかき消した。ついには爆炎すらも追い越して、その先で立ちすくむスグリに襲いかかる。

視界いっぱい広がる光の壁が眼前のすべてを押し潰して迫ってくる。これは、ちよつと眩しすぎるな、スグリはぎゅつと強くまぶたを閉じて、顔を背けた。——自ら生み出した虹

が放つ、目もくらむばかりの閃耀^{せんよう}から。

「わたしたちを消せ、って命令を出したのは、貴方？」

操縦室に明瞭な少女の声が響く。

「そう、俺だよ」

それでシフは、先制攻撃が失敗に終わったことを悟った。

シフはロボットの操縦席で各種外部モニタ用スクリーンを調整する。非真空中で主砲を使つたことによる表示の乱れが、ようやく回復。

どろどろに融解し、灼熱のプラズマで満ちる元・通路の奥に、銀髪の少女の姿を見つけた。赤熱して泥のようにぬかるむ床の上を、水張りのフロアを進むかのような淡々とした足取りで歩いてくる。

「あの子たちを、あんなふうしたのも……」

「俺」

少女は通路の縁で立ち止まった。そこより一步先は底無しの空洞だ。天井もない。シフの巨大ロボが両手を広げられるほどの、この広大な空間は、そのまま上下に吹き抜けのようになっている。ロボはそこに滞空しており、少女の立つ通路は高さでいえばロボの胸あたり。

少女はロボの頭部、キューブをそのまま大きくしたようなパーツを見上げて訊いた。

「どうしてそんなことを」

「なんでも言うことを聞いて、なんでもこなせる部下が欲しかったからね」SIBS（独立艦艇戦闘システム）に交戦レベルの引き上げを指示。「ま、この肝心な場面で、ダメダメだったみたいだけど」

少女はうつむき、黙ってしまふ。

その間にシフは主要なアクティブセンサが起動したことを統合パネル上でチェック。続いてロボ自身のセンサが取得するさまざまなデータと、宇宙船から提供されたそれとのあいだに食い違いがないかどうかの最終確認。異常なし。ロボは宇宙船から独立した戦闘モードへと、あらたまって顔を上げた少女が言った。

「わたしたちを消せって命令を出したのは？」

シフの手が止まる。

スクリーンに映る光学カメラからの映像に目を向ける。こちらを見上げる少女の瞳が不安げに揺らいでいた。まったくどこにもいるような、まるでただの人間のような姿かたちが、そこにあった。

そいつが必死に訊いている、なぜ攻撃してくるのか。
ふん、と息をつくシフ。スイツチ類を避けて、頼杖。

「……きみたちの存在が、許せなかったから」

——わたしたちを許せない？

ロボットに乗る青年の声が、そうこたえてくるまで若干の間があつた。スグリは即座に聞き返す。「どういうこと？」

「俺たちはね、何千年ものあいだ旅してきたんだ」今度はすぐに返答があつた。「住処となる星を探して、何千年もね。ようやく見つけた星がここ。見つけたときは、本当に嬉しかった。いままで、あの瞬間を夢見て生きてきたようなものだから。でもね」

毒気の抜けたような、とても落ち着いた口ぶりで青年は言つた。

「その星に、人がいた。街まであつた。それが、俺には許せなくてね」

「意味がわからないよ」

「ずっと探し求めて、やっと見つけたものが、すでに他人のものだったんだぜ。そんなの悔しいじゃないか。だけどもんな消しちまえば、ここは俺たちのものだ」

スグリは呆氣に取りられてロボを見上げた。ぽかん、と頭が空っぽになる。が、次に意識したのは、じわじわと込み上げてくる怒りだった。

なんて、くだらない。

「……この星には、まだまだ人の住める場所があるんだよ？」震える声を絞り出す。「わたしは……きつとみんなだつて、おまえたちがこの星に住むことを拒まない。それなのに……そんなくぐらないこたわりで、戦いを起こしたの？ そんなことのために、あの子たちをあんふうにしたの!？」

「うん、そうだよ。気持ち悪いじゃないか、まったく未知の生物と一緒に生きていくなんて。そして、気持ち良いじゃないか、きれいで豊かな星を、自分たちだけのものにできるなんて」

あくまで穏やかな青年の声。こいつは本音で話している、とスグリは思う。包み隠すことなく……ひどい言葉だが誇張もない、これは紛れもない、この青年の、本心だ。

だからよけいに腹立たしかった。だからよけいに悔しかったし、悲しくすらあった。

「そんな考え……わたしは許さない」

なぜならそれは、彼の本当の願いだから。そしてそれを、スグリは許すわけにはいかないから。

「許さないって」青年は少し笑ったようだった。スグリの気持ちなど全部わかっていとう調子で、「どうするつもりさ」と問いかける。

あの子たちはこの青年の心をよくわかつていたのだと、いまさらにスグリは思った。命令の真意は聞かされていない、と口を揃えて言っていたが、あの子たちにはわかつていたのだ。自分とこの青年が話をすれば、こうなることがわかつていたから……命令がなくなつてもな

お、あんなに悲しい笑顔を見せた。だけど――

「わたしには力があるから……」スグリは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。「みんなを守る力も、戦う力もあるから」

ビームライフルとソードを握ったスグリの体が、ふわりと浮いた。再構成したポッドが踊る。アクセラレーターが展開し、清浄なフレアを吹き上げる。

これは、あの途方もない夢に、みんなで歩き続けるための力。この力がわたしの手にあるのは幸せなこと。けれど、それを持つわたしには、ちよつとばかり重たい役目もまわってくる。それで大げさに迷ったこともありはしたけど――スグリは耳を澄ませる――いまはこんなに離れた場所でも、こんなにはつきり聞こえるんだ。

……でも、ちよつと心配しすぎかな。大丈夫、わたしはまだまだ、がんばれるよ。

たおやかに揺れる銀の髪が、星の声を受けてきらめいている。だが、その瞳に宿り燃えるは彼女自身の不撓^{ふとう}の意志に他ならない。浄化の力は人の子の血に指向され、いま最後の敵へ向かう。

「――だからわたしが、ここでおまえを止める」

ランデヴー

思惑を語って彼が立つ

だが彼には、敵を認めた彼女を傷つけることができなかった
追い詰められた彼は最後の力を目覚めさせる

そして彼女は、彼女と出会った

操縦室に警告音が鳴り止まない。

けたたましい音量というほどではないのに、それはやたらと耳についた。並外れた集中力を発揮して獲物を追うパイロットに、咄嗟に自機の異常に目を向けさせるためのシステム、これをそのまま採用したのは間違いだった、とシフは思った。注意を喚起する警笛もこの縦室では大きな意味を持たない。応急処置くらいならロボは自動でできるのだ。ただ、その処置が完了するか、警告を確認した、とシステムに知らせてやるまで、パイロットへの警告は止まらない。これではかえって集中を削がれるだけだ。

背部ミサイル投射装置の開口タイミングを、敵ビームポッドに狙われた。発射セル内で大型ミサイルが爆発。機が震え、新たな警告が耳をつんざく。連鎖的な誘爆はまぬがれたが隣接セルのいくつかが損壊。シフは苛々とコンソールを操作して、問題の解決前に警告を解除してしまう。

シフはいまだに戦士ではなかった。シフが乗り込んでいるとはいえ、ロボットの戦闘制御をつかさどるのはロボット自身に備わる機能である。SIBS、独立艦艇戦闘システムはその名の通り個艦戦闘に重きを置く。ロボは他機とのデータリンクがおこなえない状況でも、単独で、最大の性能を発揮できる。レバー、スティック、ペダルにスイッチ、操縦室には操縦装置がもちろんあるが、シフがそれらを握ってロボを動かすより、戦闘システムに任せておく方が遥かに効果的だ。どんな優れたパイロットと交代してもこれはくつがえらない。

そんなロボにシフがわざわざ乗り込んでるのは、ここが一番安全だと思ったからだ。敵は自分をピンポイントで狙ってくるだろう、とシフにはわかっていた。室でのんびり殺されるのを待つ気はなかった。敵の攻撃から身を守る場所が、必要だった。自分がロボに乗り込むことで、敵にロボとの戦いを強制する目的もあった。リスクを承知でわざわざ船内に招待してやったのだ、逃げられてはかなわない。

シフはあくまでこの場で決着をつける腹積もりだった。限られたスペースで腰を据えて戦うならロボが有利だ、そう思っていた。

だが、警告が鳴り止まない。

結局、敵はサテライト機動で速度を維持せずともロボの攻撃をかわしてみせたのだ。初速度ゼロからいきなり目標速度にシフトする敵を相手に、高度なロボのターゲットシステムはほどなく完全に破綻した。そして……だから、シフは操縦桿を握るはめになっていた。

近接防御用の各種ガンやビームターレットだけは、いまもまともだ。みな個別にセンサと

射撃システムを備え、中枢の戦闘システムから独立して行動している。高度な連携攻撃はできず、ただただ愚直に敵を追うのみだが、それゆえ敵の異常さに狂ってしまうということがある。

右へ左へと流れる無数の火線——しかしそれが、当たらないのだ。ごくまれに当たっても効かない。ガンは青く光を放つビームポッドに防がれた。ビームは、ビームソードに斬り払われた。徹甲弾が直撃したかと期待をすれば、液化化してべっとり手のひらにこびりついた侵徹体^{しんてつたい}を、振り払って飛び去る姿を、見せつけられた。

甘かったのだ、シフは拙い操作で主砲、ロボの右腕部にマウントされた大型ビーム砲を揺らしながら、苛立つ。加速する思考で無限の可能性を試行する、改造人間に対抗できるのは改造人間だけだ。これを戦闘メカで抑えられるわけがなかったのだ。……そう、あの少女はおそらく改造人間、少なくともその近縁種的な存在に違いない、とシフは思い、なにより自身のその認識に、苛立っていた。

ようやく辿り着いた星にいた、先住の生物。もし彼らが人の姿かたちをしていなければ、これほど心を乱されることはなかったかもしれない。人、まさに人間。似ているのは外観だけではなかった。ほんの些細な工夫で言葉が通じ、しぐさや声色から内の感情までもが読み取れる、それもおそらくはお互いに。シフはそれがとにかく気に入らない。彼らは自分たちとなにもかわらないではないか、それなのに、自分たちだけが暗い闇のなか、ちっぽけな宇宙船で何千年もあてなき旅を強いられてきた。

「くそ……」

操縦室に響く警告は、大半が近接自動防御砲塔システムの被害を告げるものだ。ロボ本体の装甲は、敵ビームライフルやビームポッドからの攻撃にも耐えていた。唯一の脅威は高出力ビームソードで、これによる超高速の斬撃は主装甲にも食い込んだ。もつともその一撃離脱の一部始終は、シフの目で捉えきれるものではなかったが。

本来ビームソードやレーザーブレードによる斬撃は、速すぎではかえって効果を減じてしまう。光線の接触時間が極端に短ければ対象構造を破壊しきれないからだ。斬撃を受けるたび、巨大なロボが叩きつけられたように大きく揺らぐことも、シフには奇妙だった。敵ビームソードは、本当のところはビームではない、シフはそう思った。

あれがビームでなければいいのか、たしかなことは言えないが、しかし思いつくところで挙げるとするなら——シールドだろう、やつが改造人間だとすれば十分ありうる。そこには大出力のビームもたしかにあるが、本質ではない。あれは、刃状に形成したシールドにビームを這わせた、半実体剣のようなものではなからうか。

であればあらゆる種類のビーム束を一方向的に打ち消す性能にも納得がいった。これを装甲で防ぐのはむずかしい。たださいわいにも、ソードがつける切り傷はロボの機体にくらべてあまりに小さかった。

少女はロボに決定打を与える術を持っていない、シフの予想どおりだった。たとえその身にどれほどの力を秘めているとしても、あの少女は攻撃力のほとんどを手にした矮小な武器わいしょうぶき

装置に頼りきっている、機動さえ殺せば勝算はある、そう考えて、決戦に望んだ。

しかし敵の力はシフの予想を超えていた。いや、明らかにいま突然、大幅に向上した。敵の優位性とははや機動の甚しさだけでは語れなかった。事前に収集した戦闘データでは見られなかった、いくつかの能力を敵は行使しているのだ。

シフは再度ミサイル攻撃を試みる。ロボの背部から左右に分かれて六基ずつ、一二基の大型ミサイルが射出される。この場に合わせた、低速で高い旋回性を持つミサイルだ。空間いっぱいには広がったあと転回し、目標の両脇から突っ込んでいく。

はじめのうちはロボの自動砲塔からの火線にミサイルを引き込んだりもしていた敵だったが、いまはもう、特別に避けようとも迎撃しようともしない。着弾直前になって、ミサイルの方からふいと機動を逸らし、自爆してしまうのである。

まるで目の前の目標が見えていないかのような、ミサイルの挙動だった。とはいえ発射母機であるロボが目標位置情報を送り続けているかぎり、本当に見失ってしまうということはありえない。

そして、それこそが仇となったのだ、とシフは思った。おそらく敵は、ロボとこのミサイルとの通信方法を盗み見、学んだ。

機械システムを破壊するではなくその機能を利用するなら、そのシステムが、正しい、正常である、と判断してしまうような情報操作をおこなわねばならない。自ら生み出したわけではない、未知の複雑な機械にそのように干渉するのは、「人差し指を曲げる」ようにはい

かないだろう。それでこの自分も、テンタクル・システムの実用化には苦勞したものだ……。だが敵は実際にミサイルを乗っ取ってみせた。この理屈の不整合を補っているのが——シフは少女の背にある機械翼を見た——あのウイングスラスターか、どうもそんな気がする。少なくとも推力を得るための装置でない、というのは明らかだ。やつが扱う装置のなかで、あれだけがなんのためにあるのかわからなかった。が、電子戦ポッドの類か？

敵は自爆したミサイルの爆風を嫌い、爆発地点から離れるように機動。

その動きはシフにも予想しやすかった。シフは即座に主砲照準。照準モニタ上の敵の姿を、AR D マーカーがすつぽり包み込んだ。主砲発射。すべての外部モニタが一瞬真っ白になる。だが、やがて回復するノイズ混じりのスクリーンに映るのは、広範囲を覆い尽くす大口徑ビームと、その余波で乱れる自動砲塔の火線、それから——ビームの上端を割って飛び出す、あの少女のしかめっ面だった。少女はビームの海からゆらりと浮上する。その周囲を、虹色に発光する大小のリングが幾重にも巡っている。

これが、もつとも忌むべき敵の力だった。あの発光体のせいだ、とシフは齒噛みする。なんどやつてもこうなるのだ。機動を制限し、ミサイルとビームで敵を囲い込み、必殺の威力を持つ主砲で勝負を決めるはずだったのに。

それは交戦前から抱いていたプランである。シフはなんとかこの主砲を当てるために、すべての状況を組み立てたのだった。だから最初の先制攻撃は幸運だった。あれで、全部終わっていたはずなのだ。

現実はこちらだ。戦闘システムは機能不全、まともな自動砲も次々と破壊されていく。そのうえ、必殺の主砲は避けられるでも防がれるでもなく、ただ素通りするかのごとく不可解にいなされる。あの発光体のせいだ！ 根拠などなかった、シフは見た目のイメージだけで思う。どのみちセンサシステムには、なにも観測されてはいないのだ。

しかしすべてを台無しにする虹は、こうも眩しく光り輝く。

少女の体が主砲ビームから離れるとその虹のリングは消失した。かわりにビームライフルが閃く。ロボの自動砲塔が吹き飛ぶ。シフは警告を黙らせるのも忘れてコンソールを叩く。こんなはずではなかった。

自身を勝利へと導くプランは崩壊した。取るべき行動の指標は残されていない。シフにできるのはあきらめないことだけだった。敵が戦闘機動を続けて消耗すれば、いつかはあの虹のリングも生み出せなくなるかもしれない、そう信じて、そのときまで戦い続けることだけだった。

この空間の防護壁はさる事情からもとと特別頑丈で、いまは戦闘に備えてさらなる強化をほどこしてある。とはいえ主砲の一点照射を続ければすぐに貫通してしまうから、主砲発射後に照準操作がなければ警告とともにビームは自動停止するようになっていた。

そうなるまえに、シフはビーム照射を続ける主砲の照準で、敵を追う。敵は急上昇、急速離脱。ロボが見上げ、主砲をマウントした右腕を振り上げる。壁面をビームが這い上がる。

敵はくるりと一回転、その体を虹のリングが取り囲んだ。

それはシフが、この重い腕では機動する敵に照準が追いつかない、と悟った直後のことである。いまあの発光体を出してくる必要はないはずだ、とシフは疑い——敵の手にあるソーダを目にして、その狙いに思い当たった。まずい。

高みへと上昇していた敵が突如反転、急降下。自ら大口徑ビームに飛び込もうとする。シフは咄嗟に主砲攻撃を中断。

ビーム照射停止とともに近接防衛システムがよみがえる。直上から突撃してくる敵に火線を集中。敵、回避機動へ、再び上昇へ転じる。

主砲内部に飛び込むのはあきらめたか？ しかし虹のリングは消えていない。シフはひとまず敵の目から砲口を隠そうと、主砲を下ろす。それからミサイル攻撃を指示。ミサイル発射。

弧を描いたミサイルが全弾、戻ってきた。

ばかな——だが事実だ。ばかな、と思いつつシフは対応を試みている。自爆コマンドすら受けつけない、完全に乗っ取られている。

ミサイルはもうロボのものではなかった。近接防衛システムに脅威としてマークされる。ミサイル群はロボに突っ込む直前に迎撃。爆発に操縦室が揺れ、スクリーンが乱れる。シフはコンソールに両手をつけて耐える。

映像回復。上空に敵の姿を探す。どこにもいない。自動砲塔はなにもない空間を撃っている。しかしシフの目には、自動砲塔の火線の先から一直線に下ろされた、長い虹の軌跡が映

っている。

再度の衝撃がロボを襲う。シフは反射的にコーションパネルを見る。右腕部に異常が発生しているのがわかるが、ダメージレベルは低い。それで、やられた、と直感する。敵ソードの斬撃が主砲のマウントステーションを傷つけていた。

後進離脱していく敵をメインスクリーンによく捉える。あの虹は消えていた。自動砲塔も敵を補足。

しかし敵の再攻撃の方が早い。ビームライフルと、広がって飛ぶビームポッドからの同時攻撃を受ける。複数条の敵ビームがロボの右腕部、損傷したマウントステーションに収束し、爆発。ついに主砲が脱落する。

それがどうした、シフは兵装選択パネルを操作、手元の照準システムに新たなビーム砲を対応づける。ロボの固定武装である、頭部内蔵ビーム砲を選択。主砲にくらべれば劣るとはいえ、これも強力な副砲だ。

敵は主砲を失ったロボの様子をうかがうように漂っている。シフは躊躇なく攻撃——今度は下方へ避けられた。

副砲の照準はロボの機体前方から上方を広くカバーするが、俯角にはほとんど余裕がない。頭部に設置している関係上どうしてもそうなる。しかし敵は上下空間を広く使いはじめていて、これをロボの正面に捉え続けることがまず重要だった。シフはやむなく照射中断、ロボを機体ごと、うつぶせに傾けていく。

大きく降下した敵が静止、ロボを見上げている。いまにも上昇して突っ込んできそうだった。またあのソードかと、シフは一瞬そう思ったが、違った。敵の右腕に見慣れない巨大な装置があるのだ。

その装置は一見すると重厚なビーム砲のようだった。しかし砲口はなく、本来砲口があるべき場所からは太い金属の棘が顔を覗かせていた。シフはそれがなにかを即座に悟る。

手持ちの「杭打ち機」だった。パイルバンカー、あるいはパイルドライバー。砲弾ではなく、大質量の槍だか杭だかを至近距離から対象に打ち込む酔狂な装置だ——まさかここに来て新しい武器を出してくるとは、そんなよいいな思考が一瞬生まれる。

パイルバンカーという兵器は、少なくとも宇宙船ではあまり配備例がない。見た目の派手さからくる敵への威圧効果は大きい、たいていの場合ありふれた徹甲弾の方がずっと高い貫通力を示す。徹甲弾でなくパイルバンカーが必要になるシチュエーションというのは極めてまれで、そのためこれを装備する戦闘メカは少なく、だから研究も進まない。パイルバンカーはまだまだ兵器として洗練されていないのだ。杭を打ち出す、という根本的な部分の構造にしても、炸薬式と電気式というまったく異なるシステムが共存している。もともと、等身大のものであればふつうは炸薬式が採用された。無反動砲の原理で使用者への反動を抑えられるからだ。ただしその分のエネルギーは杭には伝わらず、どうしても威力は低下する。

だが、やつが扱う武器装置にそんな配慮がされているという保証はない。それに——この星でのパイルバンカーがどの程度兵器として確立しているのか、敵の手にあるものが、どの

ような駆動原理でもってどの程度の威力を発揮するのか、それはまったく問題ではない、とシフは思った——あの速度で殴り掛かるなら射出機構など必要ない。

そしてそれにはロボの主装甲を打ち抜くだけの力がある、そういう前提で動かざるをえなかった。なんとか直撃は避けなければ、シフは身のこわばる思いでスクリーンから目を離し、照準モニタに集中する。

そこでシフは挫けそうになった。敵の機動を思えば照準モニタに倍率など掛けられない、下方へ離脱した敵の姿は、照準モニタ上では小さな点にしか見えなかった。

マニュアル照準に用いるARDマークは、ビームの射線と効果界、つまりビームの太さが、ひとめでわかるようになっていた。目標着弾点でビームがどの程度の太さを保っているかが、推定効果界円としてモニタ上に描かれる。この円の中に目標がいれば、当たる。なにも真ん中に捉える必要はない。

しかしいま、照準マークは敵から遠い。ロボはまだうつぶせている途中なのだ。機体の重心ではなく操縦室を回転中心としているために姿勢制御が難しく、時間が掛かるのだった。そうしないとシフの体がGで潰れてしまうから、しかたがない。

照準モニタの小さな点が、ぴくりと動いた、ように見えた。

シフは気のせいとは思わなかった。敵が機動開始したに違いない。副砲の照準は間に合わないかもしれない。間に合っても、機動する敵を完璧に照準するなどできるはずがないし、そのころにはもう発射トリガを引く時間すら残されていないかもしれない。

だが、撃たないわけにはいかない。

ロボの一つ目が輝く。頭部ビーム砲作動。同時に操縦室を衝撃が襲った。

シフにも嘘のような話だったが、照準は、間に合ったのだ。発射トリガも引いた。しかし一方でパイルバンカーの杭も、すっかり打ち込まれてしまっていた。敵はロボの足元へ潜り込むように、ビームを避けながら突っ込んできたのだった。杭はロボの腰部右寄りから機体中央に向かって食い込んでいる。そのまま対面に貫通はせず、機体内部にとどまっている。

敵はこの力加減のために減速したのかもしれない、などとシフは思う。それで自分にもトリガを引く猶予が生まれたのか。黙っていれば胸部、操縦室を吹き飛ばされていたかもしれないのだから、ビームは回避されたとはいえ完全な無駄ではなかったらう。

警告。シフはつとする。あれだけ耳ざわりだった警告音も、あまりに鳴りつばなしでさすがに意識の外に出かけていた。

その警告は他とは違う、火災を知らせるものだった。機内に残された杭の付近から出火したらしい。自動消火装置作動中。右脚部駆動系に影響が出ていたが、すでにシステムがバックアップしている。加えて主砲用のエネルギー変換効率が低下……これはもう放っておく。

極限状態を脱してみれば、だ、シフは機体のダメージを確認して思う、巨大なパイルバンカーといえど、それはあくまで敵少女の身の丈からみて巨大なのであって、ロボの機体規模からすれば穿^{うが}たれた孔はごく小さい。ロボはまだ戦える。

離脱した敵に向き直らねばならない、いつまでも鳴り止まない火災警告にまた苛立ちなが

ら、ロボの体を起こそうとして、シフは、事態の深刻さに気づいた。いったいいつになつたら鎮火するのだ？ 消火に時間が掛かりすぎていた。

自動消火装置は作動しているはずで、それは確認した。あんな杭一本で、消火不能なほどの火災が引き起こされるとは思えなかった。現にシステムによるダメージ評価は低いのだ……なにかが、おかしかった。

しかしシステムはおかしいとは思っていない。なにがどうおかしいのか、知ることができないのは疑いを持つ自分だけだとシフは思い、一刻も早く敵に正対したい気持ち堪えつつ、まじめに機体ダメージを調査する。

やはりおかしい、火災の疑いがある区画にとくに温度上昇が認められない。本当は火など出ていないのではないか？ シフは火災感知器の誤作動を疑うが、すぐに思い直す。感知器は、なにも炎と熱にだけ反応するわけではない。煙やガスの発生も知らせる。……そう、ガス。可燃性の、

——気化炸薬。

機内に残された杭からか、シフはぞつとしてメインスクリーン上の敵を見る。

うつぶせ状態のロボから見れば、敵は頭上に佇んでいた。もし照準モニタに視線を落としたなら、すぐにでも副砲による攻撃が可能な位置。

シフにそうする余裕はなかった。スクリーンから目が離せなかった。

「――」

少女のくちびるが小さく動くのをシフは見る。声は拾えなかったが、ひとこと分。いや、一単語。それならなにをつぶやいたのかは、だいたい予想できた。インパクト、イグニッション、デトネーション……いずれにせよ、着火宣言に決まっている。ひとときわ激しい振動が機を襲い、シフの意識はいったん途切れた。

気がつくと、警告音は消えていた。かわりに録音された女の声が、流暢なアナウンスを繰り返している。

『本機は撃破されました。戦闘続行不能。火災の心配はありません。ハロー？　生きてますか？　This ship has been destroyed——』

だれだ、こんなものを仕込んだやつは。

シフは軽く頭を振った。おそらく操縦室は激しく揺さぶられて、そのせいだろう、くらくらする。

女の声が言っていることは各種警告表示とかわらない。本機は撃破されました。うるさいな、わかってるよ、シフは警告に確認を出す要領でアナウンスを止めようとする。うまくいった。

ほとんどのスクリーンが沈黙していて操縦室は暗かった。機関停止。三基ある補助動力装置も損傷、ないし接続失敗で機能していない。非常用応急電源——言ってしまうと電池によって、最小限のシステムだけが稼働している。

動力停止したロボは気流に押されるかたちで吹き抜けのエリアを落下したらしい。ここは宇宙船の中枢も中枢、コア・ナセルを擁する大空洞だ。ロボは仰向けの状態でフロアに接地している。被弾以外でこれ以上揺さぶられることはないだろう、シフはきつく肩に食い込んだベルトをいまいましく思い、ショルダーハーネスとシートベルトを外して息をついた。コンソールに手を伸ばし、有毒な気体や爆発の発生など、二次被害のおそれがないかを自分でもチェック。どうも本当に火は出ていないらしい、鎮火されたのかもしれないが。ともかく、大慌てで脱出する必要はなさそうだ。

こつん、と物音。

シフは耳をそばだてる。

こつ、こつ、ごん、ごん。何度も壁を叩くような音が操縦室に響く。

やつだ、とシフは思わず息をのんだ。あの少女が、ハッチ上面装甲上を這い回っているに違いない。なにを探ってる。ここに入ってくるつもりか。

たしかにそこには、乗降ハッチの外部コントロールハンドルがあった。黄色に黒の縞模様が入った、いかにもなハンドルで、これ进行操作するのなら特別な知識は必要ない。握って、引いて、回せば作動する。あの少女にも使えるだろう、そうなったら終わりだ、とシフは思った。機体が被撃破サインを出しているいま、操縦室からハッチをロックすることはできなかつた。戦闘でハンドルが吹き飛んでいることを願うしかない。

しかしそう都合よくはいかないのが常だ。シフはシートの後ろを探り、拳銃を取り出す。

外部ハッチコントロール作動。それをシフは多機能表示モニタのひとつで確認する。機内外の気密差チェックに一秒ほどの間をおいて、ハッチオープン。

重いハッチ機構の可動とエア抜けが同時に起こるガシユ、という独特の音。そこに、少女の「わ」という声が重なって聞こえた。

「わ、わわ……」

ロボの胸部主装甲がガスシリンダーの力で持ち上がる。可動部を設定することは防衛に悪影響をおよぼすから、大げさな展開システムにはなっていないが、メンテナンスハッチのようになちまちまとした穴が開くわけでもない、少女にとっては想像以上の変化だったらしい。

ハッチ解放にともない、操縦室シート前面のコンソール類が両脇へスライド。スクリーンも天井に貼り付くように動く。少し屈めば歩いて出られるくらいの出入口ができあがる。

シフはシートに掛けたまま動かなかった。ひざ立ちのまま固まってしまった少女が、ちょうど出口をふさぐ位置にいる。

「なんの用だ」

と、シフは言った。身を乗り出しかける少女に素早く銃を向ける。少女はびっくりと身を硬ばらせて動きを止めた。

いまさらこんなものが効くはずないのだが、しかしお互い戦闘の熱は冷めていた。まともな感覚ならそうなるだろう、とシフにも思えた。

だがやがて冷静になれば、本当に優位なのがどちらなのかは理解できる。少女もいつまで

も萎縮してはいない。

「おまえの負け」と静かな口調で少女は言った。「……おとなしくしろ」

シフはこたえず、少女を見返す。

少女の瞳はまっすぐな意志に満ちている。——シフはこの目が、嫌いだった。こういう目をした人間が、自分のとなりに並び立つことは決してない。こういう目をした人間は、いつもいつも決まって自分の行く先に立ち、邪魔をするのだ。

見つめあって無言の数秒がすぎる。

この星は広い、とシフは思う。そう、たしかに、できるだろう、潰しあわずとも生きていくことは。

いまは心底「気持ち悪い」この星の人間たちだが、時とともに嫌悪感も薄れていつて、やがてどこにでもいる他人と変わらなく感じるようになって、いつかあたりまえのように言葉を交わせる日が来るだろう、そうシフは思う。この胸にある憎しみは消え去って、不公平もなかったことになって、自分がやったことは全部無駄になって、それでもよかったのだと思いい込んでしあわせに飼い馴らされる日が、きっといつか来るのだろう。

「冗談じゃない」

冗談じゃない、とシフは思う。

とどのつまり少女はシフに、あなたもそうなれ、と言っていた。絶対にごめんだった。もうなった自分は、もはや自分ではない。心が麻痺して変質した、別のなにかだ。それはいま

自分が心の底から憎み、排除したいと願っているもの、そのものではないか。

まったく冗談ではない。そうならないために、美しい星にすぐにでも降りたいのを堪え、多大なリスクを受け入れ戦ってきたのだ。ここまで追い込まれるとは思わなかったが……それでもまだ、できることはある。

とはいえ、その手の銃では本当になにもできなかった。シフは構えを解き、少女に向けて無造作に拳銃を放ってやった。少女は大慌てで両手を伸ばし、受け損ないそうになりながらも危うくキャッチ。

「なにこれ」と少女。

「必要なくなった」とシフ。「脅しにもならないようだから。好きに使えよ」

少女はむずかしい顔をしてシフと拳銃とを見比べた。が、ほどなくその手のひらの拳銃は、ぱつと光を放って消えてしまう。

シフは言葉を失った。たしかに好きにしろとは、言ったが。

「……化け物かよ」

「失礼なこと言うな」

「ふん……。だけどいいのか、せつかくの武器をさ」

シフは、少女が拳銃を具体的にどうしたのか、気になりはしたものの、追求する気までは起きなかった。なにせこれから、もっとやっかいな少女の相手をせねばならなかった。

「俺はまだ負けてないよ」

「まだなにかする気？」

「本当は使いたくなかったんだけどねえ。こうなっちゃったら、しかたないか」

ここは宇宙船の中樞も中樞、コア・ナセルを擁する大空洞だ。

*

青年の顔はこちらに向いているが、彼は自分を見てはいない、とスグリは気づいた。後ろを振り返る。

青年が乗ったロボットを追って降りた、とんでもなく広い空間。ふしぎな場所だった。ここにはほかの部屋にあった、作業用の機材や資材とおぼしきものは見当たらない。かわりに不気味に明滅する大きな角柱が、何本も何本も、見渡すかぎり並んでいる。

角柱はみな積み上げられた立方体のブロックでできていた。しかしそれぞれの立方体のあいだにはひとめでわかるほどの隙間がある。浮かんでいるのだ。一本の柱のように並んで、浮かんでいる。

角柱は天井を支えてなどいないのかもしれないし、実はやっぱりすごい力が働いていて、しっかり柱の役目を果たしているのかもしれない。それぞれの立方体には、自分には想像もつかないような、まったく別の機能があるのかもしれない。

それからここにはもうひとつ、スグリの目を引く物体があった。立方体の柱は本当に無数

に並んでいるので、目を引くものといえば、それだけだ。

やはり天地を繋ぐ太い柱である——ただし一本しかない特別なもの。周囲の角柱よりもずっと大きく、機械的だった。丈夫そうな装甲、随所に埋め込まれた発光体、インジケータ……天井と床に繋がる部分はさらに太くなっている。まるで木々が地に根を張るように、パイプやケーブルが枝分かれして広がっているのだ。

これは鉄でできた樹のようだ、とスグリは思う。葉は見当たらない。天地に根を張る鋼鉄の樹幹。じゅかん

樹幹の中央はぶつくりと膨らんで見えた。そこには卵形をした球体が埋め込まれている。とはいえ球体は樹幹の径より大きいから、樹幹の方が、上下から挟み込むように球体を支えている、といった様相である。

青年はこの樹幹、この球体に、視線を送っているのだった。

薄ぼんやりと暖かな光を放つ球体をスグリも目にして、とまどう。さつき見たとき、ロボツトがここへ落ちてきたときは、球体は真つ黒な塊だったというのに。

光る球体の内部がわずかに透けて見えている。球の中央に小さな人影を認めて、スグリのとまどいは大きくなった。

スグリがその人影に気づいた直後、暖かな光はそのままに、球体はさつと不透明になった。球体表面に細い針で開けたような穿孔がひとつ生まれる。それが一気に周囲を侵食する。球体の半分ほど、スグリから見えている側が、消失した。

球体は中空構造をしていた。直径からすると、外殻は異様なほど薄い。表面はいまも光っているのに、内側はおそろしく黒かった。黒いのか、暗いのか、わからない。

そんな器のなかに、スグリは先ほどの人影の正体を見る。金色の髪。白と黒と金縁のドレス。首もとから下げた大きな紅玉に手を置き、目を伏せて宙にたたずむ、

「女の子……？」

スグリのつぶやきに、青年がこたえる。

「この船の守り神さ」

スグリは青年を振り返る。青年はやはり、金の髪をした女の子を見ていた。目を開けた女の子も、青年を見ているようだった。スグリはそろと退いて、二人の視線から外れる。

「……おはよう」

無感情に女の子が言った。

「やあ」と青年。「久しぶり」

「貴方に起こされるのは、七度目かしら」

「最初の数を数に入れたか？ 俺が起こしたわけじゃないだろ」

「そうだったかしら……どうせ、今回もろくな用件じゃないんでしょう」

「大事な用件さ。目の前にいる銀髪を消せ」

スグリは無言。女の子の表情をうかがうと、一瞬だけ目が合った。

女の子はすぐに青年に向き直って、

「なぜ」

「理由なんて聞かなくていい」

「ろくなことを考えない貴方の言うことだもの。理由も知らずに言うことを聞けば、ろくでもないことになってしまいうわ」

「ああもう、だから起こしたくなかったんだ」苛々とした口ぶりで青年。「どうせ、さっきのやり取りは全部知ってるんだろ」

「だからろくでもないって言ってるのよ」

女の子も譲らない。

さいわい彼女に戦意はないようだ、しかしこれまで戦ってきた子らへの「命令」も、こんなけんかのような調子だったのかと、スグリは疑問。

心情的にはもちろん女の子の肩入れしたいスグリだったが、ここでもし青年を言い負かしたとしても、あまり意味はないだろうな、という思いもあった。彼の心が変わらないかぎり、けんかは終わらないだろう。

女の子が、忽然とした態度で言った。

「その子や、この星の人を消すというのは、貴方のただのわがまま——」

「だからどうした」

青年はそんな女の子の言葉も遮って言った。

「俺の言うことを聞け」

「嫌よ……」

「俺の言うことが聞けないんなら」と青年。「……この船の居住区、いますぐ爆破させるぞ」スグリは思わず青年を見る。

ここに来る少し前に、成層圏で、結晶体を操る女性が言っていた。船には大勢の仲間が乗っている、と。居住区というのは、まだ見ぬそれらの人々が暮らす場所だろう。そこを、どうするって？

「……貴方ならやりかねないわね」

「もちろん本気だよ」

女の子は、大勢の仲間を人質に取られたわけだった。自分もだ、とスグリは思う。ひとごとではない。自分も、そんなことにはなつてほしくない。

スグリには青年がどんな手段で居住区を攻撃するのかわからない。止めかたも。ボタンやスイッチの操作を阻止すればよいのか？ 口頭で叫べばなにかが起るのかもしれない。あの女の子を「起こした」ときは、そのどちらの操作も青年はやっていない。

「最低のろくでなしね」

女の子のため息が聞こえてくるようだった。

「……でも、ここでは戦えない。その貴女、名前は？」

こうなれば、自分も覚悟を決める必要がありそうだ、スグリは立ち上がり、女の子に向き合つて名乗る。

「スグリ」

「そう……綺麗な名前ね。わたしはヒメ」

ヒメは、スグリの心を和ませようとするかのように、ゆったりと微笑んだ。

「スグリ、こっちにいらっしやい」

そしてそう言ったヒメは、返事も待たずに消えてしまった。スグリはほんの少しだけ逡巡

——だが、迷うほどに道はない。

やがて顔を上げたスグリはロボの装甲をとん、と蹴って舞い上がる。ヒメが残した虹の軌跡を追って飛ぶ。

ロボットと交戦した縦穴を再び昇り、横穴に飛び込む。入り組んだ通路にこれといって障害はない。ヒメはそういうルートを選んだのかもしれない、そう思ったころ、しかしスグリは戦闘メカを見つけてしまう。

だが戦闘メカは動いていなかった。長方形の箱のような空間の、床一面、壁一面に、たくさんの戦闘メカが黙って並んでいるのだ。みな個別の固定具に収まっている。天井からぶら下がっているものもあった。宇宙に出てから戦った機械は少ないように、スグリには思えた。星の空でまみえたタイプがほとんどだ。ここはそれらを保管しておく格納庫のような場所だろう、そうスグリは結論づける。同じような庫が、いくつも連結して先の見えないトンネルになっていた。

格納庫トンネルを進んでいく。まもなくスグリは前方にヒメの姿を見つける。目が合ったかと思うと、やおら片手を突き出して手のひらを見せてくるヒメに、スグリは困惑。静止のポーズか、それとも手招き？——いや、どちらでもない。

ヒメの手と、直前までスグリがいた地点とを結ぶ直線、その周囲広域がぱつと燃え上がった。

めらめらと赤い炎は見えない。まばゆい光に包まれた焦熱しょうねつの路だ。大口径のビームのようだが、危うく難を逃れたスグリは、ほっと嘆息してそう思う。たしかに力が発動した後の光景は、ビームの持続放射と似通っていた。だが決してヒメの手のひらから、のんびり光の束が伸びてきたわけではなく、スグリにもそれはわかつている。しかもその熱の路からは、ふつうのビームのような、効果界周辺への余剰エネルギーの拡散が感じられない。

どうもヒメはとびきりすごい力を持っているらしい、しかしスグリにはそれ以上に気掛かりなことがあった。いまの攻撃で相当数の戦闘メカが焼滅していたのだ。もちろん格納設備ごと、である。ヒメは、この自分を消すためなら、機械たちや宇宙船の設備が傷つくことをなんとも思わないのだろうか？

ヒメからの第二射を回避。

そうは思わない。そうではなく……むしろヒメは、この自分を撃つふりをしながら、本当は機械たちの破壊こそを狙っている、とすら思える。なぜ。……なぜ？ 決まっている。いまにお互いにとって、こんなものは必要なくなるから！

ビームポッド展開。ぎりぎりまで間隔を詰めた五機のポッドがヒメに対して同時ビーム攻撃をかける。効果界を重視した、収束なしの並行射撃。

ヒメはやすやすと避けて見せた。飛び抜けたビームが数機の戦闘メカを破壊。

続けてスグリはビームライフルを、ヒメも再びその手をかざそうとした、だがそのとき、格納庫内に警報が鳴り響く。二人の動きが止まる。

戦闘メカたちが起動していた。格納設備のアームや固定具が次々に解放され、収まっていた戦闘メカたちが動きはじめる。

スグリとヒメは互いの立場も忘れて顔を見合わせた。と、戦闘メカのうちの一機、キューブが放ったビームがスグリの背に迫る。スグリは背を向けた状態のまま前方やや左へ、そのまま五メートルほどの水平円を描いてビームを回避。そのさい一回分の左スピンを混じえて背後の状況を確認しつつ、もとの地点、もとの向きに戻ってくる。

ヒメが小さく肩をすくめて見せてきた。スグリも思わず苦笑してしまう。用意がいいのか、いま思いついて操作したのか、いずれにせよあの青年はなかなか抜かりがない。

ヒメ、反転。トンネルの奥へ翔けていく。スグリはその場でもう一度左スピン、後ろを振り向いたところではほどのキューブをビームライフルで攻撃し、それからヒメを追いかける。あとに続こうとした戦闘メカたちが焦熱路に消えた。

生き残った戦闘メカが追いつがってくる。メカは翔けゆく先からも向かってきた。先をゆくヒメの邪魔をするものはいなかったが、スグリの方は激しい攻撃を受けた。ま、それはそ

うだろうとスグリは思う。どうもヒメは、空を飛んだり戦ったりできるだけでなく、宇宙船のなかで特別重要な役目を帯びているらしい。対して自分はいまだに侵入者だ。

高速の空戦メカが正面からぶつかってきた。スグリは反射的にソードを突き立てる。そのとき、スグリの右側方にはキューブ。キューブはスグリと併飛行しながらビームの発射体勢に入っている。慌てたスグリはソードに刺さったままの空戦メカをキューブに向かって投げつけた——当たった。いきおいよく衝突。折り重なってふらつく二機をビームライフルがまとめて貫く。

——されどヒメは、とスグリは思う。ヒメの目的、ヒメの願いは、おそらくこの自分ともにある。いまこんな状況でも、ヒメはその願いを叶えるための方法を必死に考えているに違いない。

前方から空戦メカの編隊がミサイル発射。

放ったミサイルを追うように、空戦メカもそのまま突っ込んでくる。だがそれらはみな、先行するヒメと交差する直前に、爆発した。ヒメが自身の周囲全周に強烈な衝撃波を投射したのだった。圧力変動面に熱プラズマの層が閉じ込められている。

スグリがヒメに抱く期待がどうであれ、全周に広がる衝撃波はもちろん、スグリだけを避けて通ったりはしない。スグリは迫りくる波面をビームライフルで撃ち割り、突っ切る。

ヒメが放った衝撃波は戦闘メカはおろか、格納庫トンネルの壁や天井まで歪に押し潰し、はるか後方でもよく音速を下回って爆音に変わった。もっとも、後方からの音波が二人に

届くことはなかった。なおも増速し、ちらと視線をよこしてくるヒメに、スグリはトンネルの終わりが近いことを悟る。

ヒメの向かう先に巨大な隔壁がそびえている。そこには戦闘メカの最後の一団も待ち構えていた。すかさずスグリはビームライフルの射撃体勢へ。と、ヒメがすつと射線に滑り込んでくる。そこが最適照準点というわけだった。スグリは笑ってしまいそうになるのを堪えて、アクセラレーション。ハイパーアタック。

吹き飛んだ隔壁の向こうは船外だった。爆炎と、戦闘メカの残骸とが入り交じり、真空中に吸い出されていく。船内には新たな警報。破損区画を閉鎖するため、すぐに奥の隔壁が降り始める。

そしてそのころ——とつくに宇宙船を飛び出したスグリとヒメは、もう青い星の、夜の空。ゆったり並んで、しばし語らず、月の光に照らされていた。

「……この星の空、とても綺麗」

見上げ、見下ろし、見渡して、やがてヒメは感嘆した様子でそう言った。

「うん、すごいでしょ」

スグリは嬉しく、誇らしくなって、そんなふうに同意を返す。

「もつとじっくり眺めていたいけれど……いまは無理ね」

「……戦うの？」

ヒメはスグリに背を向ける。「あのろくでなし、本当ろくでもないことを考える」ゆつくりと歩むようなペースでスグリから離れていく。「だけど、いまはそれに逆らえない。この綺麗な星で、最初にすることがこれなんて、とても寂しいけれど……」

立ち止まり、振り返ったヒメは、大きな満月を背に微笑んだ。寂しい、その言葉通りの感情を滲ませて。

「さあ、はじめましょう。……みんなを守るために」

スグリは深くうなずいた。そんなふうに言われては、うなずくしかなかった。

「うん、みんなを守るために」

——それはきつと叶うだろう。わたしは、きみが、叶えるだろう。だからそんな顔をしながらも大丈夫。

二人は同時に走り出す。幾重も幾筋も走る虹の軌跡が夜空を彩る。

ライフル、ソード、ポッドを操るスグリに対し、ヒメは、武器装置に頼らない。身ひとつで、舞うように戦う。その機動はスグリにも匹敵した。そしてときおり手をかざしては、あの熱の路や、プラズマを折り込んだ衝撃波を放つのだ。

ヒメが向けてくる力はまだあった。スグリは、ヒメが自身の周囲に数十条の光線を生むのを見た。砲台もなしでビームが……いいやあれば「剣」だな、とスグリは思う。

ヒメが生み出したビームは、幅の広い、両刃の直刀のようだった。ビーム束が実際に、はつきりとそんな形をしているのだ。圧縮された高エネルギーが剣の形象を取っている。スグ

リのソードなどよりずっと大型の、光の剣だった。

ヒメがさっと腕を振るうのを合図に、一斉に投射される光剣の群れ。それらはさらに、赤い光を放つ剣と、青い光の剣に、明確に区別できる。それぞれが大口徑ビーム並みの威力を持つていたが、スグリは赤い剣にかぎり、ビームライフル一発で迎撃することができた。赤い剣は、目標との接触点に、溜め込んでいた力を解放・集中するのだ。その性質がスグリのビームにも反応した。結果、エネルギー量に大きな差があるにもかかわらず、事実上の迎撃が成り立つのだった。

一方、青い剣はスグリのビームをものともせず打ち消して、そのまま飛翔した。単に青い剣の方が威力がある、わけではないことに、スグリはすぐに気がついた。出力差があるのではなく、性質が違うのだ、でなければ撃ち分ける意味がない。

青い剣は、赤い剣のように収束することも、かといって爆発することもない。ビームを当ても弾いてしまう。高エネルギーの塊とは思えぬ、まさに実体剣のようなふるまい。

しかしあまりにかたくなな、その力がなんなのか、心あたりがスグリにはあった。降り注ぐ剣をかくぐりつつ、見定めた一本の青い剣に、スグリは果敢にソードスラッシュを敢行。しかし、重い。

ヒメが繰り出す青い剣は、スグリのソードを持つてしても軽々と斬り捨てることは適わない。なぜなら、これらは同じものだから。自己保存を強要し、独立性の維持を謳って他からのあらゆる干渉を検閲する最強のバリアシステム。シールド。スグリにとっては、父の手に

より最初に与えられた力でもあった。

足を止めるわけにはいかない、スグリは気合いとともにソードを押し込み、一閃、青い剣を斬り裂いた。いったん真つ二つになった青い剣は、かん高い破碎音を発して粉々に砕け、大気に消える。

そのときソードのビーム出力は、ソード装置が持つビームの整流・拘束能力を一時的に上回った。剣身から離れたビームが帯状の光波となってスグリの前方広範を薙ぎ払う。スグリは狙ってそうしたわけではなかったが、光波はヒメが投射した赤い剣の多くを無力化した。

青色は、無視するにかぎる、空いた空間にスグリは飛び込み、ライフルを構える。ヒメに反撃のビームを放つ。

これをヒメは横方向へのステップでひらりと回避。だがその回避位置、回避タイミングを狙い、光の剣との攻防ではかやの外だったビームポッドが、同時並行射撃をしかける。

それでもヒメなら避けるだろうか、スグリはそう思ったが、ヒメは強引な機動変更はおこなわなかった。

ヒメが首もとから下げている大きな紅玉、ドレスの装飾かと思われたそれが、うつすらと発光。それと同様の淡い光が、ヒメの前方にいくつも連なって輪を描く。ポッドが斉射したビームはその輪をくぐってヒメを打つかたち——輪をなすそれぞれの光から、無数の「鎖」が飛び出してヒメの前を横切った。折り重なって壁を作る鎖に阻まれ、ビームは途絶える。

ただの鉄鎖であるはずがない、あれにも、間違はなくヒメの力が込められている、スグリ

は警戒を強くする。

こうした少女らの戦いが、シフには観察できなかった。

シフは、二人の少女が自分の前から消えた直後に、無謀にも降機した。おそらく少女らはここへは戻ってこない、戦闘に巻き込まれることはないだろうと思つたからだ。コア・ナセルは広い大空洞の中央で、そのそばに落ちたロボから出入口までは遠かつた。床や壁に畳まれている、移動用レールのハンドル位置をシフはよく心得ていたが、それを使つても、通常の通路に出るまでにはそれなりの時間を要した。

統制室に戻つたシフはすぐに少女らの足取りを探つた。二人が戦闘区にいることを知つたシフは、戦闘区指令コンピュータを呼び出し、システムハンガーに待機中の全戦闘メカを起動した。〈非常事態〉をさえ発令すれば、ダイナミックミッションプランナーは施設内での積極交戦すら選択する、シフはそうしてやつた。疲れていた。個々の戦闘メカの搭載武装や戦術は、みなプランナー任せだ。少女らはほどなく宇宙船の外へ飛び出していったようだが、シフは戦闘メカと施設の被害状況からそれを類推するほかなかつた。敵ビームが宇宙船の内外を貫通したようだ、たぶん、やつらはそこから外に出たのだろう、というあんばいである。少女らの宇宙船離脱を捉えたセンサは存在しない。

それでもシフは、自然とあの青い星に目をやるのだつた。二人がすでにそこにいるのはわかつていた。センサシステムにわからなくとも、シフには。

ここでは戦えない、とはよくも言う。どうせあの星を、見たかっただけだろう。

しかし、シフには戦いの様子が観察できない。いまや二人の少女は互いに互いだけを見つめていた。外から見てとれるのは、幻想的な光の乱舞だけだった。

それすら本当に幻想、幻かもしれないのだ。生まれては消える光の軌跡が、二人の航跡だという保証はどこにもない。戦いはもう終わっているかもしれないし、まだはじまっていないのかもしれない。もうなんでもいい、とシフは思う。あれを自分が理解する必要はない、ヒメが役目を果たしてくれるなら、それでなんでも言うことはない、勝手に高めあい、勝手に潰しあえ。

シフは、ヒメが負けるかもしれない、ということは思いつかなかった。シフのような男でもやはり宇宙船に生きる人間、「守り神」に対する無意識的な盲信はごくごくわずかながら持っていた。同じ計れないもの同士なら、ヒメが勝つ、そういうあたりまえの感覚。

どのみち宇宙船は、電池では飛んでいられない。ヒメの身になにかあれば、そのときは宇宙船もおしまいである。

いまは黙って、ヒメが戻るのを待とうと、シフは思った。
だが――。

ヒメの攻撃は次第に二色の光剣を主軸としたものにかわっていた。光剣は一本一本が凄まじい威力を持つうえに、ヒメの身振りひとつで間断なく、無尽蔵に降り注ぐ。それと比べる

と、スグリのビームライフルやポッドの火力はいかにも貧弱だった。ライフルもポッドも高性能だが、完成されすぎている。増大するオペレーターの力に対して、自機の性能を柔軟に上下させるといったことができない。

戦闘行為に不慣れだったスグリには、それが比較的プラスにも働いた。しかしもはやここでは、絶対的な性能不足という事実だけが立ち上がってくる。二人の少女は際限なく加速してゆくというのに、ライフルやポッドは装置としての限界を依然超えられないでいる。どうしても、段階的進化を待つ必要があるのだ。

よってスグリの武器でまともにヒメに通用するのは、スグリ自身の機動と、ソード、ほぼそれだけだった。

しかしスグリに気負いはない。ヒメに向かって、光剣の流れを逆行していく。青い剣の間をすいすいと抜け、赤い剣のエネルギーを取り込みながら突撃する。

ヒメの右側方から鎖、鎖で編んだ巨大な槍が、飛び出した。スグリは突撃体勢のまま左斜め上方へ跳ねる。槍の穂先は腹の下ぎりぎりを通過した。そのまま胴まわりほどの径がある槍の柄の、左下方へ、真下を通って右へ抜け、槍を離れる。真正面にヒメ。

ソードスラッシュ、振り上げた左手で、左上から右下へ。ヒメはスグリの右肩を飛び越えて回避、その背へ降り立つ。スグリ、高速で左転回しながら背後のヒメに水平方向の斬撃を放つ。

その斬撃を、ヒメは首もとの紅玉からじかに引っぱり出した鎖を両手でびんと張って、受

け止めた。鎖は切断されなかったが、しなる鎖でスグリのソードと鏢迫り合いはできない。逆らわず押されるまま後退しようとするヒメ。そんなヒメからスグリはソードをさっと引つ込めると、右手に遊ばせていたビームライフルを向ける——が、攻撃中断、後進離脱。

直後、鋭い穂を備えた無数の鎖が全周から、スグリがいまいた一点を貫いた。獲物を逃した鎖の檻を挟んで、スグリとヒメ。だが鎖の檻は、熱の路に吞まれて消える。スグリは大きく弧を描いて回避機動。

——夜空を飛ぶのは久しぶりだな、と、スグリは思った。

いつのまにか、スグリはそんなことばかり考えていた。どうしたことだろう、みんなの命運を背負った、たいへんな渦中にいるというのに……だめだ。空を飛ぶのが、楽しくてしかたがない。

心地よい大気に満ちた空。頬を撫でるやわらかな風。大地を覆う森とその匂い。月明かりをきらきら反射する湖に、白波立ててさざめく大海。ここにはそんな素敵なものがたくさんある。ここから、ぜんぶ見渡せる。気を抜くとすぐ、それらに意識が向いてしまうのだ。

ヒメの背から、とびきり大きな光剣が生えた。赤と青の光の剣が、何本も何本も、ヒメの左右に翼のように広がって、どこまでも伸びていく。

この星の空を綺麗だと言ってくれた人と、一緒に飛んでいるのだな、とスグリは思う。もちろん、戦いをやりながら、ではあるが。

……いや、そのはず、ではあるのだが……。

実際のところ、どうもスグリには、ヒメと戦っている、という気がしなかった。あれほど悲壮なヒメの顔を見たはずなのに、である。

あのとき自分は、真剣にヒメの決意に向き合ったつもりでいた。それだというのに……いまこんなに気分がらくなのは、いま、ヒメにその悲壮さが見えないからだ。いうなればヒメこそ、この自分と戦っている、という意識に乏しいのだ。この星の大地や空に気を取られているのは、自分だけではない。ヒメも、そうなのだ。

だからこんなに楽しくいられるのだろうか、とふと思い、スグリはヒメの胸の内が、わかつたような気がした。あの人まさか、ひよつとして。

ヒメがのびのびと両手を広げる。するとヒメが背負った光の剣が、ひとりでにさまさまに折り畳まれて、スグリに向かって斬りつけてきた。投射されたわけではない光剣は迎撃不能スグリはビームライフルもポッドも手放した。二基のソードを一基ずつ、両手に握って翔ける。身の丈を超える幅の光剣があらゆる角度から振り下ろされ、突き出される。重なり交差する光剣が空間を埋めてしまう。スグリは赤い剣をすり抜け、取り込み、青い剣を斬り裂き、押し退け、ヒメに向かって突進する。

光剣の壁に隙を見出す。両手を広げたヒメが見えた。あと一步。

二人のあいだでもうビームは意味を持たない。ソード装置はビームの生成を完全放棄、しかしそれが、ソードの最大出力でもあった。スグリ、ソードスラッシュ。薄青い輝線が前方空間を切開しながらヒメに達する。ヒメの光の翼が消え去った。スグリのソードも自壊して

いる。

斬撃の間合いにヒメを捉える。スグリは残ったもう一基のソードを両手で振り下ろす。これは真横へ回避される。スグリは追撃せず、そのまま飛び抜ける。

ヒメは回避行動と同時に、紅玉から引き出した鎖を基礎とした青い剣を形成、投げず手折らず、それをその手に携えていた。スグリと交差して反対方向へ飛ぶ。

二人は互いに距離を離しながら、同じ軌道で上昇する弧を描く。そしてそのまま対向する軌道になめらかに乗る。正面からぶつかっていく。

スグリは正対するヒメを見る。近いのか遠いのか、速いのか遅いのかわからない。とにかく、これでいったんおしまいになるな、とスグリは思った。なに、あの子たちと飛ぶ機会は、この先いくらでもおとずれるだろう。

スグリのソードとヒメの光剣がかち合った。甲高い破碎音を響かせて、双方の武器は虹の欠片となって飛び散った。二人は再びすれ違い、交差して飛び抜ける……その直前、示し合わせたようにくると向き合い手を伸ばす。直下地上時間8月14日3時30分、二人の少女は互いに伸ばした手を取った。

「さすがね」

そう言ったヒメの表情は穏やかだった。

「ヒメも、強かった」

「この空で踊るのが、とても楽しくって……少しはしやぎすぎたわ」

ヒメはふわふわと体を揺らしてそう言った。

「子供だな」やれやれ、という笑みでスグリ。

「子供よ」とヒメ。「一万年ちよつと生きているけれど、この姿だもの」

それを言われると、とスグリはうなる。あまり人のことは言えないな、姿も、心も。ヒメの踊りとやらにまんまと付き合わされて、しかも、思う存分楽しんできました。

「あはは、わたしも同じだ」

「ふふ……」

ヒメは静かに目を伏せた。そして、おどけた調子を抑えてこう言った。

「さて、そろそろあのろくでなしを止めるとしましょうか」

そうだ、いつまでもその問題を引き伸ばしてはいられない。そしてあの青年を止めるための考えが、すでにヒメにはあるはずだ。でなければヒメも遊んでないなかつたろう。

スグリはちらりとヒメを見る。「どうするの？」

「あの船の居住区を」ヒメは真剣な顔を宇宙船に向ける。「丸々、切り離すわ。あいつに気づかれるまえに、一瞬で」

同じように宇宙船に目をやって、スグリ。「うん、わかった」

——と、そう神妙にうなずいて見せるスグリだったが……となりに並ぶヒメからの応答が、いつまでもない。とまどい、そろとヒメの顔を盗み見る。

ヒメの方が、先にスグリを見つめていた。ヒメは困り顔だった。

「けっこう無茶なことを言ったつもりなのだけど……」

なんだ、そんなこと。

「できるよ、二人とも強いもの」

澄まして笑って、言ってやる。

しかしヒメにとつてそれはたやすいことではない、というのはスグリにもうかがえた。居住区の分離は、おそらくヒメ一人では実現できないか、成功率が低い。しかし二人で力を合わせれば、というわけだろう。この自分にその力があるかどうか、あの空の舞台で、ヒメは探っていたのかもしれない。

「ふふふ……そうね」

ヒメも笑う。

それからヒメは「そうそう」と、思い出したように続けた。

「あの船のみんなは、本当に良い人ばかりなの……。今回のことは、あのろくでなし一人が暴走してただけ」

「そうなんだ、よかった。それなら、地上にいるみんなとも仲良くなれるよ」

「……いいの？」

良いもなにも。

「一緒にがんばれる人が増えるなんて、すごく素敵なことだよ。きっと、だれも拒まない」

「……ありがとう」

もう一度小さく笑みを交わすと、二人は並んで急上昇。宇宙船のやや上方から、その全貌を俯瞰する。

「じゃあ、行くよ」

「ええ」

右手と、左手、繋いだその手を高く掲げる。

「これでもう、手はないわよ……シフ」

小さなつぶやき。それにしては重たい声だと、スグリは思った。

長かったのか短かったのか、わからない。ともかくシフは、青い星から二条の虹が、螺旋を描いて昇ってくるのを、統制室のメインスクリーンの端に見た。たしかな指向性が見てとれる、その虹の軌跡をシフは追う。観測システムの自動追尾がきかないが、もう慣れた。手動で目標を捉え続ける。

虹の穂先は、宇宙船を見下ろす二人の少女の姿に変わった。

——なんで、並んでる。

その瞬間シフは凍りついた。そうかと思えば胸が早鐘を打ち、どつと汗が噴き出してくる。並んだ少女が繋いだその手を高く掲げる。やめろ——声にはならない。

宇宙船から居住区が、分離した。

シフははじめ、なにが起こったのかわからなかった。無意識におそれた大爆発はなく、警告すらなく、室は静かで、一番やかましいのは自分の胸の鼓動だった。シフがそれを理解するまで十を数える時を要した。

居住区を分離する機能など宇宙船には存在しない。居住区は強引に、二人の少女の力によつて、切り取られたのだった。肉厚の円筒形をした宇宙船から、いくぶん薄い円筒形がきれいにくりぬかれ、上昇しながら離れていく。パズルのピースを剥がすように、すつぽりと、音もなく。

なにが起こったのか、なにをされたのか、わかった。全身の汗がひいていく。激しい緊張のあとにはいちじるしい脱力感が控えていた。シフは円卓の椅子にぐったりともたれ掛かった。

「くそ……減茶苦茶やりやがつて」

どうやって、どんな力で、シフがそれを思うことはなかった。ヒメをコントロールする手段を失った、それだけが問題だった。いわば命令権を奪われたのであって、これが意味するところは大きい、とシフは思った。それというのも、少女らは居住区ではなく、この自分の居場所だけを切り取り、閉じ込めることもできたはずなのだから。

「ああ、くそ……なんで……」

スクリーン上のヒメを見る。ヒメも自分を見ているように、シフには思えた。カメラ越しなのに生の視線を感じるようだった。命令権を奪って見せて、さあどうする、と言わんばか

りだ。どうもこうもない。もうどうしようもない。それはヒメにもわかっていよう。

さあどうする、ではなく、ヒメはこう言っていた。

この星でみんな仲良くしあわせに飼ひ馴らされましよう。

冗談じゃない、とシフは思う。

意味がないじゃないか、俺のものにならなきや。おまえたちの言うしあわせな世界では、この俺は生きちやいられないんだよ。そこに生きる俺は、俺じゃないんだ。だからこの星は俺のものにしないと意味がないんだ。それでもその居住区の連中は、それなりにしあわせに過ごせるはずだ、いままでそうだったように。なんでそれがわからない……ずっと探してたんだぞ、ちくしやう。

ちくしやう、ちくしやう、ちくしやう。しかしもう手は残されていなかった。この星を手に入れることは適わなくなつたのだ。

やがて居住区の人間たちは、守り神に導かれ、地上に降りて、先住民らと手を取りあつて、彼らにとつてはしあわせな世界を築くだろう。だが、そこに自分はいられない。そして自分がいなくても、彼らはきつとしあわせだ。

切り抜かれたのは居住区だが、本当に切り捨てられたのはこの自分なのだ、とシフは思った。

「くっそ……もういいよ」

なにもかも、もうどうでもいい。もうなんでもいい。……だが――。

シフはヒメの瞳を見返した。

俺は、おまえの言う折衷には乗らない。

増速する宇宙船を険しい目つきで見送って、ヒメが言った。

「最後までろくでなしね」

宇宙船とヒメに交互に目をやって、スグリ。「なにを……？」

ヒメは青い星に目を走らせた。

「船を、このまま落下させるつもりね」

「あんなものが落ちたら……みんなが」

「星にも、大きな穴があいてしまう」

「やらせるか、そんなこと」

思わず駆け出しかけたスグリを、「スグリ」とヒメが呼び止めた。

「……私は、これを離すわけにはいかないわ」

宇宙船からむりやり分離した居住区の施設機能は、すべてヒメが維持している。

「大丈夫だよ、一人でもやれるさ」

「スグリは強いものね」

その通り、なにせ一人といっても、その実自分は、大勢の人に支えられているのだ。

「うん」

スグリはひとつうなずくと、宇宙船を追い越して、宇宙船を睨みつつ、背中から星の空へと吸い込まれていく。

砲の名はバスターといった。

スグリは右腕でバスターの銃床を抱えこみ、せいっぱい伸ばした左手でサブグリップを握る。巨大な砲にしがみついていっしょに落ちながら、体ごと宇宙船に狙いをつける。砲身部が前方へスライド。バスターは完全な発射体勢へ。そしてスグリは——ためらった。

あの青年には……こうなることは、わかりきっていたろうに。

バスターの存在は周知だった。もちろんその威力も。だからこそヒメも、躊躇なく自分に任せてくれたのだろう、とスグリは思った。あの青年も、こんなことをしても無駄だとわかつているはずなのだ、それなのに。

こうなってもいい、と青年は思っている。そう、スグリは思い至った。

ということとは、あの人の目的は、船を大地に落とすことではない、ということになる。落とせるものなら落としたいのかもしれないが、わたしがそれを許さないことは、きつとあの人にはよくわかつている。……あの人は、わたしに自分を撃たせたいのか？

こんな思いつきはスグリ自身にも意外だったが、思いついてしまえば、それはさほど突飛な想像というわけではなかった。大地に落ちても、バスターの光線に吞まれても、どちらにせよ青年の命はないのだから。そして、どちらの最期を迎えるか、確立が高いのはどちらかといえば、明らかにバスターである。いいや、確立うんぬんの話ではない。あの青年が、本

当に大地に到達できる気にいるとは、まるで思えない……

——声が聞こえる。

大気がざわついていた。ざわついているのは、自分の心なのかもしれない。胸の奥で、自分以外のだれかが、自分の声で、囁いている——敵は排さねばならない。

おや珍しい、焦っているな、とスグリは思う。声の焦りを意識して、自分はいくらか冷静になる。

たしかにこのまま船が落ちれば、星は壊れてしまうだろう。だが、青年は本気で星を壊せるとは思っていない。この自分に阻止されると、彼はわかつている。つまるところ……なにもバスターでなくてもいいのだろう、あの青年は、もうなんでもいいから、終わりにしたいと思っている。

ううん、とスグリはうなる。どうにも気分が萎えてしまう。そんな役目はいらないよ、あの青年にそう言ってやりたい。

「自分は撃たなかったくせに」

バスターは、光の束に姿を変えて、大気に還った。かわりにスグリの手には、小さな拳銃。あのと青年は、撃つてもよかったのだ、お互いそんなことは無駄だとわかつていたのだから。撃つても撃たなくても、なにも変わらない状況で、彼は撃たないことを選択した。いま青年は再び同じ状況にいる、とスグリは思う。バスターを撃つても、撃たなくても、あの青年は死んでしまうだろう。彼の運命はなにも変わらない。もちろんこちらにとっては同じ

ではない。黙っていれば星が、みんなが、壊れてしまう。そうはさせない力が自分にはある。

だが、彼の運命を変える力はないのだ。

バスターを手放したスグリを非難するように、声が言った。

——私を脅かすものは、あなたの敵。

「うん、わかつてる。大丈夫、きつと守るよ」

そこを譲るつもりはスグリにもない。やらせはしない。そう、あの人は敵だ。

しかしそれは、なんて悲しい。ずっと探し求めて、やっと見つけた星を、あの人は自ら脅かしている。きれいで豊かな星だと、言ったくせに。あんなにこの星に惹かれていたくせに。バスターでは彼の心は変わらない。撃つても撃たなくても変わらない——だが、とスグリは思うのだ。もう一度、この星をきれいと言ったときの気持ちを思い出してもらえれば。宇宙船から覗くだけでは、きつとまだ見えていない、この星のすごさをもっと知ってもらえれば。彼はこの星でみんなと生きることを望むようになるだろうか？

「……ねえ」

スグリは目を伏せ、耳を澄ませて、呼び掛けた。

「少しだけ、手伝ってくれるかな」

*

そういえば昔、大雨が降るたび、嵐のあととはよく晴れる、というようなことを大人たちから聞かされた。幼い自分は、そりやあ雨のあととは晴れるしかないではないか、などと思ったりもしたものだ。

捨てられた街の中央にある、ちよつとした広場。噴水を囲むベンチの一脚。その前に立ち、ヒルデは夏の夜空を見上げていた。結局使わなかった黄色い傘を無為に広げて、肩に担いでくるくると回す。

「あなたそれ、遊んで壊さないでよ」離れたベンチに腰掛けていたオリンが、ヒルデの背に向けて言った。「けっこう値が張るんだから」

ヒルデはきよとん、とオリンを振り返り、「……傘じゃないですか」

傘布は強化撥水性高機能生地。中軸シャフトと親・受骨はカーボン。ストレートタイプの手元と石突きは焼き付け塗装をほどこしたアルミ合金。軽くて丈夫で、まあ、こ洒落ているが、傘だ。

「あなたって、ときどき思い出したみたいに街での感性発揮するわよねえ」

「はあ」

オリンも傘を手に行っているが、それに加えて彼女は全身を包むグレーの〈雨がっぱ〉まで装備していた。雷が収まり、雨も風もピークをすぎたと聞かされて、小雨対策に共用傘一本くすねてきたヒルデとは大違いだ。ヒルデとまったく同じ言を聞いて、しかしオリンはこの重装備なのである。街での感性、というのはようするに地上の感性ということで、つまりオ

リンには、かつぱ着てるなら傘いらな、というような考えが、考えるまで出てこないのだから、とヒルデは思った。口にはしなかったが。

夜明けまでにはまだもう少しだけ時間がある。虫が鳴き、すず風がそよぐよい夜だ。

ヒルデは背後のオリンから目を離し、また頭上を見上げてつぶやく。

「きれいですねえ」

月はだいぶ低くなっていたが、雨上がりの澄んだ空には数多の星がまたたいている。

そしてそんな満天の星空をより彩るのが、先ごろ姿をあらわした、黄金色をした光の帯だった。

それはオーロラのように揺れながらヒルデの頭上を通りすぎていく。何枚も、何枚も。光の帯がどこから来たのかは、ヒルデにはよくわからない。地平線のずっと彼方からやってきているように思えたが、街の周囲は深い森だから遠くまでは見渡せない。地上の感覚をひきずっているらしいヒルデも、こんな現象は見たことも聞いたこともなかった。

この光の帯がなんなのか、だれに訊いてもわからないだろうな、とヒルデは思う。寝床を抜け出し空を見やれば、だれもがこの光の帯を目の当たりにする。しかしそれがいったいなんなのか、どこで、どのようにして生まれるのか、説明できるものがあるかといえ、ないだろう、きつと。

どこへ向かって流れていくのか、光の先になにかがあるのか、という話であれば、かんたんなのだが。

「この星は一度、死にかけたのよね」

そうオリンが言うのを、ヒルデは空を見上げたまま、ぼんやりと聞いた。

「——戦争で、毒のせいで衰えたのか、大きな爆弾のせいだか、そこまではわからないけれど……たぶん両方だと、私は思ってる。どっちにしたって人が作ったものよ。人がこの星を追いつめた、どうしようもないところまで。それは間違いのないところ。——でも、星は死ななかったの。あぶないところで、助かったのよ」

どうしてだと思う、とオリンは訊いた。人は、星を壊せるだけの力を持っていたのに、それを使って戦争をやっていたのに、どうして星は壊れなかったのか、と。

ヒルデが考えはじめるまえに、オリンは続けた。

「私はね、そこには同時に、星を守る力もあつたんじゃないか、って思うのよ。だって、勝手に助かるはずじゃないもの。星を壊せるほどの力がずつとぶつかり続けていたら、助かるはずないじゃない。だからなにか、あつたのよ、星を壊せるくらいの力と同時に、守れるくらいの力が、なにか」

なにが言いたいか、あなたわかる？

わからなかった。

「だからね、星を守ったのも、たぶん人なんでしょうね」

そんなことは考えもしなかった。勝手に助かった、と思っていた。星が死ぬ、その寸前で、運良くぱったり戦争は終わったのだ、と。そして……星を治す人があらわれた。なにも考え

ずに、漠然とそう思い込んでいた。

星を壊す人と同時に、星を守る人もいた、か。戦争の時代にも、悪い人ばかりではなかったのだと、オリンは言っているのだろうか。

ヒルデがそんなふうに解釈しかけたところで、オリンは言った。

「星なんて、生かすも殺すも人間次第」

ヒルデは肩越しにオリンを見る。オリンは空を見上げている。

「これって、お星さまからすると、どうかしらね」

そう言うオリンに、ヒルデは肩越しの視線を向けたままで言った。

「きつと落ち着かないでしょうね。気が気じゃあない」

「できるだけたくさんの人に味方をしてもらいたい、自分を生かしてくれる人の味方をした
いと、思うものじゃない？」

「……かもしれませんね」

「でも、もうそんな人は、この星にたった一人しかいなかったのよね」

虫が鳴いている。

ヒルデはまた空に視線を向けた。

「……なんだかおとき話みたい」背負った傘をくるくるまわす。「それ全部オリンが考えた
んですか」

オリンは笑った。

「そうよお。昔はそんなことばかり考えてた。だからあの子は人よりも星のことを目に掛けるべきなんだ、って。私、あの子のこと怖かったのよ。だってあんまり普通の女の子なんですよ。それなのに星を治す役割、一手に引き受けてて……わかる？ あの子がへそ曲げたら、星が死ぬのよ。さすがに最近はどうじゃあない、もう十分星の傷は癒えたんだって、信じたけれど、でもそういう時代って確実にあったのよ。どう接していいかわからなかった。いまにして思えば、ばかげていた、と言えるけれど」

「昔のことはわかりかねますけど」ヒルデは傘を畳んで、そばのベンチによった。「いまのオリンは、スグリさまにべたべたしすぎですよ」

「……どの口が言ったのそれ」

そのベンチには、二本の細い木の棒が立て掛けられていた。それと、小さな携帯ポーチがある。木の棒は風雨に飛ばされないよう、ポーチのベルトで軽くベンチに固定されている。ヒルデがやったのではない、広場に来たとき、すでにこうなっていた。

二本の木の棒は、つまり、ふたつに折れた釣竿であった。ポーチは餌入れに使っていたものだ。

ベンチの上には、どこから見つけてきたのか、手のひら大の白い紙に鉛筆で走り書いたメッセージも置かれていた。石の重しがされていた、そのずぶ濡れの紙はいま、オリンの雨がっぱのポケットに居候中。書かれた内容はごくごくシンプルな二言だった。それぞれ異なる筆跡で、

『ごめんなさい』

——元気だして、さいしよはよくやりますよ。

『折れた』

——見りやわかりますよ。

ま、竿などいくらでも作り直せる。いいや今度はだれか上手な人に頼んで、もう少ししっかりしたものをこしらえてもらおうか、とヒルデは思った。あの川は穴場だし、これまであの穴場でしか糸を垂らさなかったから、この竿でも十分だったが。あんな近くに出口ができたのなら、ここへももう少し頻繁に来られるし、新しいポイントを探ってみるのもいいかもしれない。……そのときは、釣り餌の確保から手伝ってもらおう。

「そうだ、オリン」

濡れたベンチに傘を敷いて、その上に尻を置いてヒルデは言った。

「さっきの出口、どうしていままで教えてくれなかったんですか」

オリンは一瞬傘に目を走らせたが、その扱いについて文句をつけることなく、こたえる。

「だから出口、じゃあないって言ってるでしょう。ついこの前まで忘れられてた、非常用の通路なの。エマーージェンシー、よ。おわかり？　ここに来るには便利だろうけど、あんまりあたりまえにうろうろされるのもねえ」

「うええ、いいじゃないですか、使わせてくださいよ。あ、ほら、獲れたてのお魚とか持つて帰りますから」

「それは魅力的な提案だけれど」オリンはヒルデを横目に見た。「あなたが地上を出歩くこと自体、ちよつと問題なのよねえ」

「え……」

「だってあなたすぐ風邪こじらせるじゃない。しかもへんに無理したり、気づかないままで給湯室使うでしょう、一種のバイオハザードよ、あれ。もしまた今度おかしい風邪が流行ったら、あなただけ、隔離室で汚染洗淨義務付けるから」

「わたしのせい、つて限らないじゃないですか」

ヒルデは思わずそう叫んでから、はつと縮こまつて言った。

「もしかして、わたしが持ち帰った病気で、セクターが滅茶苦茶になったりすること、つて」
 「そ、れ、は、ありえません。いまのは冗談」オリンはしれつとそう言った。「地上と地下のあいだにセイフティなんて、あなた見たことある？ たぶん、大昔はあったはずだけれど、いまはない。だってそうでしょ、みんな地上で暮らすのが夢なんですもの。はじめて地上に出られるようになったのは、何年くらい前かしらねえ。それから何十年も何百年も……もつとかしら、ま、長い時間掛けて、調整してきたんだから。なにかあつてもせいぜいインフルエンザくらいね」

なるほどそうか、とヒルデは納得。

「それじゃあ、たまには風邪と戦つて、みなさん体を鍛えましょう」

「風邪だってあなたばかりにできないのよ、ものによつては。だいたい、一番弱いのが自分だ

って、あなた忘れてない」

それでも。

やはり良い釣竿を手に入れよう、とヒルデは思った。

空ではちょうど、光の帯の最後の一行が、頭上を走り抜けていくところだった。

居住区構造体を支えるヒメは、落ちていく宇宙船から距離を取りつつ、大型ビーム砲による迎撃体勢に入るスグリからも目を逸らした。

また、決断できなかった、最後の最後で、また人を頼った、まぶたを閉じてそんなことを思う。

——おまえに人間集団のお守りが務まるものか。

よけいなお世話よ。

一方で、それでもいい、ある意味ではこの状況こそ正しい、ともヒメは思った。こうなつてしまったシフを倒すのは、自分よりもあの少女がふさわしい。この星の守り神が、やるのがいい。あのビーム砲ならば宇宙船を破壊しきれよう。

だがそのときには、もうビーム砲は消えていたのだ。

再びまぶたを開いたヒメは、眼下に広がる光景に思わず息を飲んだ。ヒメの瞳に、金色の光が写り込む。

星を包み込む光。星を這い上がる光。光の輪がいくつも並び、星を丸ごと覆っている。そ

れは星の裏側から波紋のようにあらわれては、大気上層を伝わって、輝きを増しながら押し寄せていく。ただ一点、あの少女を目指して。

こんなに――？

もう声は聞こえなかった。頭上に溜まった金色の光が、ただ揺れる。自分に向かって降り注ぐその光を、スグリは全身で受け止める。

あたたかい、とスグリは思った。

これは、みんなでがんばって叶えた夢だ。ずっと長いあいだ見てきた夢なんだ。わたしに力をくれたお父さんや、わたしを好きだと言ってくれた友だち……もういなくなってしまう人も多いけど、いまだってたくさんの人ががんばって……やっとな、こんな素敵な星になったんだ。消させるもんか、絶対に。

そして願わくば、これを壊すなどと言わないでほしい。

スグリは拳銃を両手に構えて宇宙船を照準する。しかしやがてその拳銃も消え去った。指先で、指向する。

光の柱が、星から、生えた。スグリの体を包み込んで、宇宙船まで一直線に伸びてゆく。どうか届きますように。

その光線にはバリアも装甲も無力だった。あの少女がなにかやったな、と思った直後、目

を開けていられないほどまぶしい光にシフは怯み、そして気がついたときには、先ほどまでそこにあつたスクリーンも、レーザーディスプレイも、円卓も椅子も、消えていた。床も壁も天井もない。目を焼かれるほどの光量だと思つたのに、いまはまぶしく感じることもさへもなかった。ただ周囲のすべてが真っ白に塗り潰され、あらゆる色と陰影が消え去つたようだった。

痛くはなかつた。熱くもない。これからだんだんそうなつていくのか、という恐怖もない。ただ、少々居心地の悪い浮遊感だけがある。

もう死んだのか、とシフは思つた。死んだあとでも、ものを考える時間はあるのか、と。ばかけているとは思わない。死を知るものはそうはいない。知らず否定は成り立たない。検証できなければ証明もできないのが現実というものだ。なるほど人が死んだ直後は、主観的には、こうなるのか。意識だとか思考だとかいうものは、こうして徐々にフェードアウトして消えるのか。

しかしシフの思考は消えゆくどころか、いまさらようやく、感じはじめるのである。えもいわれぬ温もりを。

色なき光は、どうしようもなく暖かかつた。それに気づいたシフは、とうとつに、実にさまざまな感情を喚起された。

嬉しがつていいのか、悲しむべきなのは、わからなかつた。これは幸せなのか、それとも不幸なのか。悔しい、という気もしたが、なにが悔しいのかわからない。涙が出るほど懐

しいのに、そう感じる理由がわからない。

自分の気持ちはわからない。ただ——満ちる光が放つ熱は、悪くはなかった。その光はシフに対して優しく、厳しく、無関心でいて、穏やかだった。いかようにも受け取れるのだ、しかしどう受け取っても心地がよい。ここで、少し眠りたい、とシフは思った。

アースライト

地球という星はボロボロだった

繰り返された戦争で、人も地球もボロボロになった
ほんのわずか、生き残った人たちは地球を捨てた
あてもないのに空へと飛んだ

星から生えてスグリを通って、宇宙船を打った光の柱は、そのままどこまでも、径を拡大した。宇宙船を完全に呑み込み、ヒメが予想した大型ビーム砲の加害範囲を遥かに超えて、なお広がる。

居住区を守らねばならない、ヒメは咄嗟にそう思い、なにから守るのか、と自問する。なにを、防ぐというのか。これほど暖かい光から、どうして逃れる必要があるだろう。

ヒメは悟った。この光こそ守るべきものだ、そしてまた、この光が人々を守ってくれる。光は星の直径まで広がった。その内にヒメも包み込む。

すべてが白く染まったあと、ヒメは明けゆく星の空にいた。つい先ほどもおとずれて、あちこち飛び回って踊った舞台だ。しかし、

なんて綺麗な空。なんて澄んだ空気。

さつきよりもずっと輝いて見える、とヒメは思った。戦いの束縛がなくなったから？ そ

れとも、あの光のなかで、知ったから、だろうか。

「これが、わたしたちが一万年求めてきた夢ね……」

「わたしたちが、一万年かけて叶えた夢だよ」

すぐ右下方に、誇らしげな顔をしたスグリがいた。

「すごいわね……この星の人たちは」スグリに微笑んで、ヒメ。「こんな素敵な夢を叶えたんだもの」

「うん、二度と壊れないように、頑丈に叶えた夢だよ」スグリはヒメに笑い返して、言った。
「ほんの少し人が増えても、ぜんぜん大丈夫」

「……ありがとう」

スグリは照れくさそうにしながらヒメに先立ち地表へ降下を開始する。と、スグリはそこでふと思いついたようにヒメを見上げ、あらたまって手を差し出した。

「ようこそ、地球へ」

ヒメもゆっくり降りながら手を伸ばし、スグリのその手を握る。それから少しためらったあと、遠慮がちに、ヒメはこうつぶやいた。

「……ただいま」

スグリは目を真ん丸にして——結局また、笑うのだった。

地下シエルター総合管理セクターのセントラル・ルーム。

「おはよう」

金色の髪と、黒と白のドレスが揺れる。

何人分かの控えめなあいさつと、それよりも多い、もの珍しそうな視線を受けながら、ヒメは室を横切って、隣接する給湯室へのドアをくぐった。

「あら」茶の匂いがする。「いい香り」

さして広くはない部屋の中央に小さなダイニングセットがある。木製のテーブルの上には、いまもほのかに白い湯気を立てるティーカップ。

そのカップのそばに、ごろんと横たわっていたヒルデの頭が、来訪者のつぶやき声に跳ね上がった。「あわ、ヒメさま」カップのなかの液体が波打つ。

「おじやましています」とヒメ。「ごめんなさい、起こしてしまったわね」

「ね、寝てませ——いえ寝てました……うひー。あの、いまお茶、淹れますから」

「お構いなく。香りだけいただくわ」

ヒルデは聞かなかつた。いそいそとカップを用意すると、ポットから茶を注いでヒメに向かいの椅子を勧め、自分はトレーを抱いて立った。

「なぜ立つの」

「ええと、この方が落ち着くので」

「そう」

「でもどうしてこんな隅っこへ」ヒルデはおずおずと訊く。「そっちオリン、いませんでした？」

「ええ。それにわたしがいると、みんなのお仕事のじやまになってしまうようだから」

ヒルデは、その言葉の意味を少しのあいだ考えて、うなづいた。

「すみません。ちよつとまだ、みなさん関心が強すぎるみたい。あの、悪気はないと思うんです」

「もちろんよ、なにも嫌な感じはしないわ。気をつかってくれているのがわかるもの」カッツプを少し傾ける。「——できれば、もう少しふつうにしてくれると嬉しいのだけど……。この服が、目立ちすぎるのかしら」

「やー……」ヒルデは少し言いくさそうに、言った。「たぶんヒメさまはなにをお召しになられても目立ちますよ」

「あら、どうして？」とヒメ。

「印象っていうか、空気っていうか」

「空気？」

「ええとですね……」

ううん、ううん、とさんざん言葉を探す様子を見せるヒルデだったが、最終的には「どうしてでしょうね」とごまかすように笑って、そしてこう続けた。

「でも、そうですね。そのお召しものは、たしかに、普段お出かけになるには豪華すぎるか

もしれません」

「あら、そうなの」ほう、とため息。

地球の人々と宇宙船から降りた人々は、すぐに仲良くなった。一見美しい地上での生活には実はさまざまな課題と困難があり、宇宙船から降りた人々が地上で暮らすためにはみんなが力を合わせる必要があった。それが彼らの距離を一気に縮めた。

たった一人のひとであるスグリと直接交戦したシフブランズの面々が、人々に受け入れられるかどうか、ヒメは唯一気がかりだった。しかしスグリ自身が一番に彼女らを友だちだと言つてまわつたために、それも杞憂に終わった。五人のシフブランズはこの星の人々とも十分に打ち解けていた。うらやましいくらいに。

さて、ではそろそろ自分の番だ、とヒメは思う。

ヒメを取り巻く状況は、シフブランズのそれとはやや異なつた。現状では、ヒメは人々と打ち解けている、とはいひ難い。みんな優しく、良くしてくれる——しかし人々が自分のことを、少し距離を置いて見つめているのをヒメは知つていた。

服飾でまわりの態度が変化するなら試してみるのもよからうか、とヒメは思う。だがあいくヒメには、ここでのような格好でいるのが最適か、ということまではわからない。良き隣人に囲まれた、いわば普通の生活というものの自体、ヒメには久方ぶりのことだった。

もちろんヒメは、宇宙船の人々の生活は知つていた。常にその時代の知識は得てきたし、見聞もそれなりにある。そして、宇宙船の人々と地球の人々はさほど大きな文化的亀裂もな

く接している。だからこの自分も、突飛な行動でまわりを驚かせることはないはずだ、とヒメは思いつつ、やはり他人とのちよつとしたふれあいに我が身を晒して得る情報の質や量は、長年の一方的な観測に比較してすさまじい、と感じるのである。自分はそれを長いあいだしなかつたのだ、人々のなかでは知らず浮いているという可能性はある。

そして、難儀なことに、である、そのことについてだれかに相談を持ち掛けようにも、だれもが微妙な距離を測ってヒメを見るのだ。シフブランドの面々でさえ、そうだった。守り神が相手ではどうしてもかしこまってしまうのだ、という。他方地球の人々は、宇宙船から降りた人々がヒメをそうやって見ていることを、知っている。つまりヒメ自信が、自分に対してもつと大らかに接してくれ、と言っても効果は薄いというわけだ。ご大層なふたつ名がうらめしい。

「困ったわね」

もの憂げなつぶやき。するとヒルデが遠慮がちに、こんなことを言った。

「でしたら、スグリさま、お誘いになられては」

「スグリを？」

「あの方も、わたしたちがあんまりお世話を焼きすぎると、逃げてしまわれるのですけど」ヒルデは苦笑した。「でも、ヒメさまからのお話とあらば、きつとよろこんで、いろいろ案内されるはずです。せつかくですからお二人でお召しものを、なんて。——あと、家具とか調度品とかも、僭越ですがまだそちら、十分お揃いでないのでは」

「——スグリ、いまだこか、わかるかしら」

「あ、さっそく行かれますか？ お買い物！」

ヒメは小さくかぶりを振った。

「いいえ、それはまた今度にする。大丈夫、少しずつ、やっていきましょう」この星での生活に馴染むという点において、自分は少々出遅れている感は否めない。しかしなにも焦ることはない、とヒメは思う。ここでの生活は、まだ本当に、はじまったばかりなのだ。長い長い時を跨いで、ようやくいま、はじまったのだ。「ただ、ちようど少し話したいと思っているたのよ、でも姿が見当たらなくて。あなたなら、スグリがどこにいるか、知っているかと思っただけ」

「それじゃあ、そのためにここへ」

勝手な真似をして時間を取らせた、とヒルデは詫びながら、考えはじめる。だが、

「そうですね、このあたりにはお越しでないようですし……新しいお家の施工にもお立ち会いでないとなると、ちよつと、はつきりしたことは言えませんね」

「そう」

「すみません、せつかく頼っていたのに」

「なぜあやまるの」

ヒメは微笑んで席を立った。

「お茶、おいしかったわ。ありがとう」

「おそれいます」

そう腰を折ったヒルデはしかし、「そうだ」とやおら顔を上げると、「ひよっとしたらスグリさま、また歌ってらしたのかも」と、なかばそうだと確信している口ぶりで言った。

ヒメの首がかくんと傾いた。

「歌？」

「きようは朝から、ぽかぽかして気分がいいですから」

「その歌を聴くとぽかぽかするの」

「聴こえやしないんですけどね」

ヒルデは笑う。

「ほんとに歌なんかじゃないのかも。でも……ときどきなにか、伝わってくるんですよ。すごく高いところから、じんわり、あつたかいのが」

人々にはそれを感じることがたしかにできるのだが、見たり、聞いたり、触ったりすることはできない。だが話の種にするとき、今朝は「あれ」が起りましたね、では不便だから定義しがたいその現象に、みな何かしら好き勝手な呼び名をつける。なかでも、歌、は有力な共通呼称候補のひとつだそうだ。

「わかった。もう少し探してみるわね」

高いところ。とても高いところ。美しい翼を持った鳥たちでも届かないくらい、高いところ

ろに、ぼんやりたたずむスグリの姿を、ヒメは見つけた。元氣が出る歌を歌っているさまではないな、などと思いつつ、ヒメはスグリのそばに並ぶ。恒常的に電離した大気分子が星の手を離れ、暗い宇宙へと飛んでいく。

「まだ気にしているの、スグリ」

「ヒメ……」

「ほんとに、あれは、ろくでなしね」ヒメはスグリから目を逸らして言った。「せっかくみんなが仲良くなったのに、いまだにあなたの気を煩わせている」

ヒメの横顔に向かつて、スグリは困ったように笑った。

「けっこうがんばったつもりだったんだけど、あれじゃあまだ足りなかったかな」

星を這う金色の光輪、ヒメの脳裏にあの鮮烈な光景がよみがえる。

「足りなくなんてないわ」とヒメは言った。「きっと伝わっていた。この星の暖かさ。あいつ、そういうのとても鋭かったもの」

「そうなんだ。でも、だったらわがまま言っていないでさ……、みんなと仲良くしてくれればよかったのに」

「そうね」

しかしあの男のこだわりは、とヒメはふと思い立つ、単なるわがままとは少し違うものだ。つたのかもしれない。

「どうということ？」とスグリ。

ヒメはいま自分が何気なく発した言葉を意識し直す。が、なぜそう思ったのかを考えるためには少々の時間を使う必要があった。

ヒメには、シフが人々と仲良く手を取り合うとはどうしても思えなかった。以前のシフは大勢の人々とかわりを持っていたのだが、それらの人々と信頼関係を築いているようには見えなかった。

シフは自分のために人々を利用することしか考えていなかったから、そう見えたのだ、とヒメは思った。そのかわりに、彼は自分が人々に利用されることも、ぜんぜん気にしなかった。彼にとってはそれが当然だった。彼は人々をないがしろにはしなかったが、それは他人というものが、自分をサポートする便利な機能たりえたからだ。他人とはそうあるべきで、そう使うべき。そして他人から見た自分もそうなのだと、彼は信じていた。

彼は、自分の存在が他人の機能に影響を与えることを極端に避けていた節がある。たぶん、自分に近づきすぎた他人には利用価値がなくなる、と考えたのだ。もちろん彼にとってはその逆、自分自身が他人から影響を受けることも、あつてはならないことだったろう。彼はそうやって生きてきたのだ。知るかぎりずっと、そうやって。

最近の彼はそういう考えをもっと突き詰めて、他人のかわりに機械を使うようになっていた。だが、この星で暮らすには宇宙船の機能だけではだめだ。生きるだけなら不可能ではないかもしれないが、それならはじめから星などいらぬ、そんな生き方は彼も望まなかったはず。この豊かな星で暮らすには、彼はいったん機械を手放して、以前のように、たくさん

の他人の手を頼る必要があつたのだ。

しかし宇宙船の人々と、すでにこの星にいた良き人々が触れ合い、みんな仲良く暮らしはじめたら。

彼はきつと、そうなれば自分は一になつてしまふ、と考えたことだろう。自分がいなくてもみんなで協力して生きていける世界では、自分の元にはだれ一人残らない、そう考えたに違いない。たとえそれが彼の思い込みだとしても……彼にとつてはそれが真実だつたのだ。彼がこの星の人々を消す、などと言い出したのはきつとそのためだ。彼は、人々が自分を頼らざるをえない状況を作りたかつたのだ。そして、それが叶わなくなつたから――。

しかしシフのこんな心、といつても勝手な想像でしかないものだが、それがこのスグリに理解できるだろうか、とヒメは疑問。

その想像はそれなりに的を得ているとヒメは思うが、そう思えるのは、ヒメが長くシフという男を見てきたからだ。ヒメには、あの男ならこう考えてもおかしくない、とたしかに感じる事ができて、そう感じるのに理屈はいらなかつた。だがスグリは、シフを知らない。順序立てて説明しようにも、「彼は人々を利用することしか考えなかつた」というところでききなりつまづくのが目に見えていた。「彼はなぜそんなふうになつたのか」と訊かれるに決まつていた。

シフがそうなつた理由は、ヒメにもわからなかつた。わからなくてもヒメには、シフがそういう人間だつた、と実感できるのだ。しかしスグリにその実感はない。このスグリにして

みれば、とヒメは思う、シフがそんな人間になった理由がわからなければ、シフがそんな人間だったと信じられないだろう。以後の説明のすべてが根拠のないただの空想にとどまることになる。それではスグリは納得しまい。

もつとも……なにも自分は、あの男のろくでもなさを、子細にスグリに語って聞かせたいわけではない、ヒメは自分が思うシフの人間性をぼかして言った。

「みんなが力を合わせたら、自分の居場所がなくなってしまう、と思ったんじゃない」
「そんなわけがないのに」

「そうね。そんなわけがない。みんないい人ばかりだもの。だけどあいつは、たくさん迷惑をかけて、嫌われるようなことをやったから、一人になってしまふ、と思ったんだわ。こんなに綺麗な星だけど、やっぱり一人では生きていけないでしょう」

「でも、仲直りだってできたはずなのに」

「あんなに大きなことをやったのだから、そう簡単にはいかないと思うけど」とヒメは苦笑して言った。「もつと素敵な人だったらよかった、なんて、あんまり言うものじゃないわ、スグリ」

「……ヒメはすごいな」

「あら。このあいだは子供だと言ったくせに」

「あはは、そうだった。ヒメは子供だ」

「まあ」

ヒメは膨れる。

「——それでスグリ」とヒメは話題をかえた。「こんなところだなにをしていたの」

「んー」スグリは足元で輝く星に目を落とす。「ちよっとお返ししておこうと思って。まだぜんぜん途中なんだけどね」

「お返し？」

「うん、たくさん元気づけてもらったから」

「戦いのときに？ ……あら、そういえばスグリ、背中の羽根もなくなってしまったのね」武器はともかく、あれだけは残しておいてもよかったのに、とヒメは残念に思った。「とつてもかわいらしかったのに」

スグリはたじろぐ。「そ、そうなの？」

「そうよ」とヒメ。「かわいくて、青い光も綺麗だった」

「飾りじゃないんだから」

「便利なものだっただけでしょう」

「そうだね」スグリは軽くなずいた。「でも」

そしてスグリはさつとヒメの正面にまわると、ヒメの目を見て、嬉しそうにこう言った。「かわりにみんなに、手伝ってもらおうから」

満面の笑みに連られてヒメも笑う。

「しかたないわね、スグリは」

もう何度目か、差し出されたスグリの手に、ヒメは自分の手のひらをそつと重ねる。と、眼下の青い星明かりがわずかに増したような気がした。いや、気のせいではない、とヒメは思う。見過ごしてしまいそうな些細な星のまたたきを、自分もなんとか感ずることができたのだ、そう信じる。

そして、それをもつとはつきり感得かんとくしたはずの少女をヒメは見る。いまのを、スグリはどんな風を感じたろう。いつか自分も、同じように感じられる日が来るだろうか。

スグリはヒメの手を取ったまま、目を伏せて深呼吸。ヒメも倣って、同じように目を伏せた。虹色の環状フィールドが煌めく——なるほど、ぼかぼか、気持ちがいい。

万能の銀は星の声。不撓の赤は血の記憶。万年を経ても褪せぬ希望が豊穰の金を惹きつける。虹色の夢がすべてを束ね、いのちの唄を乗せて世界に広がる。傷の癒えたこの星の、新しい歩みが始まった。

a bland-new earth, its name is...

あとがき

『スターゲイザー "SUGURI" a little war in bland-new earth.』の、二〇〇五年に同人サークル・橙汁から頒布された『スグリ "SUGURI" a little war in bland-new earth.』の二次創作物です。

——というのは自明ですが、『スグリ』に惚れ込んで以来休みなく働き続けた妄想の塊なので、『スグリ』後に発表された橙汁さまの他作品をはじめ、WEB媒体から得た情報からも設定や表現を拝借しています。たとえばスグリⅡ地球とか（オリンの解釈はここまでは及んでいない）、地球砲とか、ナノスグリとか。このあたりご存知ない方もいらっしゃるかと思います。わたしの思うスグリ像には最早不可欠な設定であり、切るわけにいきませんでした。

ナノスグリについては具体的に言及してはいないものの、けっこういろんな場面で意識しています。スグリさんがまだ未熟なうちからビームをひよいひよいかわしているのもナノスグリさんのおかげかも。V・MAXにしても、武器システムへのエネルギー供給最大化では

なくて、スグリと地球を満たすナノスグリ群との完全同期のことだったんですねえ、って
こんなの絶対言わなきゃ伝わらないよね。だから言ってみたよ。

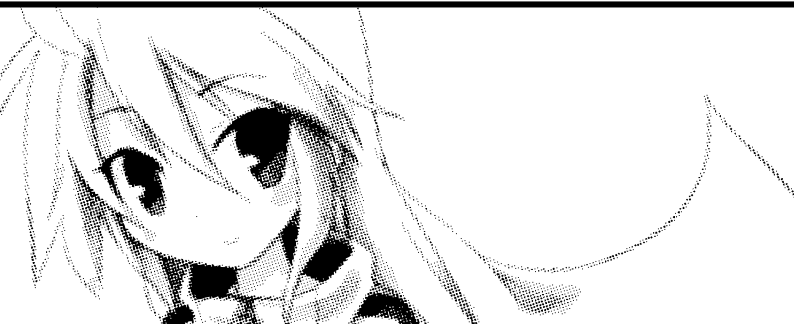
なんにせよスグリさんの能力については、橙汁さまのWEBサイトにある『スグリ』キャラクター紹介での、たった数行の記述が至高です。あれがすべてを物語ってる。短いすごく曖昧なのに、一度ゲーム本編をクリアしてから見返すと異様な説得力がある。彼女の力に上限も下限もない、こちら人間の想像力次第なのだと思わせる。

ただそれではゲームシステムの枠を離れた物語のなかでホンキの戦いをやるのが難しいので、『スターゲイザー』では、スグリさん自身の未熟さと武器装置のスペックを再々説明することで、多分に流動的な彼女の能力をある程度の「型」に落とし込もうとしている、わけなんですけど……。どうだろう、うまいこといつてるのかしら。

なんにせよ腹ンなかに溜めてたでっけえ妄想を今回かなり吐き出せて満足です。スグリさんかわい、って言いたいだけなんですけどほんと。原作初見の「止められるはず……」のくだりで完全に恋に落ちたよね。はあスグリさんかわいい。お父さんになりたい。

スターゲイザー

"SUGURI" a little war in bland new-earth.



二〇一一年 七月八日 発行

著 者
ふ か

出 典
ス グ リ / 橙 汁

発 行
sirokiri

橙汁
sirokiri

<http://daidai.moo.jp/>
<http://www4.airnet.ne.jp/tr3a/>

STARGAZER

